

「キャンパス・アジア」モニタリング

モニタリング報告書

大学名	名古屋大学	
取組学部・研究科等名	大学院法学研究科・法学部、法政国際教育協力研究センター	
構想名称	東アジア『ユス・コムーネ』（共通法）形成にむけた 法的・政治的認識共同体の人材育成	
海外の 相手大学	【中国】	中国人民大学法学院、清華大学法学院、上海交通大学凱原法学院
	【韓国】	成均館大学校法学専門大学院/社会科学部、ソウル国立大学校法科大学

平成26年1月

独立行政法人大学評価・学位授与機構
「キャンパス・アジア」モニタリング委員会

＜目 次＞

I	モニタリング結果の概要	1
II	基準ごとのモニタリング結果	
	基準 1 教育プログラムの目的	2
	基準 2 教育の実施	
	基準 2－1 実施体制	5
	基準 2－2 教育内容・方法	8
	基準 2－3 学習・生活支援	11
	基準 2－4 単位互換・成績評価	13
	基準 3 学習成果	15
	基準 4 内部質保証システム	16

＜付録＞

採択プログラム実施主体から提出された自己分析書

I モニタリング結果の概要

総 括

名古屋大学において 1990 年代より実施しているアジア諸国に対する法・政治研究、法整備支援事業で培われた経験や大学間関係を基礎に形成された特徴あるプログラムであり、参加大学の学部長による会議で人材育成の必要性について検討・分析を行い、枠組み作りが行われ、目的設定・共有が優れて進展している。

「Quality Assurance 協議会」を設置することで参加大学間の協力体制が機能し、名古屋大学では中国人・韓国人教員を複数名配置するなどして大学間の日常的な意思疎通を図っており、体制整備が優れて進展している。教育内容・方法については、3 か国の参加大学での協議を得て 6 科目の共通科目を設定し、それぞれの大学で共通して提供しているとともに、入念な事前教育を実施することで教育効果の向上を実現しており、進展している。派遣学生の事前研修や派遣後に教員を派遣してインタビューを行うことや、チューター制度、学生サークルの活用など、学習・生活面の支援に係る取り組みが十分に行われ、優れて進展している。単位互換については、その方法や互換単位数について協定書に明記して行っており、成績評価では相手大学の評価を自大学の評価に読み替える方式を定めており、進展している。

内部質保証システムについては、アンケート調査やレビュー、学生の報告書の作成と公表などを行っており、多様で多面的な点検評価となっている。また、高校生向けセミナーなど情報を積極的に公表しており、進展している。

優れた取組み

- ・ 本プログラムは、名古屋大学大学院法学研究科・法学部および名古屋大学法政国際教育協力研究センター（CALE）が 1990 年代より実施しているアジア諸国に対する法・政治研究、法整備支援事業の膨大な経験の蓄積によって可能となった取り組みである。
- ・ 協定書の制定と締結により、プログラムの目的が共有され、運営指針として機能している。
- ・ Quality Assurance 協議会を設立し、定期的（年 2～3 回）に各国持ち回りで開催し、本プログラムの運営方法や課題等の検討を行っている。
- ・ 中国・韓国の法律学・政治学を専門とする教員、中国への留学経験のある教員、日本で学位を取得した中国人・韓国人教員を本プログラムの中心に配置し、国際的な対応能力の高い教職員による教育を実施している。
- ・ 留学先において英語、または現地語による法律学・政治学の講義、および現地語を習得するための特別授業が提供されている。特に、日本からの長期派遣学生は、派遣前の 1 年間に実施される事前教育を受講することで、派遣時ではすでに語学および現地の法律学・政治学の基礎を身につけている。
- ・ 成績評価は QA 協議会が策定するガイドラインに基づき、講義担当者が原案となる成績評価を行い、それを QA 協議会に報告し、了承されることで確定する。

Ⅱ 基準ごとのモニタリング結果

基準 1 教育プログラムの目的

海外大学との共同教育プログラムの目的が明確に定められ、参加大学の間で共有されているか。

取組みの特徴

名古屋大学において 1990 年代より実施しているアジア諸国に対する法・政治研究、法整備支援事業で培われた経験や大学間関係を基礎に形成された、特徴あるプログラムである。育成すべき人材像とその目的は明快であり、参加大学の学部長による会議で人材育成の必要性について検討・分析がなされ、枠組み作りがしっかりと行われてきたと判断される。また名古屋大学の国際化戦略の中でも明確に位置づけられており、大学内でその意義が共有されている。以上のことから、質を伴った取組みの構築が優れて進展していると判断される。

抽出した優れた取組み

定期的開催される各参加大学の学部長による会議において、人材育成の社会的・学術的な必要性について検討・分析するとともに報告書としてまとめ、プログラム目的に対する認識が調整・共有される。

(優れている理由)

学部レベルの法学院長・学部長会議を年 1 回、実務教員レベルの会議を年 2 回開催し、目的や連携の枠組みを設定していることは、中韓、特に中国の大学との連携では重要であり、取り組みのモデルとなるものである。

学際間人材、アジアから世界に向けて発信できる人材の育成というターゲットは明確で、参加大学すべてで共有されており、派遣学生の受入校では語学はもちろん法学・政治学にわたる共通必修科目を設置しており、育成する人材像に求められる知識・スキル・態度等の学習成果を含めて明確に定められている。

(優れている理由)

育成する人材像を、「①日中韓の法・政治・社会の現状に関する知識とその運用能力を持ち、共通法の形成に積極的に参画しうる人材、②共通法形成の基礎となる法情報・法令用語の共有化に向けた新しい比較法学を担う人材の育成、③その成果を他のアジア諸国（特に体制移行国）の法発展に応用し、法整備支援を通じて新たな法の形成・運用を支援しうる人材」という形で明確に定めており、参加大学で共有されている。また、そのような人材像を踏まえて、共通必修科目を設定していることは優れている。

名古屋大学大学院法学研究科・法学部および名古屋大学法政国際教育協力研究センター（CALE）が1990年代より実施しているアジア諸国に対する法・政治研究、法整備支援事業の膨大な経験の蓄積によって、はじめて可能となるプロジェクトであり、これは国内唯一であるばかりでなく、世界的にもきわめてユニークな取り組みであり、高く評価されている。これらの取組を通じて、今後必要となると考えられたのが本プログラムの育成すべき人材像であり、本プログラムの目的である。

（優れている理由）

アジア的な共通法構築に向けた国際的中核人材の育成という目的は明確である。名古屋大学法学研究科・法学部ならびに法政国際教育協力研究センターがこれまで実施してきた蓄積の上に実質的な教育の内容が整備されていることは非常に優れた取り組みである。特に、日本法の学習の場を提供するのではなく、アジアにおける共通法構築という、より普遍的な課題設定を行ってきたことにより、他国の大学の連携関係が構築しやすいものであったことは参考になる点である。なお、東アジアにおける法律の伝播の歴史や日本の法律の性格に鑑みると、法学では日本がリーダーシップをとりやすい状況にあることも背景要因とのことである。

Establishment of a supportive core for CAMPUS Asia Jus Commune Triangle Agreement for Academic Exchange and Cooperation」および「Establishment of a supportive core for CAMPUS Asia Jus Commune Triangle Agreement for Academic Exchange and Cooperation (Detailed Regulations)」(以下、協定書とする)では、学生の交流、教員、研究者及び職員の交流、学術資料、刊行物及び学術情報の交換、共同研究及び各大学の利益となるその他の活動を協力して行うことが明確に定められている。協定書の制定と締結により、プログラムの目的が共有され、運営指針として機能している。

（優れている理由）

協定書の締結によって参加大学間で活動内容などが定められ、共通認識が形成されていることは優れている。

本プログラムは名古屋大学の国際化戦略「名古屋大学から Nagoya University へ」の中に位置づけられていることから、本プログラムの目的が、自大学の目的や国際化戦略の中に位置づけられ、関係者に共有されていると言える。

（優れている理由）

本プログラムは名古屋大学における「濱ロプラン」の中で社会科学系の国際化の計画の主要項目の一つとして設定されており、大学全体の国際化戦略の中にも位置づけられていることは優れている。中韓からは大学院生の参加に対する要望があることを踏まえて、修士課程の大学院生への発展も検討されており、大学間での方向性の共有も図られている。

モニタリング実施側からのコメント

- ・ プログラムの目的をより具体的なコンピテンスの形で表現すれば、プログラム運営における参加大学間の相互理解が深まるだけでなく、一個の課程としての凝集性がさらに高まるのではないかと。

大学が指摘した課題とそれに対するコメント

○大学が指摘した課題

- ・ 目的と成果のフィードバックと今後もプログラムを持続させるための具体的な取り組みが必要である。
- ・ 学部レベルでのデュアル・ディグリーの実現は、各国の学位認証システムからして、現実には難しい。
- ・ 中国の参加大学は、学部より大学院の交流を深める意思が強いので、プログラムの目的を調整する必要がある。

○コメント

- ・ 人材育成の目標が明確なので、特にダブル・ディグリーを目指す必要はないのではないかと。ポイントは、各大学での教育内容の質が目指す人材の育成に叶うかどうかであって、副次的なものとして考えるべきであると思う。
- ・ 中国の大学からの要望に関しては、将来的にデュアル／ジョイント・ディグリーへの実現に対して参加大学間で意見が一致しているのであれば、引き続き協議を進められたい。
- ・ 暗記試験による大学統一入試の弊害は、中国において深刻であり、学部教育改善の意欲はそれなりに強いものがあるところから、日本からの情報発信は、それなりに有効と考えられる。

基準 2 教育の実施**基準 2－1 実施体制**

目的を達成するための体制が、参加大学等の間で適切に構築され、機能しているか。

取組みの特徴

「Quality Assurance 協議会」を設置することで参加大学間の協力体制が組織されており、実際に共通科目の教育内容、成績評価等にかかるガイドラインの作成、成績の了承を行うなどして、教育の共同性を担保する実質的な機能を果たしている。また、名古屋大学では中国人・韓国人教員が複数名関与することで、大学間の教職員の日常的な意思疎通がはかられており、質の向上に十分な注意が払われている。海外留学と勤務の経験を有する専従の事務職員を雇用していることは優れている。以上のことから、質を伴った取組みの構築が優れて進展していると判断される。

抽出した優れた取組み

「Quality Assurance 協議会（以下、QA 協議会）を設立した。QA 協議会は定期的（年 2～3 回）に、各国持ち回りで開催され、本プログラムの運営方法や課題等（具体的には、派遣・受入学生の選抜・確定、共通科目の教育内容、成績評価等にかかるガイドラインの作成・改訂、参加大学のカリキュラムの確認、成績評価、単位認定など、質の保証された教育の共同実施を可能にするために必要な制度について）の検討が行われている。

（優れている理由）

QA 協議会を設置し、頻度高く開催することにより、参加大学間の連絡調整機関として実質的に機能していることは優れている。具体的な検討課題が明確にされており、教育内容、成績評価等についての協議が行われていることに加えて、とりわけ単位認定、また、対象学生の選抜をこの協議会で行っていることは、プログラムの質を共同で高める取り組みとして優れている。

参加大学の教職員相互で日常的な連絡体制が構築され、機能している。

（優れている理由）

中国人・韓国人教員が複数名存在することにより、他国の大学との意思疎通が可能となる体制が構築されている。特に、他国で十分な事務体制が構築されていないなどの理由によってコミュニケーションが滞りやすい状況が生じがちである場合にも、名古屋大学が主体となり、円滑な連絡を図っていることは優れている。

中国・韓国の法律学・政治学を専門とする教員、中国への留学経験のある教員、日本で学位を取得した中国人・韓国人教員を本プログラムの中心に配置するとともに、英語による講義が可能な教員（日本人および外国人）を確保・配置することによって、国際的な対応能力の高い教職員による教育を実施している。

(優れている理由)

中国、韓国の事情に詳しい教員、英語による講義が可能な教員を揃えていることは優れており、モデルとなりうるものである。また、教員のみならず、職員も連携して、国際的なプログラムへの対応ができる体制としているところが優れている。

中韓の参加大学から1名ずつ、法と政治に関する事前教育を担当する教員を特任教員として招聘

(優れている理由)

相手大学の教員を特任教員として招聘し、事前教育に活用する方法は、参加大学間の教育の共同化を促すモデルとして優れている。

少なくとも毎月1回、本プログラムに携わる教職員（非常勤講師を除く）による会議を開催し、またメーリングリストやデータベースを作成し、これらにより経験と情報を共有化することで対応能力の向上に努めている。

(優れている理由)

定期的に教職員の会議を開催することにより経験・ノウハウを共有し、対応能力向上に努めていることは優れた取り組みである。

モニタリング実施側からのコメント

特になし

大学が指摘した課題とそれに対するコメント

○大学が指摘した課題

- ・ 教職員のFD、SDを強化する必要がある。
- ・ 韓国の参加大学と中国の参加大学との間の意思疎通がうまく図られなかったことがあったため、日本側のさらなる積極的な関与が求められている。
- ・ 自大学において、受入学生に対するより充実した教育を提供するために、教務関係、留学生関係の学内支援体制をより強化する必要がある。

○コメント

- ・ 中韓の大学の意思疎通がうまくいかないのは、よく起こることであり、日本側の積極的な関与はプログラムの円滑な運用には、不可欠と言わざるを得ない。これをマイナスと捉えるか、日本側が主体的に動く上で、プラスと捉えるかで、日本側の対応の仕方が変わってくるであろう。
- ・ 日本政府の提案で開始されたプログラムであるが、中韓の大学間交流が進展することも重

要であり、協議会の場で、十分議論していただきたい。

基準 2－2 教育内容・方法

目的を達成するために適切な教育内容や教育方法が共同して検討され、実施されているか。

取組みの特徴

3 か国の参加大学での協議を得て、6 科目の共通科目を設定し、それぞれの大学で共通して提供していることはプログラムの共同性という点から優れている。共通科目と選択科目という学部教育に組み込まれた形が用意されており、モデルとなりうる要素がほぼ整っている。英語による教育を主として、現地語教育を従とする点が明確になっているのも、優れている。事前講義や事前研修など、入念な事前教育を実施することで、教育効果の向上を実現している。また、弁護士事務所など育成する人材像に適した場所でのインターンシップを行っており、今後のさらなる発展を期待したい。以上のことから、質を伴った取組みの構築が進展していると判断される。

抽出した優れた取組み

日中韓の参加大学におけるカリキュラム構成や科目の情報については、年 2～3 回開催される QA 協議会および年 1 回開催される法学部長・院長会議を通じて共有されている。

(優れている理由)

参加大学間でカリキュラムについて共同で検討し、それを各レベルの会議によって情報共有していることは優れている。

3 か国で共通した人材育成を目指すために、QA 協議会での検討・協議を経て、共通科目（現地の法律学・政治学入門、社会科学のための現地語学習、社会科学的素養・国際社会への視野を養う講義）を設定することとされ、実施されている。また、主管校（中国人民大学、成均館大学校および名古屋大学）においては、共通科目と選択科目が提供されている。

(優れている理由)

3 か国で合意した人材像を踏まえて、共通科目 6 科目の構成を QA 協議会で検討しており、実際に 3 か国の大学それぞれにおいて共通して提供されていることは、キャンパス・アジアにおける教育の共同性の観点から優れている。

留学先において英語、または現地語による法律学・政治学の講義、および現地語を習得するための特別授業が提供されている。これら大学の中での教育とは別に各種の課外活動の場を用意し（2012 年度の実施例として、東京・最高裁見学、広島・岡山への社会学習等）、留学先の社会を内面的に理解する機会を提供している。

特に、日本からの長期派遣学生は、派遣前の 1 年間に実施される事前教育を受講することで、派遣時ではすでに語学および現地の法律学・政治学の基礎を身につけており、一般の留学生に比して派遣後の学習効果が格段に高いとの評価を受けている。また、事前

研修や中国・韓国の参加校から招聘する特任教員・中国・韓国の参加大学からの留学生との交流を通じ、派遣後の学習・生活がきわめてスムーズとなっている。このように、本プログラムが参加大学との国際共同プログラムであることが、留学を単なる現地での生活経験や初歩的な語学能力の習得というレベルに止めることなく、より高度かつ専門的な語学力及び知識の習得を可能とし、それが付加価値や国際競争力の向上に繋がる。

(優れている理由)

共通科目は英語で提供されており、教育方法の明確化として重要である。一方で、受入れ国の言語習得や課外活動の機会を設けていることも優れている。また、自国内での事前教育において、語学にとどまらず、知識・能力水準の向上などの取り組みを行っており、教育効果を上げるうえできわめて優れた取り組みである。さらに、事前研修や、参加大学からの留学生との交流などが用意されているのは、システムとして配慮されているといえよう。

長期派遣学生に関して、以下の教育活動を行っている。

- 1) 英語、中国語または韓国語、中国または韓国の法律学および政治学に関する1年間の事前教育
- 2) 定期的に外国から講師を招聘しての特別講演
- 3) 留学に向けた事前研修としての、中国・韓国への短期研修(2週間程度)
- 4) 中韓からの受入学生と長期派遣予定の日本人学生をペアとしての相互学習
- 5) 派遣先大学における6科目の必修科目(共通科目)+選択科目の提供(専門科目教育)、加えて、語学教育として、少なくとも半年間の現地語(中国語・韓国語)研修の提供
- 6) インターンシップ

(優れている理由)

長期派遣学生に対する教育活動は、よく配慮されている。事前研修の実施や学生のペアによる相互学習はモデルとなるであろう。必修科目と選択科目の組み合わせ等、学部教育の中に本プログラムを組み込むシステムを構築しようとしており、モデルとして意味を持つものとなっている。

日本での短期受入学生に対しては、2012年8月に名古屋市内の弁護士事務所5カ所においてインターンシップを実施し、また長期受入学生に対しては、2013年3月に「Daewoo Japan」における1週間ほどの企業研修を行った。また、2013年8月には派遣先でのインターンシップ実施を予定しており、協議が進められている。

(優れている理由)

育成する人材像に関係の深い場でのインターンシップを実施しており、本プログラムの教育内容を豊かにするうえで優れた取り組みである。

モニタリング実施側からのコメント

- ・ 法律学・政治学の教育というターゲットと、英語による教育を主とするという点が明確なのは、かえって語学教育化させない国際化という点で、優れている。現地語による教育の比率をどこまで高めるのか、「社会科学のための」と明示した現地語教育は面白いが、それはどこまで可能だろうか。

大学が指摘した課題とそれに対するコメント

○大学が指摘した課題

- ・ 法律学・政治学に関する英語による講義が24科目用意されているが、極めて積極的な一部の学生のニーズに対応し切れていないところもあるため、その拡充を図る必要がある。
- ・ 日本からの第一期長期派遣学生の中に、その語学力（英語）から一部講義の履修に問題が生じた。初年度派遣学生であったため事前学習の体制が万全でなかったという点も考慮すべきであるが、派遣前の段階で語学力をより強化させる必要がある。
- ・ 派遣先大学において英語で開講されている専門科目がやや少ないことから増加を要請している。
- ・ 中国・韓国からの長期受入学生に関しては、派遣元の大学における派遣前の事前教育が十分に行われているとは言い難いため、実施を要請したい。
- ・ 中国側の主管校が法学院（法学部）であることから政治学の科目が弱く、また、韓国においては法科大学院の発足とともに法学部が消滅したことから法学関係の選択科目が大学院のものに限られるという状況が生じた。このように、三カ国の制度の差によって発生する問題が存在しており、これを解決する方策をQA協議会の場でも検討中である。

○コメント

- ・ 英語レベルは、事前教育の充実によって補われるべきだが、学生の選抜に際して、英語力を選抜の要件に入れることも考慮してよいのではなかろうか。
- ・ 英語力の向上は、本プログラムだけでは実現が難しいのではないかと。むしろ、全学的な英語力向上の取り組みのなかで実現をはかるべきではないか。
- ・ 語学力の面でのレディネス※の客観的な測定等を取り入れられるとよい。
- ・ 相手大学の対応の不足に対して、要望を提示し、対策を講じてもらうのは当然として、英語による開講コマの不足などは、教育交流として日本からの教員派遣もありうるのではなかろうか。相手大学の意向の尊重と、相互のバランスに配慮しつつというのは、もちろん前提となるが、改善が望めないことも十分想定されるところから、名分を考慮した上での検討課題ではなかろうか。
- ・ 日本側の事前準備体制と、中韓の体制が若干水準が異なるようなので、その点は改善する努力をお願いしたい。

※レディネス：英語での授業を受けるに必要な、英語能力。特に、法学・政治学等に特有の語彙、用語の英語での知識、読解力、リスニング力、ディスカッション能力など

基準 2－3 学習・生活支援

学生が適切に学べる環境を形成し、学習・生活面の支援を行っているか。

取組みの特徴

派遣学生の事前研修や派遣後に教員を派遣してインタビューを行うなど、学習・生活面の支援に係る取り組みが十分に行われている。受け入れの支援体制も、中国人・韓国人教員による履修指導やチューター制度が充実している。これらにより、現場で把握された課題が解決できる体制ができている。また、奨学金や宿舍の支援体制が整備されており、プログラム参加大学による自助的な取り組みがなされているのも、プログラムが機能しているという意味で優れている。以上のことから、質を伴った取組みの構築が優れて進展していると判断される。

抽出した優れた取組み

中国・韓国への派遣学生に対しては、およそ派遣後 3 ヶ月を目途として現地に教員を派遣し、派遣学生本人に対して現地での生活・学習状況に関するインタビューを行うとともに、受入大学の責任者ならびに講義担当者に対しても、派遣学生の生活・学習状況に関するインタビューを実施している。今後は、テレビ会議システムを利用した定期的な面談も行う予定である。

(優れている理由)

派遣学生へのケア、インタビューによる細かな改善、相手大学の教育実態についての情報収集、相手大学との教員レベルの意思疎通の強化等の点で、大変優れた取り組みである。特に、「具体的な問題は具体的に解決するしかない」ため、教員を派遣することで対応するのは、現実の処理として準備しておくべきことと思われる。また、テレビ会議システムの導入により、定期的な面談を可能にすることは優れた取り組みである。

中国・韓国からの受入学生に対しては、中国人教員、韓国人教員が履修指導を行ったり、学内各種資料の翻訳や諸手続の支援を行ったりしている。また、受入学生一人に対して日本人学生一人をチューターとして配置し、週に一度以上対面で言語や学習のサポートを行っている。さらには、部局所属の留学生担当講師および日本人学生のボランティアサークル SOLV (School of Law Volunteers (SOLV)) による生活面・学習面のケアも行っている。

(優れている理由)

受け入れ学生に対する担当教員による指導に加え、関連部局教員による学習支援・生活支援、チューターによるマン・ツー・マンに近い対応を取っているのは、プログラムを起動させる取り組みとして優れている。他方で法学部学生のボランティアサークルである SOLV によるケアなど、キャンパス・アジア以外の学生との交流が行われることも意図している。

中国・韓国への派遣を希望する学生に対して、事前研修の機会を利用して派遣先の大学を訪問し、自らの目で確かめ、体感する機会を与えている。その上で、派遣が決定した学生には派遣前にオリエンテーションを実施し、派遣先での生活支援の状況を的確に伝える機会を設けている。

(優れている理由)

派遣先大学を事前に訪問できる研修や、派遣前のオリエンテーションは効果的である。学生の安全のための支援体制が、相手大学との連携、海外事務所、海外同窓会を活用して整備されていることは優れている。

モニタリング実施側からのコメント

- ・ 学生の学習・生活に対して、総じて入念な支援が行われている。教員の派遣というプログラムとしてのケアと、学生の自主性に任せる面をうまく併用している。
- ・ 教員の派遣によるケアは、具体的な問題を解決する手段として有効だが、これをシステムとして採用するのは、将来的にも有効であるかは疑問である。個別対応によって蓄積された経験を、システムに還元していく工夫が望まれる。教育機器の貸し出しは、重要なポイントだと思われる。安否確認のシステムへの加入も重要である。

大学が指摘した課題とそれに対するコメント

○大学が指摘した課題

- ・ 派遣先から帰国後の自大学学生の学習面に対する支援が必要となる。
- ・ 中国・韓国からの受入学生の名古屋大学における身分は特別聴講学生であり、規定上、正規学生と異なる扱いをされるため、諸般の不都合が生じていることから、それに対する策を講じる必要がある。
- ・ 各参加大学からの第一期の派遣学生が派遣元大学に帰国した後は、これら学生を今後の学習・生活支援に取り込んでいく必要がある。

○コメント

- ・ 事後学習として、派遣先での勉学を学生が十分消化できるよう、今後の取り組みに期待したい。
- ・ 派遣での学生の学習面でのケアについて、とくに履修科目のアンバランスなどの調整を派遣先である程度行うことは、やはり難しいのであろうか。教育交流として、日本側から政治学等の科目を教員派遣によって、相手大学の学生向けの講義を開設する形で補う等の方法は考えられないだろうか。もちろん、相手大学を尊重し、面子に配慮するという前提の上であるが。これは、受入学生の帰国後の学習面でのケアにもつながるものと思われる。
- ・ 留学後の支援の必要性を認識していることは重要である。留学プログラムの効果がさらに深められ、期待される人物像が育成できるよう、留学後の支援について参加大学間で協議していただきたい。

基準 2－4 単位互換・成績評価

単位の取得や海外大学等との互換方法、成績評価の方法および海外大学等との互換方法が定められ、機能しているか。

取組みの特徴

単位互換の手続きについては従来から名古屋大学で行っていた方式を基にしつつ、互換方法や互換単位数について協定書に明記して行っている。成績評価についてはガイドラインが策定されており、参加大学間で合意されていることは優れている。特に相手大学の評価を自大学の評価に読み替える方式を定め、単位の実質化を行っていることは優れている。今後、成績評価に必要な学習目標の達成度の検討や、成績分布の情報共有がなされることを期待したい。以上のことから、質を伴った取組みの構築が進展していると判断される。

抽出した優れた取組み

本プログラム開始以前から交換留学生の留学による単位振替認定は行われてきており、その際、シラバス等の提出を求め、単位制度・授業時間数等はじめ履修単位の内容を詳細に検討した上で、振替認定を行ってきている。本プログラムにより取得した単位の振替認定についても同様である。

単位互換の方法については日中韓での1単位の授業時間を比較した上で、QA協議会の場において協議し決定した。名古屋大学法学研究科では、日本と中国では1単位を1単位で互換し、韓国で取得した3単位を日本では4単位として互換する方法を定めた。

(優れている理由)

単位認定にあたって、従来から行われている単位互換スキームを基礎にして、派遣先での学習内容を十分確認するよう努めている点は優れた取り組みである。また、単位互換における単位数の換算についても、1単位の授業時間を踏まえて3か国の協議会で方法を定めている。

単位互換の上限管理については、日本から中国への派遣学生は、必修科目：半期・2単位科目3講義、選択科目：半期・2単位科目8講義以下（最大合計22単位）。日本から韓国への派遣学生は、必修科目：半期・3単位科目3講義、選択科目：半期・3単位科目4講義以下（最大合計21単位）と定めている。

(優れている理由)

単位互換の上限管理は、卒業に必要な単位数の中で、本キャンパス・アジアプログラムにて取得した単位をどのように位置づけるかという点から重要である。そのため、協定書により各科目の単位認定の上限が明示され、参加大学間で共通認識されていることは、優れている。

すでに QA 協議会において成績評価方法に関する調整が行われている。成績評価は QA 協議会が策定するガイドラインに基づき、講義担当者が原案となる成績評価を行い、それを QA 協議会に報告し、了承されることで確定する。このような形で、単位の実質化が図られることとなっている。

名古屋大学法学研究科では、成績については読み替え表を作成し、中国の A を名古屋大学の S と読み替えるなどの方式を定めている。

(優れている理由)

QA 協議会が成績評価についてガイドラインを定め、成績原案を QA 協議会で報告・了承する仕組みを設け、成績評価の統一性、水準を実質的に保証する機能を果たしている点は、特に優れている。実際には、出席状況・授業態度・レポート試験・筆記試験等の成績の根拠を QA 協議会で確認している。9 段階評価、5 段階評価など各大学で異なる評価を、振替認定する際に、相手大学の評価を自大学の評価に読み替えることで実現させており、他大学のモデルとなる。今後、各国・各大学での成績分布についても情報把握を行い、成績の読み替えが妥当なものとなっているか確認をすすめていただくことを期待したい。

モニタリング実施側からのコメント

- ・ 本プログラムは、交換留学をモビリティの枠組みとしているが、通例の交換留学と異なり、一つの教育プログラムとしての完結性がある。その点、参加大学間の科目内容の統一性が問われるが、これについて詳細を詰める必要があるのではないか。
- ・ 本プログラムは、必修科目にまで踏み込んだものであり、その点は優れている。

大学が指摘した課題とそれに対するコメント

○大学が指摘した課題

- ・ 4 年での卒業を保証するために、単位互換・成績評価に関して改善をする必要がある。
- ・ 具体的な単位互換方法を引き続き検討する必要がある。
- ・ 参加大学において単位互換方法を統一化する。

○コメント

- ・ 卒業延期を避ける方策というのは、単位互換や成績評価の問題よりも、履修モデルの問題ではないか。本プログラムへの参加を 4 年間の修学にどう組み込むかのモデルを作成して学生に提示することを検討していただきたい。
- ・ 単位互換・成績評価においては、単なる学習量だけの対比ではなく、むしろプログラムとしての内容的統一性に向けて、科目内容のすり合わせが求められるのではないか。

基準3 学習成果

教育プログラムの目的に即して学習成果を測定する方法を設定し、成果が適切にあがっているか。

取組みの特徴

学生の講義の履修状況等についての質問票を用いた調査を始めている段階であり、より詳細な測定方法や分析方法の検討については今後の取組みを期待したい。また、各講義の評価・認定と共に、プログラム全体としてのアウトカム評価（目指す人材に成長しているかどうかの把握）の方法を検討していただきたい。また、実施を予定している学生シンポジウムについても継続して行われることを期待したい。以上のことから、質を伴った取組みの構築が標準的であると判断される。

モニタリング実施側からのコメント

- ・ 受講者の成績評価に当たって、教育プログラムの目的がどの程度達成されたかという視点をより勘案する取組みに期待したい。

大学が指摘した課題とそれに対するコメント**○大学が指摘した課題**

- ・ 帰国後の展開までを視野にいれ、学習成果を確認する方法（たとえば研究論文の提出や評価など）について検討する必要がある。

○コメント

- ・ 学生の成果をより広く把握する取組みと合わせて、それが本プログラムとしての目的とどう合致するかについて、検討を進めていただきたい。
- ・ 学習成果の測定方法について、参加大学間での早急な協議が必要であると思われる。
- ・ 学生の報告書は、派遣期間中に「生存報告」（言葉は少しきついが）も含めて、定期的に提出させるのも、一つの方法であろう。

基準 4 内部質保証システム

内部質保証や改善のための体系的な取組みが、参加大学との連携のもとで行われ、機能しているか。

取組みの特徴

アンケート調査やレビュー、学生の報告書の作成と公表などを行っており、多様で多面的な点検評価となっていることが優れている。履修状況や成績の分析も行っている。今後、外部の評価者による評価方法を導入する等の検討を願いたい。また、3か国の大学間での質保証をどのように実現するかは、このようなプログラムの要諦であるため、今後の工夫に期待したい。プログラムに関する情報発信の取り組みについては、高校生向けセミナーをはじめとして多角的に実施しており、情報を積極的に公表することは優れた姿勢である。以上のことから、質を伴った取組みの構築が進展していると判断される。

抽出した優れた取組み

派遣学生・受入学生へのアンケート調査とレビュー、事前教育・附属プログラムの参加学生へのアンケート調査とレビュー、および履修状況と学習成果の分析が行われている。

(優れている理由)

アンケート調査とレビュー等による多面的な評価・点検を構想することで質の保証を高めようとする取り組みは優れている。履修状況や成績についての詳細な分析もおこなっており、派遣・受入学生が適切に学習を行っているかを確認していることも優れている。多様で多面的にプログラムをレビューするという方向性は今後のキャンパス・アジアの展開に有用な知見を提供するものと期待される。

本プログラムの教育内容や学生の学習成果・教育効果の情報は、高校生セミナーやホーム・カミングデー、新任研修会におけるポスター発表を通じて、プログラムの教育内容を社会、学内に向けて発信をしている。事前研修、International summer schoolなどの附属プログラムの成果については、参加学生による報告書を作成し、公表している。このようなかたちで、本プログラムの実施状況を公表・発信することにより、社会で広く理解されるようになってきているものと判断する。

(優れている理由)

プログラムの成果や実施状況について、学内外に広く情報を発信し、質の保証を担保しようとする取り組みは、優れている。高校生向けのセミナーでの発信は、本プログラムに関心を抱く可能性のある学生を確保するための一つの工夫である。

モニタリング実施側からのコメント

- ・ 受講生からのアンケート結果などが、各担当教員にどのようにフィードバックされるかという具体的仕組みについて、今後のいっそうの取り組みを期待したい。

大学が指摘した課題とそれに対するコメント

○大学が指摘した課題

- ・ 学生の負担も考慮しながら学習成果の公表の機会を増やす。
- ・ 本プログラムが学部生向けであることに主眼を置いた、プログラムの継続のための検討が必要である。

○コメント

- ・ 助成終了後のプログラムの継続は、種々の財政的措置を伴うだけに容易ではないが、プログラムの継続に向けた努力をお願いしたい。
- ・ 学部生向けプログラムは、他大学へのモデルとしての影響が大きいと考えられるところから、バランスの取れた科目配置を含めて、安定的な教育の運営上からも重要である。プログラム参加学生が4年で卒業できるように保証することも、そのポイントの一つとなりうる。そのためには、教育交流の形を取って、日本側からの教員派遣による「教員＋学生」の形のシステムも、相手大学を尊重するという前提のもとで、ありえるのではなかろうか。

「キャンパス・アジア」モニタリング 自己分析書

平成25年5月

「東アジア『ユス・コムーネ』（共通法）形成にむけた
法的・政治的認識共同体の人材育成」

名古屋大学

＜目 次＞

I 構想にかかる基本情報および目的、進捗状況	
1. 基本情報	1
2. 構想の目的、概要、進捗状況	1
II 基準ごとの自己分析	
基準1 教育プログラムの目的	6
基準2 教育の実施	
基準2-1 実施体制	8
基準2-2 教育内容・方法	10
基準2-3 学習・生活支援	13
基準2-4 単位互換・成績評価	15
基準3 学習成果	16
基準4 内部質保証システム	17

I 構想にかかる基本情報および目的、進捗状況

1. 基本情報

1. 大学名	名古屋大学	
2. 構想名称	【和文】	東アジア『ユス・コムーネ』(共通法)形成にむけた法的・政治的認識共同体の人材育成
	【英文】	Training Human Resources for the Development of an Epistemic Community in Law and Political Science to Promote the Formation of “jus commune” in East Asia
3. 取組学部・研究科等名	大学院法学研究科・法学部 法政国際教育協力研究センター	
4. 海外の相手大学	【中国】	中国人民大学・法学院、清華大学・法学院、上海交通大学・凱原法学院
	【韓国】	成均館大学・法学専門大学院/社会科学部、ソウル国立大学・法科大学

2. 構想の目的、概要、進捗状況

○構想の目的及び概要

現在、経済的・文化的に非常に強く結び付いている日中韓三ヶ国は、将来に向けてさらにその連携を深めていくとともに、アジア全域に対して共同して指導力を発揮していくことが求められている。そのために重要なのは、政治・経済・外交的な連携の基礎となる社会的インフラストラクチャ、なかでも法を共有するとともに、それを三ヶ国で協調して運用することのできる人材を育成することである。また、ここで共有される法は、アジアにおける法の現状と理念を反映したものである必要がある。そこで本構想では、東アジアのユス・コムーネ(共通法)の形成を目的として、①日中韓の法・政治・社会の現状に関する知識とその運用能力を持ち、共通法の形成に積極的に参画しうる人材、②共通法形成の基礎となる法情報・法令用語の共有化に向けた新しい比較法学を担う人材の育成、③その成果を他のアジア諸国(特に体制移行国)の法発展に応用し、法整備支援を通じて新たな法の形成・運用を支援しうる人材を養成することを目的とする。

【背景】①世界的に進行しているグローバリゼーションは、経済的側面にとどまらず、その基盤となる法制度の統一・共通化を要請している。すでに欧州では欧州人権条約やEU消費財売買指令といった形で、民商法領域に留まらないユス・コムーネ形成が進展してきた。東アジア地域においてもこの動向に応える必要があるとの声は、次第に強まっている。だがその際に留意すべきなのは、法や人権のあり方が世界的に統一的なものなのか、一定の地域性を持ったものかという点である。欧米的理解とは一線を画した「アジア的人権」論が1990年代以降のアジア諸国で主張されたように、社会の現実や文化・伝統法のあり方に大きな差異があるこ

とを考えれば、この地域に適したアジア的な法概念の可能性を、人権保障のあり方を含め、真剣に検討する必要がある。

②その際、日中韓の東アジア諸国がいわゆる「漢字文化圏」に属することは重要である。欧米起源の法体系を受容するにあたって、明治維新以降の日本による翻訳作業が中国・韓国の法令用語に大きな影響を及ぼしてきた。無論、歴史的経緯やその後の発展により同じ起源を持つ語であってもその意味が異なるようになった事例も多く存在するが、情報科学の知見を活用して法情報データベースを構築することにより、法令用語の共通化やそれを基礎としたユース・コムーネの形成が急速に進展する可能性がある。

③また、三ヶ国を囲むベトナム・カンボジア・モンゴル・ウズベキスタンなどアジアの体制移行国に対しては、日本・韓国が法整備支援を行なってきており、近年では中国もそこに加わっている。当然ながら、法整備支援という事業を成功させるためには、被支援国の法文化や現行法に対する深い理解が必要である。日中韓の研究者が共同して、アジア諸国の法・政治をめぐる過去と現在について本格的に調査・研究し、その成果を若い世代へと還元していくことは、三ヶ国にとどまらず広くアジア諸国にとって重要な意味を持ち得る。

【具体的構想】これらの課題はいずれも、一朝一夕に解決可能なものではない。長期にわたる努力を支えるためには、継続的な学生相互交流を含む、本格的な人材教育交流が必要である。本構想では、日中韓各大学の法学部・社会科学系学部による共同の教育を進めることにより、三ヶ国およびアジア地域において将来的に法曹・研究者・公務員(国際・国家・地方)・企業人として活躍することのできる人材を、主として学部レベルにおいて育成することを目指す。

具体的には本プロジェクトに参加する優秀で意欲のある学生を1年次教育の終了時に選抜し、2・3年次に共通カリキュラムによる教育を進める。まず2年前期には各国での準備作業として自国の政治・法体系について学修するとともに、外国語能力を強化する(英語のレベルアップ+中国語・韓国語初歩(日本の場合))。2年後期～3年次には各大学へ留学し、共通講義を受講する。コアカリキュラムとして、①各国の法・政治に関する入門講義、②社会科学的素養と国際社会への視野を養うための世界を対照とした比較法・政治を扱う講義、③社会科学分野に特化したものを含めた語学科目を設定する(各大学で3分野×2科目×2単位=12単位)。また、各大学で開講されている英語による授業等への出席も認める。

規模としては、毎年本学から中国の大学へ5名、韓国の大学へ5名の計10名を派遣する。また、中国・韓国の大学からそれぞれ5名、計10名の学生を受け入れる。コアカリキュラム以外も含め、相互の授業は単位の相互認定が可能となるように制度化する。また、本構想の中心は学部学生の教育に置かれるが、附属的プログラムとして各国の法科大学院学生・大学院生の部分的参加を認める。これにより、これまでは難しかった大学院水準の学生たちについても、交流の機会を促進する。

本構想は、名古屋大学大学院法学研究科・法学部および名古屋大学法政国際教育協力研究センター(CALE)が1990年代より開始したアジア諸国に対する法・政治研究、法整備支援事業の膨大な経験の蓄積によって、はじめて可能となるプロジェクトである。

○平成24年度末までの取組状況

【平成23年度の取組状況】

[実績]

①中国・韓国の協力校との情報交換・打ち合わせの実施

本プログラム採択直後から中国・韓国の協力校との情報交換・打ち合わせを行った。中国の主管校および参加校とは、12月に中国人民大学法学院および清華大学法学院と、1月には上海交通大学凱原法学院

と、それぞれ実施した。韓国の主管校および参加校とは、1月に成均館大学とソウル大学との間で実施した。また、1月には中国北京に全主管校が集まり、情報交換・打ち合わせを行った。これらの情報交換・打ち合わせにより、参加校同士にお互いの事情や要望などについて情報を共有し、また、共通認識を増やすことが出来た。その結果、本プログラムの内容の確定にむけて大きな前進があった。

②中国・韓国での受け入れ準備状況と派遣における要請事項の調査

中国とは1月に、韓国とは3月に、それぞれ1年間の派遣及び、事前研修・附属プログラムの受入準備状況と派遣における要請事項について調査を行った。これにより、学生交流における課題を把握し、本学における取組の改善に反映させることができた。

③各国における Quality Assurance（以下、QA）実施委員会の立ち上げ

1月には日本におけるQA実施委員会を立ち上げ、カリキュラム、シラバス、成績評価基準、単位授与、成績評価および単位互換に関わる内容を充実化し、また制度を整える作業を行った。1月には北京において各大学のQA実施委員会からなるQA協議会が設立され、参加学生に対して提供される共通科目の具体的内容、単位授与、成績評価および単位互換等について基本的な合意をみた。

④参加学生を対象とした英語・中国語・韓国語特別クラスの立ち上げ

2月には、参加学生を対象とした英語・中国語・韓国語特別クラス、および中韓の主管校から招聘した特任教授・講師による中国法および韓国法に関する講義ならびに文化交流ガイダンスを立ち上げた。学生には、英語と派遣希望国の言語の授業を毎週3時間ずつ提供することにした。これらの語学特別講義によって、学生の派遣国での学校生活や日常生活に必要な言語能力を備えられるようにしている。言語教育とともに、中国法と韓国法の講義を導入することで、学生に派遣国の法学に関する基礎知識の提供を図った。

⑤中国・韓国への学生派遣、予備教育の実施

中国には3月に7名の学生を、また韓国には2月に4名の学生を派遣して、9日間の事前研修を実施した。研修では、著名な学者による特別講演、裁判所や法律事務所の訪問、大使館領事部・政治部の訪問（中国）、派遣先大学での学生間の交流、中国・韓国の歴史や文化体験などを通じて、派遣後の教育と生活について実体験する機会を与え、派遣後の教育効果の向上を図った。

⑥日中韓のQA協議会と国際シンポジウムの開催

2月に、名古屋で国際シンポジウムを開催し、参加機関の代表が集まって、本取組の計画、意義および展望についての報告と討論を行った。また、1月（北京）、2月（名古屋）、3月（上海）に三カ国の大学によるQA協議会（第二回）を開催し、（1）各参加大学における本プログラム実施計画に関する情報交換、協議、調整、（2）各参加大学のカリキュラム、シラバスおよび成績評価に関する打ち合わせ、（3）各参加大学の単位授与、成績評価および単位互換の実施に関する情報交換、協議、調整などを行った。

[成果]

上記①および②：中国と韓国の受入準備状況と派遣における要請事項に関する調査を通じて、日本から中・韓への派遣と中・韓から日本への派遣をよりスムーズに行うための体制を構築することができた。

共通講義および選択講義の開設、既存の英語による講義の状況、インターンシップの実施状況および語学プログラムの実施状況など教育面に関する準備状況、ならびに宿舍の手配、生活および勉学をサポートする教員・チューターの配置状況の確認を実施した。各国間でこれらの状況に微妙な差異が存在するため、それをすりあわせ、調整し、均質でしかも質の高い教育を参加学生に提供するための体制を構築することができた。

上記③および⑥：QA 実施委員会と QA 協議会の活動を通じて、質の保証された教育の共同実施を可能にするために必要な制度の整備、担当者の準備などを進めることができた。

共通講義の内容の確定、履修科目数、単位（成績）認定、本プログラム修了学生に対するディプロマの授与などに関する制度整備をはかった。これにより、関連する名古屋大学法学部規定の改正作業に着手した。

上記④および⑤：中国・韓国への本学学生の派遣・短期教育によって、学生に対して現地での教育経験を与えるとともに、各大学には、派遣と受入の実践的練習の期待が与えられることとなり、これによって双方の受入準備が整えられた。

2月・韓国および3月・中国に実施された学生派遣（事前研修）により、参加学生は現地での教育経験を通じて、中国および韓国における法と政治の現実の一端に触れることができた。参加学生の受けたインパクトは大きく、意識と意欲の大幅な向上が見られたのみならず、本プログラムに参加していない他の学生への影響も見受けられた。また、事前研修を総括し、語学および法と政治に関する事前教育プログラムの改善にも取り組むなど、教員への意識にも影響を与えている。

上記⑥：2月に名古屋で開催された国際シンポジウムにより、本取組みを内外の教育界に情報発信され、関心と支持を促した。

第二回 CAMPUS Asia 法学院長・学部長会議を名古屋で開催し、日中韓の主管校・参加校の関係者をはじめ50名以上にものぼる参加者を得た。会議の一部は日本経済新聞でも報道され、会議終了後、本プログラムに関する問い合わせのメールが来るなどの反響があった。

【平成24年度の取組情況】

[実績]

①新入生及び在学生向けのキャンパス・アジアの説明会と参加学生を対象とした語学教育及び予備教育の実施

平成24年度入学学生に対して、本プログラムの趣旨に関する説明会を行った。その上で、10月からは、本プログラム参加希望学生に対し、事前教育を開始した。

②QA 協議会の開催（7月：ソウル、3月：北京）

各参加大学から本年度派遣される学生につき、各大学において選抜を行い、これを QA 協議会にて審議し、確定した。また、本プログラムにもとづく共通教育の教育内容、成績評価等にかかるガイドライン及び改善点、各参加大学のカリキュラムを確認した。

③各参加大学の長期学生の派遣・受入開始

8月から9月にかけて、各参加大学で学生の派遣及び受入を実施した。

④中国・韓国・ASEAN 諸国からの附属プログラム学生と事前研修参加学生の受入

附属プログラムと事前研修の一環として、各国の学生に日本の教育と生活について体験する機会を与えることを目的に、8月にインターナショナル・サマーセミナーを開催した。特にベトナムおよびカンボジアにおいて本学が設置する日本法教育研究センターなどの学生を招聘し、東南アジアと東北アジア（日中韓）の学生との交流を通じて、キャンパス・アジア事業のさらなる波及を図った。

⑤国際シンポジウム「第三回 CAMPUS Asia 法学院長・学部長会議」の開催

日中韓参加校による国際シンポジウム「第三回 CAMPUS Asia 法学院長・学部長会議」を開催し、本取

組の意義と現状の公表・普及とあわせ、本プログラムの長期継続を視野に入れた国際的成果を確認した。

⑥ 派遣学生に対するケア及びインターン先の手配

派遣地で学生が学業を進めるに於ける問題点を点検し、その改善策を模索した。その上、学生の方の実用的感覚を養うために、インターン先を手配及び提供した（12月）。

⑦ 韓国・中国への附属プログラム及び事前研修参加学生の派遣

キャンパス・アジアの事前教育を受けている新入生の教育効果を向上させるために、派遣希望国の教育と生活について体験する機会を与えた。そして、附属プログラムとして、本学の法科大学院生を四人ずつ選抜し、中韓の法科大学院生との交流を図った（2～3月）。

[成果]

上記①：入学の段階から積極的な広告活動を行うことで、学生に参加の機会を広く与えると同時に、本事業により良い人材に参加させることを可能にした。参加学生を対象とした予備教育及び語学教育を通じて、派遣後の現地における教育を円滑かつ充実したものにする事ができた。

上記②：QA 実施委員会と QA 協議会の活動を通じて、質の保証された教育の共同実施を可能にするために必要な制度の整備ならびに改善などができた。

上記③：本プログラム開始以降、各参加大学の間で初めて学生の派遣と受入を実践することができ、それを通じて準備が万全となることを目指すとともに、本プログラムの改善に寄与することができた。

上記④：各参加大学から派遣を希望する学生を選抜し、日本での教育経験を与えることによって、今後の学習の動機付けとなるとともに、次年度に派遣が予定されていた学生の教育向上をもたらすことができた。さらにこのような交流は、将来の東アジア「ユス・コム・ネ」（共通法）形成にむけた法的・政治的認識共同体形成を担う人材が集う環境を整備することに重要なきっかけとなった。

上記⑤：第三回 CAMPUS Asia 法学院長・学部長会議により、本プログラムに関する情報を内外に発信し、関心と支持を促した。同会議には日中韓の主管校・参加校の関係者をはじめ 50 名以上にものぼる参加者を得た。これまでに 3 回開催された CAMPUS Asia 法学院長・学部長会議での報告および質疑応答をまとめた資料を作成し、公表した。これを世に問うことによって、よりいっそうの質の向上を図っている。

上記⑥：派遣後、一学期を過ぎた時点で中間点検を行うことにより、派遣学生が学業を進めるに於ける問題点を改善することができた。また、現地でのインターンシップの手配を通して、学生には、法と政治専攻を生かした実用的感覚を養う機会を与えることができた。

上記⑦：2月・韓国および3月・中国に実施された学生派遣（事前研修）により、参加学生は現地での教育経験を通じて、中国および韓国における法と政治の現実の一端に触れることができた。参加学生の受けたインパクトは大きく、意識と意欲の大幅な向上が見られたのみならず、本プログラムに参加していない他の学生への影響も見受けられた。また、事前研修を総括し、語学および法と政治に関する事前教育プログラムの改善にも取り組むなど、教員への意識にも影響を与えている。

Ⅱ 基準ごとの自己分析

基準 1 教育プログラムの目的
海外大学との共同教育プログラムの目的が明確に定められ、参加大学の間で共有されているか。

1. 基準 1 に係る現況の説明

a) 教育プログラムの目的(育成する人材像を含む)の設定

- ・定期的に開催される各参加大学の学部長による会議において、人材育成の社会的・学術的な必要性について検討・分析するとともに報告書としてまとめ、プログラム目的に対する認識が調整・共有される。
- ・学際間人材、アジアから世界に向けて発信できる人材の育成というターゲットは明確で、参加大学すべてで共有されており、派遣学生の受入校では語学はもちろん法学・政治学にわたる共通必修科目を設置しており、育成する人材像に求められる知識・スキル・態度等の学習成果を含めて明確に定められている。
- ・本プログラムは、名古屋大学大学院法学研究科・法学部および名古屋大学法政国際教育協力研究センター（CALE）が 1990 年代より実施しているアジア諸国に対する法・政治研究、法整備支援事業の膨大な経験の蓄積によって、はじめて可能となるプロジェクトであり、これは国内唯一であるばかりでなく、世界的にもきわめてユニークな取り組みであり、高く評価されている。これらの取組を通じて、今後必要となると考えられたのが本プログラムの育成すべき人材像であり、本プログラムの目的である。
- ・本プログラムは東アジア地域における法的・政治的認識共同体のためのグローバル人材育成を目的としており、そのためには参加大学との共同の教育プログラムが必要であるということで認識が一致しており、これが共通必修科目の設置につながっている。
- ・本プログラムの目的を達成させるために、参加大学間で締結した「Establishment of a supportive core for CAMPUS Asia Jus Commune Triangle Agreement for Academic Exchange and Cooperation」および「Establishment of a supportive core for CAMPUS Asia Jus Commune Triangle Agreement for Academic Exchange and Cooperation」（以下、協定書とする）では、学生の交流、教員、研究者及び職員の交流、学術資料、刊行物及び学術情報の交換、共同研究及び各大学の利益となるその他の活動を協力して行うことが明確に定められている。

b) 教育プログラムの目的の大学間での共有

- ・協定書の制定と締結により、プログラムの目的が共有され、運営指針として機能している。
- ・本プログラムは名古屋大学の国際化戦略「名古屋大学から Nagoya University へ」の中に位置づけられていることから、本プログラムの目的が、自大学の目的や国際化戦略の中に位置づけられ、関係者に共有されていると言える。
- ・本プログラムは、現時点では学部学生を中心とし、共同学位を目的とはしていないが、将来的には修士課程に在籍する大学院生にも一部開放し、デュアル・ディグリーもしくはジョイント・ディグリーの実現に向けて努力することで、各大学の認識が一致している。

〈段階判定の尺度と説明〉

以上のことから、基準 1 における本プログラムの取組状況は「進展している」と自己判定する。

2. 今後の課題点

- ・目的と成果のフィードバックと今後もプログラムを持続させるための具体的な取り組みが必要である。
- ・学部レベルでのデュアル・ディグリーの実現は、各国の学位認証システムからして、現実には難しい。
- ・中国の参加大学は、学部より大学院の交流を深める意思が強いので、プログラムの目的を調整する必要がある。

基準 2 教育の実施
基準 2-1 実施体制
目的を達成するための体制が、参加大学等の間で適切に構築され、機能しているか。

1. 基準 2-1 に係る現況の説明

a) 組織体制

- ・参加大学間で運営体制や学生に対する責任、経費の配分等の基本的方針は、協定書で明確化され、機能している。
- ・本プログラム参加大学は、協働して、本プログラムの質を保証するための Quality Assurance 協議会（以下、QA 協議会）を設立した。QA 協議会は定期的（年 2～3 回）に、各国持ち回りで開催され、本プログラムの運営方法や課題等（具体的には、派遣・受入学生の選抜・確定、共通科目の教育内容、成績評価等にかかるガイドラインの作成・改訂、参加大学のカリキュラムの確認、成績評価、単位認定など、質の保証された教育の共同実施を可能にするために必要な制度について）の検討が行われている。また、QA 協議会および毎年 1 回開催される学部長会議を通じて、各々最高レベルの意思決定ならびに実務レベルの決定事項を行っている。また、参加大学の教職員相互で日常的な連絡体制が構築され、機能している。
- ・入学生に対する指導教員体制が構築されている。また、参加大学の指導教員および講義担当教員が派遣学生と直接面談することにより、学習面・生活面での指導を行っている。
- ・「取組学部・研究科及び学内における採択プログラムの実施体制表」のとおり、自大学における教育プログラムの責任体制は構築されている。

b) 教職員

- ・中国・韓国の法律学・政治学を専門とする教員、中国への留学経験のある教員、日本で学位を取得した中国人・韓国人教員を本プログラムの中心に配置するとともに、英語による講義が可能な教員（日本人および外国人）を確保・配置することによって、国際的な対応能力の高い教職員による教育を実施している。また、日本人学生の事前教育を担当する教員として外国人非常勤講師（英語 1 名、中国語 1 名、韓国語 1 名）を、海外からの留学生のために日本語教育を担当する非常勤講師（1 名）を、それぞれ雇用するとともに、中韓の参加大学から 1 名ずつ、法と政治に関する事前教育を担当する教員を特任教員として招聘し、さらに本プログラム専従の事務職員には海外留学・海外勤務の経験を有する者を採用することによって、国際的な対応能力の向上に努めている。
- ・部局としての取り組みの一環で、12 年 5 月に留学生対応にかかる FD を実施し、部局全体の対応能力向上を図った。FD・SD という形式ではないが、少なくとも毎月 1 回、本プログラムに携わる教職員（非常勤講師を除く）による会議を開催し、またメーリングリストやデータベースを作成し、これらにより経験と情報を共有化することで対応能力の向上に努めている。
- ・自大学の国際部国際学生交流課が留学生に対するケア及び生活面におけるガイドラインを作成しているが、それをベースに、本プログラム参加学生（受入・派遣）のためのガイドライン作成を行っている。

〈段階判定の尺度と説明〉

以上のことから、基準 2-1 における本プログラムの取組状況は「進展している」と自己判定する。

2. 今後の課題点

- ・教職員の FD、SD を強化する必要がある。
- ・韓国の参加大学と中国の参加大学との間の意思疎通がうまく図られなかったことがあったため、日本側のさらなる積極的な関与が求められている。
- ・自大学において、受入学生に対するより充実した教育を提供するために、教務関係、留学生関係の学内支援体制をより強化する必要がある。

基準 2－2 教育内容・方法

目的を達成するために適切な教育内容や教育方法が共同して検討され、実施されているか。

1. 基準 2－2に係る現況の説明

a) 教育内容・教育方法

・日中韓の参加大学におけるカリキュラム構成や科目の情報については、年 2～3 回開催される QA 協議会および年 1 回開催される法学部長・院長会議を通じて共有されている。

・3 か国で共通した人材育成を目指すために、QA 協議会での検討・協議を経て、共通科目(現地の法律学・政治学入門、社会科学のための現地語学習、社会科学的素養・国際社会への視野を養う講義)を設定することとされ、実施されている。また、主管校(中国人民大学、成均館大学および名古屋大学)においては、共通科目と選択科目が提供されている。

・本プログラムでは、留学先において英語、または現地語による法律学・政治学の講義、および現地語を習得するための特別授業が提供されている。これら大学の中での教育とは別に各種の課外活動の場を用意し(12 年度の実施例として、東京・最高裁見学、広島・岡山への社会学習等)、留学先の社会を内在的に理解する機会を提供している。特に、日本からの長期派遣学生は、派遣前の 1 年間に実施される事前教育を受講することで、派遣時ではすでに語学および現地の法律学・政治学の基礎を身につけており、一般の留学生に比して派遣後の学習効果が格段に高いとの評価を受けている。また、事前研修や中国・韓国の参加校から招聘する特任教員・中国・韓国の参加大学からの留学生との交流を通じ、派遣後の学習・生活がきわめてスムーズになっている。このように、本プログラムが参加大学との国際共同プログラムであることが、留学を単なる現地での生活経験や初歩的な語学能力の習得というレベルに止めることなく、より高度かつ専門的な語学力及び知識の習得を可能とし、それが付加価値や国際競争力の向上に繋がる。

・本プログラムでは、中韓への派遣を希望する日本人学生に対し、長期研修や短期研修、および、それに係る教育活動を行っている。これらは、学生が育成する人材像に期待される知識やスキルを身につけることができるように意図されており、活動の中には日中韓の法・政治・社会に関する知識だけでなく、身をもって体験することができるという内容が含まれ、これが目指す人材育成に繋がっている。

具体的には、以下の教育活動を行っている。

【長期派遣学生】

- 1) 英語、中国語または韓国語、中国または韓国の法律学および政治学に関する 1 年間の事前教育
- 2) 定期的に外国から講師を招聘しての特別講演
- 3) 留学に向けた事前研修としての、中国・韓国への短期研修(2 週間程度)
- 4) 中韓からの受入学生と長期派遣予定の日本人学生をペアとしての相互学習
- 5) 派遣先大学における 6 科目の必修科目(共通科目)+選択科目の提供(専門科目教育)、加えて、語学教育として、少なくとも半年間の現地語(中国語・韓国語)研修の提供
- 6) インターンシップ(予定)

【短期派遣学生】

特別講演、2 週間程度の短期派遣

・中国と韓国からの長期受入学生 10 名に対しては、英語による六つの共通科目(Introduction to Japanese

Law, Introduction to Japanese Politics, Japanese for Social Science 1, Japanese for Social Science 2, Comparative Legal Study in Asia, Comparative Politics in Asia)を開設している。また、様々な選択科目(日本語もしくは英語)も提供することで、彼らの滞在期間中には、日本の法および政治に関する全般的な知識が習得できる環境が整備されている。これにより、参加学生が将来東アジア共通法の形成に貢献しうる人材に育成するという本プログラムの目的と合致させている。また、中韓の参加大学(受入大学)でも同様の講義が提供され、このことから、本プログラムが一つのプログラムとして構成されていると評価できる。

- ・日本での短期受入学生に対しては、2012 年 8 月に名古屋市内の弁護士事務所 5 カ所においてインターンシップを実施し、また長期受入学生に対しては、2013 年 3 月に「Daewoo Japan」における 1 週間ほどの企業研修を行った。また、2013 年 8 月には派遣先でのインターンシップ実施を予定しており、協議が進められている。

- ・日本においては留学生センターにおける日本語学習の保証がされている。また、中国、韓国においても、言語コース等における現地語の学習が進められている。また、共通科目として設定されている「社会科学のための日本語／中国語／韓国語」において、言語学習を通じた社会科学の学習が進められている。

- ・本プログラムは英語での学習を基本としているため、参加学生は基本的には英語による講義を履修している。6 つの共通科目をはじめ、24 の法律学・政治学に関する英語講義が提供されている。紙媒体およびインターネットによる英語のシラバスが用意されており、加えて、留学生担当講師やチューター、および日本人学生のボランティアサークル SOLV (School of Law Volunteers, 以下、SOLV とする) によるケアもあり、外国人学生が履修しやすい教育環境にある。

- ・e-learning システムを用いた特別講演の聴講を実施しているため、遠隔地においても日本における講演を聞くことができる。

b) 学生受入

- ・日本から中国・韓国への派遣学生、及び両国から日本への受入学生は、ほぼ予定通り 5 名ずつという双方向性が保たれている。

- ・日本が受け入れている中国・韓国の学生のレベルは専門知識・語学力とも非常に優れており、優秀な成績を修めている。一方、日本から派遣している学生(第一期長期派遣学生)の中には、主に英語力の問題から、単位取得に困難を生じる場合もある。

〈段階判定の尺度と説明〉

以上のことから、基準 2-2 における本プログラムの取組状況は「進展している」と自己判定する。

2. 今後の課題点

- ・法律学・政治学に関する英語による講義が 24 科目用意されているが、極めて積極的な一部の学生のニーズに対応し切れていないところもあるため、その拡充を図る必要がある。

- ・日本からの第一期長期派遣学生の中に、その語学力(英語)から一部講義の履修に問題が生じた。初年度派遣学生であったため事前学習の体制が万全でなかったという点も考慮すべきであるが、派遣前の段階で語学力をより強化させる必要がある。

- ・派遣先大学において英語で開講されている専門科目がやや少ないことから増加を要請している。

- ・中国・韓国からの長期受入学生に関しては、派遣元の大学における派遣前の事前教育が十分に行われて

[大学名：名古屋大学]

いるとは言い難いため、実施を要請したい。

・中国側の主管校が法学院(法学部)であることから政治学の科目が弱く、また、韓国においては法科大学院の発足とともに法学部が消滅したことから法学関係の選択科目が大学院のものに限られるという状況が生じた。このように、三カ国の制度の差によって発生する問題が存在しており、これを解決する方策を QA 協議会の中でも検討中である。

基準 2－3 学習・生活支援

学生が適切に学べる環境を形成し、学習・生活面の支援を行っているか。

1. 基準 2－3に係る現況の説明**a) 学習支援**

- ・QA 協議会での検討を通じ、講義科目、単位認定等については情報の共有を行っていたが、初年度の学生派遣(交換)の際には、一部でシラバスの入手等の具体的な情報交換が難しかった。しかしながら、平成 24 年度末では、カリキュラムや科目に関する具体的、詳細な情報の交換と共有は実現している。
- ・本プログラムは参加学生の入学・卒業に直接の関係を有しないことから、参加大学間のアカデミック・カレンダーに関しては大きな違いはないため、これまでのところでは問題は生じていない。
- ・現地での単位取得に支障が生じた学生がいた場合の対応方針について、協定書等では特に定めていないが、問題が生じた場合に派遣元大学から教員を派遣する等の個別対応を行っている。
- ・中国・韓国へ派遣を希望する学生には、事前教育として、英語、中国語、韓国語の語学教育、及び、中国法・政治、韓国法・政治の教育を 1 年間実施している。
- ・中国・韓国への派遣学生に対しては、およそ派遣後 3 ヶ月を目途として現地に教員を派遣し、派遣学生本人に対して現地での生活・学習状況に関するインタビューを行うとともに、受入大学の責任者ならびに講義担当者に対しても、派遣学生の生活・学習状況に関するインタビューを実施している。今後は、テレビ会議システムを利用した定期的な面談も行う予定である。
- ・中国・韓国からの受入学生に対しては、中国人教員、韓国人教員が履修指導を行ったり、学内各種資料の翻訳や諸手続の支援を行ったりしている。また、受入学生一人に対して日本人学生一人をチューターとして配置し、週に一度以上対面で言語や学習のサポートを行っている。さらには、部局所属の留学生担当講師および SOLV による生活面・学習面のケアも行っている。
- ・受入学生に関しては図書館の利用は自由にできるようになっており、IT 機器に関しても、iPad や PC、電子辞書、法律に関する CD-ROM の貸し出しなどを行うなどして、学習環境の整備に努めている。

b) 生活支援

- ・中国・韓国からの受入学生に対しては月額 8 万円の奨学金を支給するとともに、日本側が賃借料の全額を負担する形で学内の寮を提供している。中国・韓国への派遣学生に対しても、授業料は免除され、また各国の大学から奨学金も支給され、宿舍の提供も行われている。これらの情報に関しては、留学前に学生に提供されている。また、各国政府による支援の差が存在する中で、参加大学の努力によって、支援体制が整いつつある。特に、中国人民大学法学院からは、中国政府からの奨学金支給がなされていない時点で独自の奨学金支給が行われ、また成均館大学からは派遣学生に対して宿舍の提供(無償)が行われるなど、「参加大学による一つのプログラム」として学生に対する待遇に差が生じないよう努力している。
- ・中国・韓国からの受入学生に対しては、来日前に生活支援の情報を適切に伝達する(ハンドブックの送付)とともに、来日後に生活、語学、履修関係等の様々なオリエンテーションを行っており、また、外国人登録をはじめとする諸手続には引率者を配置して、一切が円滑に進むための体制を構築している。言語や生活面の支援に関しても、中国人教員、韓国人教員やチューター、留学生担当講師および SOLV によって定期的に行われている。

[大学名：名古屋大学]

- ・災害時等のリスク管理については、自大学が災害情報の提供および安否確認に関するシステムをすでに構築しており、これを活用している。
- ・中国・韓国への派遣を希望する学生に対して、事前研修の機会を利用して派遣先の大学を訪問し、自らの目で確かめ、体感する機会を与えている。その上で、派遣が決定した学生には派遣前にオリエンテーションを実施し、派遣先での生活支援の状況を的確に伝える機会を設けている。また、派遣後 3 ヶ月を目途に、自大学から教員を派遣し、学生との面談を通じて各種の生活支援を行っている。災害に限らず、緊迫した社会情勢になった際は、受入れ校に対し、派遣学生の保護を求めるとともに、学生に対して個別に聞き取り調査等を行っている。なお、中国には上海に名古屋大学事務所があり、緊急時には同事務所を拠点として速やかに対処する体制が構築されている。また、北京、上海およびソウルに名古屋大学同窓会があり、これら同窓会の支援も得られる体制を構築している。
- ・日本人学生の間では、1 期生と 2 期生とが単位の履修や現地の生活に関する情報交換が積極的になされている。また、中国・韓国からの派遣学生と日本人学生の間では、大学の行事(高校生セミナー、ホーム・カミングデーなど)や研修旅行等の場や、チューターとしての活動を通じて積極的な交流がなされている。

〈段階判定の尺度と説明〉

以上のことから、基準 2-3 における本プログラムの取組状況は「進展している」と自己判定する。

2. 今後の課題点

- ・派遣先から帰国後の自大学学生の学習面に対する支援が必要となる。
- ・中国・韓国からの受入学生の名古屋大学における身分は特別聴講学生であり、規定上、正規学生と異なる扱いをされるため、諸般の不都合が生じていることから、それに対する策を講じる必要がある。
- ・各参加大学からの第一期の派遣学生が派遣元大学に帰国した後は、これら学生を今後の学習・生活支援に取り込んでいく必要がある。

基準 2－4 単位互換・成績評価

単位の取得や海外大学等との互換方法、成績評価の方法および海外大学等との互換方法が定められ、機能しているか。

1. 基準 2－4 に係る現況の説明**a) 単位認定・互換**

- ・本プログラム開始以前から交換留学生の留学による単位振替認定は行われてきており、その際、シラバス等の提出を求め、単位制度・授業時間数等はじめ履修単位の内容を詳細に検討した上で、振替認定を行っている。本プログラムにより取得した単位の振替認定についても同様である。
- ・単位互換の上限管理については、以下のように協定書に規定する。

【日本/中国→中国/日本】

必修科目：半期・2 単位科目 3 講義

選択科目：半期・2 単位科目 8 講義以下(最大合計 22 単位)

【日本/中国→韓国】

必修科目：半期・3 単位科目 3 講義

選択科目：半期・3 単位科目 4 講義以下(最大合計 21 単位)

【韓国→日本/中国】

必修科目：半期・日本中国では 2 単位の科目として開講されるが、3 単位科目として 3 講義

選択科目：半期・日本中国では 2 単位の科目として開講されるが、3 単位科目として 2 講義以下(最大合計 15 単位)

b) 成績評価・学位授与

- ・すでに QA 協議会において成績評価方法に関する調整が行われている。成績評価は QA 協議会が策定するガイドラインに基づき、講義担当者が原案となる成績評価を行い、それを QA 協議会に報告し、了承されることで確定する。このような形で、単位の実質化が図られることとなっている。
- ・共通科目を履修して単位を取得した 1 年間の学部交換学生、および受入大学の教員の指導の下、研究活動を行った 1 年間の大学院交換学生は、ユス・コムーネトライアングル交流プログラムの事務局からディプロマが授与される。

〈段階判定の尺度と説明〉

以上のことから、基準 2－4 における本プログラムの取組状況は「標準的」と自己判定する。

2. 今後の課題点

- ・4 年での卒業を保障するために、単位互換・成績評価に関して改善をする必要がある。
- ・具体的な単位互換方法を引き続き検討する必要がある。
- ・参加大学において単位互換方法を統一化する。

基準3 学習成果
教育プログラムの目的に即して学習成果を測定する方法を設定し、成果が適切にあげられているか。

1. 基準3に係る現況の説明

a) 学習成果の測定と結果

- ・平成25年3月にはじめて、すべての第一期参加学生の単位取得状況が明らかになり、現状を把握することができた。学習状況の分析結果をふまえ、不足している点については、本プログラム担当教員から参加学生にアドバイスをしたり、関係大学と協議を行ったりして、その改善に努めている。
- ・学習成果に関する調査(学生の講義の履修状況等についての質問票を用いた調査)等を行っているが、その測定方法を適切に設定するところまでは至っていない。

b) プログラム履修後の状況

- ・現時点でプログラム修了者は存在しないが、1年の交流プログラムの修了後は、聞き取り調査、追跡調査等を実施し、今後の教育内容や指導方法の改善に活用する予定である。

〈段階判定の尺度と説明〉

以上のことから、基準3における本プログラムの取組状況は「標準的」と自己判定する。

2. 今後の課題点

帰国後の展開までを視野にいれ、学習成果を確認する方法(たとえば研究論文の提出や評価など)について検討する必要がある。

基準4 内部質保証システム

内部質保証や改善のための体系的な取組みが、参加大学との連携のもとで行われ、機能しているか。

1. 基準4に係る現況の説明

a) 内部質保証システムの体制

- ・学生から定期的な意見聴取(授業アンケート、懇談など)を実施している。
- ・派遣学生・受入学生へのアンケート調査とレビュー、事前教育・附属プログラムの参加学生へのアンケート調査とレビュー、および履修状況と学習成果の分析が行われている。
- ・参加大学間の連携のもとでの、定期的な外部者によるレビューは行われていないが、今後 QA 会議等を通じて外部者のレビューについて検討する予定である。
- ・自大学の自己点検・評価や認証評価において、本プログラムの状況についても含めることで、大学全体としての質保証においても考慮されている。
- ・本プログラムの教育内容や学生の学習成果・教育効果の情報は、高校生セミナーやホーム・カミングデー、新任研修会におけるポスター発表を通じて、プログラムの教育内容を社会、学内に向けて発信をしている。事前研修、International summer school などの附属プログラムの成果については、参加学生による報告書を作成し、公表している。このようなかたちで、本プログラムの実施状況を公表・発信することにより、社会で広く理解されるようになってきているものと判断する。

b) 改善実績・将来計画

- ・レビュー結果は参加大学間で共有されており、QA 協議会および院長・学部長会議の場におけるそれに対する検討を通じて本プログラムの改善へ活用されている。
- ・本プログラムは自大学の国際化や他の教育への影響を及ぼすことが意図されており、同時に、これまで法学研究科・法学部が取り組んできた国際的な教育・研究活動が本プログラムに及ぼす影響も大きい。実際に、本プログラム短期研修と日本法教育センター在籍学生の日本研究とを同時に実施したことで、参加学生に対して本プログラムが想定する以上の大きな成果を与えることができた。
- ・公的な資金助成が終了した後の、本プログラムの継続については、その方向で検討が進められている。

〈段階判定の尺度と説明〉

以上のことから、基準4における本プログラムの取組状況は「標準的」と自己判定する。

2. 今後の課題点

- ・学生の負担も考慮しながら学習成果の公表の機会を増やす。
- ・本プログラムが学部生向けであることに主眼を置いた、プログラムの継続のための検討が必要である。

[大学名]	名古屋大学
	(中国側大学) 中国人民大学、清華大学、上海交通大學 (韓国側大学) 成均館大学、ソウル国立大学
[構想名]	東アジア「ユス・コムーネ」(共通法)形成にむけた法的・政治的認識共同体の人材育成

1. 構想全体における交流学生数(実績)

(単位:人)

平成23年度		平成24年度	
受入	派遣	受入	派遣
0	11	28	35

2. 奨学金・宿舍提供の状況

(単位:人)

(1) 奨学金を受けている学生数		平成23年度		平成24年度	
		受入	派遣	受入	派遣
内訳	日中韓三国共通の財政支援受給者	0	0	10	10
	大学による奨学金	0	0	10	0
	その他の奨学金	0	0	0	10
		0	0	0	0

(2) 宿舍(大学所有の宿舍、大学借り上げによる宿舍等)を提供されている学生数		平成23年度		平成24年度	
		受入	派遣	受入	派遣
		0	注1)11	28	注2)35

注1) 11名は宿舍の提供を受けたものの、宿泊費については名古屋大学が負担した。
注2) 35名中、中国に短期で派遣された16名は宿舍の提供を受けたものの、宿泊費については名古屋大学が負担した。

3. 個別の交流プログラムの概況

※色の見方 外国人学生の受入れ(中韓⇒日本) 日本人学生の派遣(日本⇒中韓)

受入/派遣	相手国	平成23年度				平成24年度			
		第3四半期		第4四半期		第1四半期		第2四半期	
受入	中国							①5	③5
								②4	
	韓国							①5	③5
								②4	
派遣	中国				②7			③7	④4
									⑤1
	韓国				①4				④5
									⑥5
									⑦4

外国人学生の受入れ(中韓⇒日本)							日本人学生の派遣(日本⇒中韓)								
No.	交流期間		派遣元	交流内容	取得可能 単位数	学生交流数		No.	交流期間		派遣先	交流内容	取得可能 単位数	学生交流数	
	始期	終期				計画値	実績		始期	終期				計画値	実績
①	24.08	24.08	中国	事前研修(サマーセミナー) (3週間)	0	5	5	①	24.02	24.02	韓国	事前研修(10日間)	0	5	4
			韓国		0	5	5	②	24.03	24.03	中国	事前研修(10日間)	0	5	7
②	24.08	24.08	中国	付属プログラム(サマーセミナー) (3週間)	0	4	4	③	24.09	24.09	中国	付属プログラム(1週間)	0	4	7
			韓国		0	4	4	④	24.09	25.08	中国	長期派遣	44	4	4
③	24.09	25.08	中国	長期受入れ	44	5	5	④	24.09	25.08	韓国			39	5
			韓国		30	5	5	⑤	25.02	26.01	中国	長期派遣	44	1	1
								⑥	25.02	25.02	韓国	事前研修(10日間)	0	5	5
								⑦	25.02	25.02	韓国	付属プログラム(10日間)	0	4	4
								⑧	25.03	25.03	中国	事前研修(10日間)	0	5	9

「キャンパス・アジア」モニタリング自己分析書別添 授業科目一覧表

名古屋大学	
(中国側大学) 中国人民大学・清華大学・上海交通大学	(韓国側大学) 成均館大学・ソウル大学
東アジア『ユス・コミュニネ』(共通法)形成にむけた法的・政治的認識共同体の人材育成	

1. 日本側の授業科目(中国・韓国から受け入れた学生が単位取得した科目)

授業科目の名称	教授言語	担当教員	受講年次	学期/通年	必修/選択	取得可能単位	単位取得者数
Reading Legal Documents	英語	Glenn Melchinger	2年	半期	選択	2	6
Contemporary Japanese Law I	英語	Glenn Melchinger	2年	半期	必修	2	9
Preliminary Seminar A	英語	Westra Richard John	1年	半期	選択	2	5
Political Systems	英語	Westra Richard John	1年	半期	選択	2	4
Political Science	英語	Tamura Tetsuki	2年	半期	選択	2	1
Academic Japanese (Reading & Writing) III	日本語	KATO Jun	2年	半期	選択	1.5	1
Japanese for Social Science I	英語	KONDO Yukihito	2年	半期	必修	2	9
Special Lecture and Seminar (Comparative Law and Politics seminarsI)	英語	Matuura Yoshiharu	修士1年	半期	選択	2	7
Professional Studies in International Human Rights Law II	英語	Obata Kaoru	修士1・2年	半期	選択	2	2
Special Lecture and Seminar (Workshop on International Negotiation)	英語	Frank Bennett	修士1・2年	半期	選択	2	1
Special Lecture and Seminar (Comparative Asian Corporate Theory)	英語	Reporters for Yomiuri Shinbun Tokyo main office	修士1・2年	半期	選択	2	7
Comparative Studies in Public Administration	英語	Ushiro Fusao	1・2年	半期	選択	2	4
環境法	日本語	下山 憲治	3・4年	半期	選択	2	1
近代日本の政治と外交	日本語	増田 知子	1年	半期	選択	2	1
現代日本の政治と行政	日本語	小野 耕二	1年	半期	選択	2	1
法社会学	日本語	原田 綾子	3・4年	半期	選択	2	1
西洋政治思想史	日本語	菊池 理夫	3・4年	半期	選択	4	3
地域政治	日本語	小池 康弘	2・3・4年	半期	選択	2	1
中国法	日本語	宇田川 幸則	3・4年	半期	選択	4	1
法哲学基礎研究 II	日本語	森際 康友	修士1・2年	半期	選択	4	1
法哲学	日本語	森際 康友	3・4年	半期	選択	4	1
日本政治史 I	日本語	増田 知子	2年	半期	選択	2	1
日本政治史 II	日本語	増田 知子	2年	半期	選択	2	1
日本法制史研究 II	日本語	神保 文夫	修士1・2年	半期	選択	2	1

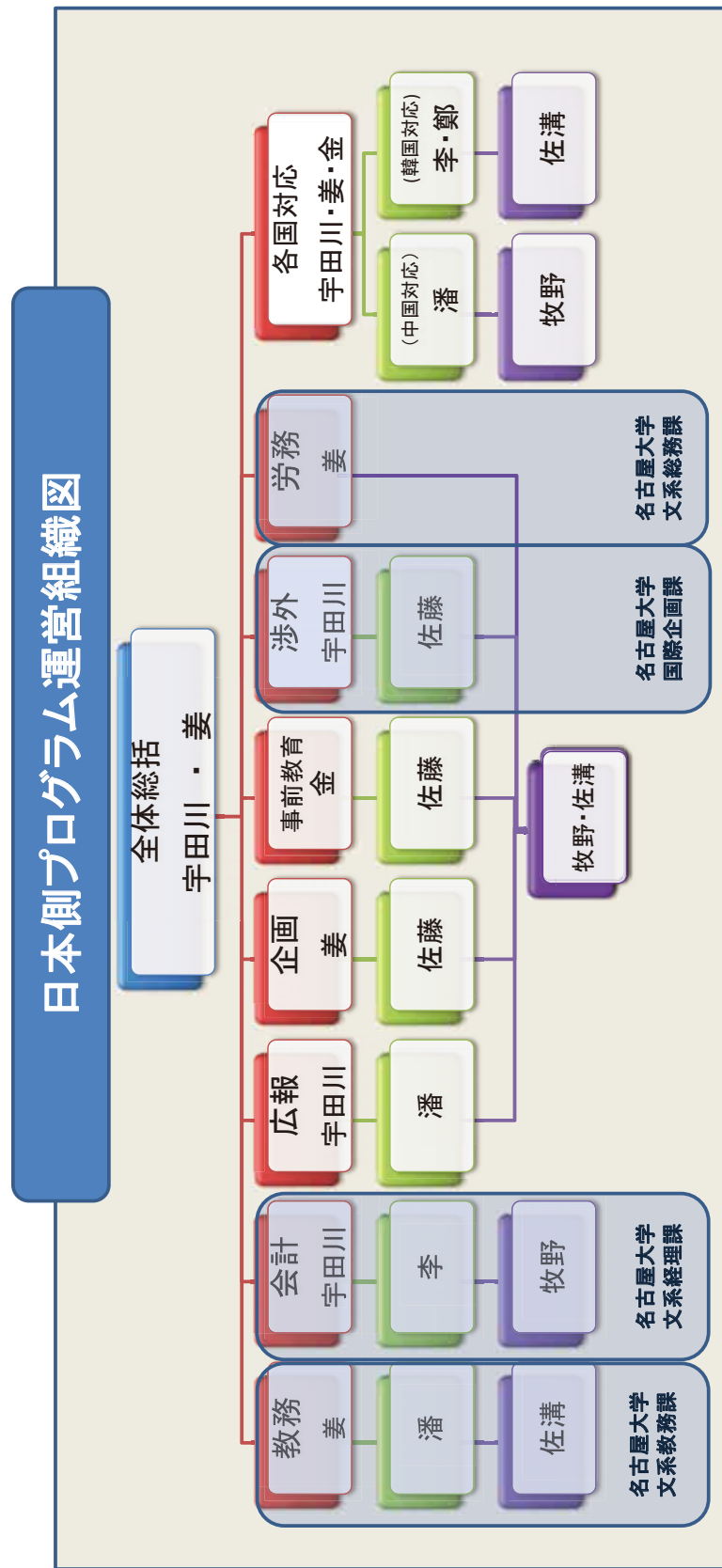
2. 中国側の授業科目(中国に留学した学生が相手大学先で単位取得した授業科目)

授業科目の名称	教授言語	担当教員	受講年次	学期 (半期/通年)	必修/選択	取得可能単位	単位取得者数
Introduction to the US Law	英語	Jeffrey Wayne Grove	修士1・2年	半期	選択	2	2
Tort Law of the US	英語	Matias Sueldo	修士1・2年	半期	選択	2	2
Introduction to Chinese Politics	英語	REN Feng	1・2・3年	半期	必修	2	4
Chinese Social Science	英語	LU Haina	修士1・2年	半期	選択	2	4
Comparative Legal Study in East Asia	英語	DING Xiangshun ZHENG Weiwei	1・2・3年	半期	必修	2	4
Introduction to Chinese Law	英語	Zhu Jingwen Ding Xiangshun Feng Yujun	1・2・3年	半期	必修	2	4
Chinese Contract Law	英語	Zhang Yongfan	修士1・2年	半期	選択	2	1
Dispute Resolution Mechanism	英語	Stephen Leonard	修士1・2年	半期	選択	2	1

3. 韓国側の授業科目(韓国に留学した学生が相手大学先で単位取得した授業科目)

授業科目の名称	教授言語	担当教員	受講年次	学期 (半期/通年)	必修/選択	取得可能単位	単位取得者数
Introduction to Political Science	英語	YOO, Chull	学部	半期	必修	3	5
Introduction to Korean Law	英語	JANG, Junhyok	学部・大学院	半期	必修	3	5
Korean language course 1	韓国語	(Sungkyun Language Institute)	学部	半期	必修	9	5
Political & Economic Development in Korea	英語	YOO, Chull	学部・大学院	半期	選択	3	3
Contemporary Korean Society & Culture	英語	SON, Cheol Bae	学部・大学院	半期	選択	3	1

名古屋大学 キャンパス・アジアプログラム実施体制表



名古屋大学内関係部署

- ・名古屋大学法政国際教育協力研究センター
- ・法学研究科学部国際関係プログラムに関する学務事項検討委員会
- ・法学部Web広報委員会
- ・キャンパス・アセアン事務局(法学部担当)

日中韓合同

- ・ Quality Assurance 委員会
- ・ Quality Assurance 協議会
- ・ 法学院長・学部長会議

中国	
中国人民大学 International Office Xu Fei	清华大学 International Program Office YangBoyi
上海交通大学 International Program Office Xie Mingyang	

韓国	
成均館大学 キャンパス・アジア 事務局 Kwon Chul	ソウル国立大学 法務教育支援室 U Mi-Hyoung

名古屋大学 キャンパス・アジアプログラム関連教職員

職位	名
教授	宇田川 幸則
教授	姜 東局
特任准教授	金 彦叔
特任講師	李 正吉
特任講師	鄭 燦玉
特任講師	佐藤 綾
特任助教	潘 芳芳
事務補佐員	牧野 考代
事務補佐員	佐溝 美乃里

「キャンパス・アジア」モニタリング

モニタリング報告書

大学名	名古屋大学 東北大学	
取組学部・研究科等名	名古屋大学（大学院理学研究科、工学研究科） 東北大学（大学院理学研究科、工学研究科、薬学研究科、農学研究科、生命科学 研究科、多元物質科学研究所、金属材料研究所、原子分子材料科学高等研究機構）	
構想名称	持続的社会に貢献する化学・材料分野のアジア先端協働教育拠点	
海外の 相手大学	【中国】	南京大学化工学院、上海交通大学化工学院
	【韓国】	ソウル国立大学校化学科、浦項工科大学校化学科

平成26年1月

独立行政法人大学評価・学位授与機構
「キャンパス・アジア」モニタリング委員会

<目 次>

I	モニタリング結果の概要	1
II	基準ごとのモニタリング結果	
	基準 1 教育プログラムの目的	2
	基準 2 教育の実施	
	基準 2－1 実施体制	4
	基準 2－2 教育内容・方法	6
	基準 2－3 学習・生活支援	8
	基準 2－4 単位互換・成績評価	10
	基準 3 学習成果	12
	基準 4 内部質保証システム	14

<付録>

採択プログラム実施主体から提出された自己分析書

I モニタリング結果の概要

総 括

これまでの大学間交流や研究者間のネットワークを基礎にして、日中韓の6大学によるコンソーシアムを形成しており、6大学が一堂に会する議論を通じて目的の設定と共有を行っている。

「世界のリーダーシップをとれる研究者の育成」を目的とし、それに即して他国の研究室文化や生活面の文化的差異を経験させるプログラムを構築しており、進展している。

実施体制については、シンポジウムの持ち回り開催やその際の責任者の会議の開催、キャンパス・アジア専任の外国人教員・国際コーディネーター等の雇用による体制構築を行っている。学習・生活支援については、派遣前の語学プログラムや宿舍の提供などの取り組みに加えて、受入学生の支援のためにマンツーマン体制でTAを配置しており、さらに学生間の交流促進の工夫として企業訪問を組み込んでおり、進展している。

優れた取組み

- ・ 本プログラムは、平成20年度から東北大学・浦項工科大学校で実施している短期学生交流、および大学間交流で培われた研究教育のグローバル化を基に、さらに国際交流協定校を拡大し、名古屋大学、東北大学、上海交通大学、南京大学、ソウル国立大学校、浦項工科大学校の6大学の化学系が集結し、長期的な研究教育を実現した。
- ・ 年に一度、日中韓の各国持ち回りで、公開シンポジウムを開催する体制をもった。その開催時に、参加（連携）大学の運営責任者を含む複数の委員が参加した会議を行っている。
- ・ 受け入れ学生が生活上、研究上の不便を感じないように、マンツーマン体制でTAを配置している。
- ・ 派遣先大学での研究活動の単位化については、派遣元大学において活動実績をもとに単位を授与する方法をとっており、そのための科目を設けている。
- ・ 日中韓運営責任者会議を定期的に行い、学生交流、単位認定など本プログラムの活動の問題点を議論し、改善への取り組みを行っている。

Ⅱ 基準ごとのモニタリング結果

基準 1 教育プログラムの目的

海外大学との共同教育プログラムの目的が明確に定められ、参加大学の間で共有されているか。

取組みの特徴

大学間の交流経験や研究者間のネットワークを基礎にしつつ、日中韓 6 大学が一堂に会して議論を行うなど、国を越える交流プログラムに必要な連携を経て目的の設定と共有を行っている。

「世界のリーダーシップをとれる研究者の育成」を目標として定め、他国での研究室文化や生活面の文化の差異を学生に経験させ、国際的な視野を有する研究者の養成を図っている。今後、育成する人材像に必要な具体的な能力や態度などの内容をさらに検討して明確に定め、学習成果の把握へとつなげていっていただきたい。以上のことから、質を伴った取組みの構築が進展していると判断される。

抽出した優れた取組み

本プログラムは、平成 20 年度から東北大学・浦項工科大学校で実施している短期学生交流、および大学間交流で培われた研究教育のグローバル化を基に、さらに国際交流協定校を拡大し、名古屋大学、東北大学、上海交通大学、南京大学、ソウル国立大学校、浦項工科大学校の六大学の化学系が集結し、長期的な研究教育を実現したものである。

(優れている理由)

選定された相手校はいずれも研究大学として定評がある大学であり、既にそれらの大学同士で個別に学生派遣の経験と実績を蓄積し、また研究者間のネットワークも形成されてきた。これらを基礎にして開発されたプログラムであるという点で、今後のプログラム開発の一つの方法を示すものである。化学分野では、基礎的な教育内容については国際的な標準性がある一方、研究活動は各大学・各研究室の特色があるため、複数の大学によるコンソーシアムを構築することは、学生が選択可能な研究テーマの多様性を確保することにつながっており、構築の一つの考え方として参考になる。また、研究集会と学生交換を組み合わせた仕組みも、教員・研究者のメリットが明確であり、目的の共有が図られやすいものと考えられる。

本プログラムは、2011 年 3 月に本プログラム採択前に上海で開かれたキャンパスアジア会議において、日中韓六大学が集まって議論しその目的を集約したものである。化学系の学生のグローバル教育を行なうことで、世界のリーダーシップをとれる研究者の育成を目的としている。

(優れている理由)

「化学系の学生のグローバル教育を行うことで、世界のリーダーシップをとれる研究者の育成」という目的が設定されている。学生は他国の研究室に滞在することで、異なる研究室文化を経験するとともに、派遣元大学とは異なる研究領域の先端的研究に取り組む機会も得

る。特に日本人学生は、中韓での研究室において英語による議論が行われている場に参加し、自己の英語力の課題を認識することも可能となっている。同時に、他国で暮らすことによる生活面の文化的差異もあわせて体験しており、国際的な感覚を有した研究者へと育っていくことが期待されている。これまで学生の交流が、教員の交流や研究室間での共同研究に発展していくことも見られ始めており、今後の発展が期待される。

モニタリング実施側からのコメント

- ・ 研究交流を通じてどのような共同教育プログラムを構築しようとしていくかに関して、参加6大学間での共有をさらにすすめていただきたい。

大学が指摘した課題とそれに対するコメント

○大学が指摘した課題

参加大学内でも、共同研究に積極的に関わる研究室が本プログラムに対する貢献が大きく、それ以外の研究室との間の温度差が大きい。これは中国・韓国側も同様である。そのため本プログラムに関わる学生が特定の研究室に偏る傾向がみられる。多くの研究室の学生が参加できるようにする仕組みが必要である。そのためには、学生交流と結びついた共同研究の芽を育てることが必要で、3か月以上という本格的な留学のまえに、短期間の体験的な留学経験を幅広い学生に持たせることが望ましい。

○コメント

- ・ 研究者個人の関心事として学生交換を行う場合、対象とする研究室によってもばらつきが出ることはある程度避けられない。全体としてのバランスをどのようにして達成するか、ガバナンスのポリシーが問われることになるのではないかな。
- ・ プログラムに参加する学生が、各大学の研究室の取組みを具体的に事前に把握できるように情報の収集と提供を充実させるのが一つの方策であるように思われる。

基準 2 教育の実施

基準 2-1 実施体制

目的を達成するための体制が、参加大学等の間で適切に構築され、機能しているか。

取組みの特徴

シンポジウムの持ち回り開催やその際の責任者の会議の開催、英語に堪能なキャンパス・アジア専任の外国人教員、国際コーディネーター、マネージャーおよび事務員の雇用により、体制構築を進めている。また、キャンパス・アジアに参加する研究室に関する情報を一覧化して学生に伝える工夫をしている。今後、中国や韓国側とのノウハウ共有・ガイドライン作成などの、共同した体制構築をさらに進めていただきたい。以上のことから、質を伴った取組みの構築が進展していると判断される。

抽出した優れた取組み

本プログラムにおいては、英語に堪能なキャンパスアジア専任の外国人教員・国際コーディネーター、マネージャーおよび事務員を雇用し支援体制を整えた。

(優れている理由)

日本側の2大学ではそれぞれ体制整備を適切に行っている。外国人教員による英語によるプレゼンテーション能力向上の事前研修や、国際コーディネーターによる日常的な情報の共有など、構築された体制が機能している。

本キャンパスアジアに参加する日中韓全体の研究室や研究テーマについて一覧表を作成した。名古屋大学のキャンパスアジアホームページおよび東北大学のキャンパスアジアホームページを作成して、参加研究室の一覧や研究会などの活動状況を発信した。

(優れている理由)

複数の大学が同様の内容で一覧表を作成することはプログラムの可視化の点から優れている。共同研究に依拠する大学間交流事業としては共同研究に関する情報をどのように集積し、どのように公開するかが重要となるが、参加する研究室のリストなどを事前に調整して準備することは重要であろう。実際に、交流に参加した学生はこの一覧表をもとに研究室選びを行っており、機能している。

年に一度、日中韓の各国持ち回りで、公開シンポジウムを開催する体制をもった。毎年開催国を替えて開催される「キャンパスアジア総合公開シンポジウム」開催時に、参加(連携)大学の運営責任者を含む複数の委員が参加した会議を行っている。

(優れている理由)

キャンパス・アジアに参加している研究室は個別に活動していたとしても、このようなシンポジウムを開催することで、ある程度の一体感がもたらされることは期待できる。年に1

回のシンポジウムであるが開催国を輪番制としている点は事業の将来展開からしても、教職員の意識改革や交流の視点からしても、重要な取り組みである。シンポジウムの開催時に、参加（連携）大学の運営責任者を含む複数の委員が参加した会議が行われている点も優れている。次回は11月に実施して単位認定について議論する予定であり、議題を定めて定期的な会議が行われていることも優れている。

モニタリング実施側からのコメント

特になし

大学が指摘した課題とそれに対するコメント

○大学が指摘した課題

日本側大学では支援スタッフを採用し、事務処理を行っているが、中韓の連携大学においてはキャンパスアジアの運営が特定の教員によって担われており、事務体制がないことが多く、国際交流上支障をきたすことが見受けられた。日本側からできることは限られているが、事務体制の確立を要請することが必要である。

中国のキャンパスアジアは、関係する教員が中心となった組織であり、他の教員との連絡が希薄であると感じた。協力体制をどのように形成するか課題であると思う。

本プログラムの運用は、キャンパスアジア事務局（工学研究科内）で行っているが、本プログラムは大学の学部・研究科をまたいで実施されているので、担当部署によって解釈が異なることがある。実際、本プログラムで学生を派遣する時の身分が「RA」と「学生」とに分かれたことがある。Q&Aなどで統一見解を明記していただくとありがたい。

○コメント

- ・ 事務体制は国際プログラムの運用において極めて重要であり、これを機に各大学に蓄積されたノウハウを共有し、あるいは、共通のガイドラインや方針の策定を検討されるなどして、全体のレベルアップを図ることが望ましい。
- ・ 国を越えるプログラムでは、相互の大学の事情等によって対応の異なりが課題となる事例は多く、キャンパス・アジアのみならず、一般の交流プログラムにおいても、多かれ少なかれ同種の問題が発生しているのが実状である。その際に検討すべき一方策としては、段階論的な視点である。具体的に中国のキャンパス・アジアで他教員との連携が希薄である点についていえば、まず第一段階として、中国側カウンターパート教員との良好な関係性作りや（仮に問題があれば、その解決方法から始める）、密な連携を進めることが重要である。それらの個別の取り組みの積み重ねと、プログラムの結果の可視化の積み重ねが、徐々に協力体制の促進につながると思われる。

基準 2－2 教育内容・方法

目的を達成するために適切な教育内容や教育方法が共同して検討され、実施されているか。

取組みの特徴

日中韓の公開シンポジウムを開催し、教員と学生を含めた本キャンパス・アジア関係者が一堂に会して、研究交流を図り、成果を全体で共有している。また、学生の派遣予定先の研究者を日本に招聘したり、学生を事前に数日派遣することで、派遣後の研究教育活動を円滑化する工夫も行われている。今後、研究活動を中心とする大学院生中心の交流プログラムとして、効果的な教育内容や教育方法、ならびに単位化の仕組みを、参加大学間で共同してさらに検討していただきたい。以上のことから、質を伴った取組みの構築が標準的であると判断される。

抽出した優れた取組み

本プロジェクトの学生交流は共同研究を主たる柱とするため、教育内容や教育方法は共同研究の研究室間に依存するところが多い。そのため、プロジェクトの運用上では、その成果を共有してフィードバックを図れるように発表の機会をできるだけ多く設けること、および留学する学生だけでなく周辺の多くの学生の参加を促すことに努めている。

(優れている理由)

ともすれば学生が単独の研究室のみで活動するようになりがちの中で、研究の成果の共有とフィードバックの機会として公開シンポジウムなどの発表の場を設けていること、発表には留学する学生だけでなく周辺の学生の参加も促していることは、優れている。参加学生によるフィードバックは重要であり、学生同士の情報交換・情報共有の仕組みを作ることが参加学生数を増やす際に役立つだろう。

東北大学では、学生の派遣予定先の研究者を日本に招聘し、研究発表の後、学生を交えて研究ディスカッションを行った。留学前に双方の意図を確認することで、派遣してからの研究教育活動をスムーズに行うことができた。教育研究交流会を開催して、留学希望を有する学生が先方の研究室を数日訪問して、実地の経験を得るとともに、研究の事前打ち合わせを可能としている。また、公開シンポジウムの際にも、名古屋大学の学生の滞在を1日延長し、留学希望の研究室を訪問する機会を作っている。

(優れている理由)

学生の派遣予定先の研究者を日本に招聘することや、学生が事前に数日訪問することは、留学前に双方の意図を確認し、派遣後の研究教育活動をスムーズにするために効果的な方法である。実際に、東北大学では留学した8名の学生のうち、2～3名が教育研究交流会に参加した後に留学を決定している。

モニタリング実施側からのコメント

特になし

大学が指摘した課題とそれに対するコメント

○大学が指摘した課題

各大学の各々の研究科において単位制度が異なるため、単位互換には難しい点がある。とくに本化学系プログラムのような理系の学生交流では、研究室での研究内容が主たる交流活動となるため、それを単位認定する制度が望まれる。そのことに加えて、大学による単位認定基準の違いもあり、併せて制度の検討を期待したい。

○コメント

- ・ 研究室での活動を単位化するのは難しいが、学生交流プログラムの質保証においては本質的な課題と言える。
- ・ 単位互換が難しい点は理解できるものの、本プログラムの趣旨が相手側大学との単位互換を伴った交流プログラムの構築であることから、具体的に、どの点から優先して改善を目指すか、またいつごろまでに行うかの検討がさらに必要ではないか。例えば、単位を認定する科目自体が無ければ、当該科目を学則上科目として新たに設定することは、よくある方法であるし、また相手側の大学で修得した科目であれば、その科目を認定するかどうかは、部局で決定できるものと思われる。

基準 2－3 学習・生活支援

学生が適切に学べる環境を形成し、学習・生活面の支援を行っているか。

取組みの特徴

大学院生・教員を対象としてキャンパス・アジアプログラムの説明会を開催したほか、派遣前の語学プログラムの実施や、個別のアドバイジングの取組み、奨学金の給付方針、宿舍の提供、履修支援等、これまでの取組みの基盤の上に、確実な支援を行っている。受入学生の支援のために、マンツーマン体制で TA を配置している。また学生間の交流促進の工夫として、企業訪問を組み込んでいる点は優れている。相手国の支援状況（たとえば奨学金支給）についても、現状や課題についての情報把握を行っており、機能している。以上のことから、質を伴った取組みの構築が進展していると判断される。

抽出した優れた取組み

受け入れ学生が生活上、研究上の不便を感じないように、マンツーマン体制で TA を配置している。

（優れている理由）

TA をマンツーマン体制で配置しているのは望ましい。TA を務める学生にとっても、留学生への指導経験は有意義であると考えられる。実際に、TA を務めた学生が翌年に韓国の交換留学に参加するなどの実績が得られている。

日本側大学の対応学部・研究科に留学生担当教員を配置し、留学生の各種相談に対応している。

（優れている理由）

相手大学ごとに担当教員を配置する方法をとっており、大学ごとの留学に関するノウハウが蓄積されるようになっているのは、6 大学という参加大学数の多いコンソーシアムにとって有効な方法である。

日本企業への興味と関心を高め、また中・韓留学生同士の交流を支援するために、工場見学ツアーを開催した。

（優れている理由）

学生間の交流促進の工夫は特に優れている。学生からの率直なコメントを常に得る工夫を行い、さらなる高度化を図っていただきたい。同時に、日本以外の国の大学においても学生交流や文化体験の取組みがさらに充実することを期待したい。

中国の場合に、本プログラムの事務は拠点運営委員の教授が対応しており、出張で不在の場合は連絡がとれないことが多いため、名古屋大学上海事務所に対応を依頼している。

(優れている理由)

国によって大学側の学生支援体制の充実度合いには差が出てしまう中で、名古屋大学上海事務所などを活用して学生支援を強化している点は優れている。実際に中国の奨学金の状況について継続的に情報を把握することが行われている。

モニタリング実施側からのコメント

特になし

大学が指摘した課題とそれに対するコメント

○大学が指摘した課題

全体での運営会議の際、中国の大学からはキャンパスアジア事業に対する奨学金が出せないで、実質的に学生の受け入れが困難であるとの話があった。この事情については確認する必要があると思われる。

日本側および中韓の両方で、宿舎の確保が学生交流のボトルネックとなることがある。この場合、民間のアパートなどを借りて対処しているので、良い方法があると有り難い。

産業界との関わりについて、トヨタ自動車見学などの機会は設けているが、もう少し深くその産業界との有効な関わりについて考慮し整えていく必要がある。

○コメント

- ・ 奨学金に関しては、大学側は引き続き実態把握に努められると共に、政府関係者にも検討を望みたい。
- ・ 宿舎の確保については、研究室間交流を大学全体の事業として認定してもらうには学内的な理解が必要となる。また、他大学でも試みがなされているシェアハウスは一つの方法として参考になるかもしれない。

基準 2－4 単位互換・成績評価

単位の取得や海外大学等との互換方法、成績評価の方法および海外大学等との互換方法が定められ、機能しているか。

取組みの特徴

学生は派遣先大学で授業を履修するのではなく研究活動を行うことを中心としており、派遣先での研究活動をもとに、自大学の単位を学生に授与する方法を構築していることは他大学の参考になる。今後、派遣先での研究活動の状況や成果を適切に把握して単位授与する工夫をさらに検討していただくことを期待したい。また、各国の学生にも派遣前に単位授与や単位認定の仕組みについて十分な情報が伝えられるような工夫を望みたい。以上のことから、質を伴った取組みの構築が標準的であると判断される。

抽出した優れた取組み

共同研究を含む単位のあり方について、新たな試みを行っている。試行錯誤の段階であるが、独自の方式を導入し、単位の発行・認定を行う方式を実行している。

(優れている理由)

本プログラムでは、派遣学生は授業科目を履修するよりは、研究室で研究活動を行うことが中心となっている。その単位の授与については、派遣先大学の研究室での研究活動を「研究インターンシップ」に近い概念でとらえ、派遣先大学の単位を認定するのではなく、派遣元大学において活動実績をもとに単位を授与する方法をとっている。そのために、名古屋大学では「International Core Chemistry」「International Mentor Course」「International Laboratory Course」(理学研究科)や、「International Cooperative Research Project」(工学研究科)を設け、3か月の留学に対して、4単位を与えている。東北大学理学研究科では「特別研修」(博士前期課程)、「海外特別研修」(博士後期課程)を設け、3か月の留学に対して、2～4単位を与えている。研究交流について単位互換の仕組みを構築しにくいなかで、本プログラムの取組みは先行事例として他大学の参考になる。

海外大学では単位授与や認定の方法は異なり、学生にはそれらの制度について情報が十分伝わっていない場合もみられるため、今後、大学間での調整を行い、事前に情報を学生につたえていただきたい。

モニタリング実施側からのコメント

特になし

大学が指摘した課題とそれに対するコメント

○大学が指摘した課題

韓国、中国の学生が帰国後に日本で得た単位を認定する仕組みが不十分のようである。これは提携先大学の教務上の問題である。

3か月間のような短期の滞在に対して単位認定する仕組みが、中韓の大学の一部ではできていない。

日本でも大学内の研究科ごとに教務システムが独立に運用されているため、留学に関する単位取得のルールが異なる。留学について単位取得のルールを学内でも統一する必要がある。

韓国、中国とは年度の開始・終了期間が異なるので、年度を合わせての留学が行いにくい。これをうまく合わせないと、通常の講義を聴講するクラスの単位取得が難しい。

セメスターのタイミングの違いや相手国の事務手続き、日本側での派遣学生選考タイミングの流れの調整や、予定を変更せざるを得ない場合の対処など、システム運用の柔軟性にまだ多くの課題が残されている。

○コメント

- ・ 日中韓の大学間で単位互換、成績評価について十分に情報共有を行うことと単位互換制度確立のための検討を進めることを期待する。特に相手側が、円滑に単位認定を行うに際して、日本側大学（名古屋・東北大学）からどのような情報を提供したらよいか（シラバスや成績評価、授業内容の教員からのコメントのフィードバック等）を相手側大学に聴取する等、工夫は可能と思われる。
- ・ 「学内での統一」は容易な課題ではないことはわかるが、キャンパス・アジアのような「単位互換」を謳っているプログラムにおいては、本プログラムの「拠点・実行委員会」等を通じて課題を提起するところから開始するなど、何らかの行動があることが望ましいのではないかと。

基準3 学習成果

教育プログラムの目的に即して学習成果を測定する方法を設定し、成果が適切にあがっているか。

取組みの特徴

学生へのアンケート調査や実績報告の提出を通じて、学習成果を定性的に把握している。今後、共同研究を基礎とする大学院教育において、学習成果をいかにとらえ、それを評価するかについて、より具体的な議論をしていただきたい。たとえば「世界のリーダーシップをとれる研究者」としての素養に関する学習達成度アンケートの充実や、履修後の追跡調査など工夫の余地はあると考えられる。以上のことから、質を伴った取組みの構築が標準的であると判断される。

抽出した優れた取組み

共同研究の成果を学生の教育という観点で数量化するのは難しいが、受け入れ研究室および留学した学生の両方から高い評価を受けている。

(優れている理由)

学生に対するアンケート調査を行っており、その中で高い評価を受けていることが示された。また、訪問調査時の学生に対するヒアリングでも、学生は研究室文化を含む異文化経験や、新たな研究課題への取り組みなどに高い評価をしており、共同研究を中心とする教育プログラムの目的に即した学習効果が得られていることが明らかになった。

モニタリング実施側からのコメント

特になし

大学が指摘した課題とそれに対するコメント

○大学が指摘した課題

大型計算機を使用する研究では、外国籍の学生は使用が制限される場合があり、事前に確認を行う必要がある。

短期間に留学の効果がみえる方式を模索中である。

履修後の追跡調査をどう行ったらよいか苦慮している。

○コメント

- ・ 本協働教育によってどのような学習成果を挙げようとしているのかについての具体的内容を明確にすることが望まれる。
- ・ 各国から集めた学生でグループワークを課するのが短期間で最も効果が上がる。
- ・ 3か月未満の短期留学については、例えばまずは学生及び受入れ教員が、特定の項目についてループリック式に「○が～まで出来た」等のマトリックスを作成し、受入れ前・後で測る等の取組みは一般的であるほか、短期間で異なる文化等を知る観点からは、北米の大

学で導入されている IDI 試験を行う等の工夫もできよう。ぜひとも「何をもって留学効果」を図るかを、6 大学で協議いただき、他大学の改善に資する情報として公開いただきたい。

- Facebook など SNS の活用など、追跡調査の方法は引き続き検討されたい。

※ IDI : *Intercultural Development Inventory*

基準 4 内部質保証システム

内部質保証や改善のための体系的な取組みが、参加大学との連携のもとで行われ、機能しているか。

取組みの特徴

留学生や留學生を担当した TA に対してアンケート調査を行っている。また、日中韓運営責任者会議を定期的で開催するなど、参加大学との連携や改善の取組みは優れている。今後、アンケート調査の分析、学生の経験の蓄積や、外部レビュー等の取組みを期待したい。以上のことから、質を伴った取組みの構築が標準的であると判断される。

抽出した優れた取組み

日中韓運営責任者会議を定期的に行っている。その際に学生交流、単位認定など本プログラムの活動の問題点を議論し、改善への取組みを行っている。

(優れている理由)

日中韓運営責任者会議を定期的に行っていることは優れている。学生インタビューからは、学生は過去に派遣された学生や TA 経験者からの情報が有効と認識していることが示されたため、今後はそれらの情報を蓄積するような組織的対応を期待したい。

モニタリング実施側からのコメント

特になし

大学が指摘した課題とそれに対するコメント

○大学が指摘した課題

本プログラムで国際交流の成果を改善するには、学生の派遣・受け入れに関わる研究室の指導教員の間での研究計画の打ち合わせが本質的に重要である。これまですでに共同研究の実績のある研究室間での学生交流が多く、連携がうまくいっていたが、新たな研究交流を開拓することが必要である。

○コメント

- ・ 研究交流が主目的になっているような印象があるが、3か国間の協働で教育プログラムを構築することが目的であるので、それに向けて努力されることを期待したい。
- ・ 学生の派遣、受入れに関わっては、相手側大学の指導教員との間での連携が決定的に重要であることは事実である。具体的な工夫としては、受入れ前の段階で、留学中の指導教員のテーマや具体の研究内容や、当面の課題等を提示するとともに、受入れ学生自身に事前の課題を提示し、それを受け入れ段階で確認するなどのやり取りを工夫されている事例は他大学にも多くあることから、参考にされたい。

「キャンパス・アジア」モニタリング 自己分析書

平成25年5月

「持続的社会に貢献する化学・材料分野のアジア先端協働教育拠点」

名古屋大学 東北大学

<目次>

I 構想にかかる基本情報および目的、進捗状況	
1. 基本情報	1
2. 構想の目的、概要、進捗状況	1
II 基準ごとの自己分析	
基準1 教育プログラムの目的	4
基準2 教育の実施	
基準2-1 実施体制	5
基準2-2 教育内容・方法	7
基準2-3 学習・生活支援	9
基準2-4 単位互換・成績評価	11
基準3 学習成果	12
基準4 内部質保証システム	13

I 構想にかかる基本情報および目的、進捗状況

1. 基本情報

1. 大学名	名古屋大学 東北大学	
2. 構想名称	【和文】	持続的社会に貢献する化学・材料分野のアジア先端協働教育拠点
	【英文】	A Cooperative Asian Education Gateway for a Sustainable Society: Expanding the Frontiers in Science and Technology of Chemistry and Material
3. 取組学部・研究科等名	名古屋大学 大学院理学研究科、工学研究科 東北大学 大学院理学研究科、工学研究科、薬学研究科、農学研究科、生命科学研究科、多元物質科学研究所、金属材料研究所、原子分子材料科学高等研究機構	
4. 海外の相手大学	【中国】	School of Chemistry and Chemical Engineering, Nanjing University School of Chemistry and Chemical Engineering, Shanghai Jiao Tong University
	【韓国】	School of Chemistry, Seoul National University Department of Chemistry and Chemical Engineering, Pohang University of Science and Technology

2. 構想の目的、概要、進捗状況

○構想の目的及び概要

環境・エネルギー問題に代表されるように、持続的社会の構築は人類にとって喫緊の課題である。その解決へ向けて化学・材料分野の科学技術がますます重要となる。かかる状況にて、本提案は、持続的社会の構築へ向けた化学・材料教育のアジアにおける中核拠点の形成を目的として、日本(名古屋大学*と東北大学)、中国(南京大学*、上海交通大学)、韓国(ソウル国立大学校*、浦項工科大学校)が参加し、これらアジアの高水準各大学のもつ化学系分野のもつ高い教育ポテンシャルを相互に活用し、アジアの総合的化学教育拠点形成を行う(*は各国における幹事大学)。各国2大学を中核とした骨太で強力なトライアングル拠点を形成させる。

参加大学いずれも総合的な化学分野を強力に推進していることから、三国間いずれの大学からみてもいずれの分野でのスムーズな学生交流が可能である。特に日本側は有機化学、生物化学・高分子化学、理論化学、中国側は無機材料化学や触媒化学、韓国は各種ナノマテリアル創製を中心とした分野に強みをもっていることから、互いに強い分野を補強して協同的に学生の交換を通じた世界的な教育拠点を形成させる。

2010年のQSアジア大学ランキング(自然科学分野)に拠れば、ソウル国立大学校6位、東北大学9位、南京大学16位、名古屋大学17位、浦項工科大学27位であり、いずれも自然科学分野におけるアジアトップクラスの大学に位置づけられる。これらの大学間での協同教育プログラムを持って中核拠点形成させることにより、化学系分野におけるアジアのみならず世界的な最先端の教育の推進が可能である。

本提案プログラムの具体的内容は、①大学院学生を対象とし、単位互換に基づく日中韓の大学院生の3

～12 ヶ月の相互交換交流を行い、基本的に、学生が希望する他国の研究室に一時所属して研究活動を通じた実習を行うとともに各大学に特徴的な講義の受講による単位取得を行う。②公募によって定めた特定テーマに関して、三国いずれかのキャンパスにて数日間から一週間程度の集中セミナーを行なう。③教員の相互の交流を行い、集中講義により訪問国における単位授与を行なう。④直接交換留学に関与しない学生に対しても参加大学間にて密な情報交換や研究・教育が加速できるように、三国間でのサイバーキャンパスシステムを構築する。⑤公開シンポジウムを年2回程度(平成23年度はキックオフシンポジウム1回、その後、総合公開シンポジウムと専門分野での公開シンポジウム1回を目安とする)を開催し、参加大学だけでなく、他大学や他機関にも広く公開し、他大学からの学生の参加も促す。また、産業界との関わりを持つプログラムも用意しており、派遣・受入れ学生は積極的に他国の産業、文化、システムを体験できる。

日本人学生にとって、中国や韓国の学生の積極性、バイタリティー、常に海外に視点を置く態度に強い刺激を受けると期待され、それが職業観や人生観に与える好影響は計り知れない。これにより日本の科学技術や産業の活性化に資することができる。また中国、韓国の学生は、従来から日本への留学の願望は強い傾向があるが、それをさらに推し進め加速的な教育効果を得ることが期待できる。

21世紀はアジアの世紀といわれ、アジアの科学技術の影響力がより増すことになると予想される。この時節において、アジアを先導する日中韓で相互にある一定の期間相互の国での人材交流を進めて、文化も含めて正確に相互の国を理解できる視点をもつ人材育成が鍵になる。そのためには、6大学だけの交流プログラムでは不十分であり、参加6大学を中核として、将来は他大学の関連する分野の学生交流も含めたプログラムの形成への拡張や次代の段階での発展的なシステムの枠組み作りも常に視点に入れる。

○平成24年度末までの取組状況

教育プログラムの目的（育成する人材像を含む目的の設定、大学間での共有）

本プログラムは、2011年3月に本プログラム採択前に上海で開かれたキャンパスアジア会議において、日中韓六大学が集まって議論しその目的を集約したものである。本プログラムの目的は、化学系の学生にグローバル教育を行なうことを通して、世界のリーダーシップをとれる研究者を育成することである。すなわち、学生の国際交流が当該研究室間の共同研究と密接に結びついて進められることが大きな特徴である。共同研究の推進を大きな柱として、それを支える様々な仕組みを運営するという実施形態が参加大学間で共有されている。

実施体制（組織体制、教職員）

本プログラムにおいては、英語に堪能なキャンパスアジア専任の外国人教員・国際コーディネーター、マネージャーおよび事務員を雇用し支援体制を整えた。年に一度日中韓の各国まわりもちで、公開シンポジウムを開催する体制を整えた。第二回会議(2013年3月13日開催)では、前回の議事を受けて、学生交流実績等が報告された。また2013年度の公開シンポジウムは、11月にソウル国立大学校で開催されることが決定された。

教育内容・方法（教育内容・教育方法、学生受け入れ）

本プロジェクトの学生交流は共同研究を主たる柱とするため、教育内容及び教育方法は研究室間の共同研究に依存することが参加大学間で承されている。プロジェクトの運用にあたり、その成果を共有してフィードバックを図れるように発表の機会をできるだけ多く設けること、および留学する特定の学生だけでなく彼らの周囲の学生の参加を促すことに力を注いだ。そのために、本キャンパスアジアに参加する日中韓の研究室及び

研究テーマについて一覧表を作成し、参加研究室に配布し、学生や指導教員が留学可能な相手先の研究室を探してコンタクトしやすいような交流モデルを整備した。日中韓の公開シンポジウムでは、教員と学生を含めた本キャンパスアジア関係者が一堂に会して、研究交流を図り、その成果を全体で共有した。

学習・生活支援（学習支援、生活支援）

英語教育を活発化する目的で、キャンパスアジア担当のグリドネフ准教授による英語講義を開催し、英語によるプレゼンテーション能力の向上を図り留学への準備を行なった。留学生には、月8万円の奨学金を給付し、更に宿舍使用料も本プログラムが支払っている。受入学生には原則として大学が所有する交換留学生受入宿舍を提供し生活面の援助を行なっている。宿舍には本プログラム以外にも多くの留学生が住んでいるため安全であり、学生間の情報交換も容易である。受け入れ予定の留学生には、機会を設けて来日前に面接を行い大学・研究室情報や生活情報を提供している。そのほかメールやホームページで奨学金等の財政的支援内容、宿舍情報、TA 情報などの情報を提供し、留学予定者からの質問へ回答して不安を払拭するように努めている。平成23～24年度は、受け入れ留学生全員（18名）に上記支援を行った。

単位互換・成績評価（単位認定・互換、成績評価・学位授与）

本プログラムでは各大学で広く化学系（化学の各分野、化学工学、材料科学、薬学、農学など）に属する教員と学生が関わり、その間の共同研究を含むため、学生が取得する単位は多岐にわたる。そのため単位の互換について特定の取り決めを行うことが実際的ではない。留学した学生は派遣先の大学の教務体制に合わせて単位を取得し、派遣元の大学が単位認定を行うという体制を構築した。受入学生については、受け入れ指導教員の認定に基づき修士・博士の研究活動相当の単位を発行した。派遣した学生については、海外研修（博士課程前期）、または海外特別研修（博士課程後期）の単位を授与した。すなわち、事前に単位を申請し、帰国後報告書等により成績評価を行なった。

学習成果（学習成果の測定と結果、プログラム履修後の状況）

本プログラムは化学系の専門研究を行なっているので受入教員が評価する体制をとっている。交換留学には大学院生または大学院を志望する学部生を派遣しているので、相互に高い意識をもって留学しており、十分な効果が上がっている。留学後の学生には成果報告書を提出してもらい、成果をモニターしている。また、サマースクールの運営や外国から大学院生を招聘する実務を担当し、更に国際会議に参加し、英語での口頭発表を行うことで学習成果を具体的な形で高めている。

内部質保証システム（内部質保証システムの体制、改善実績・将来計画）

本プログラムは基本的に各大学での大学院教育の国際化への重要な一環として位置付けられており、内部質保障も大学院教育のなかで位置づけられている。本学から派遣した学生、および本学に留学した学生より本プログラムに関する意見を聴取し、その結果を参考資料として今後の運営に役立てている。

公開シンポジウムや研究会において、学生交流の成果としての共同研究を発表し、研究者同士で評価しあうことで成果をフィードバックする機会をつくっている。日中韓運営責任者会議を定期的に行っている。その席上で学生交流、単位認定など本プログラムの活動の状況や問題点を議論し、改善への取り組みを行っている。留学生、及び留学生を担当した TA から、交換留学が修了する都度、アンケート調査を行ってプログラムの運用に反映している。

中間年である平成25年度より、公的助成終了後の本プログラムの将来計画を検討する予定である。

Ⅱ 基準ごとの自己分析

基準1 教育プログラムの目的
海外大学との共同教育プログラムの目的が明確に定められ、参加大学の間で共有されているか。

1. 基準1に係る現況の説明

1. 本プログラムは、平成20年度から東北大学・浦項工科大学で実施している短期学生交流、および大学間交流で培われた研究教育のグローバル化を基に、さらに国際交流協定校に拡大し、名古屋大学、東北大学、上海交通大学、南京大学、ソウル国立大学校、浦項工科大学校の六大学の化学系が集結し、長期的な研究教育を実現したものである。
2. 本プログラムは、2011年3月に本プログラム採択前に上海で開かれたキャンパスアジア会議において、日中韓六大学が集まって議論しその目的を集約したものである。化学系の学生のグローバル教育を行なうことで、世界のリーダーシップをとれる研究者の育成を目的としている。
3. 信頼できる関係を築くことにより、研究成果を取り合うことなく学生の教育に向かうことができる。礎となる教員の相互関係作りを積極的に行っている。
4. 本プログラムでは、学生の国際交流が当該研究室間の共同研究と密接に結びついて進められることが大きな特徴である。共同研究の推進を大きな柱として、それを支える様々な仕組みを運営するという実施形態が参加大学間で共有されている。

当キャンパスアジアのプログラムでの学生交流をきっかけとして、教員同士や学生人的交流が活発に開始され、相互に訪問する例が多数でくるなど、相互の研究や文化の理解に関して当プログラムの遂行は大変有効であった。以上のことから、基準1における当プログラムの取組状況は、「進展している」と自己判定する。

2. 今後の課題点

1. 参加大学内でも、共同研究に積極的に関わる研究室が本プログラムに対する貢献が大きく、それ以外の研究室との間の温度差が大きい。これは中国・韓国側も同様である。そのため本プログラムに関わる学生が特定の研究室に偏る傾向がみられる。多くの研究室の学生が参加できるようにする仕組みが必要である。そのためには、学生交流と結びついた共同研究の芽を育てることが必要で、3か月以上という本格的な留学のまえに、短期間の体験的な留学経験を幅広い学生に持たせることが望ましい。

基準2 教育の実施**基準2-1 実施体制**

目的を達成するための体制が、参加大学等の間で適切に構築され、機能しているか。

1. 基準2-1に係る現況の説明

1. 本プログラムにおいては、英語に堪能なキャンパスアジア専任の外国人教員・国際コーディネーター、マネージャーおよび事務員を雇用し支援体制を整えた。また東北大学では関係する研究科が多いため、キャンパスアジアワーキンググループが運営を担う体制を機能させている。昨年度一年間の運用を通して、学生交流に関するノウハウも蓄積されてきた。
2. 本キャンパスアジアに参加する日中韓全体の研究室や研究テーマについて一覧表を作成した。
3. 東北大学のホームページを作成して、参加研究室の一覧や研究会などの活動状況を発信した。
「データ名」(<http://irem.pharm.tohoku.ac.jp/~campusasia/>)
4. 遠隔会議やセミナーなどが行なえるよう、テレビ会議システムを導入し、活用している。
5. 学生は留学により視野を広げるという観点から、研究テーマを留学先の研究室の主宰研究者と話し合っ
て決めることができることとし、参加大学間で合意された。
6. 教員・学生が簡便に交流できるようにセミナーを行なって、お互いの研究活動を知る機会を多くする体
制をつくった。
7. 東北大学では6研究科の化学系に渡ることからワーキンググループを組織し、月に一度の会議を行っ
て支援体制を整えている。
8. 年に一度日中韓の各国まわりもちで、公開シンポジウムを開催する体制をもった。毎年開催国を替えて
開催される「キャンパスアジア総合公開シンポジウム」開催時に参加(連携)大学の運営責任者を含む
複数の委員が参加した会議を行っている。(1)第一回(名古屋大学)(2012年3月13日開催)では、
2012 年度の交流予定、公開シンポジウム開催計画等の報告に加え、規則の確認がなされた。さらに、
派遣旅費は、派遣元大学が負担すること。滞在費用は受け入れ大学が負担することの確認がなされた。
(2)第二回(南京大学)(2013年3月13日開催)では、前回の議事を受けて、学生交流実績等が報告
され、また 2013 年度の公開シンポジウムは、11 月にソウル国立大学校で開催されることが決定された。
また、2012 年度に中国から派遣された学生の旅費の支給がされていないので、再度方針の確認が行
われた。学生に対する支援内容は、現状では上記に示した違いを反映して、「派遣学生への旅費支給
の有無」という点が異なっている。
9. 本プログラムでは英語コミュニケーション力に優れ通訳経験を持つ、国際コーディネーターを採用し、
中国、韓国の連携大学の事務当局、担当教員と英文 e-mail や国際電話による交渉を行い、学生交流
事業や公開シンポジウムの準備、現地での交渉、会議の開催を支援した。
10. 名古屋大学留学生センターでは、世界の主要な文化、宗教に対応できる実績を持っている。キャンパ
スアジアでの対象となる中国・韓国の留学生の対応には大きな支援となっている。大学内での学生生活
はもちろん、学生としての社会生活にも対応できるガイドラインが日本語／英語対訳で出版されており、
ホームページで公開されている。

「データ名」(<http://www.ecis.nagoya-u.ac.jp/admission/hadbook2013-2015.pdf>)

学内の関連部署からの支援に関して「今後の課題」に示す一定の弱点はあるが、参加大学間で調整がはかられており、国際的に質の高い教職員が積極的に関与しうる支援体制が形成されている。以上のことから、基準 2-1 における当プログラムの取組状況は、「進展している」と自己判定する。

2. 今後の課題点

1. 日本側大学では支援スタッフを採用し、事務処理を行っているが、中韓の連携大学においてはキャンパスアジアの運営が特定の教員によって担われており、事務体制がないことが多く、国際交流上支障をきたすことが見受けられた。日本側からできることは限られているが、事務体制の確立を要請することが必要である。
2. 中国のキャンパスアジアは、関係する教員が中心となった組織であり、他の教員との連絡が希薄であると感じた。協力体制をどのように形成するか課題であると思う。
3. 本プログラムの運用は、キャンパスアジア事務室(工学研究科内)で行っているが、本プログラムは大学の学部・研究科をまたいで実施されているので、担当部署によって解釈が異なることがある。実際、本プログラムで学生を派遣する時の身分が「RA」と「学生」とに分かれたことがある。Q&Aなどで統一見解を明記していただくとありがたい。

基準 2－2 教育内容・方法

目的を達成するために適切な教育内容や教育方法が共同して検討され、実施されているか。

1. 基準 2－2に係る現況の説明

1. 本プロジェクトの学生交流は共同研究を主たる柱とするため、教育内容や教育方法は共同研究の研究室間に依存するところが多い。そのため、プロジェクトの運用上では、その成果を共有してフィードバックを図れるように発表の機会をできるだけ多く設けること、および留学する学生だけでなく周辺の多くの学生の参加を促すことに努めている。
2. 本キャンパスアジアに参加する日中韓全体の研究室や研究テーマについて一覧表を作成し、参加研究室に配布し、学生や指導教員が留学可能な相手先の研究室を探してコンタクトしやすいように整えた。
3. 日中韓の公開シンポジウムでは、教員と学生を含めた本キャンパスアジア関係者が一堂に会して、研究交流を図り、その成果を全体で共有した。
4. 交換留学により、学生の研究に広がりや深みを持たせることができる。現在の研究テーマとは別の研究を行なっている留学先を選び、その先生の研究テーマを行なうことが可能である。あるいは、現在の研究テーマをさらに展開するために共同研究先として留学先の研究テーマを選択することも可能である。
5. 公開シンポジウムの際に行われる日中韓の運営会議では、運営方針の意志統一を図り、目的達成のための問題点を挙げて議論している。
6. 学生の派遣予定先の研究者を日本に招聘し、研究発表の後、学生を交えて研究ディスカッションを行った。留学前に双方の意図を確認することで、派遣してからの研究教育活動をスムーズに行なうことができた。
7. 留学に興味をもつ日本の学生を連れて、韓国・中国の連携大学を訪問した。学生による研究発表・ディスカッションに加えて研究室見学を行なって、留学後のイメージをつかめるように図った。
8. 学生の派遣・受入だけでなく、公開シンポジウムの機会も重要で、このとき日中韓の学生間の交流が自発的になされ、表向きだけでなくレベルの相互理解に大いに役立っている。
9. 受け入れ学生が講義を受けられるように英語での講義科目履修一覧を作成した。
10. 派遣の渡航費および受入学生の奨学金支給の条件として選考を行う体制を整えた。
11. 本プログラムのメンバー研究室では、セミナー、シンポジウム、研究室ミーティングなどは英語で行われており、留学生は問題なく履修、研究を行うことができる。
12. 交換留学生は、いずれも将来の活躍が期待される各大学のトップクラスの学生から選抜している。本プログラムにより交換留学生に採用されたことを契機に、学术界又は産業界でアジアのみならずグローバルに活躍できる人材を育成する。日本側大学からの派遣学生の派遣資格は、海外留学等を開始する年度において3年生以上の学部学生または大学院博士課程前期課程及び博士後期課程に在学予定又は在学する者とし、英語力での選抜基準は、TOEFL IBT 70 (PBT 520) 又は TOEIC (650)相当以上である。さらに成績、意欲等の総合力も勘案して決定している。日本側大学での留学生選抜及び奨学金支給に関する詳細は、「キャンパスアジア留学生受入・派遣学生選考基準及び奨学金取扱要項」に記載している。

[大学名：名古屋大学・東北大学]

13. 日本側大学には、強力な研究施設と豊富な研究設備・機器が配備されている。その利用体制も整っており、それらの操作を熟知した TA と研究室スタッフの連携で、留学生にストレスを感じさせず短期間でも十分な研究成果をあげることができた。
14. 平成23年度及び24年度で日本側大学へ受け入れた留学生は23名、中国・韓国へ派遣した日本人学生は、7名である。当初の学生交流計画では、中・韓合わせて10名の留学生受け入れ、派遣学生8名の目標であった。受け入れ実績は、目標を超過しており、中・韓留学生の日本側大学への興味を反映している。サマースクール参加やシンポジウム派遣等で1週間程度交流した学生は、受け入れ5名、派遣22名になる。両者を合計した学生交流は、受け入れ23名、派遣31名になる。

「単位互換」に関して遅れをとっているが、「学生の交流」に関して、順調に交換留学を進めている。以上のことから、基準 2-2 における当プログラムの取組状況は、「進展している」と自己判定する。

2. 今後の課題点

1. 各大学の各々の研究科において単位制度が異なるため、単位互換には難しい点がある。とくに本化学系プログラムのような理系の学生交流では、研究室での研究内容が主たる交流活動となるため、それを単位認定する制度が望まれる。そのことに加えて、大学による単位認定基準の違いもあり、併せて制度の検討を期待したい。

基準 2－3 学習・生活支援

学生が適切に学べる環境を形成し、学習・生活面の支援を行っているか。

1. 基準 2－3に係る現況の説明

1. 派遣学生については、大学院生・教員を集めてキャンパスアジアプログラムの説明会を開催し、本プログラムによる留学の意図を周知した。
2. インターネットでシラバスが公開され、履修届が出せる体制にある大学間とは派遣前に履修指導を行っている(例、ソウル大学校-日本)。
3. 英語教育を活発化する目的で、キャンパスアジア担当のグリドネフ准教授による英語講義を開催し、英語によるプレゼンテーション能力の向上を図り留学への準備を行なった。
4. 博士課程 D2 全員による研究発表会を英語で行ない、国際化に向けて環境づくりを行なった。
5. 受入学生に対し、事前に奨学金の審査を行い、採択された場合は来日後滞りなく奨学金を給与できる体制をとっている。
6. 派遣学生の渡航費支援審査を行ない、留学して十分に研究教育が受けられる学力があることを判定した。
7. 受入学生について交換留学生受入宿舎を利用して生活面の援助を行なっている。他に多くの留学生が住んでいるため安心かつ学生間の情報交換が容易である。
8. 受入研究室では、コンピュータを貸し出して研究発表の資料の作成、文献検索などの効率化を図っている。
9. 派遣した学生が安全にかつ研究活動ができるように先方の大学の寮を提供してもらっていて、派遣先の学生と同じ生活を送ることができる。
10. 派遣した学生と連絡がとれるようにインターネット会議ができる仕組みを構築した。
11. 参加6大学の研究室リスト、研究室ウェブサイト、指導教員の助言などでの情報取得の他、参加大学の持ち回りで開催される「公開シンポジウム」や、教育交流で直接教員・学生から研究情報を得ることができる。
12. 日本側から派遣する場合は、就職活動を配慮し博士前期課程に進学後、M1年時次の5～7月頃から3～6ヶ月間留学する。韓国、中国からの受け入れは、主に9月からを設定している。平成23年度と24年度の実績では、韓国、中国からの3ヶ月以上の受け入れは、ほとんど9月以降になっている。
13. 日本側大学の対応学部・研究科に留学生担当教員を配置し、留学生の各種相談に対応している。学部以外では、全学的な留学生対応を行う、(留学生)センターがあり、アドバイジング・カウンセリング部門を設置し、生活全般カウンセリング及びメンタルヘルス相談に対応している。幸い、本プログラムで単位取得に障害が生じた学生は発生していない。
14. 名古屋大学では、平成24年度からの派遣はないが、平成25年6月及び7月にそれぞれ派遣する計画があり、平成25年1月より6月まで、外部語学学校に委託し、週1回、3時間の派遣前特別語学トレーニングを実施している。また、外国へ長期滞在予定の学生のために、6月に外部専門家に依頼し、「Global Mindset Seminar for Students Going Overseas」セミナー(6時間)を開催し、外国生活に対する心構えを豊富な事例をもとに解説する。主な内容は、(1)異文化間の価値観は違う、(2)非言語コミュニケーションが重要、(3)ハイテキストとローテキストのスタイルは違う、(4)よい聞き手・よい話し手、(5)

多様性の良いところ、を予定している。

15. 受け入れ学生に対する履修指導は、「大学院基礎にあたる講義」、「(少人数)セミナー」、「研究室実習」とし、それらを通して最先端研究に触れるように配慮している。基礎データの「授業科目毎の単位取得者数」は、ほとんどの科目で10名以下であり、少数による密度の濃い授業を実施している。受け入れ学生が生活上、研究上の不便を感じないように、マンツーマン体制でTAを配置している。TAの研究支援業務としては、入国・入学時の手続き支援、日本での生活に慣れる支援のほか、図書館、IT 機器、研究施設、設備等の予約や使用手順を教えること、英語版クイックマニュアル、クイックレファレンスを整備する、施設・装置を留学生が利用し易いように工夫するなど、指導教員と相談しながら研究環境を整備している。
16. 留学生には、月8万円の奨学金を給付し、更に宿舍使用料も本プログラムが支払っている。宿舍は、原則として大学が所有する学生寮を提供している。受け入れ予定の留学生には、機会を設けて面接をおこない、メールやホームページで奨学金等の財政的支援内容、宿舍情報、TA 情報を提供している。平成23～24年度は、全留学生(18名)に支援を行った。
17. メールやホームページで奨学金等の財政的支援内容、宿舍情報、TA 情報を提供するとともに、来日後は、毎月1回、生活上、研究上の問題点をヒアリングしている。
18. 留学経費負担の取り決めを、派遣する学生へ伝えるとともに、派遣先大学の責任者に確認している。(派遣先への渡航費は派遣元大学が負担する、派遣先大学は、奨学金・宿舍費・研究費を負担する)。参考までに、奨学金は各国の物価水準から日本及び韓国は月8万円程度、中国は1700元(2万7千円程度)となっている。
19. 派遣先大学滞在中に災害等が発生した時は、滞在研究室を通して本人に安否確認を行い、滞在研究室の意見を参考に、留学期間の短縮、スケジュールの変更など柔軟に対応することとした。
20. 日本企業への興味と関心を高め、また中・韓留学生同士の交流を支援するために、工場見学ツアーを開催した。

奨学金に関して中国側連携大学の対応に対応のずれは今後の協議事項として残るが、日本側大学では、日本人学生に対する派遣旅費の支給及び中・韓留学生に対しての奨学金支給、宿舍提供、研究経費の保証は遺漏なく行っている。以上のことから、基準 2-3 における当プログラムの取組状況は、「進展している」と自己判定する。

2. 今後の課題点

1. 全体での運営会議の際、中国の大学からはキャンパスアジア事業に対する奨学金が出せないのでは、実質的に学生の受け入れが困難であるとの話があった。この事情については確認する必要があると思われる。
2. 日本側および中韓の両方で、宿舍の確保が学生交流のボトルネックとなることがある。この場合、民間のアパートなどを借りて対処しているので良い方法があると有り難い。
3. 産業界との関わりについて、トヨタ自動車見学などの機会は設けているが、もう少し深くその産業界との有効な関りについて考慮し整えていく必要がある。

基準 2－4 単位互換・成績評価

単位の取得や海外大学等との互換方法、成績評価の方法および海外大学等との互換方法が定められ、機能しているか。

1. 基準 2－4 に係る現況の説明

1. 本プログラムでは各大学で広く化学系(化学の各分野、化学工学、材料科学、薬学、農学など)に属する教員と学生が関わり、その間の共同研究を含むため、学生が取得する単位は多岐にわたる。そのため単位の互換について特定の取り決めを行うことが实际的でなく、留学した学生は派遣先の大学の教務体制に合わせて単位を取得し、派遣元の大学が単位認定を行うという体制をとっている。
2. 受入学生については、英語クラスを履修して単位を取得した。また研究活動に対して、受け入れ指導教員の認定に基づいて修士・博士の研究活動相当の単位を発行した。
3. ソウル大学校に派遣した学生は事前にインターネットで単位を申請し、取得した後、証明書とシラバスを吟味した上で単位を認定した。
4. 派遣した学生については、海外研修(博士課程前期)、または海外特別研修(博士課程後期)の単位を取得した。事前に単位を申請し、帰国後報告書により成績評価を行なった。
5. 東北大学では留学期間は在学年数に算入し、単位認定できる上限は10単位である。
6. 参加6大学の取り決めにより、互換可能単位数を10単位と定めている。今までの実績では、最高でも6単位(学部)であり、大学院では通常2-4単位である。

共同研究を含む単位のあり方について、新たな試みを行っている。試行錯誤の段階であるが、独自の方式を導入し、単位の発行・認定を行う方式を実行している。以上のことから、基準 2-4 における当プログラムの取組状況は、「進展している」と自己判定する。

2. 今後の課題点

1. 韓国、中国の学生が帰国後に日本で得た単位を認定する仕組みが不十分のようである。これは提携先大学の教務上の問題である。
2. 3か月間のような短期の滞在に対して単位認定する仕組みが、中韓の大学の一部ではできていない。
3. 日本でも大学内の研究科ごとに教務システムが独立に運用されているため、留学に関する単位取得のルールが異なる。留学について単位取得のルールを学内でも統一する必要がある。
4. 韓国、中国とは年度の開始終了期間が異なるので、年度を合わせての留学が行いにくい。これをうまく合わせないと、通常の講義を聴講するクラスの単位取得が難しい。
5. セメスターのタイミングの違いや相手国の事務手続き、日本側での派遣学生選考タイミングの流れの調整や、予定を変更せざるを得ない場合の対処など、システム運用の柔軟性にまだ多くの課題が残されている。

基準3 学習成果

教育プログラムの目的に即して学習成果を測定する方法を設定し、成果が適切にあがっているか。

1. 基準3に係る現況の説明

1. 化学系の研究を行なっているので受入教員に評価してもらっている。大学院生を派遣しているので高い意識をもって留学しており、十分な効果が上がっている。
2. 共同研究の成果を学生の教育という観点で数量化するのは難しいが、受け入れ研究室および留学した学生の両方から高い評価を受けていることは明らかである。本学から派遣した学生が中韓の大学で良い研究成果をあげる例も多い。これは留学した学生の意識や能力による部分が大きいといえる。日本に受け入れた学生も、日本の研究レベルの高さから学ぶものが多いことがうかがえる。
3. 留学後の学生には成果報告書を提出してもらい、成果をモニターしている。
4. サマースクールの運営に携わったり外国から大学院生を招聘したり、英語での口頭発表を行って学習成果を得ている。
5. 各研究室で国際会議に参加、発表させることで学習成果を得ている。
6. 留学生在が帰国する直前にアンケートを行っている。いままでのアンケート結果では、日本側大学の対応への不満はみられない。

受入教員による専門分野の判定及び留学後の成果発表により、適切な学習成果が得られていることが分かっている。以上のことから、基準3における当プログラムの取組状況は、「進展している」と自己判定する。

2. 今後の課題点

1. 大型計算機を使用する研究では、外国籍の学生は使用が制限される場合があり、事前に確認を行う必要がある。
2. 短期間に留学の効果がみえる方式を模索中である。
3. 履修後の追跡調査をどう行ったらよいか苦慮している。

基準4 内部質保証システム

内部質保証や改善のための体系的な取組みが、参加大学との連携のもとで行われ、機能しているか。

1. 基準4に係る現況の説明

1. 本プログラムは基本的に各大学での大学院教育の国際化への重要な一環として位置付けられており、内部質保障も大学院教育のなかで位置づけられている。
2. 本学から派遣した学生、および本学に留学した学生より本プログラムに関する意見を聴取し、その結果を参考資料として今後の運営に役立てている。
3. 公開シンポジウムや研究会において、学生交流の成果としての共同研究を発表しあい、研究者間で評価しあってフィードバックする機会をつくっている。
4. 日中韓運営責任者会議を定期的に行っている。その際に学生交流、単位認定など本プログラムの活動の問題点を議論し、改善への取り組みを行っている。
5. 留学生、及び留学生を担当した TA から、交換留学が修了する都度、アンケート調査を行ってプログラムの運用に反映している。
6. 日本側大学の外部評価委員に本プログラムの実施状況についての評価を頂く予定である。

内部レビュー、プログラム情報の公表等は実施済みであるが、「外部レビュー」及び「公的助成終了後の将来計画」策定のためには中間年度である、平成25年度の状況を見極める必要があると考える。それゆえ、両者については検討の段階である。以上のことから、基準4における当プログラムの取組状況は、「標準的」と自己判定する。

2. 今後の課題点

1. 本プログラムで国際交流の成果を改善するには、学生の派遣・受け入れに関わる研究室の指導教員の間での研究計画の打ち合わせが本質的に重要である。これまですでに共同研究の実績のある研究室間での学生交流が多く、連携がうまくいっていたが、新たな研究交流を開拓することが必要である。

[大学名]	名古屋大学・東北大学	
	(中国側大学) 南京大学、上海交通大学	(韓国側大学) ソウル国立大学校、浦項工科大学校
[構想名]	持続的社会に貢献する化学・材料分野のアジア先端協働教育拠点の形成	

1. 構想全体における交流学生数(実績)

(単位:人)

平成23年度		平成24年度	
受入	派遣	受入	派遣
1	0	22	31

2. 奨学金・宿舍提供の状況

(単位:人)

(1) 奨学金を受けている学生数		平成23年度		平成24年度	
		受入	派遣	受入	派遣
内訳	日中韓三国共通の財政支援受給者	1	0	17	7
	大学による奨学金	1	0	11	2
	その他の奨学金	0	0	0	0
		1	0	6	5

(2) 宿舍(大学所有の宿舍、大学借り上げによる宿舍等)を提供されている学生数		平成23年度		平成24年度	
		受入	派遣	受入	派遣
		1	0	22	7

3. 個別の交流プログラムの概況

※色の見方 外国人学生の受入れ(中韓⇒日本) 日本人学生の派遣(日本⇒中韓)

受入/派遣	相手国	平成23年度				平成24年度			
		第3四半期		第4四半期		第1四半期		第2四半期	
受入	中国								
	韓国								
派遣	中国								
	韓国								

外国人学生の受入れ(中韓⇒日本)							日本人学生の派遣(日本⇒中韓)								
No.	交流期間		派遣元	交流内容	取得可能 単位数	学生交流数		No.	交流期間		派遣先	交流内容	取得可能 単位数	学生交流数	
	始期	終期				計画値	実績		始期	終期				計画値	実績
①	24.07	24.08	韓国	交換留学(東北大学)	1	5	3	①	24.07	24.07	韓国	交換留学(東北大学)	2	5	5
②	24.09	24.10	中国	交換留学※複数パターンあり(東北大学)	1	0	2	②	24.08	24.11	韓国	交換留学(東北大学)	2	1	1
③	24.10	24.12	中国	交換留学(名古屋大学)	0	1	1	③	24.08	25.08	韓国	交換留学(東北大学)	2	1	1
④	24.03	24.06	中国	交換留学※複数パターンあり(東北大学)	2	1	2	④	24.01	24.01	韓国	教育交流検討会(東北大学)	0	7	5
⑤	24.11	25.01	中国	交換留学(名古屋大学)	4	0	1	⑤	24.03	24.03	中国	公開シンポジウム教育交流検討会(東北大学)	0	7	7
⑥	24.11	25.02	中国	交換留学(名古屋大学)	4	5	6	⑥	24.03	24.03	中国	公開シンポジウム分野間交流セミナー(名大)	0	0	12
⑦	24.09	25.02	韓国	交換留学(学部)(名古屋大学)	6	0	1								
⑧	24.11	25.11	中国	交換留学(東北大学)	2	1	1								
⑨	25.01	25.08	韓国	交換留学(東北大学)	2	1	1								
⑩	24.08	24.08	中国	サマースクール	0	3	3								
⑪	24.08	24.08	韓国	サマースクール	0	2	2								

授業科目一覧表（H25モニタリング／受け入れ）

氏名	Lee, Sunkook	Lee, Sunkook	Lee, Sunkook	Lee, Sunkook	Lee, Sunkook	Lee, Sunkook	Lee, Sunkook
派遣元大学	浦項工科大学校	浦項工科大学校	浦項工科大学校	浦項工科大学校	浦項工科大学校	浦項工科大学校	浦項工科大学校
受け入れ大学	名古屋大学	名古屋大学	名古屋大学	名古屋大学	名古屋大学	名古屋大学	名古屋大学
受け入れ専攻等	NUPACE	NUPACE	NUPACE	NUPACE	NUPACE	理学部	理学部
授業科目の名称	Standard Intermediate Japanese 1, SJ201 (会話1&2)	Standard Intermediate Japanese 1, SJ201 (読み)	Standard Intermediate Japanese 1, SJ201 (聞き取り)	Standard Intermediate Japanese 1, SJ201 (文法)	Standard Intermediate Japanese 1, SJ201 (文法)	Synthesis of New Cobalt Complexes with P-N Type Ligand (GIS)	
教授言語	英語	英語	英語	英語	英語	英語	英語
担当教員	衣川隆生	衣川隆生	衣川隆生	衣川隆生	伊丹健一郎	斎藤進	
受講年次	2012年後期	2012年後期	2012年後期	2012年後期	2012年後期	2012年後期	
受け入れ期間	Sep 24, 2012-Feb 8, 2013	Sep 24, 2012-Feb 8, 2013	Sep 24, 2012-Feb 8, 2013	Sep 24, 2012-Feb 8, 2013	Sep 24, 2012-Feb 8, 2013	Sep 24, 2012-Feb 8, 2013	
学期（半期／通年の別）	半期	半期	半期	半期	半期	半期	
必修／選択の別	選択	選択	選択	選択	選択	選択	
取得可能単位	2	1	1	1	2	8	
授業科目ごとの単位取得者数	2	2	2	2	7	4	
（中国・韓国で取得した単位については、日本側大学での単位認定状況も含む）	該当なし						

受入（名大理学部1）

1/5

授業科目一覧表 (H25モニタリング/受け入れ)

氏名	DU Pengfei	DU Pengfei	DU Pengfei	WANG Jing	WANG Jing	WANG Jing
派遣元大学	上海交通大学	上海交通大学	上海交通大学	上海交通大学	上海交通大学	上海交通大学
受け入れ大学	名古屋大学	名古屋大学	名古屋大学	名古屋大学	名古屋大学	名古屋大学
受け入れ専攻等	理学研究科	理学研究科	理学研究科	理学研究科	理学研究科	理学研究科
授業科目の名称	International Core Chemistry 1	International Mentor Course	International Laboratory Course 1	International Core Chemistry 1	International Mentor Course	International Laboratory Course 1
教授言語	English	English	English	English	English	English
担当教員	田中健太郎教授	田中健太郎教授	田中健太郎教授	田中健太郎教授	田中健太郎教授	田中健太郎教授
受講年次	2012年後期	2012年後期	2012年後期	2012年後期	2012年後期	2012年後期
受け入れ期間	Nov 5, 2012-Feb 6, 2013	Nov 5, 2012-Feb 6, 2013	Nov 5, 2012-Feb 6, 2013	Nov 5, 2012-Feb 6, 2013	Nov 5, 2012-Feb 6, 2013	Nov 5, 2012-Feb 6, 2013
学期(半期/通年の別)	半期	半期	半期	半期	半期	半期
必修/選択の別	選択	選択	選択	選択	選択	選択
取得可能単位	1	1	2	1	1	2
授業科目ごとの単位取得者数	2	2	2	2	2	2
(中国・韓国で取得した単位については、日本側大学での単位認定状況も含む)	該当なし					

授業科目一覧表 (H25モニタリング/受け入れ)

氏名	Wan Lin	Fangjie Wang	Yuanyuan Zhuang	Shan Feng	Yang Bai
派遣元大学	上海交通大学	上海交通大学	上海交通大学	上海交通大学	上海交通大学
受け入れ大学	名古屋大学	名古屋大学	名古屋大学	名古屋大学	名古屋大学
受け入れ専攻等	工学研究科	工学研究科	工学研究科	工学研究科	工学研究科
授業科目の名称	International Cooperative Research Project	International Cooperative Research Project	International Cooperative Research Project	International Cooperative Research Project	International Cooperative Research Project
教授言語	English	English	English	English	English
担当教員	岡崎進教授	上垣外正己教授	松下裕秀教授	関隆広教授	馬場嘉信教授
受講年次	2012年後期	2012年後期	2012年後期	2012年後期	2012年後期
受け入れ期間	Nov 5, 2012-Feb 6, 2013	Nov 5, 2012-Feb 6, 2013	Nov 5, 2012-Feb 6, 2013	Nov 5, 2012-Feb 6, 2013	Nov 1, 2012-Jan 31, 2013
学期(半期/通年の別)	半期	半期	半期	半期	半期
必修/選択の別	選択	選択	選択	選択	選択
取得可能単位	4	4	4	4	4
授業科目ごとの単位取得者数	5	5	5	5	5
(中国・韓国で取得した単位については、日本側大学での単位認定状況も含む)	該当なし				

受入(名大工学部)

3/5

授業科目一覧表 (H25モニタリング/受け入れ)

氏名	YANG Yongchao	Min Ren	Liu Yuanyuan	Sung Jae Kim	Seo Hyewon	Kim Dong-Gil	Seong Ju-Hwa	Wei Zheng	Qu Xingyu
派遣元大学	南京大学	南京大学	上海交通大学	ソウル国立大学	浦項工科大学校	浦項工科大学校	浦項工科大学校	南京大学	南京大学
受け入れ大学	東北大学	東北大学	東北大学	東北大学	東北大学	東北大学	東北大学	東北大学	東北大学
受け入れ専攻等	理学研究科	理学研究科	理学研究科	理学研究科	理学研究科	理学研究科	理学研究科	理学研究科	理学研究科
授業科目の名称	化学特別セミナーⅠ	セミナーⅠ	化学特別セミナーⅠ	課題研究Ⅰ	—	—	—	—	—
教授言語	英語	英語	英語	英語	英語	英語	英語	英語	英語
担当教員	小林長夫教授	山下正廣教授	寺田眞浩教授 (ク'リ'ネフ イリヤ准教授)	福村裕史教授	寺前紀夫教授	徳山英利教授	土井隆行教授	山下正廣教授	小林長夫教授
受講年次	2012年	2012年	2012-2013年	2012-2013年	2012年	2012年	2012年	2012年	2012年
受け入れ期間	Mar 4, 2012-May 31, 2012	Jun 12, 2012-Sep 11, 2012	Nov 11, 2012-Nov 10, 2013	Jan 13, 2013-Aug 10, 2013	Jul 27, 2012-Aug 25, 2012	Jul 27, 2012-Aug 25, 2012	Jul 27, 2012-Aug 25, 2012	Sep 26, 2012-Oct 28, 2012	Oct 24, 2012-Nov 21, 2012
学期(半期/通年の別)	通年	通年	通年	通年	—	—	—	—	—
必修/選択の別	必修	必修	必修	必修	—	—	—	—	—
取得可能単位	1	1	1	2	—	—	—	—	—
授業科目ごとの単位取得者数	24	81	—	81	—	—	—	—	—
(中国・韓国で取得した単位については、日本側大学での単位認定状況も含む)	該当なし	該当なし	該当なし	該当なし	該当なし	該当なし	該当なし	該当なし	該当なし
備考			身分は特別研究学生で、帰国時に成績表を渡すため、H24年度に取得した単位はありません。 (上記記載の科目をH25年度に取得予定)	身分は特別聴講学生で、授業科目の履修が要件のため、H24年度受入時から、単位を取得しました。					

授業科目一覧表 (H25モニタリング/受け入れ)

氏名	大澤 宏祐	吉井 優	村上 景一	関岡 直樹	坂口 俊	瀧 集作	田村 昂作
派遣元大学	東北大学	東北大学	東北大学	東北大学	東北大学	東北大学	東北大学
受け入れ大学	浦項工科大学	ソウル国立大学	浦項工科大学	浦項工科大学	浦項工科大学	浦項工科大学	浦項工科大学
受け入れ専攻等	Chemistry	Chemistry	Chemistry	Chemistry	Chemistry	Chemistry	Chemistry
授業科目の名称	—	Special Research in Chemistry 2 /Special Research in Chemistry 4	—	—	—	—	—
教授言語	英語	英語	英語	英語	英語	英語	英語
担当教員	Prof. Young Ho Rhee	Prof. David Chen	Prof. Jaiwook Park	Prof. Kyo Han Ahn	Prof. Young Min Rhee	Prof. Byeang Hyeon Kim	Prof. Kimoon Kim
受講年次	2012年	2012年	2012年	2012年	2012年	2012年	2012年
派遣期間	平成24年8月9日～11月13日	平成24年8月31日～平成25年8月予定	平成24年7月2日～7月31日	平成24年7月2日～7月31日	平成24年7月2日～7月31日	平成24年7月2日～7月31日	平成24年7月2日～7月31日
学期(半期/通年の別)	通年	通年	通年	通年	通年	通年	通年
必修/選択の別	選択	選択	選択	選択	選択	選択	選択
取得可能単位	2	3	2	2	2	2	1
授業科目ごとの単位取得者数	5	—	5	5	5	5	1
(中国・韓国で取得した単位については、日本側大学での単位認定状況も含む)	海外特別研修(2単位)	海外特別研修(2単位) 医薬製造化学特別演習(4単位)	海外特別研修(2単位)	海外特別研修(2単位)	海外特別研修(2単位)	海外特別研修(2単位)	特別研修 I (1単位)
単位認定教授(東北大学) 指導言語:日本語	森田 明弘教授 (土井 隆行教授) 指導言語:日本語	Prof. David Chen 指導言語:英語	岩淵 好治教授 指導言語:日本語	土井 隆行教授 指導言語:日本語	森田 明弘教授 指導言語:日本語	和田 健彦教授 指導言語:日本語	星野 仁教授 指導言語:日本語

派遣(東北大)

5/5

(4) 取組学部・研究科及び学内における採択プログラムの実施体制表（様式自由）

○プログラム運営体制図

別紙 （ppt ファイル）

・日本側のプログラム運営組織

運営組織名称：「拠点運営・実行委員会」

委員長 関隆広（名古屋大学）

副委員長 森田明弘（東北大学）

委員

産業界連携担当委員：薩摩篤（名古屋大学）、猪股宏（東北大学）

産業界との連携

学生交流担当委員：土井隆行（東北大学）、田中健太郎（名古屋大学）

留学生の受け入れ、派遣総括

学術交流担当委員：及川英俊（東北大学）、中島洋（名古屋大学）

公開シンポジウム、サマースクール、研究交流会等

外国語教育担当委員：イリア・グリドネフ（東北大学）

化学分野の英語でのコミュニケーション能力を向上させる

参照；別紙 （ppt ファイル）

・学内及び外部の委員会との連携体制

「学内の運営体制」

名古屋大学キャンパスアジア 運営会議工学研究科及び理学研究科との定例運営会議、
メンバー5名。月1回程度。

東北大学キャンパスアジア ワーキンググループ関連6研究科代表会議、
月1回。

「外部評価委員会」

目的：「拠点運営・実行委員会」に対し下記の事項を評価し指摘する。

①実施実績、②制度の適切性、③改善部分や問題点

委員

岡本芳男博士

（哈爾浜工程大学特聘教授：中国。実施大学以外の大学等研究機関の教員や研究
員より選任）

臼杵有光博士（株式会社 豊田中央研究所取締役。民間企業の研究員等より選任）

・日中韓合同の運営組織

「日中韓運営委員会」：連携6大学の代表委員長及び数名の委員により構成される。

年1回の公開シンポジウム時に会議を開催する。

目的：プログラム実施の進捗状況及び問題点の把握、制度の改善

代表委員氏名

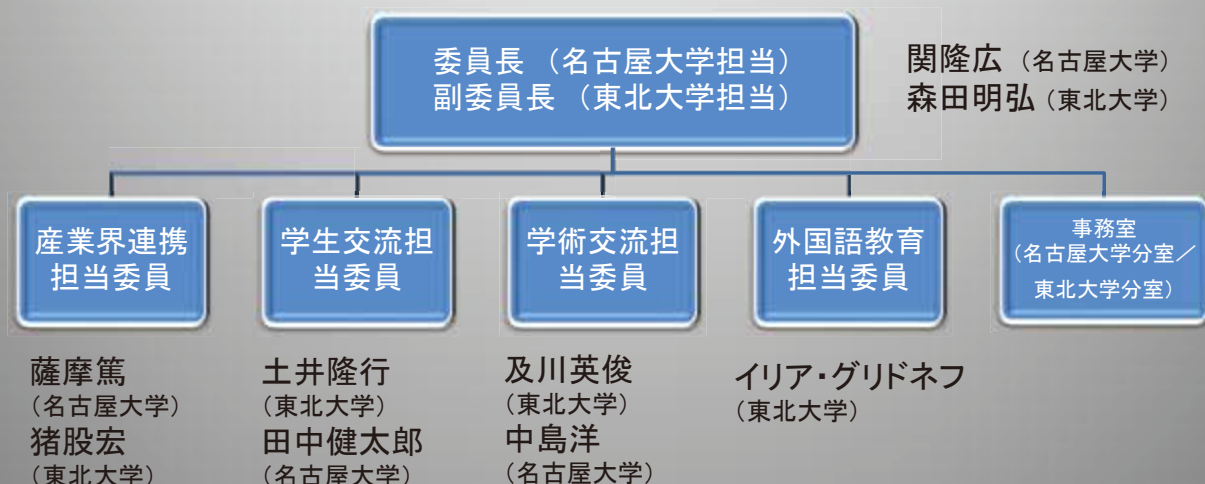
氏名	所属
関 隆広	名古屋大学 大学院工学研究科 物質制御工学専攻, 教授
森田 明弘	東北大学 大学院理学研究科 化学専攻, 教授
Xing-Hua Xia	南京大学 School of Chemistry and Chemical Engineering, Vice Dean
Yong Zhang	上海交通大学 School of Chemistry and Chemical Engineering, Vice Dean
Byeong Moon Kim	ソウル国立大学校 Department of Chemistry, Chair
Kyo Han Ahn	浦項工科大学校 Department of Chemistry, Professor

○日本側のプログラム運営組織のメンバー表

日本側「日中韓運営委員会」委員（拠点運営・実行委員会メンバーに同じ）

日本側委員長	関隆広	名古屋大学 大学院工学研究科 教授
同 副委員長	森田明弘	東北大学 大学院理学研究科 教授
産業界連携担当	薩摩篤	名古屋大学 大学院工学研究科 教授
	猪股宏	東北大学 大学院工学研究科 教授
学生交流担当	土井隆行	東北大学 大学院薬学研究科 教授
	田中健太郎	名古屋大学 大学院工学研究科 教授
学術交流担当	及川英俊	東北大学 多元物質科学研究所 教授
	中島洋	名古屋大学 大学院理学研究科 准教授
外国語教育担当	イリア・グリドネフ	東北大学 特任准教授

日本・中国・韓国のトライアングル交流事業、キャンパスアジア
「持続的社會に貢献する化学・材料分野のアジア先端協働教育拠点」
運営体制図



外部評価委員

日本・中国・韓国のトライアングル交流事業、キャンパスアジア
「持続的社會に貢献する化学・材料分野のアジア先端協働教育拠点」

（学術界委員）

- 岡本芳男 博士
哈爾濱工程大学特聘教授（中国）

（産業界委員）

- 臼杵有光 博士
株式会社 豊田中央研究所取締役

「キャンパス・アジア」モニタリング

モニタリング報告書

大学名	神戸大学	
取組学部・研究科等名	大学院国際協力研究科、人文学研究科、自然科学系先端融合研究環都市安全研究センター	
構想名称	東アジアにおけるリスク・マネジメント専門家養成プログラム	
海外の相手大学	【中国】	復旦大学国際関係・公共事務学院
	【韓国】	高麗大学校国際大学院

平成26年1月

独立行政法人大学評価・学位授与機構
「キャンパス・アジア」モニタリング委員会

<目 次>

I	モニタリング結果の概要	1
II	基準ごとのモニタリング結果	
	基準 1 教育プログラムの目的	2
	基準 2 教育の実施	
	基準 2－1 実施体制	5
	基準 2－2 教育内容・方法	7
	基準 2－3 学習・生活支援	10
	基準 2－4 単位互換・成績評価	13
	基準 3 学習成果	16
	基準 4 内部質保証システム	18

<付録>

採択プログラム実施主体から提出された自己分析書

I モニタリング結果の概要

総 括

リスク・マネジメント専門家養成という目的のもと、大学間での役割分担を伴うプログラムデザインが図られており、目的の設定とそれに基づく取り組みが進展している。

参加大学間でのコンソーシアム委員会、実務者会議が整備され、実施面での課題を共に検討する協力体制を構築しているとともに、神戸大学ではキャンパスアジア室を設置して中国語・韓国語ネイティブや両国での教育研究経験を有する者を任用して学習・生活支援を行っていることは進展している取組みである。学習・生活支援については、国際機関の人事担当者による就職セミナー開催など学生の就職・キャリア開発支援を考えた取り組みを行っているなど、進展している。単位互換については、システムが整備され、学位授与については神戸大学内の上位の委員会において確認を行うなど、厳格な手続きが定められており、進展している。

優れた取組み

- ・ 3大学の副学長・理事が出席するコンソーシアム委員会、教員及び事務方担当者の出席する実務者会議など各レベルの会合において、相互のカリキュラムの連携と調整、学生のニーズに応じた講義科目の新設、教育環境の整備状況に関する情報交換、教員レベルの相互交流などについて議論を持ち、プログラム運営に関する認識の共有を確保している。
- ・ 本プログラムの実務関係を担当する「キャンパスアジア室」には、中国語・韓国語ネイティブの者や両国での教育研究経験を有する者、また英語をハイレベルに駆使できる者を任用し、プログラムの運用及び学生のサポートの体制を整えている。
- ・ コンソーシアム委員会において、各大学の履修コースのカリキュラムの水準、単位の認定基準、成績基準等を協議している。科目の成績は各大学が自国の基準によって評価し、単位の認定を行うが、プログラムとしては最終的にプログラム運営委員会におけるコース修了判定を経て、修了証（サーティフィケート）を交付することとなっている。
- ・ 派遣学生及び受け入れ学生に対しては、全員にマンスリーレポートの提出を課し、日常的な学習状況とその成果についての報告を学生から定期的に受けるシステムを整えている。こうした情報は、蓄積のうえ、必要に応じて本学及び留学先大学における学習成果の、単位などの数字に表れない部分に関する定性的な評価、及び学習上の問題点の把握に利用されている。

Ⅱ 基準ごとのモニタリング結果

基準 1 教育プログラムの目的

海外大学との共同教育プログラムの目的が明確に定められ、参加大学の間で共有されているか。

取組みの特徴

リスク・マネジメント専門家養成という目的が明示され、各大学が特色とする内容を提供するという役割分担を伴ったプログラムデザインが図られている。副学長・理事が出席するコンソーシアム委員会、教員及び事務方担当者の出席する実務者会議といった各レベルでの組織の設置により、参加大学間での目標共有の枠組みが整備されている。以上のことから、質を伴った取組みの構築が進展していると判断される。

抽出した優れた取組み

本プログラムは、東アジア、さらには世界レベルで活躍するリスク・マネジメント専門家—種々の危機的事態に関わる「リスク」を分析して政策策定を主導し、災害の現場でも活躍できる専門家—養成を目指すものである。この人材育成目標を現実化するため、コンソーシアムを形成する三大学院は、それぞれの特性に応じて担うべき役割を分担しており、本プログラムに参加する学生は、各人の問題意識に沿ってこの三大学院における教育を組み合わせ、専門性を持つグローバル人材となるためのキャリアデザインを行っている。

(優れている理由)

世界レベルで活躍する「リスク・マネジメント専門家の養成」という目的が明示され、参加大学間で明確に認識されている。また、1つの大学(院)だけでは提供しきれないプログラムを、それぞれのコンソーシアム参加大学が、それぞれ特色とする内容を提供するという役割分担を行うことでデザインする工夫がみられ、汎用的で可能性の大きい教育プログラムにまとめている点が優れている。今後、「リスク・マネジメント専門家」の人材像をより明確にするとともに、その人材に必要な知識・スキルを明確にし、共有をすすめることが望まれる。

本プログラムにおける教育の中核機関となる三大学院は、共同国際シンポジウム(2012年2月：神戸、2012年11月：上海)の開催や、それに伴って副学長・理事が出席するコンソーシアム委員会・教員及び事務方担当者の出席する実務者会議など各レベルの会合において、相互のカリキュラムの連携と調整、学生のニーズに応じた講義科目の新設、教育環境の整備状況に関する情報交換、教員レベルの相互交流などについて議論を持ち、プログラム運営に関する認識の共有を確保している。また、神戸大学では、キャンパスアジア室を通して、三大学院間の情報交換を恒常的に行い、プログラムの進行に応じて

発生する諸問題を早い段階で把握する体制を整えている。**(優れている理由)**

3大学間でプログラムの目的や教育内容等について協議する組織を副学長・理事らのトップレベルのコンソーシアム委員会、ならびに教員及び事務担当者のレベルの実務者会議として組織化し、カリキュラムの調整等を行うことで意見や意識の共有化を促進している点は工夫がみられる。また、国際共同シンポジウムの開催などで目的を共有する仕組みを有していることは優れている。

モニタリング実施側からのコメント

- ・ 3大学間で実質的な意見交換をし、プログラム開発について意見や意識を共有する努力を行っている。
- ・ リスク・マネジメントというプログラム目標を具体的なコンピテンスの形で表現すれば、プログラム運営における参加大学間の相互理解が深まるだけでなく、一つの課程としての凝集性がさらに高まるのではないか。
- ・ 中国の大学では、学部長ないし副学長を巻き込んだ会議の決定が有効であるところから、用意されている各レベルの会合がどのように連携し、役割分担をしているのか、とくにトップレベルの会合が機能を発揮するように、どのように工夫がなされているのかが、モデル構築としては大事と思われる。

大学が指摘した課題とそれに対するコメント**○大学が指摘した課題**

本プログラムは、発足以前に締結済みであった神戸大学大学院国際協力研究科と高麗大学国際大学院とのダブルディグリー・交換留学・教員交流に関する協定を基礎とし、ここに復旦大学国際関係・公共事務学院を加えて三大学院間での学生交流・教員交流体制を発展的に構築したものである。

したがって、本プログラムでは発足当初から、交換留学に加えて、二大学の学位の取得が可能なダブルディグリー留学が可能となっている。ただしこの点については、「日中韓三国すべてで学びたい」というニーズには必ずしも応えきれないこともまた事実である。さらに、ダブルディグリー留学は協定を締結している大学院間でのみ可能であるため、例えば本学他研究科の学生は交換留学にしか参加できない。こうした問題の解決のためには、三大学共同でのジョイントディグリー制度の導入や協定参加機関の範囲を拡大するなどの方策をとる必要があるが、その場合にはカリキュラムの調整をはじめとする学位の質保証のための作業が極めて複雑になることが予想され、現行体制ではそのようなプログラムの拡大は難しいと考えられる。

○コメント

- ・ 一人の学生が日中韓で学ぶことが難しいとすれば、日中韓の学生が合同で討議したり、発表したり、文化に関する相互理解を紹介したりできるような機会を3大学で提供することで、3つの国の文化の違いなどを学ぶことができるのではないだろうか。自国と他の2か国をど

う学ぶかの工夫が可能ではないか。

- ・ 3大学すべてでの修学という計画については、博士前期課程の2年間で3大学で修学するのは、学生にとって移動が頻繁となり、かえって負担になる懸念はないかという点を検討していただきたい。
- ・ ダブル・ディグリーの対象となる2大学以外の1大学での履修単位を認定する方法も考えられるが、3大学が協力して実施しているプログラムのメリットとして、3大学の学生が一度に会する「夏季集中合同講座」のような取組みも考えてはどうか。
- ・ 神戸大学と高麗大学校の間の体制は、それなりに整っていると思われるが、復旦大学を加えた体制を構築し、機能させていくためには、3大学が一致できる人材の養成を明確にし、とくに中国の大学の指導部を巻き込んだ体制の構築がカギとなってくる。本プログラムの効果、魅力を復旦大学に理解してもらい、そこに巻き込んでいくために、国際シンポジウムや教員交流によるリスク・マネジメント教育への理解の増進等を積極的に図っていくことが、大事になってくるのではないと思われる。
- ・ 当初目的が、「グローバルなレベルのリスク・マネジメント人材の輩出」であり、各大学院がそれぞれの役割を持ってより質の高い人材の輩出に機能するということであるから、そのための仕組みを整え、本来目的に叶う体制を検討していただきたい。一方、他研究科の学生が、参加大学院で学びたいというのは本来目的とは別の課題であろうため、ジョイント・ディグリー制度については別途検討すべきである。
- ・ 本プログラムは、相手大学の中の特定研究科によって組成されており、他研究科の学生の扱いはさほど問題にならないのではないかと考える。
- ・ 大学の仕組み上、部局間のダブル・ディグリー協定を基礎にして、必要に応じて他部局に拡大していくのが現実的ではないだろうか。

基準 2 教育の実施**基準 2-1 実施体制**

目的を達成するための体制が、参加大学等の間で適切に構築され、機能しているか。

取組みの特徴

参加大学間でのコンソーシアム委員会、実務者会議が整備され、実施面での課題を共に検討する協力体制を構築している。神戸大学内ではプログラム委員会を設置し、他研究科との協力を図る体制ができている。教職員については、英語による教育ができる体制を構築しているとともに、キャンパスアジア室を設置して中国語・韓国語ネイティブや両国での教育研究経験を有する者を任用するなどの体制は優れている。以上のことから、質を伴った取組みの構築が進展していると判断される。

抽出した優れた取組み

本プログラムを実施する神戸大学国際協力研究科及び復旦大学国際関係・公共事務学院、高麗大学校国際大学院は、それぞれ英語コースもしくは英語プログラムを持っており、構成する教員はほぼ全員が海外での豊富な英語（または現地語）による教育研究経験を有している。また、これら三大学院は、これまでも世界各地から多くの留学生を受け入れてきた実績があり、日本語・中国語・韓国語による研究教育についても十分な経験とサポート体制を有している。

（優れている理由）

英語を基礎として、併せて現地語での教育も行う体制を構築していることは優れている。共通言語を設定することにより、特定のテーマを有する教育プログラムが作りやすくなっており、英語で日中韓の地域研究が行われている。

本プログラムの実務関係を担当する「キャンパスアジア室」には、中国語・韓国語ネイティブの者や両国での教育研究経験を有する者、また英語をハイレベルに駆使できる者を任用し、プログラムの運用及び学生のサポートの体制を整えている。

（優れている理由）

本プログラムの実務や学生支援を行う室に各国の言語等に堪能な専門家を配置していることは、優れている。書面や e-mail のみでは把握が難しい事案も電話などにより直接的な処理が可能となっており、また学生支援の面でも十分に機能している。

モニタリング実施側からのコメント

特になし

大学が指摘した課題とそれに対するコメント

○大学が指摘した課題

本プログラムは日中韓の三大学院間の共同教育プログラムであるが、各大学の特性を維持しながら、教育や研究指導体制の細部にわたる共通性をいかに確保していくか、という点が、課題として挙げられる。

例えば、シラバスの編集スタイル（記載項目や内容・分量・言語など）や、候補者選考時に学生に求める研究計画の形式及び内容については、各大学の慣例に則って裁量に任される部分が少なくない。特に復旦大学からの受け入れ学生の場合、出身のコースにシラバスに相当するものがなく、学生作成の講義概要の提出を受けて参考資料とすることもあった。そのため、指導教員の選定に際してそうした認識のギャップが問題となる事態が、今年度には発生した。

各大学の他プログラムとのバランスなども考慮する必要があるため、すぐに形式的な共通化を実現することは難しいが、今後、ある程度のすり合わせを行いながら、交換留学及びダブルディグリー留学における研究指導の連携体制をスムーズなものとしていく必要がある。

○コメント

- ・ 研究指導体制についての細部にわたる共通性はそれほど重要なことではないが、むしろ教育の内容や方法における質の保証の観点からどのように共通性や通用性を確保できるかについて具体的に協議することで課題の解決が可能になるのではないかと。研究計画等の指導は異なる指導方針などを学ぶことの意義を議論してみてもどうか。
- ・ 目的整合性の点からは、プログラムの共通性ではなく、教育・育成の内容の過不足の方が優先される場合もあると思われるので、ダブル・ディグリーの仕組みの完成度に囚われることのない本来目的の実現度をまずは高めてもらいたい。
- ・ コンソーシアム委員会が副学長・理事が出席するレベルのものであることは重要であり、とくに中国の大学との意見調整では、指導部との協議は有効に機能することが多い。シラバスの記述の統一は、協働プログラムにとって、ひとつのメルクマールとなるものである。連携体制をスムーズなものにしていくために、各レベルの会合をどのように組み合わせ、機能させていくのか、そのあたりの検討が重要になってくるものと思われる。
- ・ 参加大学間での教育内容の統一のためや、派遣候補学生の履修指導の面から、各校でのシラバスの導入、あるいはさらにはその共通化を検討していただきたい。

基準 2－2 教育内容・方法

目的を達成するために適切な教育内容や教育方法が共同して検討され、実施されているか。

取組みの特徴

参加大学間の協議・調整を綿密に行い、コア科目を神戸大学・高麗大学校で開設している。セミナー、インターンシップ、海外研修を実施して、参加学生に多様な機会を提供していることは優れている。予定している数の学生の派遣や受け入れも行われている。以上のことから、質を伴った取組みの構築が進展していると判断される。

抽出した優れた取組み

正規科目としてプログラムの教育体系に沿った「キャンパスアジア科目」を指定及び新規開設し、本プログラムの育成人材像に期待される知識やスキルを身につけるコア科目として位置づけている。本科目については、その単位取得をプログラム修了証明書（サーティフィケート）の交付条件としており、必須科目として履修する動機付けを与えている。なお、高麗大学校においても同様のキャンパスアジア特設科目が指定されており、復旦大学の学生もそのいずれかを留学先で履修することが可能となっている。

（優れている理由）

神戸大学において正規科目として「キャンパスアジア科目」を指定及び新規開設したのは優れている。高麗大学校でも特設科目を開設・指定し、今年からはリスク・マネジメントに関する科目が開設されるようになり、共同プログラムとしての教育内容の調整を行っていることは優れている。復旦大学では、公共政策学や行政学の支援からの教育が行われているが、四川大地震の被災地見学などを新たに実施するようにしたなど、キャンパス・アジア関連科目の充実を図る調整を今後も行い、共同プログラムとしての有効性を増す努力を引き続きお願いしたい。

国内外の専門家・研究家を招請して行われる「リスクマネジメントセミナー」は、平成 24 年度中に 6 回にわたって開催され、本コンソーシアムの枠を超えた国際的な付加価値を持つ教育機会を提供する場となっている。

インターンシップならびに海外・国内実習については、本年度は FHI360〔アメリカ合衆国・ワシントン DC〕での海外実習、ユネスコ・アジア太平洋地域教育事務所〔タイ・バンコク〕でのインターンシップが実施されたほか、国内でも東日本大震災に関連して東北地方でのインターンシップやスタディツアーを実施し、現地での経験を積む機会を学生に提供した。

（優れている理由）

セミナーの開催、インターンシップや海外研修の機会が提供されていることは優れている。特にユネスコ・アジア太平洋地域教育事務所には 2 名の学生がインターンシップとして参加し、同事務所のプログラムアシスタントの役職に就いた学生も出ており、有効に機能してい

る。日本から韓国に派遣している学生についても、インターンシップに参加している実績が出ている。

候補者の選考や評価については、候補者毎に研究計画書等の書類評価を行うとともに、キャンパスアジア室スタッフ、プログラム委員会委員からなる教員による面接も実施して、選考における信頼性の確保を図っている。

(優れている理由)

希望者を採用するということではなく、書類や面談等に基づいて学生を選考することでプログラムの質と水準を維持するという点での工夫が見られる。なお、相手大学の派遣候補者について、神戸大学側で改めて受け入れの選考を行い、その結果を派遣先大学に示してから公表することとしている。

モニタリング実施側からのコメント

特になし

大学が指摘した課題とそれに対するコメント

○大学が指摘した課題

まず、「キャンパスアジア科目」や「リスクマネジメントセミナー」といった教育機会を、プログラムの目的や学生のニーズに応じて、適切にかつ体系的・継続的に提供するためには、それにふさわしい人員措置（非常勤講師としての雇用、もしくは海外を含む遠隔地からの招聘）を講じなければならない。しかし、そのための経済基盤を本プログラムにおいてどこまで安定的に確保できるか、今後の不安は払拭できない。現在のところ、キャンパスアジア科目は、「臨時開設科目」として開講されている。

また、インターンシップのような学外での教育機会について、個々の学生の研究関心やキャリアプランに則してアレンジされるものであり、現在のところ、本学教員個人の努力によって開拓しながら提供している。また、インターンシップ（海外や阪神圏以外）の実施には、交通費や宿泊費用も必要とされる。プログラムの目的に即し、学生のニーズに合致したものを今後どれだけ確保し、学生に提供できるかという点についてはなお不確定な部分が残っている。

○コメント

- ・ 財政的側面は、プログラム実施にとってつねに大きな問題であるが、教育プログラムとしての持続性を実現できるよう、成果のアピール等、このプログラムの有用性を明確化して継続できる努力をしていただきたい。場合によっては他のプログラムに吸収するなり、何らかの形で残ることを期待する。
- ・ キャンパスアジア科目等の教育機会の提供は、人員措置によって保証されるべきものだが、そのための経済基盤が不安であるから、「臨時開設科目」としているのは、本プログラムの実施そのものが臨時であるという印象を、相手大学に与えかねず、少なくともプログラム

実施期間中の経費的な保証がある以上は、再検討の余地があるのではなかろうか。

- ・ インターンシップはマッチングから実習のチェック、評価に至るまで、大学側、教員側の負担が大きい。大学間連携等の利用を検討するなどの方途の検討をお願いしたい。「大学コンソーシアムひょうご神戸」でもインターンシップを実施されていると承知しているが、地元企業との連携を優先的に考慮してはどうか。

基準 2－3 学習・生活支援

学生が適切に学べる環境を形成し、学習・生活面の支援を行っているか。

取組みの特徴

相手大学からの学生も含め、参加学生に対する学習・生活面での支援が現在、十分行われている。特に国際機関の人事担当者による就職セミナー開催など、キャンパス・アジアプログラム参加学生の就職・キャリア開発支援を考えた取り組みを行っていることは優れている。今後、派遣前の事前学習・指導の充実、SNS の活用等による参加者・支援者の情報交換や生活・学習状況等の可視化、ペア学生制度等、より一層の支援の手段の検討を期待したい。以上のことから、質を伴った取組みの構築が進展していると判断される。

抽出した優れた取組み

各校のシラバスについては、留学開始前に各派遣学生に参照できるようにするとともに、履修指導のためのオリエンテーションを実施している。また、学生便覧を各国語に翻訳し、留学先の情報入手に便宜を図っている。

(優れている理由)

シラバスを留学開始前にキャンパスアジア室で閲覧可能としていることや、各国語へ翻訳していることは、本プログラムの透明性を確保するうえで、有意義な取り組みである。それらをもとに学生に履修指導が行われていることは優れている。プログラム開始当初は相手国での指導体制や単位制度に関する情報が学生に十分に伝わっていなかった状況もあり、今後、キャンパスアジア室や相手大学との連携により、プログラムの内容や単位互換の制度に関する事前の情報提供をいっそう進めていただきたい。また、そのような中で、過去に参加した学生からの情報提供も重要となっており、学生ネットワークの構築にも引き続き尽力されたい。

本学留学生センターが留学生のための日本語日本文化教育プログラムを実施しており、修学上の諸問題については各部局やプログラムとの連携の下に専任教員が個別指導を行い、問題の解決に当たる体制が整えられている。また留学生センターは、新留学生を対象とする「外国人留学生ガイドブック」(日本語・英語・中国語・韓国語版)を配布しており、日本語教育、留学生相談、奨学金・宿舎情報等に関するオリエンテーションも行っている。同センターには相談指導部門もあり、各部局と連携しながら問題解決に至る助言を行っている。

(優れている理由)

受入れ学生に対して、TA 及びチューターが配置されるとともに、個別指導や留学生センターによる日本語プログラム等、学内の各部署の協力を得ながら、適切な支援体制が整備されている。

学内外の諸手続などの支援をキャンパスアジア室スタッフが行っている。宿舎については、神戸大学所有の宿舎だけではプログラムで受け入れる留学生全員を収容することが難しいため、通学圏内の賃貸アパートを一括して借り上げ、プログラム参加学生専用の宿舎として貸与している。

就職支援については、神戸大学大学院国際協力研究科の学生就職委員による「なんでも相談室」が毎月1回開催されており、世界銀行やアジア開発銀行、アフリカ開発銀行などの国際機関の人事担当者が毎年、研究科を訪問して、就職セミナーを実施している。さらに国際公務員養成プログラムを通して、国際機関のスペシャリストが就職セミナーを行っている。

(優れている理由)

各種の学習・生活面の支援を、中国語・韓国語を話せるスタッフなどのキャンパスアジア室のスタッフが行っており、機能している点は優れている。プログラム参加学生専用の宿舎については、参加学生間の交友を深め、将来の人脈形成に向けて有意義な取り組みである。国際機関の人事担当者による就職セミナーは、日本人学生のみならず中国や韓国の学生にとっても大変有意義なキャリア開発の機会となっている。

モニタリング実施側からのコメント

特になし

大学が指摘した課題とそれに対するコメント

○大学が指摘した課題

学習支援・就職支援については上記の通りの体制を整えているが、実際にダブルディグリー生が学位を取得し、交換留学生を含めて大学院を修了した者が出るのは平成25年度となるため、こうした支援の成果についてはいまだ評価が難しい。同様に、同窓会の組織についても、構想自体はプログラム発足当初からあるものの、実態としてはいまだ結成するに至っていない。こうしたものがスケジュールに上がってくるに従って、そこで生じた問題点をいかに拾い上げて適切に対処するかが今後、課題になってくると予想される。

○コメント

- ・ 修了学生のフォローアップは、今後のプログラム改善や学習成果の測定方法の策定のために重要であり、参加大学間で、協議を進めていただきたい。
- ・ 同窓会については、本プログラムを通じて形成された人脈の保持にきわめて有意義なものであり、本プログラムの成果をサステナブルにするために必要なところから、関係者の努力を期待したい。同窓会については各大学のみならずキャンパス・アジア参加大学全体で同窓会を考えることもできるのではないかな。
- ・ 学生の派遣と受け入れについては、さまざまな具体的な問題を、そのつど具体的に解決し

[大学名：神戸大学]

ていく必要に迫られる。担当教員の負担を軽減し、システムとして対応する必要がある。とくに海外への派遣学生については、既存の学生支援組織では対応が難しいところから、相手大学との協働による支援体制の構築が必要となるのではないかと。

基準 2－4 単位互換・成績評価

単位の取得や海外大学等との互換方法、成績評価の方法および海外大学等との互換方法が定められ、機能しているか。

取組みの特徴

プログラムの質に直接に関わるカリキュラムの水準、単位の認定水準、成績基準を参加大学間で協議し、質の同等性を図っている。単位互換のシステムが整備されているとともに、学位授与では神戸大学内の上位の委員会において確認を行うなど、厳格な手続きが定められている。以上のことから、質を伴った取組みの構築が進展していると判断される。

抽出した優れた取組み

三大学間においては、本プログラムのコンソーシアム委員会において、各大学の履修コースのカリキュラムの水準、単位の認定基準、成績基準等を協議し、その質の同等性を確保している。それぞれのコースの講義科目を履修し、またインターンシップを実施した学生の成績については、各大学が自国の基準によって評価・認定を行うが、プログラムとしては最終的にプログラム運営委員会におけるコース修了判定を経て、修了証（サーティフィケート）を交付することとなっている。

（優れている理由）

コンソーシアム委員会において、参加大学間でのカリキュラムの水準や成績基準等が協議されたことは優れた取組みである。実際には、受け入れ学生については、相手大学で受講してきた科目リストをもらい、履修した科目がどのような内容かを確認して質の同等性についての判断を行っている。単位認定では、授業名から内容が判別し難い場合には学生から授業の詳細やワークロードを聴取した上で、学内の教務委員会に諮り、国際協力研究科の委員会でもレビューを受けるようになっている。カリキュラムについては参加大学間で開講が必要な授業の協議を行うことで、全体的な質を確保している。学生の質の確保という点では、派遣学生がダブル・ディグリーを希望していても、各大学の選考段階で学力に不安が残る場合は、交換留学に切り替えて送り出すことを実際に行っている。また、各科目の評価とプログラムの修了判定を分けているのは適切な方法であると思われる。

三大学の間には、既に全学及び部局間で関連協定が結ばれており、単位算定方式についても合意されている（なお、そこでは、各校の単位はすべて1：1で互換するものとされている）。

（優れている理由）

相手大学での授業時間数を実際に比較検討したうえで、参加大学間で単位互換のシステムを構築している点において優れている。

三大学間で締結されているダブルディグリー協定に定められたところ、また各大学が定めるところに基づいて、派遣元大学・派遣先大学それぞれにおいて必要な単位を取得し、論文審査に合格した場合は、両大学における学位授与審査を経て、双方の学位が授与される。なお、神戸大学におけるダブルディグリーの認定については、適切なプログラム設計による質の保証を全学的に担保するため、全学の教育に関する事項を審議する大学教育推進委員会、及び大学の国際交流の取組を審議する国際交流委員会において二重に審査した上で、役員会決定事項としている。

(優れている理由)

3大学で明確な協定があり、さらに、神戸大学においては上位の委員会において学位の確認を行うなど、厳格な手続きが定められていることは、学位授与にかかる質の保証に十分な配慮がなされている点で優れている。なお、ダブル・ディグリー授与のためには、2つの異なる修士論文をそれぞれの大学に提出して審査を受ける方法をとっている。

モニタリング実施側からのコメント

特になし

大学が指摘した課題とそれに対するコメント

○大学が指摘した課題

ダブルディグリー留学は平成24年度の秋学期から派遣が始まっており、こうした学生の学位取得については平成25年度以降となるため、まだ結果が出ていない状況である。そのため、修士論文審査や、修了延期を申し出てきた学生の扱いといった点への対応は、いまだシミュレーションの段階を出ていない。

また、単位互換については、交換比率は1:1という合意がすでに確立されているものの、講義の内容に基づく単位互換の可否判定については、講義名だけでは必ずしも判定できないため、平成24年度については各大学のシラバスをつき合わせて個別に判断するという作業を余儀なくされた。こうした作業の効率化、及びシラバスなど履修資料の共有もしくは共通化は、本プログラムにおける今後の課題となっている。

○コメント

- ・ 単位互換では、シラバスの詳細な突き合わせと、必要であれば内容の変更の要求、不足する時間については補講などを行う、などの努力が必要であると承知している。今後も弛まぬ改善を望みたい。
- ・ 単位やシラバスの共通化の経験は他大学にも参考になると思われる。可能な範囲で、他大学との情報共有もお願いしたい。
- ・ 学生が自分の成績を確認するシステムの構築は、たとえばネットによる共通の成績管理サイトの設置などは検討されてよいだろう。
- ・ 成績判定が合否だけでなく、5段階ないし9段階が各大学で混在する場合には、その調整が課題となるが、その場合には「優」等の分布割合の調整も検討しておかねばならず、

協議システムの機能が重要となってくるだろう。

- ・ 派遣先で取得した単位の認定についての情報を、派遣前に学生に周知するようお願いしたい。

基準 3 学習成果

教育プログラムの目的に即して学習成果を測定する方法を設定し、成果が適切にあがっているか。

取組みの特徴

派遣学生・受け入れ学生ともにマンスリーレポートの提出を課し、帰国後のシンポジウム学生セッションでの発表を求めるなど、学生の学習内容を把握する努力が継続的に行われており、有意義である。レポートの学習成果把握面での活用方法や、得られた課題点の共有・改善をする仕組みについて、引き続き深めていただくことを期待したい。以上のことから、質を伴った取組みの構築が標準的であると判断される。

抽出した優れた取組み

派遣学生及び受け入れ学生に対しては、全員にマンスリーレポートの提出を課し、日常的な学習状況とその成果についての報告を定期的に受けるシステムを整えている。こうした情報は、蓄積のうえ、必要に応じて本学及び留学先大学における学習成果の、単位などの数字に表れない部分に関する定性的な評価、及び学習上の問題点の把握に利用されている。

(優れている理由)

マンスリーレポートという形で定期的な報告書を提出させ、学生の学習成果や生活面の状況を適確・迅速に把握していることは優れた取組みである。学習成果把握の点での活用方法や課題点を教職間で共有・改善する仕組みについて、引き続き深めていただくことを期待したい。

平成 24 年度までにプログラムを修了した学生（本学関連）は、交換留学の 2 名（平成 23 年度：派遣学生 1 名〔神戸大学から高麗大学校へ派遣〕、平成 24 年度：受け入れ学生 1 名〔神戸大学が高麗大学校から受け入れ〕）である。このうち、平成 23 年度の交換留学学生については留学先での単位取得状況を確認の上でプログラム修了証（サーティフィケート）を授与済みであり、本学修了後の就職状況も把握している（なお、平成 24 年度の交換留学学生については、インターンシップを含めた成績の確定が平成 25 年度にずれ込んでいるため、サーティフィケート授与は平成 25 年度となる予定である）。また、両名からはともに留学レポートの提出を受けており、プログラムに関する満足度やその後の状況についての調査と情報蓄積を進めている。

ダブルディグリー留学生についても今後、学位取得・帰国後の満足度調査及びその後の状況把握を進める予定である。

また、プログラム参加者及び修了者については、派遣先大学からの帰国後、平成 25 年 11 月に開催される三大学共同国際シンポジウム（於：韓国・高麗大学校）で設置される学生セッションにおいて、成果報告を行うことが決定している。

(優れている理由)

レポートによって定性的な報告を求めるなどの方法は、単に知識量などで測定する方法のみに頼るよりも優れている。シンポジウムによる発表で学生が成果報告を行う機会を設けることは優れた取組みである。

モニタリング実施側からのコメント

- ・ 受講者の成績評価に当たって、教育プログラムの目的がどの程度達成されているかという視点をより勘案する取り組みに期待したい。
- ・ TOEFL スコアや、その他のプログラム進展を確認する KPI を設け、それらをチェックするなどの定量的なアプローチも欲しい。

※ KPI: Key Performance Indicator

大学が指摘した課題とそれに対するコメント

○大学が指摘した課題

今後、平成 24 年度のダブルディグリー派遣・受け入れ学生が平成 25 年度春学期以降に学位を取得し、それぞれ帰国する予定となっている。こうした学生のプログラム修了後、及びダブルディグリー取得後の状況を的確に把握し、プログラムの学習成果の測定や教育内容・指導方法の改善に生かしていく必要がある。そうした状況把握や調査の要領について、いかにスムーズに行う体制を築くかという点が、今後の大きな課題となっている。

○コメント

- ・ プログラム修了後の学生の動向はプログラムの教育効果の指標としてきわめて重要である。追跡調査、データ収集、蓄積の仕組みについても検討をお願いしたい。
- ・ 参加大学間の連携によるフォローアップが重要であるため、十分協議されたい。
- ・ 目的整合性、特に自大学院のみではできないグローバルなリスク・マネジメント人材の定義とその達成度評価、という視点でより具体的に評価の仕組みを整えられるとよいと思われる。
- ・ 定期的なレポートの提出のほかに、学生との面談も定期的に行うのが良いであろう。学生による自主的な発表も効果の測定には有効と思われる。

基準 4 内部質保証システム

内部質保証や改善のための体系的な取組みが、参加大学との連携のもとで行われ、機能しているか。

取組みの特徴

学生レポートを蓄積してその内容に基づいて改善方策を迅速にとっている。また、外部評価を既に実施し、その結果を公表していることは優れている。参加大学で、結果を共有し、改善に活用しようという努力を引き続き進めていただきたい。以上のことから、質を伴った取組みの構築が標準的であると判断される。

抽出した優れた取組み

本プログラムでは、プログラム参加学生に対してマンスリーレポートの作成を依頼し、教育内容に関する継続的なモニタリングを行っている。それらの情報は、本学のキャンパスアジア室に蓄積されるとともに、必要に応じてコンソーシアム委員会等に提供され、三大学における教育内容の質保証のための資料として活用されている。

（優れている理由）

マンスリーレポートを通じて問題の把握を行っており、そこに記された課題や要望事項に対しては、まずはキャンパスアジア室で相手大学へ改善要求をするなどの迅速な対応を図っていることは優れている。そこで解決が難しい事案は、プログラム委員会委員長と対応を協議し、中国・韓国の大学との協議が必要な場合には、年1回開催されるシンポジウムの際に3大学の実務担当者を集めて協議を行うなどの対応が取られている。また、マンスリーレポートに記載されていた情報を、翌年の派遣学生に見せて助言するなどの活用もなされている。

本プログラムの選考方法や派遣数などの実績については、国内外の外部評価委員、及び理事・副学長をはじめ、国際交流本部その他の学内関係部局から参加者を得る形での外部評価委員会を年度末に実施し、プログラムの実施状況と教育内容に関するレビューを行った。その内容については文書化及び翻訳（英語化）がなされており、一部はプログラムホームページを通じて公開されている。

（優れている理由）

プログラムに関する外部評価が行われていること、その内容が公開されてアカウンタビリティを果たしている点は優れた取り組みである。

モニタリング実施側からのコメント

特になし

大学が指摘した課題とそれに対するコメント**○大学が指摘した課題**

まず、外部評価委員会によるレビューは毎年度末に行われるため、教育プログラムとして本格的に稼動した初年度である平成 24 年度のレビューの検討及び改善のための議論は平成 25 年度へと持ち越されることとなった。このため、三大学間のコンソーシアム委員会レベルでの改善に向けた議論は、スケジュール的に 11 月まで待たなければならないこととなっている。よって、レビューを受けての改善計画の策定プロセスをいかにスムーズで合理的なものとするかが、今後の課題となっている。

また、公的資金助成の終了後のプログラム継続の方策については、高度かつ実践的な人材を引き続き養成するため、「学長裁量経費」を充当する他、継続的な冠奨学金を創設する予定であり、授業料免除などさまざまな支援を検討する。また、大学院生の研究成果の国際会議などでの発表や調査研究、ダブルディグリープログラムの学生受入れ及び長期インターンシップなどについては「神戸大学基金」等による旅費などの支援を行っていく。

○コメント

- ・ PDCA サイクルが 11 月まで待たねばならないことは学年度等の違いから仕方ない。しかし 3 大学で PDCA サイクルをどう動かすか、評価点検の事項は何にすべきかなどの準備は早い方がよい。
- ・ 改善のための議論をスムーズに行い、自大学での対策を用意するためには、キャンパスアジア室の上に置かれる委員会が、単なる評価委員会ではなく、学内的な調整機能と決定機能を備えた運営委員会となる必要がある。そのような体制が整えば、相手大学との協議も組織決定を踏まえた交渉となり、有効な結果をもたらす可能性が増すであろう。公的資金助成が学内の組織の改編や育成につながるならば、臨時の開設科目という問題の解決にもつながるものと思われる。
- ・ プログラム終了後の継続方法については、神戸大学での検討状況は評価するが、中韓の大学の計画策定を促す必要もあり、更なる協議を図られたい。

「キャンパス・アジア」モニタリング 自己分析書

平成25年5月

「東アジアにおけるリスク・マネジメント専門家養成プログラム」

神戸大学

<目次>

I 構想にかかる基本情報および目的、進捗状況	
1. 基本情報	1
2. 構想の目的、概要、進捗状況	1
II 基準ごとの自己分析	
基準1 教育プログラムの目的	5
基準2 教育の実施	
基準2-1 実施体制	7
基準2-2 教育内容・方法	9
基準2-3 学習・生活支援	11
基準2-4 単位互換・成績評価	13
基準3 学習成果	14
基準4 内部質保証システム	15

I 構想にかかる基本情報および目的、進捗状況

1. 基本情報

1. 大学名	神戸大学	
2. 構想名称	【和文】	東アジアにおけるリスク・マネジメント専門家養成プログラム
	【英文】	Program for Careers on Risk Management Experts in East Asia
3. 取組学部・研究科等名	国際協力研究科、人文学研究科、自然科学系先端融合研究環都市安全研究センター	
4. 海外の相手大学	【中国】	復旦大学 国際関係・公共事務学院（SIRPA：School of International Relations and Public Affairs）
	【韓国】	高麗大学校 国際大学院（GSIS:Graduate School of International Studies）

2. 構想の目的、概要、進捗状況

○構想の目的及び概要

目的

平成23年5月の日中韓首脳会談で合意されたように、日本・中国・韓国が国際協力体制を整えることは東アジアのみならず世界においても大きな意味を持っている。本プログラムでは、神戸大学、復旦大学、高麗大学校がコンソーシアムを構成し、三大学が有する世界レベルの大学院教育を通して「東アジアにおけるリスク・マネジメント専門家」を養成することを目的とする。具体的には、現在の各大学院のカリキュラムをレビューして、新しいカリキュラムを三大学院間で構築することにより、①自然災害時のみならず経済危機、社会情勢危機時におけるリスク・マネジメントに関わる応用力のある専門的な知識とスキル、②三か国が拠点となり日本・中国・韓国に関する政治・経済・人的資源開発・開発運営を含む社会科学全般の専門性、③自国語に加えて英語と現地語による政策・実施支援ができるレベルのコミュニケーションスキルを習得して、④異文化を理解した上で、公共機関や国際機関、NPO において世界の危機時における問題の分析、政策策定を主導し、さらに災害の現場で活躍できる専門家の養成を目的とする。

概要

東日本大震災及び福島第一原子力発電所の事故は、その救援・復旧・復興活動には大きな困難が伴い、自然災害やそれに伴う出来事が国境を越えて通貨危機や安全保障問題にも影響を及ぼすことを如実に示した。

神戸大学大学院国際協力研究科では、1995年の阪神淡路大震災の教訓を基礎に日本語コースと英語コースの双方にて、自然科学系先端融合研究環都市安全研究センター、人文学研究科等の協力の下、アジア諸国に関わる経済・法律・政治・教育開発・開発運営・国際関係等の社会科学分野における講義や演習、そして、都市工学や環境衛生分野における講義や演習を組み合わせた独自のカリキュラムを有し、これまでも多くの修了生を国際連合やWHO、世界銀行など、関連する諸機関に送り込む実績を有している。

本プログラムは、このような神戸大学大学院国際協力研究科の国内外での実績を前提に、神戸市に設置されている WHO 神戸センター、人と未来防災センター、アジア防災センター、JICA 兵庫(注：現・JICA 関西)国際センター等のリスク・マネジメントに関わる多彩な研究機関やNPOの諸機関の協力を得て、カリキュラムの拡充を実現し、国際連合、世界銀行、アジア開発銀行、米州開発銀行等、既にネットワークが構築されている国際機関でインターンシップを実施する。そして、海外の大学機関等から非常勤講師等を招聘する等、プログラム参加者により充実した教育の機会を提供する。また、このような機関との協働により、本プログラム参加者の実践的かつ実務的な能力向上の機会を提供し、加えてこれらの機関とのネットワーク拡大により、本プログラム修了者に一定の就職先を確保(WHO、世界銀行、アジア防災センターなど)できることが期待される。

本コンソーシアムを形成する復旦大学は、中国における国際関係教育の拠点の一つであり、日中関係をはじめとする東アジアの豊富な国際関係及び中国の政治・社会・経済・言語に関わる豊富な教育機会を提供している。一方、高麗大学校は、韓国語と英語コースの双方で、安全保障面と韓国情勢及び政治政策面、経済的危機時におけるリスク・マネジメントの研究とインターンシップの機会を提供することができる。

本プログラムでは、博士前期課程の大学院生を対象に 12 ヶ月間交換留学とダブルディグリープログラムを実施する受入・派遣モデルを三大学の協働により開発し(注：神戸大学-復旦大学-高麗大学校は、平成24年度において交換留学及びダブルディグリー留学の協定を締結し終えており、両プログラムでの学生の留学も三大学間ではすでに相互に行われている)、東アジア、また世界レベルで活躍するリスク・マネジメント専門家を養成する。本プログラムの参加を円滑化するために、各大学はプログラム参加者に対する事前教育を実施する。事前教育においては各派遣先の現地語を学び、異文化を理解し、各派遣先における教育や生活に対応する環境を整える。

本コンソーシアムは、本プログラム参加三大学の構想責任者 1 名を共同代表とし、これに実施部局の責任者 1 名及び教員 1 名、プログラム実施責任教員各 1 名、各大学の事務職員 1 名の計 15 名から構成されるコンソーシアム運営委員会を設置する。運営委員会においては、各履修コースのカリキュラムの質及び水準、単位の認定基準、成績基準等を協議し同質性を確保し、派遣者の決定やコンソーシアム以外の交流についての審査、決定を行う。なお、運営委員会の他に外部委員を含めた評価委員会を設置し、本プログラムの点検・評価を行い、教育の質の保証と向上を図る。

○平成24年度末までの取組状況

教育プログラムの目的の設定と共有

本プログラムは、東アジア、さらには世界レベルで活躍するリスク・マネジメント専門家一種々の危機的事態に関わる「リスク」を分析して政策策定を主導し、さらには災害の現場でも活躍できる専門家一養成を目指すものである。この人材育成目標を現実化するため、コンソーシアムを形成する三大学院は、下記の通りにそれぞれの特性に応じて担うべき役割を分担している。

1. 神戸大学 大学院国際協力研究科

- 海外援助に関する日本の豊富な経験に根ざした、救援活動に関わる専門家教育
- 1995 年 1 月 17 日の阪神淡路大震災以降に蓄積され、2011 年 3 月 11 日の東日本大震災においても経験された、自然災害や防災に関わるリスク・マネジメント教育

2. 復旦大学 国際関係・公共事務学院

- 公共政策大学院の特色を生かした、公共政策学・行政学の視点からのリスク・マネジメント教育
- 地域大国である中国を組み込んだ東アジア国際関係や、地域的な将来構想に関わるリスク分析

3. 高麗大学校 国際大学院

- 東アジアのクロスロードに位置する朝鮮半島の利点を生かした、安全保障に関わるリスク分析
- 原子力などエネルギー問題に関わるリスク・マネジメント教育

組織体制および教職員について

本プログラムを実施する神戸大学国際協力研究科及び復旦大学国際関係・公共事務学院、高麗大学校国際大学院は、それぞれ英語コースもしくは英語プログラムを持っており、構成する教員はほぼ全員が海外での豊富な英語(または現地語)による教育研究経験を有している。また、これら三大学院は、これまでも世界各地から多くの留学生を受け入れてきた実績があり、日本語・中国語・韓国語による研究教育についても十分な経験とサポート体制を有している。

こうした既存の体制に加えて、本プログラムを担当する「キャンパスアジア室」には、中国語・韓国語ネイティブの者、また英語をハイレベルに駆使できる者を任用し、プログラムの運用及び学生のサポートの体制を整えている。さらに、それぞれの大学院には、交流相手国を研究対象とする専門家が複数所属しており、プログラム参加者のバックグラウンドの応じた教育サポートも可能となっている。

教育内容・教育方法および学生の受け入れ

まず、神戸大学キャンパスアジア室では、復旦大学・高麗大学校へ派遣する学生に対して、自主ゼミナールをアレンジするとともに、TOEFL のスコアアップに向けた教育指導を行った。また、正規科目としてプログラムの教育体系に沿った「キャンパスアジア科目」を指定及び新規開設し、本プログラムのコア科目として位置づけている。

また、国内外の専門家・研究家を招請して行われる「リスクマネジメントセミナー」は、平成 24 年度中に 6 回にわたって開催され、本コンソーシアムの枠を超えた国際的な付加価値を持つ教育機会を提供する場となっている。

インターンシップについては、本年度はタイ、東日本大震災の被災地である岩手県大槌町で実施したほか、海外実習をアメリカ合衆国で実施、国内実習として東日本大震災に関連して東北地方でスタディツアーを実施し、フィールド経験を積む機会を学生に提供した。

なお、平成 24 年度において、復旦大学からは 3 名のダブルディグリー留学生（平成 24 年 9 月来日、平成 25 年 9 月修了予定）を受け入れ、高麗大学校からはダブルディグリー留学生 1 名（平成 24 年 9 月来日、平成 25 年 9 月修了予定）及び交換留学生〔半年〕4 名（1 名は平成 24 年 9 月来日、平成 25 年 3 月帰国。3 名は平成 25 年 3 月来日、同 9 月帰国予定）を受け入れている。

学習支援・生活支援

各校のシラバスについて、留学開始前に各派遣学生に参照できるようにするとともに、履修指導のためのオリエンテーションを実施している。また、学生便覧を各国語に翻訳し、留学先の情報入手に便宜を図っている。また、受け入れ留学生の教育においては、各講義に配置される TA 及び留学生個々人に付くチューターなどを通じて、個別のきめ細かい対応を行っている。

また、平成 25 年度以降、プログラム修了者及び参加者の交流を進め、プログラム同窓会を結成することも計画中である。

学習環境面では、図書館や IT 設備、また本学契約のデータベースなども、他の正規学生と同様の利用が可能となっている。宿舎については、神戸大学通学圏内の賃貸アパートを一括して借り上げ、プログラム参加学生専用の宿舎として貸与している。

就職支援については、神戸大学大学院国際協力研究科の学生就職委員による「なんでも相談室」が毎月 1 回開催されており、各種の就職セミナー・キャリアセミナーも開催されている。

単位の相互認定および成績評価・学位授与

三大学間においては、本プログラムのコンソーシアム委員会において、各大学の履修コースのカリキュラムの水準、単位の認定基準、成績基準等を協議し、その質の同等性を確保している。学生の成績については、各大学が自国の基準によって評価・認定を行い、プログラム運営委員会におけるコース修了判定を経て、最終的には修了証（サーティフィケート）を交付することとなっている。

交換留学制度による取得単位については、各所属大学の規則に定められた基準によって修了要件の単位として認定される。また、三大学の間には、既に全学及び部局間で関連協定が結ばれており、単位算定方式についても合意されている。また、三大学間で締結されているダブルディグリー協定に定められたところ、また各大学が定めるところに基づいて、必要な単位を取得し、論文審査に合格した場合は、両大学における学位授与審査を経て、双方の学位が授与されることとなっている。

学習成果の測定、およびプログラム履修後の状況

派遣学生及び受け入れ学生に対しては、全員にマンスリーレポートの提出を課し、日常的な学習状況とその成果についての報告を定期的に受けるシステムを整えている。同様のレポートは、国内外におけるインターンシップ等についても別途提出することになっている。

平成 24 年度までにプログラムを修了した学生（本学関連）は、交換留学の 2 名（平成 23 年度：派遣学生 1 名、平成 24 年度：受け入れ学生 1 名）である。このうち、平成 23 年度の学生については留学先での単位取得

状況を確認の上でプログラム修了証(サーティフィケート)を授与済みであり、本学修了後の就職状況も把握している。また、両名からはともに留学レポートの提出を受けており、プログラムに関する満足度やその後の状況についての調査と情報蓄積を進めている。

ダブルディグリー留学生についても今後、学位取得・帰国後の満足度調査及びその後の状況把握を進める予定である。

内部質保障システムの体制、および改善実績・将来計画

本プログラムでは、プログラム参加学生に対してマンスリーレポートの作成を依頼し、教育内容に関する継続的なモニタリングを行っている。また、本プログラムの実績については、国内外及び学内外から参加者を得た外部評価委員会を実施し、プログラムの実施状況と教育内容に関するレビューを行った。

Ⅱ 基準ごとの自己分析

基準 1 教育プログラムの目的
海外大学との共同教育プログラムの目的が明確に定められ、参加大学の間で共有されているか。

1. 基準 1に係る現況の説明

教育プログラムの目的の設定

本プログラムは、東アジア、さらには世界レベルで活躍するリスク・マネジメント専門家——種々の危機的事態に関わる「リスク」を分析して政策策定を主導し、災害の現場でも活躍できる専門家——養成を目指すものである。この人材育成目標を現実化するため、コンソーシアムを形成する三大学院は、下記の通りにそれぞれの特性に応じて担うべき役割を分担しており、本プログラムに参加する学生は、各人の問題意識に沿ってこの三大学院における教育を組み合わせ、専門性を持つグローバル人材となるためのキャリアデザインを行っている。

1. 神戸大学 大学院国際協力研究科

- 海外援助に関する日本の豊富な経験に根ざした、救援活動に関わる専門家教育
- 1995年1月17日の阪神淡路大震災以降に蓄積され、2011年3月11日の東日本大震災においても経験された、自然災害や防災に関わるリスク・マネジメント教育

2. 復旦大学 国際関係・公共事務学院

- 公共政策大学院の特色を生かした、公共政策学・行政学の視点からのリスク・マネジメント教育
- 地域大国である中国を組み込んだ東アジア国際関係や、地域的な将来構想に関わるリスク分析

3. 高麗大学校 国際大学院

- 東アジアのクロスロードに位置する朝鮮半島の利点を生かした、安全保障に関わるリスク分析
- 原子力などエネルギー問題に関わるリスク・マネジメント教育

なお、こうした目的設定の過程においては当初、復旦大学国際関係・公共事務学院のプログラムにおける位置づけが相対的に不明確であるという指摘を受けていた。この点については、プログラム内の議論や学生指導の経験を通じて、東アジアの地域大国である中国の存在感を踏まえた東アジア国際関係に関する教育を担うと同時に、中国そのものを事例とした地域研究の拠点として位置づけが明確になりつつある。

教育プログラムの目的の大学間での共有

本プログラムにおける教育の中核機関となる三大学院は、共同国際シンポジウム(2012年2月:神戸、2012年11月:上海)の開催や、それに伴って副学長・理事が出席するコンソーシアム委員会・教員及び事務方担当者の出席する実務者会議など各レベルの会合において、相互のカリキュラムの連携と調整、学生のニーズに応じた講義科目の新設、教育環境の整備状況に関する情報交換、教員レベルの相互交流などについて議論を持ち、プログラム運営に関する認識の共有を確保している。また、神戸大学では、キャンパスアジア室を通して、三大学院間の情報交換を恒常的に行い、プログラムの進行に応じて発生する諸問題を早い段階で把握する体制を整えている。

以上の事項を踏まえ、本基準について、本プログラムの取り組みの自己判定は、「進展している」とする。

2. 今後の課題点

本プログラムは、発足以前に締結済みであった神戸大学大学院国際協力研究科と高麗大学校国際大学院とのダブルディグリー・交換留学・教員交流に関する協定を基礎とし、ここに復旦大学国際関係・公共事務学院を加えて三大学院間での学生交流・教員交流体制を発展的に構築したものである。

したがって、本プログラムでは発足当初から、交換留学に加えて、二大学の学位の取得が可能なダブルディグリー留学が可能となっている。ただしこの点については、「日中韓三国すべてで学びたい」というニーズには必ずしも応えきれないこともまた事実である。さらに、ダブルディグリー留学は協定を締結している大学院間でのみ可能であるため、例えば本学他研究科の学生は交換留学にしか参加できない。こうした問題の解決のためには、三大学共同でのジョイントディグリー制度の導入や協定参加機関の範囲を拡大するなどの方策をとる必要があるが、その場合にはカリキュラムの調整をはじめとする学位の質保証のための作業が極めて複雑になることが予想され、現行体制ではそのようなプログラムの拡大は難しいと考えられる。

基準 2 教育の実施
基準 2－1 実施体制 目的を達成するための体制が、参加大学等の間で適切に構築され、機能しているか。

1. 基準 2－1に係る現況の説明

組織体制および教職員について

本プログラムを実施する神戸大学国際協力研究科及び復旦大学国際関係・公共事務学院、高麗大学校国際大学院は、それぞれ英語コースもしくは英語プログラムを持っており、構成する教員はほぼ全員が海外での豊富な英語(または現地語)による教育研究経験を有している。また、これら三大学院は、これまでに世界各地から多くの留学生を受け入れてきた実績があり、日本語・中国語・韓国語による研究教育についても十分な経験とサポート体制を有している。

一例を挙げれば、神戸大学では、既存の教員の国際化について、平成 21 年 9 月から「神戸大学若手教員長期海外派遣制度」を設けており、本学の教育研究を担う次世代の人材を養成するため、優秀な若手教員を長期間海外に派遣するなどの全学的努力を行っている。学長戦略経費を用いて、平成 21 年度から平成 26 年度までの 6 年間で 100 名、原則 45 歳以下の若手教員を海外に少なくとも 6 ヶ月以上は派遣する、しかも年度内帰国も条件としては付さずに 1 年を越える滞在についても制限しないといった、柔軟な制度として実施している。このような取組みによって、本プログラムにおいても、こうした制度を活用した者を含んだ、海外での経験を有する教員によって構築された指導教員体制の下での研究指導が行われている。学生の研究計画に適合的な研究教育実績を持つ指導教員を的確に配置するのは必ずしも簡単なことではないが、経済学・法学・政治学・国際関係論といった多彩な専門分野を擁する国際協力研究科教員の協力によって、指導教員が確保されている。

こうした既存の体制に加えて、本プログラムの実務関係を担当する「キャンパスアジア室」には、中国語・韓国語ネイティブの者や両国での教育研究経験を有する者、また英語をハイレベルに駆使できる者を任用し、プログラムの運用及び学生のサポートの体制を整えている。さらに、それぞれの大学院には、交流相手国を研究対象とする専門家が複数所属しており、プログラム参加者のバックグラウンドに応じた教育サポートも可能となっている。

また、候補者の選考や評価については、候補者毎に研究計画書等の書類評価を行うとともに、キャンパスアジア室スタッフ、プログラム委員会委員からなる教員による面接も実施して、選考における信頼性の確保を図っている。

以上の事項を踏まえ、本基準について、本プログラムの取り組みの自己判定は、「進展している」とする。

2. 今後の課題点

本プログラムは日中韓の三大学院間の共同教育プログラムであるが、各大学の特性を維持しながら、教育や研究指導体制の細部にわたる共通性をいかに確保していくか、という点が、課題として挙げられる。

例えば、シラバスの編集スタイル(記載項目や内容・分量・言語など)や、候補者選考時に学生に求める研究計画の形式及び内容については、各大学の慣例に則って裁量に任される部分が少なくない。特に復旦大学からの受け入れ学生の場合、出身のコースにシラバスに相当するものがなく、学生作成の講義概要の提出を受けて参考資料とすることもあった。そのため、指導教員の選定に際してそうした認識のギャップが問題となる事態が、今年度には発生した。

各大学の他プログラムとのバランスなども考慮する必要があるため、すぐに形式的な共通化を実現することは難しいが、今後、ある程度のすり合わせを行いながら、交換留学及びダブルディグリー留学における研究指導の連携体制をスムーズなものとしていく必要がある。

基準 2-2 教育内容・方法

目的を達成するために適切な教育内容や教育方法が共同して検討され、実施されているか。

1. 基準 2-2に係る現況の説明**教育内容・教育方法**

まず、神戸大学キャンパスアジア室では、復旦大学・高麗大学校へ派遣する学生に対して、派遣先での研究計画を派遣者選考時からレベルアップさせるための自主ゼミナールをアレンジし、教員から学生に対する助言指導を行うとともに、TOEFL のスコアアップに向けた教育指導を行った。また、正規科目としてプログラムの教育体系に沿った「キャンパスアジア科目」を指定及び新規開設し、本プログラムの育成人材像に期待される知識やスキルを身につけるコア科目として位置づけている。本科目については、その単位取得をプログラム修了証明書(サーティフィケート)の交付条件としており、必須科目として履修する動機付けを与えている。なお、高麗大学校においても同様のキャンパスアジア特設科目が指定されており、復旦大学の学生もそのいずれかを留学先で履修することが可能となっている。

また、国内外の専門家・研究家を招請して行われる「リスクマネジメントセミナー」は、平成 24 年度中に 6 回にわたって開催され、本コンソーシアムの枠を超えた国際的な付加価値を持つ教育機会を提供する場となっている。

インターンシップならびに海外・国内実習については、本年度は FHI360[アメリカ合衆国・ワシントン DC]での海外実習、ユネスコ・アジア太平洋地域教育事務所[タイ・バンコク]でのインターンシップが実施されたほか、国内でも東日本大震災に関連して東北地方でのインターンシップやスタディツアーを実施し、現地での経験を積む機会を学生に提供した。

さらに、三大学院間では、教員の相互訪問を定期的に行っており、各大学の教員間での教育内容に関する現状や問題点の共有を密に行うとともに、各校から留学中の学生と対面カウンセリングの機会として活用している。

学生受け入れ

平成 24 年度において、復旦大学からは 3 名のダブルディグリー留学生(平成 24 年 9 月来日、平成 25 年 9 月修了予定)を受け入れ、高麗大学校からはダブルディグリー留学生 1 名(平成 24 年 9 月来日、平成 25 年 9 月修了予定)及び交換留学生[半年]4 名(1 名は平成 24 年 9 月来日、平成 25 年 3 月帰国。3 名は平成 25 年 3 月来日、同 9 月帰国予定)を受け入れている。派遣学生の選考は各大学に任されているが、各大学とも本年度の選考は数倍の競争率であったと聞いている。なお、各大学で派遣候補者として選抜された学生の受け入れに関しては、本学において改めて選考し、承認する形式をとっている。特にダブルディグリーについては本学の正規学生となるため、他の英語コースの学生と同様の入学選考を行ったうえで入学を許可している。

神戸大学キャンパスアジア室では、受け入れ学生の意向を調査した上で、本学セメスター開始前の段階での日本語の事前教育を実施している。これは、日本人学生とのコミュニケーションを密にするために高いニー

派遣・受け入れ状況(平成 24 年度)**派遣学生**

派遣先大学	人数	内訳
復旦大学	3 名	DD-2 名、交換[1 年]-1 名
高麗大学校	3 名	DD-2 名、交換[半年]-1 名

受け入れ学生

派遣元大学	人数	内訳
復旦大学	3 名	DD-3 名
高麗大学校	5 名	DD-1 名、交換[半年]-4 名

〔大学名：神戸大学〕

ズがあり、受け入れ学生の日本での留学生活に少なからぬプラスとなっているだけでなく、彼らの参加によって本学英語コースの他の留学生の日本語への関心を喚起するという効果も生んでいる。なお、前項でも述べたとおり、本プログラムを実施する神戸大学国際協力研究科及び復旦大学国際関係・公共事務学院、高麗大学校国際大学院は、それぞれ英語コースもしくは英語プログラムを持っており、復旦大学・高麗大学校においてもそれぞれ中国語・韓国語を学ぶ講義が設置されている。

以上の事項を踏まえ、本基準について、本プログラムの取り組みの自己判定は、「進展している」とする。

2. 今後の課題点

まず、「キャンパスアジア科目」や「リスクマネジメントセミナー」といった教育機会を、プログラムの目的や学生のニーズに応じて、適切にかつ体系的・継続的に提供するためには、それにふさわしい人員措置（非常勤講師としての雇用、もしくは海外を含む遠隔地からの招聘）を講じなければならない。しかし、そのための経済基盤を本プログラムにおいてどこまで安定的に確保できるか、今後の不安は払拭できない。現在のところ、キャンパスアジア科目は、「臨時開設科目」として開講されている。

また、インターンシップのような学外での教育機会について、個々の学生の研究関心やキャリアプランに則してアレンジされるものであり、現在のところ、本学教員個人の努力によって開拓しながら提供している。また、インターンシップ（海外や阪神圏以外）の実施には、交通費や宿泊費用も必要とされる。プログラムの目的に即し、学生のニーズに合致したものを今後どれだけ確保し、学生に提供できるかという点についてはなお不確定な部分が残っている。

基準 2－3 学習・生活支援

学生が適切に学べる環境を形成し、学習・生活面の支援を行っているか。

1. 基準 2－3に係る現況の説明**学習支援**

各校のシラバスについては、留学開始前に各派遣学生に参照できるようにするとともに、履修指導のためのオリエンテーションを実施している。また、学生便覧を各国語に翻訳し、留学先の情報入手に便宜を図っている。

単位認定については、キャンパスアジア室を通して各校と情報交換を行い、相互認識に齟齬が生じないように注意を払いながら判定作業を行っている。

受け入れ留学生の教育においては、国際協力研究科英語コースの規定するところに従って配置される各講義のTA及び留学生個々人に付くチューターを通じて、個別のきめ細かい対応を行うとともに、英語での学業支援のための論文執筆アドバイザーも置かれている。さらに、本学留学生センターが留学生のための日本語日本文化教育プログラムを実施しており、修学上の諸問題については各部局やプログラムとの連携の下に専任教員が個別指導を行い、問題の解決に当たる体制が整えられている。また留学生センターは、新留学生を対象とする「外国人留学生ガイドブック」(日本語・英語・中国語・韓国語版)を配布しており、日本語教育、留学生相談、奨学金・宿舍情報等に関するオリエンテーションも行っている。同センターには相談指導部門もあり、各部局と連携しながら問題解決に至る助言を行っている。

また、平成 25 年 11 月に開催される国際共同シンポジウムで学生セッションが設置されるのを機会として、プログラム修了者及び参加者の交流を進め、プログラム同窓会の結成を計画中である。

生活支援

学内外の諸手続き(例えば外国人登録・銀行口座開設等)については、留学生支援サークルのメンバーがキャンパスアジア室スタッフや各指導教員とともに支援に当たっている。

学習環境面では、共同研究室内に各学生専用の机・ロッカーなどのスペースを確保しており、図書館や IT 設備、また本学契約のデータベースなども、他の正規学生と同様の利用が可能となっている。

宿舍については、神戸大学所有の宿舍だけではプログラムで受け入れる留学生全員を収容することが難しいため、通学圏内の賃貸アパートを一括して借り上げ、プログラム参加学生専用の宿舍として貸与している。

就職支援については、神戸大学大学院国際協力研究科の学生就職委員による「なんでも相談室」が毎月 1 回開催されており、世界銀行やアジア開発銀行、アフリカ開発銀行などの国際機関の人事担当者が毎年、研究科を訪問して、就職セミナーを実施している。さらに国際公務員養成プログラムを通して、国際機関のスペシャリストが就職セミナーを行い、国際機関で活躍している本研究科の修了生によるキャリアセミナーも開催されている。

以上の事項を踏まえ、本基準について、本プログラムの取り組みの自己判定は、「進展している」とする。

2. 今後の課題点

学習支援・就職支援については上記の通りの体制を整えているが、実際にダブルディグリー生が学位を取得し、交換留学生を含めて大学院を修了した者が出るのは平成 25 年度となるため、こうした支援の成果についてはいまだ評価が難しい。同様に、同窓会の組織についても、構想自体はプログラム発足当初からあるものの、実態としてはいまだ結成するに至っていない。こうしたものがスケジュールに上がってくるに従って、そこで生じた問題点をいかに拾い上げて適切に対処するかが今後、課題になってくると予想される。

基準 2－4 単位互換・成績評価

単位の取得や海外大学等との互換方法、成績評価の方法及び海外大学等との互換方法が定められ、機能しているか。

1. 基準 2－4に係る現況の説明**単位の相互認定**

三大学間においては、本プログラムのコンソーシアム委員会において、各大学の履修コースのカリキュラムの水準、単位の認定基準、成績基準等を協議し、その質の同等性を確保している。それぞれのコースの講義科目を履修し、またインターンシップを実施した学生の成績については、各大学が自国の基準によって評価・認定を行うが、プログラムとしては最終的にプログラム運営委員会におけるコース修了判定を経て、修了証(サーティフィケート)を交付することとなっている。

交換留学制度による取得単位については、各所属大学の規則に定められた基準によって修了要件の単位として認定される。また、三大学の間には、既に全学及び部局間で関連協定が結ばれており、単位算定方式についても合意されている(なおここでは、各校の単位はすべて1:1で互換するものとされている)。

例えば、高麗大学校の学生が神戸大学に留学した場合、高麗大学校で取得した単位は学位取得に必要な単位として 10 単位まで認められ(修了要件は 30 単位)、神戸大学の学生が高麗大学校に留学した場合には、神戸大学で取得した単位は同じく 21 単位まで認められる(修了要件は 50 単位)。また、復旦大学の学生が神戸大学に留学した場合、神戸大学の学生が復旦大学に留学した場合には、それぞれ 10 単位の互換が認められる(修了要件はともに 30 単位)。

成績評価・学位授与

プログラム参加学生の成績評価については、各大学院の裁量に任されているが、上記のコンソーシアム委員会での協議のほか、事務レベルでの日常的な連絡を通じて情報交換と調整が行われている。

三大学間で締結されているダブルディグリー協定に定められたところ、また各大学が定めるところに基づいて、派遣元大学・派遣先大学それぞれにおいて必要な単位を取得し、論文審査に合格した場合は、両大学における学位授与審査を経て、双方の学位が授与される。なお、神戸大学におけるダブルディグリーの認定については、適切なプログラム設計による質の保証を全学的に担保するため、全学の教育に関する事項を審議する大学教育推進委員会、及び大学の国際交流の取組を審議する国際交流委員会において二重に審査した上で、役員会決定事項としている。

以上の事項を踏まえ、本基準について、本プログラムの取り組みの自己判定は、「進展している」とする。

2. 今後の課題点

ダブルディグリー留学は平成24年度の秋学期から派遣が始まっており、こうした学生の学位取得については平成25年度以降となるため、まだ結果が出ていない状況である。そのため、修士論文審査や、修了延期を申し出てきた学生の扱いといった点への対応は、いまだシミュレーションの段階を出ていない。

また、単位互換については、交換比率は 1:1 という合意がすでに確立されているものの、講義の内容に基づく単位互換の可否判定については、講義名だけでは必ずしも判定できないため、平成 24 年度については各大学のシラバスをつき合わせて個別に判断するという作業を余儀なくされた。こうした作業の効率化、及びシラバスなど履修資料の共有もしくは共通化は、本プログラムにおける今後の課題となっている。

基準3 学習成果

教育プログラムの目的に即して学習成果を測定する方法を設定し、成果が適切にあがっているか。

1. 基準3に係る現況の説明

学習成果の測定と結果

派遣学生及び受け入れ学生に対しては、全員にマンスリーレポートの提出を課し、日常的な学習状況とその成果についての報告を定期的に受けるシステムを整えている。こうした情報は、蓄積のうえ、必要に応じて本学及び留学先大学における学習成果の、単位などの数字に表れない部分に関する定性的な評価、及び学習上の問題点の把握に利用されている。

同様のレポートは、国内外におけるインターンシップ等についても別途提出することになっており、本プログラムの付加価値たるインターンシップにおける学習成果の評価を行っている。

プログラム履修後の状況

平成24年度までにプログラムを修了した学生(本学関連)は、交換留学の2名(平成23年度:派遣学生1名〔神戸大学から高麗大学校へ派遣〕、平成24年度:受け入れ学生1名〔神戸大学が高麗大学校から受け入れ〕)である。このうち、平成23年度の交換留学生については留学先での単位取得状況を確認の上でプログラム修了証(サティフィケート)を授与済みであり、本学修了後の就職状況も把握している(なお、平成24年度の交換留学生については、インターンシップを含めた成績の確定が平成25年度にずれ込んでいるため、サティフィケート授与は平成25年度となる予定である)。また、両名からはともに留学レポートの提出を受けており、プログラムに関する満足度やその後の状況についての調査と情報蓄積を進めている。

ダブルディグリー留学生についても今後、学位取得・帰国後の満足度調査及びその後の状況把握を進める予定である。

また、プログラム参加者及び修了者については、派遣先大学からの帰国後、平成25年11月に開催される三大学共同国際シンポジウム(於:韓国・高麗大学校)で設置される学生セッションにおいて、成果報告を行うことが決定している。

以上の事項を踏まえ、本基準について、本プログラムの取り組みの自己判定は、「進展している」とする。

2. 今後の課題点

今後、平成24年度のダブルディグリー派遣・受け入れ学生が平成25年度春学期以降に学位を取得し、それぞれ帰国する予定となっている。こうした学生のプログラム修了後、及びダブルディグリー取得後の状況を的確に把握し、プログラムの学習成果の測定や教育内容・指導方法の改善に生かしていく必要がある。そうした状況把握や調査の要領について、いかにスムーズに行う体制を築くかという点が、今後の大きな課題となっている。

基準 4 内部質保証システム

内部質保証や改善のための体系的な取組みが、参加大学との連携のもとで行われ、機能しているか。

1. 基準 4 に係る現況の説明**内部質保障システムの体制**

本プログラムでは、プログラム参加学生に対してマンスリーレポートの作成を依頼し、教育内容に関する継続的なモニタリングを行っている。それらの情報は、本学のキャンパスアジア室に蓄積されるとともに、必要に応じてコンソーシアム委員会等に提供され、三大学における教育内容の質保証のための資料として活用されている。

また、本プログラムの選考方法や派遣数などの実績については、国内外の外部評価委員、及び理事・副学長をはじめ、国際交流本部その他の学内関係部局から参加者を得る形での外部評価委員会を年度末に実施し、プログラムの実施状況と教育内容に関するレビューを行った。その内容については文書化及び翻訳（英語化）がなされており、一部はプログラムホームページを通じて公開されている。

また、プログラムの運営状況やプログラムで開催されるセミナーの内容などは、ホームページ・パンフレット・ニューズレターなどの媒体を通じて日英両言語で原則公開されており、今後もプログラムの進行に応じて順次情報公開を進めていく態勢が整えられている。

改善実績・将来計画

上記のレビュー内容の詳細については、本学において取りまとめたうえ、平成 25 年度のコンソーシアム委員会及び実務者会議においてプログラムの成果チェックを行う際に資料として提供される予定である。

なお、本モニタリングの時点において把握されている自大学の国際化や他の教育への影響として、日本に関心を持つ中韓両国出身の留学生が本学国際協力研究科英語コースに参加することによって、同コースの留学生の間で日本語及び日本研究への関心が増していることが、教員によって指摘されている。

以上の事項を踏まえ、本基準について、本プログラムの取り組みの自己判定は、「標準的」とする。

2. 今後の課題点

まず、外部評価委員会によるレビューは毎年度末に行われるため、教育プログラムとして本格的に移動した初年度である平成 24 年度のレビューの検討及び改善のための議論は平成 25 年度へと持ち越されることとなった。このため、三大学間のコンソーシアム委員会レベルでの改善に向けた議論は、スケジュール的に 11 月まで待たなければならないこととなっている。よって、レビューを受けての改善計画の策定プロセスをいかにスムーズで合理的なものとするかが、今後の課題となっている。

また、公的資金助成の終了後のプログラム継続の方策については、高度かつ実践的な人材を引き続き養成するため、「学長裁量経費」を充当する他、継続的な冠奨学金を創設する予定であり、授業料免除などさまざまな支援を検討する。また、大学院生の研究成果の国際会議などでの発表や調査研究、ダブルディグリープログラムの学生受入れ及び長期インターンシップなどについては「神戸大学基金」等による旅費などの支援を行っていく。

[大学名]	神戸大学
	(中国側大学) 復旦大学 (韓国側大学) 高麗大学校
[構想名]	東アジアにおけるリスク・マネジメント専門家養成プログラム

1. 構想全体における交流学生数(実績)

(単位:人)

平成23年度		平成24年度	
受入	派遣	受入	派遣
0	1	8	6

2. 奨学金・宿舍提供の状況

(単位:人)

(1) 奨学金を受けている学生数		平成23年度		平成24年度	
		受入	派遣	受入	派遣
内訳	日中韓三国共通の財政支援受給者	0	1	8	6
	大学による奨学金	0	0	0	0
	その他の奨学金	0	0	0	0

(2) 宿舍(大学所有の宿舍、大学借り上げによる宿舍等)を提供されている学生数		平成23年度		平成24年度	
		受入	派遣	受入	派遣
		0	1	8	6

3. 個別の交流プログラムの概況

※色の見方 外国人学生の受入れ(中韓⇒日本)

 日本人学生の派遣(日本⇒中韓)

受入/派遣	相手国	平成23年度				平成24年度			
		第3四半期		第4四半期		第1四半期		第2四半期	
受入	中国								①
	韓国								①②③
派遣	中国							②③	
	韓国				①		②		④

外国人学生の受入れ(中韓⇒日本)							日本人学生の派遣(日本⇒中韓)								
No.	交流期間		派遣元	交流内容	取得可能 単位数	学生交流数		No.	交流期間		派遣先	交流内容	取得可能 単位数	学生交流数	
	始期	終期				計画値	実績		始期	終期				計画値	実績
①	24.10	25.09	中国	ダブルディグリー生		3	3	①	24.02	24.08	韓国	交換留学生		1	1
			韓国			1～3	1				中国			ダブルディグリー生	1～3
②	24.10	24.03	韓国	交換留学生		1～3	1	②	24.09	25.08	韓国	ダブルディグリー生		1～3	2
③	24.03	25.08	韓国	交換留学生		1～3	3				③			24.09	25.08
								④	24.03	25.08	韓国	交換留学生		1～3	1

2012年度CA学生受講授業科目一覧表

神戸大学

名称	言語	担当教員	受講年次	学期	必修・選択	単位	No. of CA students
Socio-Economic Development Theory	English	Yamazaki	Master	Fall, 2012	選択	2	1
Academic Writing	English	Barry	Master	Fall, 2012	選択	2	1
Seminar	English	Kimura	Master	Fall, 2012	選択	2	2
Risk Management	English	Sakurai	Master	Fall, 2012	選択	2	5
Disaster Risk Reduction Strategy For Mega	English	Tsunashima	Master	Fall, 2012	選択	2	4
Local Government	English	Matsunami	Master	Fall, 2012	選択	2	1
Academic Writing (C)	English	Barry	Master	Fall, 2012	選択	2	1
Local Development	English	Katayama	Master	Fall, 2012	選択	2	1
Seminar	English	Alexander Ronni	Master	Fall, 2012	選択	2	1
Statistics	English	Kuanghui Chen	Master	Fall, 2012	選択	2	2
Social Science Research Methods For Development	English	Shimamura	Master	Fall, 2012	選択	2	2
Microeconomics	English	Ohta	Master	Fall, 2012	選択	2	2
Academic Writing (B)	English	Barry	Master	Fall, 2012	選択	2	1
Mathematics For Social Sciences	English	Souksavanh	Master	Fall, 2012	選択	2	1
Special Lecture On Development Management	English	Kim	Master	Fall, 2012	選択	2	1

高麗大 学校

名称	言語	担当教員	受講年次	学期	必修・選択	単位	No. of CA students
Japanese Society And Culture	English	Jung-Sun Han	Master	Fall, 2012	選択	3	2
Special Topics In International Development And Cooperation3	English	Byun Oung	Master	Fall, 2012	選択	3	2
Human Rights In Global And Regional Context	English	Changrok Soh	Master	Fall, 2012	選択	3	2
Thesis Research 1	English	Changrok Soh	Master	Fall, 2012	必修	3	2
Colloquium On International Relations 1	English	Sung-Hoon Park	Master	Fall, 2012	必修	2	2
Korea Language 1	English	Jung Min-Young	Master	Fall, 2012	選択	3	2
Thesis Research	English	Han Jung Sun	Master	Fall, 2012	必修	3	2

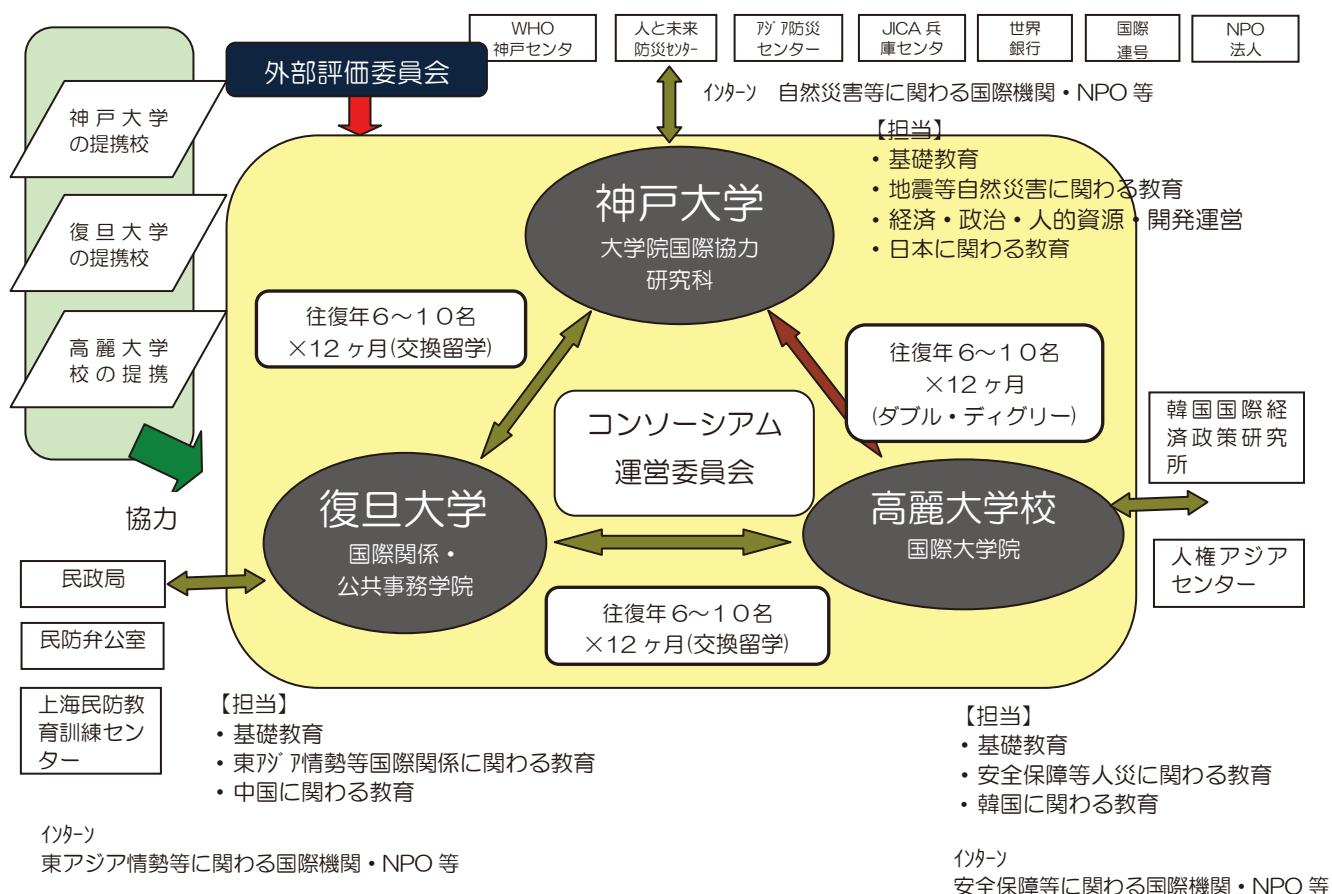
復旦大学

名称	言語	担当教員	受講年次	学期	必修・選択	単位	No. of CA students
Egoverment and China	English	Prof. Zheng	Master	Fall, 2012	選択	2	1
Chinese Politics	English	Prof. Liu	Master	Fall, 2012	必修	3	2
Emergency Management In China	English	Prof. Liu	Master	Fall, 2012	選択	2	2
Political Economy In East Asia	English	Prof. Liu	Master	Fall, 2012	選択	2	1
Doing Business In China	English	Prof. He	Master	Fall, 2012	選択	3	2
Econometrics	English	Prof. Chen	Master	Fall, 2012	選択	3	1
Integrated Chinese	English	Prof. Jiang Yong	Master	Fall, 2012	選択	4	1
E-Government And China	English	Dr. Zheng Lei	Master	Fall, 2012	選択	2	1
Public Management Theories	English	Prof. Jing Yijia	Master	Fall, 2012	必修	3	1
Public Economics	English	Dr. Chen Wu	Master	Fall, 2012	必修	3	2
Chinese Language	English	Prof. Wang	Master	Fall, 2012	選択	4	1
Chinese Language	English	Prof. Yao	Master	Fall, 2012	選択	4	1

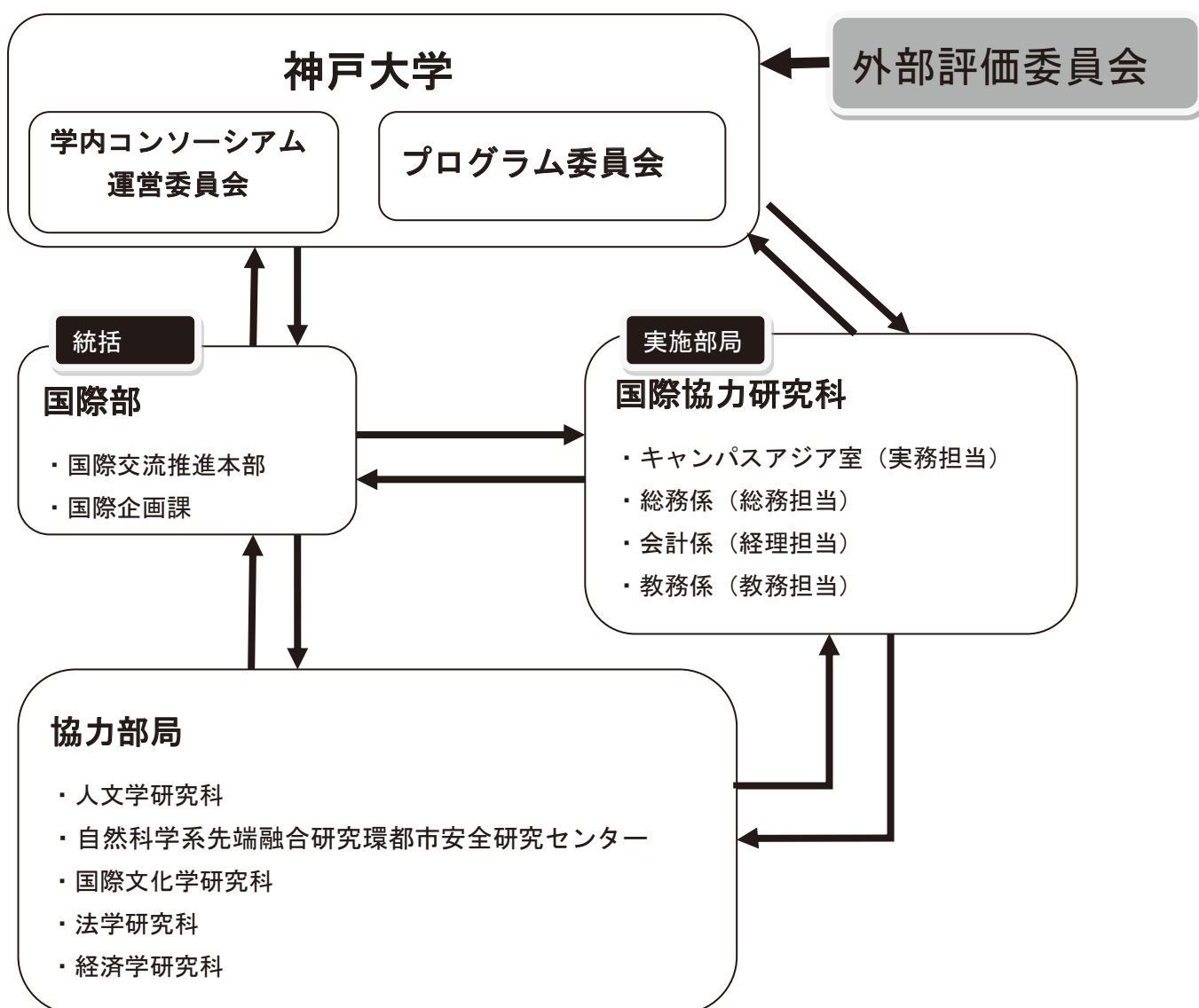
「キャンパス・アジア」モニタリング

実施体制表

プログラム運営体制図



学内連携体制



神戸大学キャンパス・アジアプログラム 実施運営体制 メンバーリスト

2013年5月13日現在

1. コンソーシアム運営委員会

【組織】

本プログラム参加三大学の構想責任者1名を共同代表とし、これを実施部局の責任者1名及び教員1名、プログラム実施責任者教員各1名、各大学の事務職員1名の15名から構成されるコンソーシアム運営委員会を設置する。

【目的】

各履修コースのカリキュラムの質および水準について保証、単位の認定基準、成績基準などを協議し、派遣者の決定に加え、コンソーシアムレベルの交流について最終的な決定、承認を行う。

【委員】

井 上 典 之	理事・副学長、国際交流推進本部長	構想責任者
土 佐 弘 之	国際協力研究科長	実施部局の責任者
藤 井 勝	人文学研究科長	実施部局の責任者(変更委嘱中)
飯 塚 敦	都市安全研究センター長	実施部局の責任者(変更委嘱中)
阪 野 智 一	国際文化学研究科長	協力部局の責任者
小 川 啓 一	国際協力研究科教授	プログラム実施責任教員
三 橋 紫	国際交流推進本部副本部長、特命教授	コーディネーター

2. 評価委員会

本プログラムの点検・評価を行い、教育の質の保証と向上を図る。メンバーは、外部委員を含めて構成される。

【委員】

藤 田 誠 一	神戸大学理事(教育担当)・副学長
川 嶋 太 津 夫	神戸大学教授、大学教育推進機構
五 百 旗 頭 真 皓	神戸大学名誉教授、公益財団法人NPOようご震災記念21世紀研究機構 理事長
二 宮 恭 史	放送大学副学長
廣 里 友 人	アジア開発銀行東南アジア局人間社会開発部主席教育専門官
北 村 友 人	上智大学 総合人間科学部教育学科准教授

3. プログラム委員会

各履修コースのカリキュラムの質および水準について保証、単位の認定基準、成績基準などを協議し、派遣者の決定に加え、コンソーシアムレベル以外の交流について審議、決定、承認を行う。

【委員】

緒 形 康	人文学研究科教授	
王 柯 樹	国際文化学研究科教授	
岡 田 浩 裕	国際文化学研究科教授	
大 西 裕 懷	法学研究科教授	
梶 谷 幹	経済学研究科准教授	
木 村 幹	国際協力研究科教授	(委員長)
小 川 啓 一	国際協力研究科教授	
四 本 健 二	国際協力研究科教授	
大 石 哲 紫	都市安全研究センター教授	
三 橋 愛 子	国際交流推進本部副本部長、特命教授	
桜 井 愛 子	国際協力研究科特命准教授	
田 中 悟 子	国際協力研究科特命助教	
小 石 佳 子	国際協力研究科特命助教	

4. 実施委員会(国際協力研究科内)

教育実施部局として、キャンパス・アジアプログラムに係る実施、調整を行う。

【委員】

土 佐 弘 之	国際協力研究科長	
四 本 健 二	国際協力研究科教授・副研究科長	
駿 河 輝 和	国際協力研究科教授	
高 橋 基 樹	国際協力研究科教授	
小 川 啓 一	国際協力研究科教授	(委員長)
木 村 幹	国際協力研究科教授	(副委員長)
陳 光 輝	国際協力研究科教授	
松 並 潤	国際協力研究科教授(教務委員長)	
金 子 由 芳	国際協力研究科教授(英語委員長)	
桜 井 愛 子	国際協力研究科特命准教授	
田 中 悟 子	国際協力研究科特命助教	
小 石 佳 子	国際協力研究科特命助教	

「キャンパス・アジア」モニタリング

モニタリング報告書

大学名	岡山大学	
取組学部・研究科等名	全学〔学部：文学部、教育学部、法学部、経済学部、理学部、医学部、歯学部、薬学部、工学部、環境理工学部、農学部、マッチングプログラムコース、大学院：教育学研究科、社会文化科学研究科、自然科学研究科、保健学研究科、環境学研究科、医歯薬学総合研究科〕	
構想名称	東アジアの共通善を実現する深い教養に裏打ちされた中核的人材育成プログラム	
海外の相手大学	【中国】	吉林大学（全学）
	【韓国】	成均館大学校（文科大学、サムソン病院、薬学大学、自然科学大学化学科、ナノ構造物理統合研究センター）

平成26年1月

独立行政法人大学評価・学位授与機構
「キャンパス・アジア」モニタリング委員会

<目 次>

I	モニタリング結果の概要	1
II	基準ごとのモニタリング結果	
	基準 1 教育プログラムの目的	2
	基準 2 教育の実施	
	基準 2－1 実施体制	4
	基準 2－2 教育内容・方法	6
	基準 2－3 学習・生活支援	8
	基準 2－4 単位互換・成績評価	11
	基準 3 学習成果	13
	基準 4 内部質保証システム	14

<付録>

採択プログラム実施主体から提出された自己分析書

I モニタリング結果の概要

総 括

本プログラムは、3か国の間で協力して課題を克服できる次世代の中核人材育成を目的とするものであり、教育内容・方法については、全学を挙げ、文理を越えて各分野で本プログラムにかかる教育が行われている。特に日中韓の学生がアクティブ・ラーニングを重視したプログラムの中で「共通善」について学び、相互理解を深めるという試みが行われていることは進展した取り組みである。

学生の学習・生活支援については、事前の語学研修や個別指導が行われ、学生の自主的な交流の場である「CA クラブ」（キャンパス・アジアクラブ）も形成され、進展している。

学習成果については、今後、「共通善」をよりいっそう明確に定義し、参加した学生の学習成果を測定することに課題が残っている。

内部質保証システムについても、本プログラムにおける「質」の定義を明確にして定期的検証を進めることや、課題について各学部をまたがって検討する体制を構築することに課題が残っている。

優れた取り組み

- ・ 「共通善」をどのように認識するかという議論の成果は、日中韓の共通教科書にまとめられ、この教科書に基づいて各国で共通の共同教育プログラムが組まれることになる。平成24年度には、「共通善」教科書の第1章となるプロローグ（4か国語）の編纂を済ませた。
- ・ 日中韓共同学習では、「学生フォーラム」として、日中韓の長期留学プログラム参加学生による「日中韓の相互理解」をテーマとする学生カンファレンス（個別発表、ディスカッション、グループ発表）を、学習の総括という位置づけで行っている。

Ⅱ 基準ごとのモニタリング結果

基準 1 教育プログラムの目的

海外大学との共同教育プログラムの目的が明確に定められ、参加大学の間で共有されているか。

取組みの特徴

教育プログラムの目的について、参加大学間で緊密な理解のすり合わせを行い、教材の共同開発を行い、目的が共有されている点は優れている。「共通善」のシンポジウムの開催などの取り組みがなされていることも優れている。日本側大学と相手大学では学部構成等が異なるため、その共有や調整について継続した取り組みが期待される。また、「共通善の実現」のための共通カリキュラムの構築は、モニタリング実施時点では教科書の第1章が完成した段階であり、今後の更なる進展が期待される。以上のことから、質を伴った取組みの構築が標準的であると判断される。

抽出した優れた取組み

人文・社会科学系においても自然・医歯薬系においても、東アジアにおける相互理解と共通課題に取り組む基礎を作るために、共同教育が重要であるという認識に立ってプログラムを遂行してきた。その際、相互理解や共通課題への協力をどのように構築するかが大きなテーマで、具体的には吉林大学及び成均館大学校との共同教育のベースである「共通善」をそれぞれがどのように認識するかということから議論を開始した。具体的には、3校の代表を中心とした共通善教育研究会を通じて意見交換を重ねてきた。研究会は、平成24年5月・8月・12月に実施され、また平成24年11月3日、4日には共通善研究フォーラム、平成25年3月5日、6日には共通善研究国際シンポジウムが開催され、研究成果が報告された（『共通善教育研究国際シンポジウム報告集』、『共通善研究国際フォーラム 研究報告集Ⅰ、Ⅱ』、他）。

（優れている理由）

専門分野の如何を問わず、東アジアにおける相互理解が重要であるという人材育成についての基本的認識が3大学間で共有されている。参加大学間で議論を行い、時間をかけて目的を共有しようと努力しているのは優れた取り組みであると考えられる。

こうした議論の成果は、日中韓の共通教科書にまとめられる。これは、共通の歴史認識や価値観を纏めるというものではなく、お互いの価値観の相違や異なる主張の根拠を相互に理解することにより、相互の信頼感を醸成していこうという試みである。この教科書に基づいて各国で共通の共同教育プログラムが組まれることになるが、講義の中身は必ずしも同じになるという訳ではない。平成24年度には、「共通善」教科書の第1章となるプロローグ（4カ国語）の編集を済ませた。

（優れている理由）

プログラムの基礎となる考え方や育成する人材像について、日中韓の共通の教科書として

文書化するという構想は、プログラムにおける教育の共同性を担保する取り組みとしてきわめて有意義である。既に3大学間で協議し、方針に合意できたことは大変意義がある。今後、吉林大学や成均館大学の教員も関与した教科書の章が編纂されていくことを期待したい。

モニタリング実施側からのコメント

- ・ 参加大学間での協議が十分に行われており、共同教育の目的や育成する人材について、共通に理解が図られていることは優れている。
- ・ 教科書の作成は優れた取り組みであるが、それが人文・社会科学系と自然・医歯薬系をつなぎ、なおかつ東アジアにおける相互理解と共通課題に取り組む基礎となることを目指すのであれば、「共通善」の内容がより明確になっている必要があるだろう。
- ・ プログラムの目的が、具体的なコンピテンスの形で表現されれば、プログラム運営における参加大学間の相互理解が深まるだけでなく、一つの課程としての凝集性がさらに高まるのではないかと。
- ・ 教材の共同開発に続いて、その教材の授業での使用について参加大学間での協議・調整が今後展開することが期待される。

大学が指摘した課題とそれに対するコメント

○大学が指摘した課題

平成25年5月末をめどに、共通善教育研究会の東アジア伝統的思想部会、歴史部会、現代の課題部会の3分野から教科書の下敷きとなる原稿を提出してもらう予定だが、これらの原稿をどのように検討して教科書に仕上げるかが最後の課題として残っている。つまり、執筆者の氏名を残し内容については個人の責任に帰するようにするか、研究会、またはキャンパス・アジアとして責任を持って編纂していくかの詰めがまだ行われていない。

○コメント

- ・ 個人の責任に帰すか団体とするかというのも、たしかに重要な点だが、各大学における伝統・歴史・現代の統一した記述も容易ではないと思われ、さらに日中韓での統一した記述はさらに困難が容易に想定される。評者は、かつて日中韓越の統一教科書の作成を、英語教材ないし東洋古典思想教材で試みた経験を持つが、東洋古典だけでも容易ではない。
- ・ 教材の使用法について、参加大学間での議論を重ねていくなかで、2つの選択肢のうち、より適当なものに議論が収斂するのではないかと考える。
- ・ 「研究会」は、当該プログラム実施にあたり立ち上げられたと理解しているが、共同教育の基礎となる資料として教科書を作成するのであれば、研究論文集ではなく、3大学間で協議の上、内容を確定することが好ましいと考える。
- ・ 学問的見解の相違、歴史認識の相違をどのように克服できるか、原稿を誰がどのような権限で加筆修正できるか、など特に日中韓3か国の間の試みであることから、注目されるに違いなく、事例としてぜひ残していただけると他の大学への参考になると思われる。

基準 2 教育の実施

基準 2-1 実施体制

目的を達成するための体制が、参加大学等の間で適切に構築され、機能しているか。

取組みの特徴

岡山大学では本プログラム実施に向けて専任教員などの人員を配置し、実施体制が基本的に整備されていることは優れている。3大学の合同会議が開催され、プログラムの運営等について協議する体制が整備されている。今後、各大学内の学部長や副学長など最高レベルの協議体制との関係をより明確化することや、共通学務委員会の設置の検討も期待したい。以上のことから、質を伴った取組みの構築が標準的であると判断される。

抽出した優れた取組み

岡山大学、吉林大学、成均館大学校の間では、毎年3月に合同会議を開催し、プログラムの運営方法や課題等を討議している。ただし、平成24年度においては、3国間の政治関係が悪化したため、予定していた大規模な合同会議が開けなかった。その代替策として、岡山大学のスタッフが成均館大学を訪問し（吉林大学もこれに合わせて成均館大学を訪問）、小規模な合同会議を行い意見を交換した。

平成25年度からは、ネットを利用した簡易テレビ会議システム（WebEx）に登録し、日常的にテレビ会議を行える体制を確立した。これは、将来的にWEB講義にも利用される予定である。

（優れている理由）

定期的に3大学による合同会議を開催し、プログラムの運営等について協議する体制が整備されている。また3大学が日常的な協議・調整の場を設けたことは優れている。今後、日中韓の三国事業として、他国の大学からのより積極的な関与が期待される。

岡山大学では国際センターの枠組みの中でキャンパス・アジア事務局を3名配置しサポート体制に万全を期すとともに、専任教員を3名配置し、日本文化、東アジアの歴史、言語、自然科学・医歯薬分野の講義・教育指導を行っている。また、順次協力講義（既存の講義にキャンパス・アジア講義の冠をかぶせる）も拡大している。吉林大学では、国際交流与合作処の日本担当が特別講義を実施している。成均館大学校では、キャンパス・アジア事務局の専任教員が、キャンパス・アジア科目を展開している。このように、それぞれの大学の教員・事務局の体系は少しずつ異なるものの、各々がキャンパス・アジアプログラムの構築・運営について共通の認識をもち、各大学のシステムに合った方法で共通教育プログラムを実施している。

（優れている理由）

本プログラム実施に向けて、岡山大学では十分な人員を配置している点は有意義である。既存の講義にキャンパス・アジア講義の冠をかぶせる協力講義が順次拡大されており、学内

の協力体制の強化が進められている。各参加大学において、共通認識の上に立った実施体制が整備されている。

モニタリング実施側からのコメント

- ・ 中国では学長や学院長（あるいは党書記）を巻き込むことが、事業の推進には欠かせないと考えられるが、吉林大学が国際処レベルの対応とすれば、その保証が十分と言えるか、不安が残る。より高いレベルの大学関係者をプログラムに巻き込む工夫が必要と思われる。

大学が指摘した課題とそれに対するコメント

○大学が指摘した課題

本プログラムでは、全学体制で学生の派遣、受け入れを行っており、さらに学部、大学院博士前期課程、大学院博士後期課程の学生を受け入れている。加えて、英語のみでの留学も受け入れている。しかしながら、キャンパス・アジアの留学生はいずれも身分は特別聴講学生であり部局の正規学生でないため授業が聴講できても単位履修ができないなどのケースが多く発生している。そこで、全学で提供する科目を増やす、キャンパス・アジア共通科目を増やす、学生・院生を部局に帰属させる、などの対策を検討する必要がある。

大学間のコミュニケーションや交流に関して、実際に相互に行き来をすることによって得られる効果は計り知れないが、今後はインターネット上の相互交流プログラムをより活用していくことを考えなくてはならない。

○コメント

- ・ 3大学の合同会議が、大学のどのレベルによって開かれているのかが見えにくい。教員レベルの研究会的なものであるならば、大学の指導部を巻き込み、システム設計を保証する方向性が模索されるべきと考える。
- ・ 共通善の実現に向けたプログラムという本事業独自の部分がどこにあるかを明確にし、それを単位修得に結び付けるようお願いしたい。
- ・ キャンパス・アジア留学生の岡山大学での履修にかかる課題については、キャンパス・アジア関連の科目を全学横断的に「キャンパス・アジア共通科目」として位置づけ、単位を取得できるように解決した旨、訪問調査において確認した。

基準 2－2 教育内容・方法

目的を達成するために適切な教育内容や教育方法が共同して検討され、実施されているか。

取組みの特徴

全学を挙げ、文理を越えて各分野で本プログラムにかかる教育が精力的に行われている。特にアクティブ・ラーニングを通じて日中韓の学生が共同で「共通善」について学び、相互理解を深めるという試みは優れている。今後、自然科学分野を含め、共通善をより具体的な教育内容・方法へと共同で検討・実施していくことを期待したい。以上のことから、質を伴った取組みの構築が進展していると判断される。

抽出した優れた取組み

キャンパス・アジア共通科目、リージョナル・カンファレンス、セミナー、ワークショップ、サマースクールといった、学生のグループワークや体験学習等のアクティブ・ラーニングを重視した多様なプログラムの中で、受入の中・韓学生および日本人の学生に対して、①伝統的な日本文化、地域社会の現代的課題を体験的に学ぶ、②共通善について学ぶ、③課題や価値観の中に共通性を見出す、ことなどをテーマとして教育を行っている。

(優れている理由)

日中韓の学生が共同で「共通性」や「共通善」について学ぶ、意見交換を行い相互理解を深めるという試みは日中韓の関係構築においてもきわめて示唆的である。アクティブ・ラーニングを通じた実践知に育成の目標を定め実行していることは優れている。

「シェアハウス」という新たな取組は、実生活を通じて日中韓の文化理解を促進し、コミュニケーションの方法を学ぶという教育プログラムである。シェアハウスのプログラムは、社会（地域コミュニティ）の一員としての在り方を日中韓の学生が学ぶ機会にもなっている。

(優れている理由)

平成 25 年 4 月よりシェアハウスを始め、一軒家 2 棟を借りそれぞれに日中韓の学生 1 名ずつ入居する方法をとっており、教室以外での相互理解を促進する配慮が行われている点で優れている。1 棟の学生数が少ないために交流が少なくなりがちな傾向もあり、今後、更なる工夫を期待したい。

モニタリング実施側からのコメント

- ・ 教育内容や教育方法を共同で検討し、実施する相手として、中国の大学の国際処を通して連絡を取ることは第一歩として理解できるが、相手大学の実際に教育を担う学院と連携するシステムを構築することが肝要と思われる。
- ・ それぞれの取り組みにおける個別分野同士の関連についてもいっそう深めてもらいたい。

大学が指摘した課題とそれに対するコメント**○大学が指摘した課題**

次のステップとして、日中韓の共通の教科書によるキャンパス・アジア科目教育を実現する必要がある。中国あるいは韓国どちらかの交流プログラムに参加した学生が、参加後更にもう一方の国との交流プログラムに参加するための仕組みを考える必要がある。つまり、「3国間」相互交流になるための、交流プログラムを深化させる必要がある。

○コメント

- ・ 交流プログラムを深化させるには、まず3大学で協定を結ぶことが必要である。教員の交流があっても、単位互換には協定が不可欠であり、急ぐ必要があろう。
- ・ 教科書を共同して作成する相手として、具体的な教育に実際に携わる組織が必要ではなかろうか。
- ・ 共通の教科書の作成は、教育の共同性を保証する取り組みとして有意義である。その教科書の使用法を含め、今後、参加大学間での協議が進展することが期待される。
- ・ 教育プログラムの組成にもよるが、たとえば修士の場合、3か国での修学を体験するのは2年間にはやや負担過重となるのではないかと危惧される。そのあたりの配慮を進めつつ、深化の検討をお願いしたい。
- ・ 3つの国の文化を学生が理解できるための仕組みとしての3か国で学ぶ機会を工夫することについては大いに期待したい。弾力的な仕組みが構築できればいいのではないか。
- ・ 学生の物理的な移動（留学）はもちろん重要であるが、3か国の学生が共に学習する機会が常に用意されることも共同プログラムの利点ではないかと考える。大学ではすでに取り組みを始められているところであるが、これにより、留学しない一般学生にも共同プログラムの恩恵を受けることも可能になるのではないか。

基準 2－3 学習・生活支援

学生が適切に学べる環境を形成し、学習・生活面の支援を行っているか。

取組みの特徴

学生の学習・生活への支援体制は基本的に整備されており、事前の語学研修や個別指導が定期的に行われている。特に学生主導のカンファレンスや「CA クラブ」などで、学生を主体的に関与させているのは優れている。リスク管理のための保険の整備をオーダーメイドで行っていることは優れている。以上のことから、質を伴った取組みの構築が進展していると判断される。

抽出した優れた取組み

明確なシラバスを作成して授業開講、履修指導を行っている。また、チューターの配置、オリエンテーションの実施、諸手続の支援等の各種の学習支援を実施している。派遣前の学生に対しては、事前の語学研修やチューターの活用による追加指導を実施している。本プログラムにおいては、自大学から派遣する学生に対して事前の語学補習（英語・中国語・韓国語）を平成 24 年 12 月から平成 25 年 2 月まで定期的実施した。また、チューターを活用し 1 対 1 での自主学習の強化を図っている。

（優れている理由）

受入れ学生に対する適切な学習支援、生活支援が行われているのは優れている。派遣学生に対し、事前の語学研修や個別指導が定期的に行われており、事前学習は派遣の効果を高めるうえできわめて効果的であることから、有意義な取り組みである。また、帰国してからも語学を使う場として、大学の語学カフェ（L カフェ）が整備されている。

日中韓共同学習では、「学生フォーラム」として、日中韓の長期留学プログラム参加学生による「日中韓の相互理解」をテーマとする学生カンファレンス（個別発表、ディスカッション、グループ発表）を、学習の総括という位置づけで行っている。本テーマに関する個々の問題意識の向上が明確に読み取れる成果を、『カンファレンス文集』にまとめている。

（優れている理由）

日中韓の共通性の理解が狙いの一つであることに鑑みれば、学生フォーラムは学びの形態として有意義なものであるといえる。また学習の成果も確認しながらの指導である点も優れている。学生の自主的なネットワーキングをプログラムとして促したことは、将来の人脈形成に向けてきわめて有意義である。

日中韓学生のワークショップを開催したが、このことがワークショップの参加者による自発的な「CA クラブ」の形成を促した。「CA クラブ」が、日中韓の交流活動、自主的な相互学習の場となりつつある。

(優れている理由)

CA クラブは、キャンパス・アジアプログラムについて学生主体で考える組織として、平成 25 年 4 月に学生の自発により発足した。共同教育の成果として、このような学生の自発的な交流・学習の場が形成されたことは、重要である。

キャンパス・アジアプログラム学生に対し、奨学金等の財政的支援や宿舎等の情報を事前に提供するとともに、ほとんどの参加学生にこれらの生活支援を提供している。当該目的の策定にあたっては、吉林大学及び成均館大学校との間で相互に授業料免除、奨学金支給が行われている。受け入れ学生に対しては、到着時のオリエンテーション、専任教員により定期的な個人指導（カウンセリング）を実施している。

(優れている理由)

参加学生に対する生活支援が明確になっており、事前に情報提供が行われているのは優れている。

本校から派遣する学生に対しては、事前に派遣先での生活支援の状況を適切に伝達するとともに、Skype または Facetime によるカウンセリング、災害時等のリスク管理の生活支援をおこなっている。また、岡山大学では派遣する学生が加入する保険を、保険会社と協力してオーダーメイドで用意している。リスク管理を含めた保険にしており、事故が起こった時の最初の連絡からサポートまで、保険会社で行うように整備してある。

(優れている理由)

派遣先での生活支援の状況を把握の上、学生に情報提供していることに加え、カウンセリングも提供していることは優れた取組みである。日中韓の政治的関係を考慮すれば、リスク管理について強調していることは大切なことである。特に、オーダーメイドの保険契約を結んでいることは優れている。

モニタリング実施側からのコメント

特になし

大学が指摘した課題とそれに対するコメント

○大学が指摘した課題

真の「成果」とは何かについて、また、その測り方についても、初年度が終わった段階で、改めて問わなくてはならない。その意味では、留学体験学生が「多くを学び」「満足した」ということ以上に、どのような進路を得て、その進路の中でキャンパス・アジア留学での学びがどう将来の人材育成につながっていくのかを長期的展望にたってとらえ直し、学習支援のあり方

を改善する必要がある。

いわゆる「アームチェア留学」(至れり尽くせりの留学)では、自ら困難を切り開くバイタリティを持った学生は育たないが(学生が何かあるとすぐに事務局に頼ってくる)、一方で手をかけただけ学生が育つという側面もあるので、これまでの成果と問題点をそうした視点から整理する必要がある。

○コメント

- ・ この点で、「共通善」やその他の本プログラムの教育目標を具体的な学習成果に移し替え、そのうえで本プログラムとしての達成度を検討することが適当ではないかと考える。
- ・ 日中韓大学間交流が学生の人生にどのようなインパクトを及ぼすかは興味深い視点であるが、そもそも東アジアの共通性を理解し、相互理解を深めた学生の育成が狙いであるので、それが社会に出てからどのようなメリットに結びつくか、といった人材育成論に短絡しなくてもいいのではないだろうか。相互理解への意欲を育てれば成功かもしれない。
- ・ 学生に対して最低限必要な学習面・生活面でのケアを提供することは、プログラムとして当然のことであるが、そのうえで学生の自主性を尊重すべきではないかと考える。
- ・ 学生が直面する問題は、きわめて具体的なものであり、具体的な問題はそのつど、速やかに、受入ないし派遣した大学によって、責任をもって具体的に解決されなければならない。そのために教職員の体制が整備されていることは重要であり、どのような体制が取られているのかが明示されている必要がある。

基準 2－4 単位互換・成績評価

単位の取得や海外大学等との互換方法、成績評価の方法および海外大学等との互換方法が定められ、機能しているか。

取組みの特徴

キャンパス・アジア関係の科目を一般教養教育科目とは別にキャンパス・アジア共通科目として全学的に認定してもらい開講するという努力を行い、受入学生も単位を取得し認定されることが可能になっている。今後、日本側の大学内での学部・研究科での単位認定取り扱いの協議、ならびに、成績評価や単位認定のための基準設定に関する参加大学間の協議・調整が望まれる。以上のことから、質を伴った取組みの構築が標準的であると判断される。

抽出した優れた取組み

キャンパス・アジア共通科目を開講し、受入学生に対して単位認定を行っている。これは、キャンパス・アジアが独自に開講する科目、および既存科目でキャンパス・アジアの冠をかぶせた科目（部局が開講する科目であってもキャンパス・アジアとして単位認定が可能）である。

（優れている理由）

学部と大学院の垣根を超えて大学全体として認めてもらえるよう、教養科目としてではなく、キャンパス・アジア共通科目として出せるよう、キャンパス・アジアの冠をかぶせて学生が単位を取得できるように工夫したのは優れた取組みである。

キャンパス・アジアは、学長のサインと捺印がある修了証書を独自に発行している。また、吉林大学、成均館大学校も同様の修了証書を発行している。

（優れている理由）

留学期間が半年～1年の学生に修了証書を発行し、サマースクールの学生にはサマースクールの修了証書を出している。修了証書はしばしば行われる有効な取り組みであり、実際に学生へのインタビューにおいても、就職活動等の場面で修了証がキャンパス・アジアプログラムの経験やそこでの学習面での付加価値を示すための証明として役立っていることが明らかになった。

モニタリング実施側からのコメント

- ・ 部局・分野等で成績評価、単位認定のための基準が異なる事態を改善し、一個の教育プログラムとしての統一的な基準の設定が望まれる。
- ・ 全学体制での大学間交流であるので、専門分野と交換留学をどのように位置づけるか、丁寧に議論してもらいたい。

大学が指摘した課題とそれに対するコメント

○大学が指摘した課題

全学で単位互換を行っているという特徴がある一方、部局ごとに履修要件、単位認定基準が様々であり、それぞれの部局の特殊性を考慮すると、単位認定制度を統一するのは事実上不可能である。しかしながら、岡山大学に留学してきたキャンパス・アジアの学生は、単位履修が複雑で制限されることに大きな不満を持っている。この点を、2つの方向で改善していきたい：

1. キャンパス・アジアの学生は、基本的に特別聴講学生なので、特別聴講学生向けの授業を全学、またはキャンパス・アジア独自でできるだけ多く提供する。
2. 留学生受け入れを前提とした特定のプログラム（コース）を準備し、そこで集中的に留学生を受け入れる。

また、共同大学院をどのように構築していくか具体的に検討を始めたところであるが、授業の相互乗り入れ、一部のプログラムを協定校で履修、相手大学にユニットごと移すハイブリッド型、編入型など、様々な可能性を模索している。基本的には、文部科学省が指針として示している国内大学間のみにおける共同大学院設置ガイドラインを参考に国際共同大学院の設置を構想している。

○コメント

- ・ 文系と理系では統一の認定基準を作成するのは、たしかに難しいであろう。キャンパス・アジアの学生向け授業の開講は、たしかにひとつの解決策だが、それが特定の教員の過重な労働を招くようでは、システムとして有効とはいえない。キャンパス・アジア専用の授業が、各学部にも役立つような新しい共通科目とするとか、そのための人員の手当てが保証されるなど、本プログラムの資金が有効に活用されるとよいのではなかろうか。
- ・ 構想が比較的大括りであるため、詳細の人材育成目標を明確化しそれを単位に結び付けることは非常に困難を伴うであろうことは予想できる。しかし、少なくとも共通化できる講義や共同での活動などを単位化出来なければ、参加者も増加しづらいであろうため、努力を望みたい。

基準3 学習成果

教育プログラムの目的に即して学習成果を測定する方法を設定し、成果が適切にあがっているか。

取組みの特徴

今後、「共通善」をよりいっそう明確に定義し、それに即した統一的な学習を実現するカリキュラムを構築することを推進した上で、参加した学生の学習成果をいかに測るのかを検討していただきたい。具体的には、たとえば、語学力ではプログラム参加要件の語学資格試験等による検証、各科目では3大学による評価基準の標準化の取り組み、目指す人材像への到達度については学生の満足度・成長実感と共に、「アジアにおける共通善」に関するレポートや論文、プレゼンテーションなどによる3大学共通の評価の仕組みの導入検討を願いたい。以上のことから、質を伴った取組みの構築に課題が残っていると判断される。

モニタリング実施側からのコメント

- ・ とりわけ本プログラムの目標である「共通善」にかかる学習、大学院生の論文執筆などについて、学習成果を具体的に測定する方式の検討を期待したい。

大学が指摘した課題とそれに対するコメント**○大学が指摘した課題**

質保証を確保する上で、学習成果の測定方法と結果の分析は重要な課題であり、早急に検討する必要がある。

○コメント

- ・ 「共通善」との関連で、プログラムに参加した学生の学習成果をどう測定するのか、それには学習目的とそれを実現する方法の明確化が前提となろう。測定方法はすでに既存のものがそれなりに数があるのだから、測定対象の明確化がなされれば、おのずと測定方法も決まるのではないだろうか。
- ・ 本プログラムの教育目標たる「共通善」ならびに、プログラム中の各科目について、学習成果を軸にした成績評価の方式を検討されるよう期待したい。
- ・ 何を評価したいか、評価すべきかについて一層の議論をすべきではないか。
- ・ 国際的な共同プログラムとして設定した目的に照らして評価する仕組みを構築していただきたい。

基準 4 内部質保証システム

内部質保証や改善のための体系的な取組みが、参加大学との連携のもとで行われ、機能しているか。

取組みの特徴

学生からの意見聴取や外部レビューを行い、そこで指摘された問題について検討し、改善の取組みを行っている。今後、「アジアのリーダー的人材育成」を目的とする本プログラムにおける「質」の定義を明確にし、それに叶うように各大学の「強み」を組み合わせたプログラムとして構築し、その定期的検証を進めていただきたい。また、プロジェクトで明らかとなった各種の課題を学内で検討する組織を、各学部をまたがって用意することが望まれる。以上のことから、質を伴った取組みの構築に課題が残っていると判断される。

モニタリング実施側からのコメント

- ・ 内部評価や改善のための体制が整備されており、実際に改善に取り組んでいることを評価したい。その意味では、進展している部分も多いと考える。
- ・ 学生からの意見聴取をどう定型的・規則的に行い、かつその結果を教員にどう還元するか of 仕組みを検討する必要があるのではないか。

大学が指摘した課題とそれに対するコメント

○大学が指摘した課題

3校間での質保証制度の議論を進め、客観的評価に耐えうる質保証制度を構築する必要がある。しかしながら、一方で、講義の形式を相互にそろえるのではなく、様々な形態と内容があるので留学の価値が生まれるのだ、多様性と異質性をお互いに認識することが相互理解につながるのだという議論も根強く、当面は単位互換に耐えられる講義時間数の把握、講義における単位認定・評価システムの相互確認から取り組むことが現実的であると考えます。

○コメント

- ・ 日本側の学内の組織として、実務担当教員の組織と、これを大学レベルで決定する最高レベルの組織が必要であろう。とくに学部間の調整が必要な課題も多いところから、学内の体制の整備は急務と思われる。3大学間で議論を進めるのは重要だが、すでに記したように中国の大学の国際処は、対外連絡部門であり、教学の具体的な内容は担当してはいない。教学内容に関わる問題は、国際処を通して、どこか具体的な担当部門を相手大学の中で確定する必要があるのではなかろうか。
- ・ 教育内容における多様性と、成績評価等の手続き面での統一性は容易に両立しうるし、後者が担保されて、初めて参加大学との間で一個の教育プログラムの運営が可能になるのではないか。
- ・ 参加大学との今後の協議・調整にあたっては、単に学習量の把握だけでなく、学習内容の水準面でのすり合わせを期待したい。

「キャンパス・アジア」モニタリング 自己分析書

平成25年5月

「東アジアの共通善を実現する深い教養に裏打ちされた
中核的人材育成プログラム」

岡山大学

<目 次>

I 構想にかかる基本情報および目的、進捗状況	
1. 基本情報	1
2. 構想の目的、概要、進捗状況	1
II 基準ごとの自己分析	
基準1 教育プログラムの目的	4
基準2 教育の実施	
基準2-1 実施体制	5
基準2-2 教育内容・方法	7
基準2-3 学習・生活支援	9
基準2-4 単位互換・成績評価	11
基準3 学習成果	13
基準4 内部質保証システム	14

I 構想にかかる基本情報および目的、進捗状況

1. 基本情報

1. 大学名	岡山大学	
2. 構想名称	【和文】	東アジアの共通善を実現する深い教養に裏打ちされた中核的人材育成プログラム
	【英文】	Program for Core Human Resources Development: For the Achievement of Common Good and Re-evaluation of Classical Culture in East Asia
3. 取組学部・研究科等名	全学[学部:文学部、教育学部、法学部、経済学部、理学部、医学部、歯学部、薬学部、工学部、環境理工学部、農学部、マッチングプログラムコース、大学院:教育学研究科、社会文化科学研究科、自然科学研究科、保健学研究科、環境学研究科、医歯薬学総合研究科]	
4. 海外の相手大学	【中国】	吉林大学
	【韓国】	成均館大学校

2. 構想の目的、概要、進捗状況

○構想の目的及び概要

【背景】

岡山大学、吉林大学、成均館大学校は、これまで部分的にはあるがコンソーシアム協定を締結し、ダブルディグリー制度、共通講義、短期留学(単位互換)制度など、先進的でユニークな交流の実績と経験を積んできた。吉林大学は、歴史的に日本文化との接触が深く、日本語教育、日本研究の層が厚い。また、地理的、歴史的に韓国とのネットワークも緊密である。また、成均館大学校は高麗の成均館を母体とした韓国最古の大学で、韓国文化と思想を代表する大学であると同時に、現代韓国を研究する上での拠点校でもある。岡山大学は、アジア共通の課題である省エネ・再生エネルギーの活用、循環型社会の形成、有機物質の研究、臓器移植、癌遺伝子の研究などで成果を上げているとともに、東アジア国際協力・教育研究センターを中心に、東アジアの政治、経済、文化、価値観の研究に取り組んでいる。

【目的】

この3校が、共同教育システムの実績をもとに、協力し課題を克服できる次世代の中核人材育成を実施する。具体的には、国際的な視野を持ちながら、同時に地域の文化に精通し、そして深い伝統的な教養をもったアジアンクラフト(地域行政、民間組織の指導者)、地域医療をリードする医療人、技術開発、生産、販売のすべて面で3国の協業をリードできる企業中堅幹部候補、また環境、エネルギー、循環型社会の構築など、現代社会が抱える問題でリーダーシップのとれる人材の輩出を目指す。

【概要】

本プログラムでは、つぎのプログラムを実現する：(1)3国が共通で抱える課題等を学習素材としたサマーセミナーを開催する。(2)3大学持ち回りの年次国際合同会議の一環として3校の学生が共通の場で講義を受け討論（共同ワークショップ）を行うと同時に、個別チュートリアルを実施することにより、異文化理解、コミュニケーション能力を向上させる。(3)共通学務委員会（スタッフ・ミーティング）を設置し、教育ガイドライン、単位相互認定制度、ピアレビューを導入して、教育プログラムの可視化と高い互換性を確立する。(4)外部専門家による「インターナショナル・レビュー」を立ち上げて実施状況を検証する。(5)定期的に開催するリージョナル・カンファレンス、地域および企業と連携して行うフィールドセミナー、インターンシップを通じ、課題解決型教育を実践する。

岡山大学・吉林大学間では、(1)博士課程前期・後期ダブルディグリー制度、(2)短期留学（単位互換）制度、(3)共通科目の実施、を実現している。さらに、吉林大学において中国語の、また岡山大学言語教育センターにおいて日本語の語学研修を実施している。岡山大学・成均館大学校間では、短期留学と単位認定制度がある。また、吉林大学・成均館大学校間では、ジョイントディグリー、短期留学が実施されている。本プログラムは、こうした既存の制度と経験の蓄積の上に実施するものである。また、岡山大学が既に実施している「アゴラ」（地域社会、産業界とのコミュニケーションと共同事業の場）をモデルに、リージョナル・カンファレンス、フィールドセミナーを実施し、地域に必要な人材を育成する。同時に、各地域が直面する課題を実践的に学ぶことによって、課題解決能力を育成し、将来において地域の中核となり、地域相互の交流促進できる人材を育成する。さらに、卒業・修了後の就職・研究フォローアップ・システムを立ち上げて、育成した人材が地域で活躍できるようサポートする。

○平成24年度末までの取組状況

【基準1：教育プログラムの目的】

a)教育プログラムの目的(育成する人材像を含む)の設定

- ・プログラムの目的が、育成する人材像に求められる知識・態度等の学習成果が明確に定められている。
- ・海外大学との国際的な共同による教育が必要であることが明確な目的となっている。

b)教育プログラムの目的の大学間での共有

- ・教育プログラムの目的が自大学の目的や国際化戦略中に位置づけられ、関係者に共有されている。

【基準2-1：実施体制】

a)組織体制

- ・参加大学間で会合等を行い、プログラムの運営方法や課題等を検討する体制が構築され、機能している。
- ・研究指導を行う場合には、参加大学間で指導教員体制が適切に構築され、連携が機能している。

b)教職員

- ・共同教育プログラムの目的や教育内容・水準に適合した教員が配置されている。特に外国教員を含め、海外大学での教育経験を有する国際的な対応能力が高い教職員が配置されている。

【基準2-2：教育内容・方法】

a)教育内容・教育方法

- ・各国の言語や文化・社会の教育が効果的に行われている。

b)学生受け入れ

- ・学生選抜の方法を教育プログラムの目的や教育内容を踏まえて、参加大学間で共同し運用している。
- ・参加希望者が適切な人数存在し、参加学生数の双方向性が実際に確保されている。
- ・実際に受け入れた学生の構成やその学力水準が、教育プログラムの目的や教育内容に適合している。

【基準 2-3 : 学習・生活支援】

a) 学習支援

- ・シラバスが明確に作成され活用されるとともに、学生に対して派遣前の履修指導を適切に実施している。
- ・自大学から派遣する学生に対して事前の語学研修やチューターの活用による追加指導を実施している。
- ・海外から受け入れる外国人学生に対して履修指導、教育支援者・チャーターの配置、諸手続の支援等の各種の学習支援を実施している。

b) 生活支援

- ・参加学生に奨学金等の財政的支援や宿舍等の情報を事前に提供するとともに、ほとんどの参加学生にこれらの支援を提供できている。
- ・自大学から派遣する学生に対して、事前に派遣先での生活支援の状況を適切に伝達するとともに派遣先での遠隔でのカウンセリング等、災害時等のリスク管理の生活支援をおこなっている。
- ・参加している学生間での交流支援、キャンパス・アジアクラブ組織の形成を支援している。

【基準 2-4 : 単位互換・成績評価】

a) 単位認定・互換

- ・海外大学で取得した単位について、その教育内容を踏まえて単位互換を行うシステムが構築されている。
- ・単位制度の違いや相手大学での科目履修順序等を踏まえた上で、適切な単位互換を機能させている。

b) 成績評価・学位授与

- ・参加大学において成績評価方法について調整を行うとともに、各参加大学にて厳格な成績評価が行われ、単位の実施化が図られている。

【基準 3 : 学習成果】

a) 学習成果の測定と結果

- ・参加学生の単位取得の状況を把握することにより、学生の学習状況を分析している。
- ・国際的な共同を行うことによって実現される学習成果が得られている。

b) プログラム履修後の状況

- ・長期・短期留学において、留学終了後の調査を行い、その結果を教育内容や指導方法の改善へ活用。

【基準 4 : 内部質保証システム】

a) 内部質保証システムの体制

- ・学生からの定期的な意見聴取を実施している。
- ・自大学のもとで、定期的に外部者によるレビューが行われている。
- ・当該プログラムの教育内容や学生の学習成果・教育成果の情報を適切な形で公表・発信することにより、社会で広く理解されるようになっている。

b) 改善実績・将来計画

- ・レビュー結果が学内の国際関係部署・学生支援部署等において検討され、必要な措置が講じられている。
- ・国際的な共同プログラムを行うことによって、自大学の国際化や他の教育への影響を及ぼすことが意図されており、実際に優れた影響が得られている。

Ⅱ 基準ごとの自己分析

基準 1 教育プログラムの目的
海外大学との共同教育プログラムの目的が明確に定められ、参加大学の間で共有されているか。

1. 基準 1 に係る現況の説明

本構想においては、人文・社会科学系においても自然・医歯薬系においても、東アジアにおける相互理解と共通課題に取り組む基礎を作るために、共同教育が重要であるという認識に立ってプログラムを遂行してきた。その際、相互理解や共通課題への協力をどのように構築するかが大きなテーマで、具体的には吉林大学及び成均館大学校との共同教育のベースである「共通善」をそれぞれがどのように認識するかということから議論を開始した。具体的には、3校の代表を中心とした共通善教育研究会を通じて意見交換を重ねてきた。研究会は、平成 24 年 5 月・8 月・12 月に実施され、また平成 24 年 11 月 3 日、4 日には共通善研究フォーラム、平成 25 年 3 月 5 日、6 日には共通善研究国際シンポジウムが開催され、研究成果が報告された(『共通善教育研究国際シンポジウム報告集』、『共通善研究国際フォーラム 研究報告集Ⅰ、Ⅱ』、他)。

こうした議論の成果は、日中韓の共通教科書にまとめられる。これは、共通の歴史認識や価値観を纏めるというのではなく、お互いの価値観の相違や異なる主張の根拠を相互に理解することにより、相互の信頼感を醸成していこうという試みである。この教科書に基づいて各国で共通の共同教育プログラムが組まれることになるが、講義の中身は必ずしも同じになるという訳ではない。平成 24 年度には、「共通善」教科書の第 1 章となるプロローグ(4カ国語)の編纂を済ませた。

この第 1 号の教科書をもとに、入講式、サマーセミナーやリージョナルカンファレンスの実施に際し、日中韓の学生に対し東アジアにおける「共通善」の講義を実施しており、学生にも「共通善」についての認識が深まりつつある。

以上のことから、基準 1 における当プログラムの質の段階は「進展している」と自己判定している。

2. 今後の課題点

平成 25 年 5 月末をめどに、共通善教育研究会の東アジア伝統的思想部会、歴史部会、現代の課題部会の 3 分野から教科書の下敷きとなる原稿を提出してもらう予定だが、これらの原稿をどのように検討して教科書に仕上げるかが最後の課題として残っている。つまり、執筆者の氏名を残し内容については個人の責任に帰すようにするか、研究会、またはキャンパス・アジアとして責任を持って編纂していくかの詰めがまだ行われていない。

基準 2 教育の実施
基準 2-1 実施体制
目的を達成するための体制が、参加大学等の間で適切に構築され、機能しているか。

1. 基準 2-1 に係る現況の説明

a)組織体制

岡山大学、吉林大学、成均館大学校の間では、毎年3月に合同会議を開催し、プログラムの運営方法や課題等を討議している。ただし、平成24年度においては、3国間の政治関係が悪化したため、予定していた大規模な合同会議が開けなかった。その代替策として、岡山大学のスタッフが成均館大学を訪問し(吉林大学もこれに合わせて成均館大学を訪問)、小規模な合同会議を行い意見を交換した。

平成25年度からは、ネットを利用した簡易テレビ会議システム(WebEx)に登録し、日常的にテレビ会議を行える体制を確立した。これは、将来的に WEB 講義にも利用される予定である。

研究指導については、現在キャンパス・アジア専任教員が Skype、Facetime により派遣した学生を定期的に指導する体制をとっているが(学生はiPadを利用)、派遣先指導教員と岡山大学指導教員同士の共同研究指導体制はまだ確立されていない。当面は、教員を相互に派遣して協定校で授業を不定期に開講する実績を重ねつつ、将来的には共同指導体制を確立し、共同大学院(後述)の設置を目指している。

b)教職員

共同教育プログラムの実施に向けて、岡山大学では国際センターの枠組みの中でキャンパス・アジア事務局を3名配置しサポート体制に万全を期すとともに、専任教員を3名配置し、日本文化、東アジアの歴史、言語、自然科学・医歯薬分野の講義・教育指導を行っている。また、順次協力講義(既存の講義にキャンパス・アジア講義の冠をかぶせる)も拡大している。吉林大学では、国際交流与合作処の日本担当が特別講義を実施している。成均館大学校では、キャンパス・アジア事務局の専任教員が、キャンパス・アジア共通科目を展開している。このように、それぞれの大学の教員・事務局の体系は少しずつ異なるものの、各々がキャンパス・アジアプログラムの構築・運営について共通の認識をもち、各大学のシステムに合った方法で共通教育プログラムを実施している。

さらに、サマーコースでは、内外の著名な研究者を招聘し、日中韓の学生に英語で講義を提供してもらうほか、日中韓の学生が混合グループを作り、招聘研究者とともにフィールドワークに出ることを計画している。

ナノバイオコースでは、岡山大学大学院医歯薬学総合研究科に各国から留学生を受け入れ、英語による教育と実習・演習的要素を含めたウェットラボでの研究見学および 体験を行っている。

以上のことから、基準 2-1 における当プログラムの質の段階は「進展している」と自己判定している。

2. 今後の課題点

本プログラムでは、全学体制で学生の派遣、受け入れを行っており、さらに学部、大学院博士前期課程、大学院博士後期課程の学生を受け入れている。加えて、英語のみでの留学も受け入れている。しかしながら、キャンパス・アジアの留学生はいずれも身分は特別聴講学生であり部局の正規学生でないため授業が聴講

〔大学名：岡山大学〕

できても単位履修ができないなどのケースが多く発生している。そこで、全学で提供する科目を増やす、キャンパス・アジア共通科目を増やす、学生・院生を部局に帰属させる、などの対策を検討する必要がある。

大学間のコミュニケーションや交流に関して、実際に相互に行き来をすることによって得られる効果は計り知れないが、今後はインターネット上の相互交流プログラムをより活用していくことを考えなくてはならない。

基準 2－2 教育内容・方法

目的を達成するために適切な教育内容や教育方法が共同して検討され、実施されているか。

1. 基準 2－2に係る現況の説明

本構想においては、日中韓の学生が、相互の文化や社会の中で共通した伝統的価値観や現代の課題を「共通善」として認識することが、その教育の起点となる。

- これを念頭に開講しているキャンパス・アジア共通科目、リージョナル・カンファレンス、セミナー、ワークショップ、サマースクールという多様なプログラムの中で、受入の中・韓学生および日本人学生に対して、①伝統的な日本文化、地域社会の現代的課題を体験的に学ぶ、②共通善について学ぶ、③課題や価値観の中に共通性を見出す、ことなどをテーマとして教育を行っている。
- 教育方法として重視していることは、①座学に偏らない、体験的学習を取り入れること、②日中韓の学生が、グループワーク(グループでのディスカッションやプレゼンテーション)を行うことを通じて、共同作業を行うことである。
- プログラムの一部には、他の留学生と共に行う授業がある。欧米の学生とも交わることで、(東)アジアの共通性を意識する機会にもなる。
- また、「シェアハウス」という新たな取組は、実生活を通じて日中韓の文化理解を促進し、コミュニケーションの方法を学ぶという教育プログラムである。シェアハウスのプログラムは、社会(地域コミュニティ)の一員としての在り方を日中韓の学生が学ぶ機会にもなっている。
- パートナー(ボランティア・チューター)制度を設け、日中韓の学生が学生生活の中で自由に交流学習をする機会を設けている。
- 上記のプログラムには、キャンパス・アジア留学プログラムの帰国学生や将来ポテンシャルのある学生とともに、留学中の中韓学生を混合し、交流が網の目のように行われるように工夫している。
- キャンパス・アジアの学生交換プログラムに、「中韓留学体験ワークショップ(1週間の中国韓国現地でのワークショップ)」「夏期短期留学(3～4週間)」「長期留学(6ヶ月あるいは1年)」というように、学生のレベルに合わせた取組への多様な機会を創出している。

自然科学系サマーセミナー

サマーセミナーの目的は、自然科学系においてキャンパス・アジアプログラムの骨子である「共通善」に対する理解を深め、さらに、自然科学系の研究の取り組みに関する理解を深めることである。実施体制としては、平成24年9月13日、14日の両日で開催された国際シンポジウム「Bioactive Okayama 2012(BAO2012)」に成均館大学から学生10名を招聘し、英語による国際セミナーを岡山大学で開催した。本取り組みにより、岡山大学の農学部、薬学部を中心とした教員と学生と成均館大学の教員と学生の研究交流を深めた。吉林大学からも来日予定であったが、時間的制約のため、日韓二国の研究者が発表した。このプログラムを通じて、「食と健康」に関する情報共有ができ、相互理解を深めることができた。なお、スライド作成や、抄録作成を含め、発表などは全て英語でおこなった。

自然科学系のワークショップ

ワークショップの目的は、自然科学系における「材料科学」に対する理解を深めることである。実施体制とし

[大学名：岡山大学]

ては、平成25年2月14日、15日の両日、成均館大学校の主催で開催された国際シンポジウム「BK21 Symposium」と融合するかたちで岡山大学からは10名の大学院生(博士前期課程5名、博士後期課程5名)が参画し、英語による国際ワークショップを韓国で開催した。本取り組みにより、岡山大学の大学院自然科学研究科と大学院環境生命科学研究科を中心とした教員3名と学生が成均館大学の教員、学生と研究交流を深め、学生が国際舞台での貴重な経験を積むと同時に、今後の協力体制にむけて教員同士の相互信頼のベースを固めることができた。同時に、このプログラムを通じて、「材料科学」に関する情報共有ができた。

ナノバイオコース国際シンポジウム

本プログラムの目的は医歯薬系における日中韓で共通の課題である先端医療についてテーマを設定し、研究者が一堂に会して最新の情報を互いに共有して理解を深めることを目的としている。実施体制としては、平成24年12月に第一回ウインターシンポジウムと題して、成均館大学から講師を招聘し英語による国際セミナーを岡山大学で開催した。吉林大学からも来日予定であったが、日中間の情勢悪化を理由に直前になりキャンセルとなったため、日韓二国の研究者が発表した。当日は吉林大学からの聴衆も交えて、活発な討議が行われた。このプログラムを通じて、先端医療に関する情報共有ができた。

ナノバイオコースのシンポジウムは、平成24年度は研究者が中心になるものであった。しかしながら、まず研究者・教育者同士が協定校の研究・教育に理解と信頼を深めなくては単位互換や共同教育のプログラムまで話がつながっていかない。この国際シンポジウムは、結果的に平成25年度からナノバイオコースを開講する大きな弾みとなった。このように、この取り組みを通じて、共通教育を進めるには、教育者同士の交流がきわめて重要であるという教訓を得た。

以上のことから、基準2-2における当プログラムの質の段階は「進展している」と自己判定している。

2. 今後の課題点

次のステップとして、日中韓の共通の教科書によるキャンパス・アジア共通科目教育の実現する必要がある。

中国あるいは韓国どちらかの交流プログラムに参加した学生が、参加後更にもう一方の国との交流プログラムに参加するための仕組みを考える必要がある。つまり、「3 国間」相互交流になるための、交流プログラムを深化させる必要がある。

基準 2－3 学習・生活支援

学生が適切に学べる環境を形成し、学習・生活面の支援を行っているか。

1. 基準 2－3に係る現況の説明**a) 学習支援**

受入学生に対しては、キャンパス・アジアが独自に、または既存の開講科目に冠をかぶせて開講している科目に関し、「岡山大学キャンパス・アジア共通科目要覧」(別添)の末尾にある「東アジアの共通善を実現する深い教養に裏打ちされた中核的人材育成プログラムの共通科目について」の規定に基づき、明確なシラバスを作成して授業開講、履修指導を行っている。また、チャーターの配置、オリエンテーションの実施、諸手続の支援等の各種の学習支援を実施している。

派遣前の学生に対しては、事前の語学研修やチューターを活用による追加指導を実施している。本プログラムにおいては、自大学から派遣する学生に対して事前の語学補習(英語・中国語・韓国語)を平成 24 年 12 月から平成 25 年 2 月まで定期的実施した。また、チューターを活用し 1 対1での自主学習の強化を図っている。

派遣後のフォローアップでは、キャリア支援、語学のブラッシュアップ講座の開講(上級、ただし単位認定はない)を実施している。

日中韓共同学習では、「学生フォーラム」として、日中韓の長期留学プログラム参加学生による「日中韓の相互理解」をテーマとする学生カンファレンス(個別発表、ディスカッション、グループ発表)を、学習の総括という位置づけで行っている。本テーマに関する個々の問題意識の向上が明確に読み取れる成果を、『カンファレンス文集』にまとめている。

学期中に行ったセミナー、カンファレンスについて、学生の学習成果はレポートを通じて確認し、「文集」として共有化している。

日中韓学生のワークショップを開催したが、このことがワークショップの参加者による自発的な「CAクラブ」の形成を促した。「CAクラブ」が、日中韓の交流活動、自主的な相互学習の場となりつつある。

自然科学系のワークショップにおいては、スライド作成や、抄録作成指導を含め、発表などは全て英語でおこなった。

b) 生活支援

キャンパス・アジアプログラム学生に対し、奨学金等の財政的支援や宿舍等の情報を事前に提供するとともに、ほとんどの参加学生にこれらの生活支援を提供している。

当該目的の策定にあたっては、吉林大学及び成均館大学校との間で相互に授業料免除、奨学金支給、が行われている。なお、成均館大学校においては支給奨学金の中から宿舍費を支払っている。

受け入れ学生に対しては、到着時のオリエンテーション、専任教員により定期的な個人指導(カウンセリング)を実施している。

本校から派遣する学生に対しては、事前に派遣先での生活支援の状況を適切に伝達するとともに、Skype または Facetime によるカウンセリング、災害時等のリスク管理の生活支援をおこなっている。

参加している学生間での交流支援、CA クラブ組織の形成を支援している。

キャンパス・アジア事務局が運営する Facebook により、キャンパス・アジア学生に随時、最新の情報を提供

[大学名：岡山大学]

し、また相互に情報を交換すると同時に、他の学生に対して情報発信を行っている。

以上のことから、基準 2-3 における当プログラムの質の段階は「進展している」と自己判定している。

2. 今後の課題点

真の「成果」とは何かについて、また、その計り方についても、初年度が終わった段階で、改めて問わなくてはならない。その意味では、留学体験学生が「多くを学び」「満足した」ということ以上に、どのような進路を得て、その進路の中でキャンパス・アジア留学での学びがどう将来の人材育成につながっていくのかを長期的展望にたってとらえ直し、学習支援のあり方を改善する必要がある。

いわゆる「アームチェア留学」(至れり尽くせりの留学)では、自ら困難を切り開くバイタリティを持った学生は育たないが(学生が何かあるとすぐに事務局に頼ってくる)、一方で手をかけただけ学生が育つという側面もあるので、これまでの成果と問題点をそうした視点から整理する必要がある。

基準 2－4 単位互換・成績評価

単位の取得や海外大学等との互換方法、成績評価の方法および海外大学等との互換方法が定められ、機能しているか。

1. 基準 2－4 に係る現況の説明**a) 単位認定・互換**

協定校で取得した単位について、その教育内容を踏まえて単位互換を行うシステムは基本的には構築されている。それは、取得した単位について単位取得証明書、シラバス、講義時間を示す書類等を提出すれば、学生の所属部局でひとつひとつ審査し、認定可/不可を判定するというものである。しかしながら、基準は部局ごとに様々で、比較的緩やかに専門科目として単に認定してくれる学部もあれば、基本的にすべて一般科目としてしか認めない学部もある。これを統一するのは、事実上不可能である。

現在、協定校とキャンパス・アジア学生の履修に関するラーニングアグリメントが締結できないか模索中である。

これとは別に、キャンパス・アジア共通科目を開講し、受入学生に対して単に認定を行っている(別添資料参照)。これは、キャンパス・アジアが独自に開講する科目、および既存科目でキャンパス・アジアの冠をかぶせた科目(部局が開講する科目であってもキャンパス・アジアとして単位認定が可能)である。

b) 成績評価・学位授与

参加大学において成績評価方法についての議論を継続的に行うとともに、各参加大学にて厳格ではあるが広範な単位認定が行われるよう調整中である。

キャンパス・アジアは、学長のサインと捺印がある修了証書を独自に発行している。また、吉林大学、成均館大学校も同様の修了証書を発行している。

教員を相互に派遣して協定校で授業を不定期に開講する実績を重ねつつ、将来的には共同指導体制を確立し、共同大学院(*)での単位認定を目指している。

* ここでいう共同大学院とは、複数の大学院が共通講義、共同論文指導を行うものであるが、当面はそれぞれの大学が独立して学位を与えるダブル・ディグリー制度を目指している。将来的には、複数の大学が共同で学位を授与するジョイント・ディグリー制度を目指しており、この制度の構築には特に成均館大学が意欲的である。

以上のことから、基準 2－4 における当プログラムの質の段階は「課題が残っている」と自己判定している。

2. 今後の課題点

全学で単位互換を行っているという特徴がある一方、部局ごとに履修要件、単位認定基準が様々であり、それぞれの部局の特殊性を考慮すると、単位認定制度を統一するのは事実上不可能である。しかしながら、

〔大学名：岡山大学〕

岡山大学に留学してきたキャンパス・アジアの学生は、単位履修が複雑で制限されることに大きな不満を持っている。この点を、2つの方向で改善していきたい：

1. キャンパス・アジアの学生は、基本的に特別聴講学生なので、特別聴講学生向けの授業を全学、またはキャンパス・アジア独自でできるだけ多く提供する。
2. 留学生受け入れを前提とした特定のプログラム(コース)を準備し、そこで集中的に留学生を受け入れる。
また、共同大学院をどのように構築していくか具体的に検討を始めたところであるが、授業の相互乗り入れ、一部のプログラムを協定校で履修、相手大学にユニットごと移すハイブリッド型、編入型など、さまざまな可能性を模索している。基本的には、文部科学省が指針として示している国内大学間のみおける共同大学院設置ガイドラインを参考に国際共同大学院の設置を構想している。

基準3 学習成果

教育プログラムの目的に即して学習成果を測定する方法を設定し、成果が適切にあがっているか。

1. 基準3に係る現況の説明**a) 学習成果の測定と結果**

全般的には、キャンパス・アジア学生の単位履修状況を把握することにより、学生の学習状況を分析している。

自然系では、国際セミナーにおいて全て英語により口頭とポスター発表をおこなったが、英語による学会発表を初めておこなった学生がほとんどであり、学生が自分自身の力を検証する良い契機となった。

学習の成果は、一義的には単位習得状況によって測ることができるが、留学の前後に所属校で集中的に単位を取る学生や、単位を所属校でほとんど修得してから論文執筆に集中するため留学する学生がいる一方、派遣先の大学で多くの単位を取得しようという学生もあり、単位習得数のみでは成果は測ることはできない。

一方で、セミナーやワークショップを開催した際は、必ず文集を編纂している。その文集の中で、学生の満足度や成長度を良いとすることは可能である。

大学院生に関しては、論文執筆の進展度が学習成果の一定の基準になる。

また、現地における語学学習の達成度は、検定試験の結果で測ることができる。

b) プログラム履修後の状況

長期・短期留学において、留学終了後の調査を行い、その結果を教育内容や指導方法の改善へ活用している。具体的には、日中韓長期留学生の合同プログラム「学生フォーラム」における日中韓相互理解に関するテーマの討議、発表と文集作りを通じ、留学中の成果と課題を掘り起こして、その後の教育に生かしている。

一方で、帰国学生の学習成果を客観的に評価する制度や枠組みはまだ構想されていない。

以上のことから、基準3における当プログラムの質の段階は「課題が残っている」と自己判定している。

2. 今後の課題点

質保証を確保する上で、学習成果の測定方法と結果の分析は重要な課題であり、早急に検討する必要がある。

基準4 内部質保証システム

内部質保証や改善のための体系的な取組みが、参加大学との連携のもとで行われ、機能しているか。

1. 基準4に係る現況の説明

a)内部質保証システムの体制

学生からの定期的に意見を聴取し、報告書に纏めている。

外部評価委員会の規約を作成し、3名の有識者に委員を依頼するとともに、第1回の会合を開き、外部評価委員にプログラムの実施状況を説明すると同時に、口頭で意見を聞く会合を行った。

当該プログラムの教育内容や学生の学習成果・教育成果の情報を冊子媒体、ホームページで公表・発信することにより、社会で広く理解されるようつとめている。

b)改善実績・将来計画

本構想においては、学生からの意見聴取(懇談、外部評価委員会参画等)を実施し、そこで指摘された問題についてプロジェクトチーム会議で検討し改善を図っている。

平成25年3月15日には国内有識者2名、海外有識者1名を迎え4時間に及ぶ外部評価委員会を開催した。そこで指摘された問題についてプロジェクトチーム会議で検討し改善を図っている。

しかしながら、将来ジョイント・ディグリーを展望した場合、各講義の質まで含めて質保証に耐えるだけの制度的枠組みが形成されていない上、3校間での質保証制度の議論も進んでいない。

以上のことから、基準4における当プログラムの質の段階は「課題が残っている」と自己判定している。

2. 今後の課題点

3校間での質保証制度の議論を進め、客観的評価に耐えうる質保証制度を構築する必要がある。

しかしながら、一方で、講義の形式を相互にそろえるのではなく、様々な形態と内容があるので留学の価値が生まれるのだ、多様性と異質性をお互いに認識することが相互理解につながるのだという議論も根強く、当面は単位互換に耐えられる講義時間数の把握、講義における単位認定・評価システムの相互確認から取り組むことが現実的であると考えます。

1. 構想全体における交流学生数(実績)

(単位:人)

平成23年度		平成24年度	
受入	派遣	受入	派遣
12	19	33	52

2. 奨学金・宿舍提供の状況

(単位:人)

(1) 奨学金を受けている学生数		平成23年度		平成24年度	
		受入	派遣	受入	派遣
内訳	日中韓三国共通の財政支援受給者	0	9	11	20
	大学による奨学金	0	0	0	0
	その他の奨学金	12	0	12	12

(2) 宿舍(大学所有の宿舍、大学借り上げによる宿舍等)を提供されている学生数		平成23年度		平成24年度	
		受入	派遣	受入	派遣
		12	4	33	24

①

①③④⑥

3. 個別の交流プログラムの概況

※色の見方 外国人学生の受入れ(中韓⇒日本)

日本人学生の派遣(日本⇒中韓)

受入/派遣	相手国	平成23年度		平成24年度			
		第3四半期	第4四半期	第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期
受入	中国					① 6	
	韓国		③ 12		② 5 ④ 10		⑤ 12
派遣	中国				① 4 ③ 10		④ 5
					③ 12 ⑤ 3		
	韓国			⑤ 2		⑤ 1	
						⑤ 1	⑥ 1 ⑥ 4
							⑦ 10 ⑧ 19

外国人学生の受入れ(中韓⇒日本)							日本人学生の派遣(日本⇒中韓)								
No.	交流期間		派遣元	交流内容	取得可能 単位数	学生交流数		No.	交流期間		派遣先	交流内容	取得可能 単位数	学生交流数	
	始期	終期				計画値	実績		始期	終期				計画値	実績
①	24.09	25.03	中国	交換留学長期(博士・修士・学部)	上限無し	5	6	①	24.03	25.02	中国	交換留学長期(学部)	上限無し	5	4
②	24.04	25.03	韓国	交換留学長期(博士・修士・学部)	上限無し	5	5	②	24.03	24.03	中国	ワークショップ(修士)	0	10	10
③	24.02	24.02	韓国	交換留学短期(学部)	3	12	12	③	24.08	24.08	中国 韓国	交換留学短期(学部)	2 4	22	22
④	24.09	24.09	韓国	サマーセミナー(自然系)	0	10	10	④	25.03	26.02	中国	交換留学長期(学部)	上限無し	5	5
⑤	25.02	25.02	韓国	交換留学短期(学部)	3	12	12	⑤	24.03	25.02	韓国	交換留学長期(学部) ※複数パターンあり	上限無し	5	7
								⑥	25.03	26.02	韓国	交換留学長期(学部) ※複数パターンあり	上限無し	5	5
								⑦	25.03	25.03	韓国	ワークショップ(修士)	0	10	10
								⑧	25.03	25.03	中国 & 韓国	中韓ワークショップ(学部)	0	20	19

岡山大学 キャンパス・アジア共通科目要覧



目次

【一般教育科目】

- 近現代日中韓三国関係史(政治外交・国際関係)Ⅰ
- 近現代日中韓三国関係史(政治外交・国際関係)Ⅱ
- 中国の少数民族政策と社会
- 日本文化と礼法：茶の道と精神Ⅰ
- 日本文化と礼法：茶の道と精神Ⅱ

【サマースクール集中講義】

- 共通善教育：日中韓三国関係と社会Ⅰ
- 共通善教育：日中韓三国関係と社会Ⅱ

【キャンパス・アジア共通科目】

- 地域文化演習・前期（EPOK と一部共通）
- 地域文化演習・後期（EPOK と一部共通）

【言語教育センター全学日本語コース科目】

- 日本語 1 A
- 日本語 1 B （後期）
- 日本語 2
- 日本語 3
- 日本語 4
- 日本語 5
- 日本語 6
- 日本語 7 (読むa) (前期)
- 日本語 7 (聞くa) (前期)
- 日本語 7 (書くa) (前期)
- 日本語 7 (話すa) (前期)
- 日本語 7 (読むb) (後期)
- 日本語 7 (聞くb) (後期)
- 日本語 7 (書くb) (後期)
- 日本語 7 (話すb) (後期)

- 初級会話
- 読み書き 1
- 読み書き 2
- 中級文法・語彙 2
- 中級文法・語彙 1
- 多読で学ぶ日本語 (前期)
- 映像で学ぶ日本語 1 (前期)
- 映像で学ぶ日本語 2 (前期)
- 日本を知ろう (後期)
- 新聞・雑誌で学ぶ日本語 (後期)
- メディアリテラシー (後期)
- プロジェクトワークで学ぶ日本語 (後期)

【備考】

「東アジアの共通善を実現する深い教養に裏打ちされた中核的人材育成プログラム」の共通科目について

レポート番号 218	
登録日時	2012/11/7 14:04 登録者 全谷 至子 [変更する]
更新日時	2012/12/20 13:21 更新者 白 安樹
科目区分 (25年度入)	文部科学 (人間と社会)
科目区分 (24年度入)	文部科学 (人間と社会)
登録番号 (23年度入)	911256
登録番号 (24年度入)	911256
登録科目 (25年度入)	近代代日中韓三國関係史 (政治外交・国際関係) I
登録科目 (24年度入)	近代代日中韓三國関係史 (政治外交・国際関係) I
授業科目 (英語) (25年度入)	The modern and contemporary history of Japan, China and Korea—Governmental diplomacy and diplomatic relations
授業科目 (英語) (24年度入)	The modern and contemporary history of Japan, China and Korea—Governmental diplomacy and diplomatic relations
科目カテゴリー	文学
主観キーワード	自己と他者、歴史、政治
学類	文学
専攻	文学
曜日	水曜
時間	2時限
対象学生 (25年度入)	9グループ (文・法・経・工・物)
対象学生 (24年度入)	9グループ (文・理・医・歯・薬・農・工)
注釈	平成23年度以前入学者は、授業科目表を参照してください。
心身・健康の関	過労心症
担当教員	白 安樹
所属	文学部センター
電話番号	066-251-8527
Eメールアドレス	del-nobcs.okazaki-u.ac.jp
オフィスアワー	(1) 月曜 12時 (10・25～11・5)
授業の概要	(2) 教室での対応 近現代のアジアは日中韓三國の歴史関係を検討するものである。考部科書図は1894年～1953年であり、主に「韓土」と「反英」をめぐって近代日中韓三國の間に展開された政治外交政策について解説する。
学習目標	近現代日中韓三國の歴史関係 (史) について学び、歴史的な視野をより一層広げることが出来る。そして幅広い知識をもつて東アジア歴史関係の中の様々な問題を解決するための、適切な思考力を身につける。
授業計画	1回 オリエンテーション (授業内容の概要、授業の進め方、教科書および文献資料の紹介) 2回 19世紀末の東アジアの日中韓三國関係史 3回 東アジアにおける歴史関係の発生と交渉 その1 4回 東アジアにおける歴史関係の発生と交渉 その2 5回 日韓戦争と東アジア 6回 日韓戦争後の日本・朝鮮・韓国三國関係 7回 大韓帝国の成立と発展 8回 大韓帝国の外交政策と国際関係 9回 大韓帝国の外交政策と国際関係 その1 10回 大韓帝国の外交政策と国際関係 その2 11回 大韓帝国の外交政策と国際関係 その3 12回 大韓帝国の外交政策と国際関係 その4 13回 大韓帝国の外交政策と国際関係 その5 14回 大韓帝国の外交政策と国際関係 その6 15回 大韓帝国の外交政策と国際関係 その7 16回 大韓帝国の外交政策と国際関係 その8 17回 大韓帝国の外交政策と国際関係 その9 18回 大韓帝国の外交政策と国際関係 その10 19回 大韓帝国の外交政策と国際関係 その11 20回 大韓帝国の外交政策と国際関係 その12
参考文献	教科書に示すが、レジューム、参考文獻資料を提示、配布する。
参考書	教科書に示すが、レジューム、参考文獻資料を提示、配布する。
参考書	教科書に示すが、レジューム、参考文獻資料を提示、配布する。
研究活動との関連	出展、発表、レポート提出などについて総合的に評価する。(出席35%、発表20%、レポート45%)
JABEEとの関連	基準1の(4)「地域的拠点から多面的に知事をもつて近代日中韓三國の歴史関係を構築している。この関係の内訳はその一部である。
コメント	日本近代史、中国近代史、朝鮮近代史といった近代日中韓三國の歴史関係を構築しているのが望ましい。

レポート番号 218	
登録日時	2012/11/7 14:04 登録者 全谷 至子 [変更する]
更新日時	2012/12/20 13:21 更新者 白 安樹
科目区分 (25年度入)	文部科学 (人間と社会)
科目区分 (24年度入)	文部科学 (人間と社会)
登録番号 (23年度入)	911256
登録番号 (24年度入)	911256
登録科目 (25年度入)	近代代日中韓三國関係史 (政治外交・国際関係) II
登録科目 (24年度入)	近代代日中韓三國関係史 (政治外交・国際関係) II
授業科目 (英語) (25年度入)	The modern and contemporary history of Japan, China and Korea—Governmental diplomacy and diplomatic relations
授業科目 (英語) (24年度入)	The modern and contemporary history of Japan, China and Korea—Governmental diplomacy and diplomatic relations
科目カテゴリー	文学
主観キーワード	自己と他者、歴史、政治
学類	文学
専攻	文学
曜日	水曜
時間	2時限
対象学生 (25年度入)	9グループ (文・法・経・工・物)
対象学生 (24年度入)	9グループ (文・理・医・歯・薬・農・工)
注釈	平成23年度以前入学者は、授業科目表を参照してください。
心身・健康の関	過労心症
担当教員	白 安樹
所属	文学部センター
電話番号	066-251-8527
Eメールアドレス	del-nobcs.okazaki-u.ac.jp
オフィスアワー	(1) 月曜 12時 (10・25～11・5)
授業の概要	(2) 教室での対応 近現代のアジアは日中韓三國の歴史関係を検討するものである。考部科書図は1894年～1953年であり、主に「韓土」と「反英」をめぐって近代日中韓三國の間に展開された政治外交政策について解説する。
学習目標	近現代日中韓三國の歴史関係 (史) について学び、歴史的な視野をより一層広げることが出来る。そして幅広い知識をもつて東アジア歴史関係の中の様々な問題を解決するための、適切な思考力を身につける。
授業計画	1回 オリエンテーション (授業内容の概要、授業の進め方、教科書および文献資料の紹介) 2回 19世紀末の東アジアの日中韓三國関係史 3回 東アジアにおける歴史関係の発生と交渉 その1 4回 東アジアにおける歴史関係の発生と交渉 その2 5回 日韓戦争と東アジア 6回 日韓戦争後の日本・朝鮮・韓国三國関係 7回 大韓帝国の成立と発展 8回 大韓帝国の外交政策と国際関係 9回 大韓帝国の外交政策と国際関係 その1 10回 大韓帝国の外交政策と国際関係 その2 11回 大韓帝国の外交政策と国際関係 その3 12回 大韓帝国の外交政策と国際関係 その4 13回 大韓帝国の外交政策と国際関係 その5 14回 大韓帝国の外交政策と国際関係 その6 15回 大韓帝国の外交政策と国際関係 その7 16回 大韓帝国の外交政策と国際関係 その8 17回 大韓帝国の外交政策と国際関係 その9 18回 大韓帝国の外交政策と国際関係 その10 19回 大韓帝国の外交政策と国際関係 その11 20回 大韓帝国の外交政策と国際関係 その12
参考文献	教科書に示すが、レジューム、参考文獻資料を提示、配布する。
参考書	教科書に示すが、レジューム、参考文獻資料を提示、配布する。
参考書	教科書に示すが、レジューム、参考文獻資料を提示、配布する。
研究活動との関連	出展、発表、レポート提出などについて総合的に評価する。(出席35%、発表20%、レポート45%)
JABEEとの関連	基準1の(4)「地域的拠点から多面的に知事をもつて近代日中韓三國の歴史関係を構築している。この関係の内訳はその一部である。
コメント	日本近代史、中国近代史、朝鮮近代史といった近代日中韓三國の歴史関係を構築しているのが望ましい。

レコーダ番号 241			
収録日時	2012/11/7 14:04	撮影者 全谷 千子	返却する
更新日時	2012/12/20 13:21	更新者 白 文昭	
科目区分 (25年度入 学)	主教科目 (人間と社会)		
科目区分 (24年度入 学)	主教科目 (人間と社会)		
課題番号 (25年度入 学)	911241		
課題番号 (24年度入 学)	911241		
授業科目 (25年度入 学)	中国の少数民族と社会		
授業科目 (24年度入 学)	中国の少数民族と社会		
授業科目 (英語)25 年度入学)	The Policy and Society of Minority people in China		
授業科目 (英語)24 年度入学)	The Policy and Society of Minority people in China		
科目カテゴリ リー	社会学、史学		
キーワード	自己と他者、政治、経済、文化		
学期	後期		
単位	2単位		
曜日	月曜		
時間	18時限		
対象学生 (25年度入 学)	3グループ (文・法・経・工・計)		
対象学生 (24年度入 学)	3グループ (文・法・経・工・計)		
注釈	平成23年度以降入学者は、希望時間表を確認してください。		
必修・選択 の別	選択必修		
担当教員	白 文昭		
所属 センター	国際センター		
電話番号	555-2514-522		
Eメールアド レス	ts31-tsccc.ohs@shu.ac.jp		
オフィスア ワー	(1) 月曜日 3時 (12:45~14:15) (2) 教室での対応		
授業の概要	56期の民族を構成する現代や国は、多民族、多文化社会である。では、この多民族社会はどのように構成されてなり、経済発展を遂げ大躍進した中国では、民族間の文化衝突はどのように行われているか。とわが「民族平等」や「民族・多文化社会の形成」などの言葉を口にする中国では、どのような民族政策を打ち出し、どのような多民族社会、どのような「民族」を築いているのか。この授業は、いかなる民族問題という一側面から現代中国社会を考察するものである。中国政府的民族政策に関する基礎知識を学び、日本という外国から中国の多民族社会を見つめ、現代中国への理解や問題を深める。		
学習目標	1回 オリエンテーション (授業内容の概観、授業の進め方、文献資料の紹介など) 2回 少数民族の権利と自治権と民族政策 3回 中国共産党の民族政策問題に関する知識の交換 その1 4回 中国共産党の民族政策問題に関する知識の交換 その2 5回 少数民族の自治区分け事業 その1 6回 少数民族の自治区分け事業 その2 7回 「憲法」と「民族区域自治法」にある少数民族の「自治権」と「区域自治」		

授業計画	9回	少数民族の自治権と民族自治制度の発展	その1
	10回	少数民族の自治権と民族自治制度の発展	その2
	11回	中国共産党の少数民族政策と民族政策	その1
	12回	中国共産党の少数民族政策と民族政策	その2
	13回	中国共産党の少数民族政策と民族政策	その1
	14回	中国共産党の少数民族政策と民族政策	その2
	15回	まとめ	
特になし			
授業時に紹介するが、レジュメや文献資料を作成指導し配布する。			
参考書籍			授業時に紹介する
成績評価			出席率、レポート、発表などに基づいて総合的に評価する。(出席35%、レポート40%、発表25%)
母体活動との関連			中国の少数民族の協定とは何の国々に存在する国境地方に居住している。この授業の内容は自治制度の研究課題の一つであり、東アジア国際関係という観点から中国国内の民族問題を捉えようとする。授業では研究課題における基礎知識を体系的に解説する
JABEEとの関連			基準1の(a)と(d)
コメント			東アジアの民族問題に関心をもっており、物事を客観的に考える姿勢が素晴らしい。

シード番号: 229	
登録日時	2012/11/7 14:04 登録者名: 谷 聖子 (変更する)
更新日時	2012/12/10 13:31 更新者: 大林 陽子
科目区分(28年度入学)	主修科目 (人間と社会)
科目区分(24年度入学)	主修科目 (人間と社会)
講義番号(25年度入学)	911229
講義番号(24年度入学)	911229
授業科目(25年度入学)	日本文化と茶法：茶の道と精神I
授業科目(24年度入学)	日本文化と茶法：茶の道と精神II
授業科目(25年度入学)	Exploring Japanese Culture via Way of Tea, Chado I
授業科目(24年度入学)	Exploring Japanese Culture via Way of Tea, Chado II
科目カテゴリ	人間と社会
主修キーワード	文化、芸術、歴史、宗教
学類	学類
専攻	2専攻
曜日	木曜
時間	2時限
対象学生(25年度入学)	グローバル (文・法・経・工・薬)
対象学生(24年度入学)	グローバル (文・法・経・工・薬・農)
注釈	平成22年度以前入学者は、授業時間表を確認してください。
必修・選択の別	選択必修
担当教員	大林 陽子
所属	国際センター
電話番号	731-8820
Eメールアドレス	
レスポンス	1週間以内(平日の午前10時～午後5時)
オフラインアット	大塚(4/30/17:30 by appointment)
授業の概要	茶法にある礼法や「形」の美にある精神(にこ)や身体をとり、茶道(歴史的、思想的)背景や茶室について全体的に考察する。グローバルセッションの中で、茶道と日本文化の美に対する価値について考える。
学習目標	所作や学びに込められる「形」のイメージが先行しかなる茶室の価値にあるものとはらまについて理解し、日本の伝統文化と現代に生きる自分の価値を深め、国際人としての価値を深める。本講義は茶室の価値に重きを置くものではないが、修習約字面を通して、受講生には茶室に込められたまじことのように心を動かさせ、お茶を飲めばよいかを判断できていることを目標とする。
授業計画	第1回は10月1日の講義の後に配布する。 第1回 オリエンテーション「茶」文化とは？ 第2回 茶室の歴史 第3回 茶室の空間 第4回 茶室の茶 第5回 茶室の茶 第6回 茶室の茶 第7回 茶室の茶 第8回 茶室の茶 第9回 茶室の茶 第10回 茶室の茶 第11回 茶室の茶 第12回 茶室の茶 第13回 茶室の茶 第14回 茶室の茶 第15回 茶室の茶
受講条件	特になし
教科書	必要に応じてプリントを配布する
参考書	講義中に紹介する
成績評価	出席 (授業の参加度) 50点、レポート40点、授業への参加度10点
研究活動との関係	専門はカルチュラル・スタディーズ (オセアニア地域研究、英米の文化と文化政策)。この講義は、茶道修道士である講師が茶文化研究の観点から茶室を教え、調査するものである。
JABEEとの関係	国際社会の一員としての教養を身につける
コメント	茶室に入ることを想定しており、上級20名程度とします。茶室を体験するものに300～500円の茶室代が必要ですが、これまでに茶室に興味はあるのに近寄りがたいと思っていた学生、留学生経験者や留学生経験者など国際社会で活動することを希望している学生にも受講してほしいと思います。

シード番号: 234	
登録日時	2012/11/7 14:04 登録者名: 谷 聖子 (変更する)
更新日時	2012/12/10 10:52 更新者: 大林 陽子
科目区分(25年度入学)	主修科目 (人間と社会)
科目区分(24年度入学)	主修科目 (人間と社会)
講義番号(25年度入学)	911264
講義番号(24年度入学)	911264
授業科目(25年度入学)	日本文化と茶法：茶の道と精神I
授業科目(24年度入学)	日本文化と茶法：茶の道と精神II
授業科目(25年度入学)	Exploring Japanese Culture via Way of Tea, Chado I
授業科目(24年度入学)	Exploring Japanese Culture via Way of Tea, Chado II
科目カテゴリ	人間と社会
主修キーワード	文化、芸術、歴史、宗教
学類	学類
専攻	2専攻
曜日	木曜
時間	2時限
対象学生(25年度入学)	グローバル (文・法・経・工・薬)
対象学生(24年度入学)	グローバル (文・法・経・工・薬・農)
注釈	平成23年度以前入学者は、授業時間表を確認してください。
必修・選択の別	選択必修
担当教員	大林 陽子
所属	国際センター
電話番号	731-8820
Eメールアドレス	
レスポンス	1週間以内(平日の午前10時～午後5時)
オフラインアット	大塚(4/30/17:30 by appointment)
授業の概要	Chado, Way of Tea, is known widely in the international community today as one of the most "authentic" Japanese traditions, which has developed over more than four hundred years. The simple act of sharing a bowl of tea with refined rules and manners in exact procedures can stand out at the first look of a tea setting. This course, therefore, attempts to provide a deeper view of Chado to appreciate the Japanese culture by examining the meanings, historic background, and artistic development of the Way of Tea. Students should explore the internal meanings and beauty of Chado rather than the rules and procedures as its "exotic" external looks. By the end of the course, students should get a sense of not only what-to-do when receiving a bowl of tea, but also "why" he/she is expected to do so based on a deeper understanding of the culture.
学習目標	The detail syllabus should be announced in the first class.
授業計画	The course consists of the lectures and discussions on the history, spiritual significance, art (implements), and manners/procedures of Chado. The demonstrations and interactive experiences in Cha-shitsu (Tea room) would be included.
受講条件	Non-native English speakers would need English ability of TOEIC 500+level. Those who took 日本文化と茶法 I (Chado I) in the previous semester are exempted from this condition.
教科書	None. Handouts will be given.
参考書	None.
成績評価	Attendance/potit-report: 40, Report/Presentation: 40, Participation: 20
研究活動との関係	The lecturer, whose background is cultural studies in Oceania, is a long-time practitioner of Urusente Tea tradition.
JABEEとの関係	国際社会の一員としての教養
コメント	This course will include classes in participating in "tea" demonstrations/practices. In order to ensure the quality of the experience, the enrollment may be limited to 20. It also requires to collect 300-500yen to participate in a tea demonstration.

レコード番号 265	
登録日時	2012.11.7 14:04 登録者 金谷 至子 [変更する]
更新日時	2012.12.20 13:22 更新者 白 倫樹
科目区分 (25年度入 学)	主選科目 (人間と社会)
科目区分 (24年度入 学)	主選科目 (人間と社会)
講義番号 (25年度入 学)	911265
講義番号 (24年度入 学)	911265
授業科目 (25年度入 学)	共通基幹教育：日中韓三国関係と社会1
授業科目 (24年度入 学)	共通基幹教育：日中韓三国関係と社会1
授業科目 (23年度入 学)	共通基幹教育：日中韓三国関係と社会1
授業科目 (22年度入 学)	The Education of Common-Health -Three countries relationship and Society of Japan, China and Korea
授業科目 (21年度入 学)	The Education of Common-Health -Three countries relationship and Society of Japan, China and Korea
科目カテゴリ	政治学 史学 社会学 経済学 文学
キーワード	自己と他者、政治、歴史、経済、文化
学期	前期集中
単位	2単位
曜日	
対象学生 (25年度入 学)	全
対象学生 (24年度入 学)	全
注釈	平成23年度以前入学者は、授業時間表を確認してください。
必修・選択 の別	選択必修
担当教員	白 倫樹 他
所属	国際センター
電話番号	006-251-8522
Eメールアド レス	NORI@ESS.ocha.ac.jp
オフィスアワ ー	基本的に研究室で対応する
この科目は2013年8月に開催するサマースクールでの集中講義である。サマースクールは岡山大学国際センター・キャンパ ス・アジア事務局が主催し、岡山大学をはじめ、中国の各大学・韓国の慶熙大学校の三大学の学生・教員が受講する。こ の科目は以下のとおり「I」「II」「III」で構成しており、教員の専攻が講義を担当する。即ち、「正義論」、「経済入門」、 「日中韓三国関係史」、「日中韓三国関係と歴史文化」、「東アジア」、「日本の文化と社会」、「社会」とは各自一専攻分野における研 究の成果・知見に基づき、講義を行う。また、講義内容の「部」として日中韓 三国の文化・社会による社会や国際関係および経済を主軸とする。講義内容は 三科目は関係性の中、二科目に集中して行う。第一週目は「I」を学び、第二週目は「II」の内容を教養する。講義内容は IとIIがそれぞれ15回(11月9日分)、計30回であり、4単位になる。履修にあたっては、「I」と「II」のうち片方の受講 は認めない。必ず二週間の日程に参加し、「I」と「II」の両方を履修しなければならない。	
キャンパス・アジアは岡山大学・市井大学・愛媛大学校の三大学校、韓国に留学中の経済、共通科目の履修などによって東 アジア社会における国際人材を育成することを目的とする。この集中講義の一環であるが、日中韓三国の学生や教員 との交流を通して、異文化社会に対する相互理解を深めることである。また、多分野の専門知識を学ぶことで幅広い知識 を身につけ、国際的な視野にたって、過去・現在・未来への多面的に論議を考える力を培う。	

(1)「第一週目」	
以下四つのテーマで構成：「正義論」、「経済入門」、「日中韓三国関係：歴史問題と歴史認識」、「史料にみる岡山の歴史 と社会」	
・「正義論」(担当教員は3名、授業数4回)	
1回「正義論」の共有第一「東洋」と「西洋」との比較 その1	
2回「正義論」の共有第二「東洋」と「西洋」との比較 その2	
3回「正義論」の共有第三「東洋」と「西洋」との比較 その3	
4回「正義論」の共有第四「東洋」と「西洋」との比較 その4	
・「経済入門」(担当教員1名、授業数2回)	
5回 経済とはなにから経済における「西産」	
6回 東アジアにおける経済と「経済」	
・「日中韓三国関係：歴史問題と歴史認識」(担当教員3名、授業数6回)	
7回 東アジアの近現代史 その1	
8回 東アジアの近現代史 その2	
9回 近現代日中韓三国関係史の概観 その1	
10回 近現代日中韓三国関係史の概観 その2	
11回 東アジアにおける「歴史観」の対比 記述の歴史と史料の共有 その1	
12回 東アジアにおける「歴史観」の対比 記述の歴史と史料の共有 その2	
・「史料にみる岡山の歴史と社会」(担当教員1名、授業数3回)	
13回 史料の概観 その1	
14回 史料の概観 その2	
15回 歴史認識の概観または講義を準備	
特になし	
受講要件	
教科書	サマースクール講義や空席に指示
参考書等	サマースクール講義や空席に指示
成績評価	基本的に出席、発表、レポートなどに基づいて総合的に判断する。判断の基準等は授業への出席率%、発表20%、レポー ト40%である。レポートの課題は授業中に指示する。
研究活動と の関連	担当教員それぞれは所属の学系または研究科での教育活動および専門分野の研究発表に基づいて教授する。
JABEと の関連	
コメント	中国・吉林大学と韓国・慶熙大学校の准学生と交流をしたい。また中国と韓国の大学へ留学したいという希望者にはよい 勉強会になる。二週間の受講で四単位を履修できるのもメリットの一つである。受講の要件は前記に添付しているが、たと い

以下の一ア一マで整理。「其の戦艦艦隊の戦艦」「日本の文化と建造」、「日本海軍の戦艦」の三つを「日本海軍の戦艦」の戦艦として整理する。

111 日本海軍の戦艦 8回
112 日本海軍の戦艦 8回
113 日本海軍の戦艦 8回
114 日本海軍の戦艦 8回
115 日本海軍の戦艦 8回
116 日本海軍の戦艦 8回
117 日本海軍の戦艦 8回
118 日本海軍の戦艦 8回
119 日本海軍の戦艦 8回
120 日本海軍の戦艦 8回
121 日本海軍の戦艦 8回
122 日本海軍の戦艦 8回
123 日本海軍の戦艦 8回
124 日本海軍の戦艦 8回
125 日本海軍の戦艦 8回
126 日本海軍の戦艦 8回
127 日本海軍の戦艦 8回
128 日本海軍の戦艦 8回
129 日本海軍の戦艦 8回
130 日本海軍の戦艦 8回
131 日本海軍の戦艦 8回
132 日本海軍の戦艦 8回
133 日本海軍の戦艦 8回
134 日本海軍の戦艦 8回
135 日本海軍の戦艦 8回
136 日本海軍の戦艦 8回
137 日本海軍の戦艦 8回
138 日本海軍の戦艦 8回
139 日本海軍の戦艦 8回
140 日本海軍の戦艦 8回
141 日本海軍の戦艦 8回
142 日本海軍の戦艦 8回
143 日本海軍の戦艦 8回
144 日本海軍の戦艦 8回
145 日本海軍の戦艦 8回
146 日本海軍の戦艦 8回
147 日本海軍の戦艦 8回
148 日本海軍の戦艦 8回
149 日本海軍の戦艦 8回
150 日本海軍の戦艦 8回
151 日本海軍の戦艦 8回
152 日本海軍の戦艦 8回
153 日本海軍の戦艦 8回
154 日本海軍の戦艦 8回
155 日本海軍の戦艦 8回
156 日本海軍の戦艦 8回
157 日本海軍の戦艦 8回
158 日本海軍の戦艦 8回
159 日本海軍の戦艦 8回
160 日本海軍の戦艦 8回
161 日本海軍の戦艦 8回
162 日本海軍の戦艦 8回
163 日本海軍の戦艦 8回
164 日本海軍の戦艦 8回
165 日本海軍の戦艦 8回
166 日本海軍の戦艦 8回
167 日本海軍の戦艦 8回
168 日本海軍の戦艦 8回
169 日本海軍の戦艦 8回
170 日本海軍の戦艦 8回
171 日本海軍の戦艦 8回
172 日本海軍の戦艦 8回
173 日本海軍の戦艦 8回
174 日本海軍の戦艦 8回
175 日本海軍の戦艦 8回
176 日本海軍の戦艦 8回
177 日本海軍の戦艦 8回
178 日本海軍の戦艦 8回
179 日本海軍の戦艦 8回
180 日本海軍の戦艦 8回
181 日本海軍の戦艦 8回
182 日本海軍の戦艦 8回
183 日本海軍の戦艦 8回
184 日本海軍の戦艦 8回
185 日本海軍の戦艦 8回
186 日本海軍の戦艦 8回
187 日本海軍の戦艦 8回
188 日本海軍の戦艦 8回
189 日本海軍の戦艦 8回
190 日本海軍の戦艦 8回
191 日本海軍の戦艦 8回
192 日本海軍の戦艦 8回
193 日本海軍の戦艦 8回
194 日本海軍の戦艦 8回
195 日本海軍の戦艦 8回
196 日本海軍の戦艦 8回
197 日本海軍の戦艦 8回
198 日本海軍の戦艦 8回
199 日本海軍の戦艦 8回
200 日本海軍の戦艦 8回

担当	大林 純子	担当 (英語)	OBAYASHI Junko	内 線	8935	e-mail	l.obayashi@cc.okayama-u.ac.jp	
講義番号								
学期	前期・後期	曜日	水曜	時 限	3-4限	単位数	1	重複履修の可否
授業科目	地域文化演習	授業科目 (英 語)	Introduction to Japanese Culture and Local Community					
授業概要	キャンパス・アジアの留学生が地域社会の中の歴史や伝統に触れることを目的とする体験的学習を行う。具体的には、地域の代表的史跡を通じた歴史、瀬戸内に位置する岡山の地理を多角的に広く学ぶエクスカーション、身近に息づいている伝統文化の体験の2部構成になっている。 授業内容の性質上、3限4限(学外研修の際には5限まで)を使うため、授業回数は7回とし、開講日程は適宜調整する。4回の授業をEPOK「日本事情」と共通授業とすることにより、各国留学生との交流も図る。							
スケジュールとツクス	第1回 オリエンテーション、岡山の歴史・地理概説 第2回 国宝史跡、儒学、地方文化：和気岡谷学校見学 備前焼体験 (レポート①) 第3回 瀬戸大橋と琴平参道 (レポート②) 第4回 暮らしの中の伝統1：稲道 第5回 地域の伝説と史跡：吉備津神社と桃太郎伝説 第6回 地域伝統産業の今：炭田・高田織物工場見学 現代の畳表産業 (レポート③) 第7回 暮らしの中の伝統2：稲道 ※ ホームステイ (課外自由参加)							
	() は、EPOK「日本事情」と共通授業)							
	キャンパス・アジア留学生 (学部生・院生)							
	特になし。見学地や学習対象についての参考資料や文献をコピーにて配布する。							
	学外の地域社会や人々の暮らし、日本的伝統への関心や理解を促進する。							
	出席・授業への取組み40% レポート (3回) 60%							
	キャンパス・アジアの学生プログラム指導。							
コメント	院生の参加も可とする。 教材費 (稲道、書道、備前焼作陶、量表体験料) として、¥2X00を第1回授業 (オリエンテーション) 時に徴集します。							

授業科目	日本語 1A	
担当教員	佐藤美穂 梅川ゆう子	
学期	前期	
曜日/時間/教室	月曜日：1025-11.55、C23 火曜日：1025-11.55、C23 水曜日：1025-11.55、C23 金曜日：1025-11.55、C23	
定員	20	
授業の概要	・ 初めて日本語を学習する人のためのクラス。 ・ 日本語の文字 (ひらがな、カタカナ) を学習し、基本的な日本語の文法、語彙を学ぶ。	
到達目標	・ 基本的な日本語の語彙、文法がわかるようになる。 ・ 日本語で簡単なコミュニケーションができるようになる。	
授業計画	第 1週：ひらがな	
	第 2週：第 1 課	
	第 3週：カタカナ	
	第 4週：第 2 課	
	第 5週：第 3 課、小テスト	
	第 6週：第 4 課	
	第 7週：第 4 課、小テスト	
	第 8週：第 5 課、	
	第 9週：第 6 課	
	第10週：第 7 課、小テスト	
	第11週：第 8 課、	
	第12週：第 8 課、小テスト	
	第13週：第 9 課	
	第14週：第 10 課	
	第15週：復習、期末テスト	
テキスト等	『初級日本語げんき I [第2版]』 ジャパンタイムズ	
成績評価	小テスト 50%、期末テスト 30%、出席・授業参加度 10%、宿題 10%	
コメント	毎回の出席を望む。	
オフィスアワー		

授業科目	日本語 2
担当教員	坂野英里・高木美子
学期	前期
曜日/時間/教室	火曜日： 8:40-10:10 , G11 水曜日： 10:25-11:55 , G11 木曜日： 8:40-10:10 , G11 金曜日： 8:40-10:10 , G11
定員	20
授業の概要	大学で100時間程度の日本語クラスを履修した人のためのクラス。クラスでは、語彙、文法、表現を学び、主に口頭能力の向上を図る。
到達目標	基本的な文法、語彙の知識を身につけ、日本語での日常会話が適切に行えるようになる。
授業計画	第 1週: 復習 第 2週: 第 11 課 第 3週: 第 12 課、小テスト 第 4週: 第 12 課 第 5週: 第 13 課 第 6週: 第 14 課、小テスト 第 7週: 第 15 課 第 8週: 第 15 課、小テスト 第 9週: 第 16 課 第 10週: 第 17 課、小テスト 第 11週: 第 18 課 第 12週: 第 18 課 第 13週: 第 19 課、小テスト 第 14週: 第 20 課 第 15週: 第 21 課、期末テスト
テキスト等	『初級日本語げんき III[第2版]』ジャバンタイムズ
成績評価	小テスト 50%、期末テスト 30%、宿題 10%、出席・授業参加度 10%
コメント	毎回の出席を望む。
オフィスアワー	坂野 水曜日 16:15-17:45

授業科目	日本語 3
担当教員	森岡明美・雪田左和子
学期	前期
曜日/時間/教室	月曜日： 10:25-11:55 , G24 火曜日： 10:25-11:55 , G24 木曜日： 10:25-11:55 , G24 金曜日： 10:25-11:55 , G24
定員	20
授業の概要	日本語1・2で習得した文法内容を中心に、このクラスでは、漢字熟語を中心に語彙を増やし、抽象的なトピックを扱っていく。学生は、日本の社会、制度、文化、習慣について理解し、自分の意見を表現するために必要な語彙、文法、慣用表現などを習得する。
到達目標	日本の社会、制度、文化、習慣などについて、情報を得て、それを批判的に検証していく力をつけることが目標である。内容についての質問を聞いて答える予習課題が出されるので、自分でテキスト本文を読んで理解して回答を書き、授業ではロールプレイ、ディベートなどを通してそれについて話すというふうに四技能を伸ばすことを目指している。
授業計画	第 1週: 教育 第 2週: 教育 第 3週: 社会人 第 4週: 社会人 第 5週: 結婚 第 6週: 結婚 第 7週: 余暇 第 8週: 余暇 第 9週: 家族 第 10週: 家族 第 11週: 宗教と行事 第 12週: 宗教と行事 第 13週: 人間関係 第 14週: 人間関係 第 15週: 自然災害
テキスト等	日本について考えよう (pdfファイルを配布)
成績評価	試験 (40%)、ペーパー (20%)、話す活動 (20%)、授業参加 (10%)
コメント	宿題をしてから出席すること。
オフィスアワー	木曜日 16:15-17:45

授業科目	日本語 4	
担当教員	守谷智美・浦江理恵	
学期	前期	
曜日/時間/教室	火曜日： 8:40-10:10、C24	
	水曜日： 8:40-10:10、C24	
	木曜日： 8:40-10:10、C24	
	金曜日： 8:40-10:10、C24	
定員	20	
授業の概要	さまざまな文章を読み、中級レベルの語彙・漢字・表現・文型を学ぶとともに、書く・話す・聞くなどの総合的な活動を行う。	
到達目標	①さまざまな文章を読むことを通して、語彙・表現力を高める。 ②自分の考えや感情など伝えたいことを自分の言葉で表現し、他者とのインターアクションを通して深める。	
授業計画	第 1週:オリエンテーション、第1課	
	第 2週:第1課	
	第 3週:第2課	
	第 4週:第2課、第3課	
	第 5週:第3課	
	第 6週:第3課、第4課	
	第 7週:第4課	
	第 8週:中間テスト、第5課	
	第 9週:第5課	
	第10週:第6課	
	第11週:第6課、第7課	
	第12週:第7課	
	第13週:第8課	
	第14週:第8課、最終発表準備	
	第15週:最終発表準備、最終発表会	
	第16週:期末テスト	
テキスト等	『中級を学ぼう 中級前期』スリーエーネットワーク	
成績評価	クイズ 20%、課題 20%、中間テスト 20%、期末テスト 20%、最終発表 10%、出席・授業参加 10%	
コメント	積極的に授業に参加してもらいたい。 受講前に少なくとも400 字の漢字を習得していることが望ましい。	
オフィスアワー	守谷： 月曜日 16:15-17:45	

授業科目	日本語 5	
担当教員	青井由佳・内丸裕佳子	
学期	前期	
曜日/時間/教室	月曜日： 10:25-11:55、C12	
	火曜日： 10:25-11:55、C12	
	水曜日： 10:25-11:55、C12	
	木曜日： 10:25-11:55、C12	
定員	20	
授業の概要	・中級レベルの語彙・漢字・表現・文型を学び、読む・書く・話す・聞く練習を行う。 ・学部あるいは大学院の授業についていくために最低限必要とされる日本語力を身につける。	
到達目標	・学習した語彙・漢字・表現・文型をもとに、まとまった内容が読めるようになる。 ・あるテーマについて、文が書けるようになる。 ・あるテーマについて、発表できるようになる。	
授業計画	第 1週:オリエンテーション、復習	
	第 2週:第2課	
	第 3週:第2課	
	第 4週:第3課	
	第 5週:第3課	
	第 6週:第5課	
	第 7週:第5課	
	第 8週:第6課	
	第 9週:第6課	
	第10週:中間試験	
	第11週:第7課	
	第12週:第7課	
	第13週:第8課	
	第14週:第9課	
	第15週:発表、復習	
	コースに関する内容や予定は、オリエンテーションで説明する。	
テキスト等	『中級を学ぼう 日本語の文型と表現 82 中級中期』スリーエーネットワーク	
成績評価	出席・授業態度 10%、漢字クイズ 10%、文法クイズ 10%、単語クイズ 10%、作文 20%、発表 10%、中間試験 15%、期末試験 15%	
コメント	積極的に授業に参加してもらいたい。 受講前に少なくとも600 字の漢字を習得していることが望ましい。	
オフィスアワー	内丸：火曜日 16:15-17:45	

授業科目	日本語 6	
担当教員	小林深子・秋田節子	
学期	前期	
曜日/時間/教室	火曜日： 8:40-10:10、C12	
	水曜日： 8:40-10:10、C12	
	木曜日： 8:40-10:10、C12	
	金曜日： 8:40-10:10、C12	
定員	20	
授業の概要	日本語そのものを学ぶのではなく、日本語を使うことを目的とします。まず、テキストに沿っていろいろなテーマについて学び、意見を交換します。そして、興味のあるテーマを選び、インタビュ―調査し発表します。	
到達目標	学習した日本語を使い、あるトピックについて調べたことをまとめ、自分の意見を加えて発表できる。	
授業計画	第1週：オリエンテーションと自己紹介 (グループ作業のためにもお互いをよく知り、興味のあることをシェアする。)	
	第2週：第1課	
	第3週：第1課	
	第4週：第2課	
	第5週：第2課	
	第6週：第3課	
	第7週：第3課	
	第8週：第4課	
	第9週：第4課	
	第10週：第5課	
	第11週：第5課	
	第12週：発表のための準備(アンケート、インタビュ―調査の作成、実施)	
	第13週：発表のための準備(調査結果の集計、分析、発表原稿の作成)	
	第14週：発表のための準備(発表資料の作成、発表の練習)	
	第15週：期末試験及び発表	
テキスト等	『改訂版 トピックによる日本語総合演習 テーマ探しから発表へ 上級』(スリーエーネットワーク)	
成績評価	出席・授業参加 20%	
	発表 1 回 40%	
	期末試験 15%	
	小テスト 25%	
コメント	これまで習った文法は失敗を気にしないで、積極的に使ってみてください。日本語が正しく使えるかより、日本語で自分の考えを表現したり、興味があることを調べたり、他の学生と協力してグループ作業をしたりできることを評価します。	
オフィスアワー		

授業科目	日本語 7(読む a)	
担当教員	森岡明美	
学期	前期	
曜日/時間/教室	火曜日： 14:30-16:00、C24	
定員	20	
授業の概要	「読む」技能に焦点をあてた、上級レベルの日本語クラスである。詩、短歌、俳句、エッセイ、評論、文学作品など様々なジャンルのものを読んで、それについて考える。	
到達目標	私達が日ごろ「読んで」いるのは文字ばかりではなく、絵・写真・建築など社会の様々な「記号」を読んでいる。授業では、文章の中から社会や文化を読み解き、究極的には、他者との関わりの中での「自分自身」を読みといていくことが目標である。	
授業計画	第1週：「読む」とはどういうことなのかを考える。 詩	
	第2週：ショートショート：村上春樹「A Day in the Life」	
	第3-4週：エッセイ：リービ秀雄「奈良枝からの電話」	
	第5週：評論(情報科学)：菅谷明子「メディア・リテラシー」	
	第6-7週：文学：山田詠美「Body Cocktail」	
	第8週：中間試験	
	第9週：俳句・短歌	
	第10週：評論(人文)：北川達夫、平田オリザ「ニッポンには対話がない」	
	第11-13週：文学：川上弘美「シュレンジガーの猫」「蛇を読む」	
	第14-15週：文学：夏目漱石「坊っちゃん」	
テキスト等	文献、プリントを配布。	
成績評価	中間試験(30%)、書評(30%)、期末試験/書評(30%)、授業参加(10%)	
コメント	評書を持参すること。	
オフィスアワー	木曜日 16:15-17:45	

授業科目	日本語 7(書く a)
担当教員	守谷智美
学期	前期
曜日/時間/教室	月曜日： 14:30～16:00、B22
定員	20
授業の概要	留学生に必要な日本語の「書く」(アカデミック・ライティング・スキル)を高めることを目標とする。具体的には、「書くための基礎的知識」を学び、それらを使って実際に日本語で書く活動を行う。また、各自が書いたものについてクラスメートとともに検討するなど他者との協働活動を行う。これらを通して、日本語で書く力を総合的に高めることを目指す。
到達目標	1. 日本語で「書く」ための基礎的な知識を学び、それらを使って論理的な文章が書けるようになる。 2. 書いたものを分析できる力を身に付ける。
授業計画	第 1週: オリエンテーション
	第 2週: 書くための基礎①文体・表現
	第 3週: 書くための基礎②書くときのルール/パラグラフ
	第 4週: パラグラフ・ライティング①空間・位置
	第 5週: パラグラフ・ライティング①空間・位置
	第 6週: パラグラフ・ライティング②時間・場所
	第 7週: パラグラフ・ライティング②時間・場所
	第 8週: パラグラフ・ライティング③列挙/比較・対照
	第 9週: パラグラフ・ライティング④分類
	第10週: パラグラフ・ライティング④分類
	第11週: パラグラフ・ライティング⑤原因・結果
	第12週: パラグラフ・ライティング⑤原因・結果
	第13週: 最終課題: 学習したことを活用して書く
	第14週: 最終課題: 学習したことを活用して書く
	第15週: 最終課題発表会/振り返り
テキスト等	必要な資料を配布します。
成績評価	各回の課題: 40%、発表・協働活動: 20%、最終課題: 30%、出席および授業への参加貢献: 10%
コメント	
オフィスアワー	月曜 5 限 (16:15-17:45)

授業科目	日本語 7(話す a)
担当教員	内丸裕佳子
学期	前期
曜日/時間/教室	木曜日： 16:15-17:45、B22
定員	20
授業の概要	「話す」技能に焦点を当てた授業である。会話やプレゼンテーションについて、分かりやすく伝えるためにどのような話し方が適切なかをディスカッションやロールプレイを通して学ぶ。
到達目標	正しい発音で話せるようになる。 日常生活で円滑なコミュニケーションができるようになる。 日本語で分かりやすく発表できるようになる。
授業計画	第 1週: オリエンテーション
	第 2週: ドラマで学ぶ日本語
	第 3週: ドラマで学ぶ日本語
	第 4週: ドラマで学ぶ日本語
	第 5週: ドラマで学ぶ日本語
	第 6週: ドラマで学ぶ日本語
	第 7週: ドラマで学ぶ日本語
	第 8週: 中間試験
	第 9週: ディベート
	第10週: ディベート
	第11週: ディベート
	第12週: ディベート
	第13週: 研究発表
	第14週: 研究発表
	第15週: 研究発表
テキスト等	ハンドアウト
成績評価	出席・タスク 30%、中間試験 30%、発表 40%
コメント	積極的な授業参加を期待する。
オフィスアワー	火曜日 16:15-17:45

授業科目	日本語 7(聞くa)
担当教員	坂野望里
学期	前期
曜日/時間/教室	水曜日：12:45-14:15、B22
定員	20
授業の概要	日本語能力試験1級程度の日本語能力を持つ学生のためのクラスである。「聞く」技能に焦点を当て、ニュースや映画の聞き取りを行うと共に、ニュースや映画の時事表現や会話表現を習得する。
到達目標	日常生活で触れる日本語を正確に聞き取れるようにする。 日本社会や文化への理解を深める。
授業計画	第 1週: コースの説明、ニュース 第 2週: ニュース、映画場面 1 第 3週: ニュース、映画場面 1 第 4週: ニュース、映画場面 2 第 5週: ニュース、映画場面 2 第 6週: ニュース、映画場面 3 第 7週: ニュース、映画場面 3 第 8週: 中間試験 第 9週: ニュース、映画場面 4 第10週: ニュース、映画場面 4 第11週: ニュース、映画場面 5 第12週: ニュース、映画場面 5 第13週: ニュース、映画場面 6 第14週: ニュース、映画場面 6 第15週: ニュース、映画場面 6 第16週: 期末試験
テキスト等	プリント教材
成績評価	中間試験:30% 期末試験:40% 宿題・発表:30%
コメント	毎回の出席を望む。宿題は毎回出す。
オフィスアワー	水曜日 16:15-17:45

授業科目	初級会話
担当教員	青井由佳
学期	前期
曜日/時間/教室	火曜日： 8:40-10:10、C23
定員	20
授業の概要	初めて学ぶ学生にとって岡山での生活に必要な日本語での会話を学ぶ。 岡山での生活に必要な知識を得る。
到達目標	初級の文法を使って、身近な場面でコミュニケーションできる。 最低限必要な情報を得るために、質問したり、相手の日本語を聞き取ったりすることができる。
授業計画	第 1 週: オリエンテーション、1 課 自己紹介とあいさつ表現 第 2 週: 1 課 あいさつ表現、5 課 買い物 第 3 週: 3 課 ファーストフード 第 4 週: 4 課 レストラン 第 5 週: 2 課 タクシーに乗る 第 6 週: 5 課 買い物 第 7 週: 6 課 時間をたずねる 第 8 週: 7 課 交通 第 9 週: 7 課 交通 第10 週: 8 課 いつ、どこで、なにを？ 第11 週: 8 課 いつ、どこで、なにを？ 第12 週: 9 課 人付き合い 第13 週: 9 課 人付き合い 第14 週: 10 課 休みの日／期末試験 第15 週: 10 課 休みの日／期末試験フィードバック
テキスト等	『For newcomers 日本語入門 NOHONGO Break through from survival to communication in Japanese』 (アスク出版) ¥1900 ＊日本語1(AorB)クラスを履修していない学生は参考書として下記ものを勧める。 『NOHONGO FUN&EASY Survival Japanese Conversation for Beginners』(アスク出版) ¥1995
成績評価	出席・授業参加 20% タスク×10 30% 期末試験 20% 小テスト×10 30%
コメント	岡山で楽しい経験をたくさんしましょう。おいしいラーメン屋やきれいなところ、お得なスーパーはどこですか？クラスでシェアしましょう。
オフィスアワー	

授業科目	読み書き 1	
担当教員	梅川ゆう子	
学期	前期	
曜日/時間/教室	月曜日： 8:40-10:10、C23 水曜日： 8:40-10:10、C23	
定員	20	
授業の概要	・初めて日本語を学習する人のためのクラス。 ・日本語の文字(ひらがな、カタカナ、漢字)を学習し、基本的な日本語の文章の読み書きを学ぶ。	
到達目標	・基本的な日本語の文章の読み書きができるようになる。 ・基本的な日本語の文字の習得ができる。	
授業計画	第 1週:第 1 課 ひらがな	
	第 2週:第 2 課 カタカナ	
	第 3週:漢字のオリエンテーション	
	第 4週:第 3 課	
	第 5週:第 4 課、小テスト	
	第 6週:第 5 課	
	第 7週:復習	
	第 8週:プレゼンテーション、中間テスト	
	第 9週:第 6 課	
	第10週:第 7 課	
	第11週:第 8 課	
	第12週:第 9 課	
	第13週:第10 課	
	第14週:漢字の復習	
	第15週:読解・作文の復習	
テキスト等	『初級日本語げんき 1 [第2版] ジャパンタイムズ	
成績評価	小テスト 30%、中間テスト 30%、期末テスト 30%、出席・授業参加度 10%	
コメント	毎回の出席を望む。レベル1の受講者は日本語1も併せて受講することを望む。	
オフィスアワー		

授業科目	読み書き 2	
担当教員	大平真紀子	
学期	前期	
曜日/時間/教室	月曜日： 14:30-16:00、C11	
定員	20	
授業の概要	・大学で100 時間程度の日本語クラスを履修した人のためのクラス。 ・基本的な漢字を学習し、短い文章を読んだり書いたりする。	
到達目標	・基本的な漢字が読んだり書いたりできるようになる。 ・短い文章を読んだり書いたりできるようになる。	
授業計画	第 1週:オリエンテーション・復習	
	第 2週:第 11 課	
	第 3週:第 12 課	
	第 4週:第 12 課・復習	
	第 5週:第 13 課	
	第 6週:第 14 課	
	第 7週:第 15 課	
	第 8週:復習	
	第 9週:第 16 課	
	第10週:第 17 課	
	第11週:第 18 課	
	第12週:第 19 課	
	第13週:第 20 課	
	第14週:第 21 課	
	第15週:総復習	
テキスト等	『初級日本語げんき I、II [第 2 版]』ジャパンタイムズ	
成績評価	テスト 80%、出席・授業参加度 10%、宿題・発表 10%	
コメント	毎回の出席を望む。 レベル2の受講者は、「日本語 2」も併せて受講することを望む。	
オフィスアワー		

授業科目	多読で学ぶ日本語
担当教員	黒江理恵
学期	前期
曜日/時間/教室	火曜日：12:45-14:15、Q24
定員	20
授業の概要	自分が見たいと読む本を選び、授業中および授業外で自分のペースでできるだけ多くの本を読む。また、より深い理解を得るために、自分が読んだ本について感想を発表したり、まとめたりする。
到達目標	・文脈の中で日本語の語彙力を伸ばす ・やさしい日本語をたくさん読むことにより、日本語を読むことへの抵抗感をなくす ・読書の楽しみを体験して、学期終了後も継続できるような読書力・習慣を身につける
授業計画	第 1週: オリエンテーション 第 2週: 多読① 第 3週: 多読② 第 4週: 多読③ 第 5週: グループ発表、多読④ 第 6週: 多読⑤ 第 7週: 多読⑥ 第 8週: 多読⑦ 第 9週: 多読⑧ 第10週: グループ発表、多読⑨ 第11週: 多読⑩ 第12週: 多読⑪ 第13週: 多読⑫ 第14週: 多読⑬ 第15週: グループ発表
テキスト等	なし
成績評価	出席・授業態度 20%、発表 30%、読書記録 50%
コメント	・このクラスは「日本語3」以上の学生を対象としている。 ・このクラスでは、1 語 1 文の意味よりも語全体の内容をつかもうとすること、できるだけ辞書は引かず 文脈や漢字から意味を推測することを意識しながら、読んでほしい。
オフィスアワー	なし

授業科目	映像で学ぶ日本語 1
担当教員	佐藤美穂
学期	前期
曜日/時間/教室	月曜日：12:45-14:15、B22
定員	20
授業の概要	日本の映画・アニメなどを通して、特定の文化に根ざした会話表現を学び、そこから日本独自の文化に対して理解を深める。映像は指定する。
到達目標	・映像から、日本に特有な文化を知る。 ・映像から特定の表現を学び、その表現が使用される適切な文脈を理解して、使えるようになる。
授業計画	第 1週: オリエンテーション 第 2週: 映像視聴 第 3週: 映像視聴 第 4週: グループワーク① 第 5週: グループワーク② 第 6週: グループワーク③ 第 7週: グループワーク④ 第 8週: 発表① 第 9週: 映像視聴 第10週: 映像視聴 第11週: グループワーク① 第12週: グループワーク② 第13週: グループワーク③ 第14週: グループワーク④ 第15週: 発表②
テキスト等	プリント配布
成績評価	発表 40%、期末テスト 30%、出席・授業参加 10%、課題提出 20%
コメント	辞書を持参すること。毎回の出席を望む。
オフィスアワー	

授業科目	中級文法・語彙 2	
担当教員	青井由佳	
学期	前期	
曜日/時間/教室	月曜日： 8:40-10:10、C24	
定員	20	
授業の概要	日本語能力試験 N2レベルの文法・語彙を学ぶクラス 練習問題を通して文法や語彙を増やし、整理する 中級文法・文型を増やして、日常的な日本語が理解できるようになる	
到達目標	第 1週:オリエンテーション 第 2週:練習問題1 第 3週:練習問題2 第 4週:練習問題3 第 5週:練習問題4 第 6週:練習問題5 第 7週:練習問題6 第 8週:中間テスト 第 9週:練習問題7 第10週:練習問題8 第11週:練習問題9 第12週:練習問題10 第13週:練習問題11 第14週:練習問題12 第15週:期末テスト、フィードバックとまとめ	
テキスト等	プリント配布	
成績評価	期末テスト40%、中間テスト30%、出席15%、宿題15%	
コメント	毎回宿題を出す	
オフィスアワー		

全学日本語コース —2013 年度後期—
Japanese Language Course (Fall, 2013)

授業科目	日本語 1A	
担当教員	守谷智美・坂野英里	
学期	後期	
曜日/時間/教室	月曜日： 10:25-11:55、C11 火曜日： 10:25-11:55、C11 水曜日： 10:25-11:55、C11 木曜日： 10:25-11:55、C11	
定員	20	
授業の概要	・ 初めて日本語を学習する人のためのクラス。 ・ 日本語の文字（ひらがな、カタカナ）を学習し、基本的な日本語の文法・語彙を学ぶ。	
到達目標	・ 基本的な日本語の語彙、文法がわかるようになる。 ・ 日本語で簡単なコミュニケーションができるようになる。	
授業計画	第 1週：ひらがな	
	第 2週：第 1 課	
	第 3週：カタカナ	
	第 4週：第 2 課	
	第 5週：第 3 課、小テスト	
	第 6週：第 4 課	
	第 7週：第 4 課、小テスト	
	第 8週：第 5 課、	
	第 9週：第 6 課	
	第10週：第 7 課、小テスト	
	第11週：第 8 課、	
	第12週：第 8 課、小テスト	
	第13週：第 9 課	
	第14週：第 10 課	
	第15週：復習、期末テスト	
テキスト等	『初級日本語げんき I[第2版]』ジャパンタイムズ	
成績評価	小テスト 50%、期末テスト 30%、出席・授業参加度 10%、宿題 10%	
コメント	毎回の出席を望む。	
オフィスアワー	守谷：月曜日 16:15-17:45、坂野：水曜日 16:15-17:45	

授業科目	日本語 1B
担当教員	梅川ゆう子・佐藤美穂
学期	後期
曜日/時間/教室	月曜日： 10:25-11:55 , C23 火曜日： 10:25-11:55 , C23 水曜日： 10:25-11:55 , C23 金曜日： 10:25-11:55 , C23
定員	20
授業の概要	・日本語を 50 時間程度学習した人のためのクラス。基本的な日本語の文法、語彙を学ぶ。 ・ 基本的な日本語の語彙、文法がわかるようになる。 ・ 日本語で簡単なコミュニケーションができるようになる。
到達目標	第 1 週: 復習 第 2 週: 第 6 課 第 3 週: 第 7 課、小テスト 第 4 週: 第 8 課 第 5 週: 第 8 課 第 6 週: 第 9 課、小テスト 第 7 週: 第 10 課 第 8 週: 第 11 課、小テスト 第 9 週: 第 12 課 第 10 週: 第 12 課 第 11 週: 第 13 課、小テスト 第 12 週: 第 14 課 第 13 週: 第 15 課 第 14 週: 第 15 課、小テスト 第 15 週: 第 16 課
授業計画	
テキスト等	『初級日本語げんき 1』(第2版)『ジャパントائمズ
成績評価	小テスト 50%、期末テスト 30%、宿題 10%、出席・授業参加度 10%
コメント	毎回の出席を望む。
オフィスアワー	

授業科目	日本語 2
担当教員	坂野英里・高木美子
学期	後期
曜日/時間/教室	火曜日： 8:40-10:10 , G11 水曜日： 10:25-11:55 , C24 木曜日： 8:40-10:10 , G11 金曜日： 8:40-10:10 , G11
定員	20
授業の概要	大学で 100 時間程度の日本語クラスを履修した人のためのクラス。クラスでは、語彙、文法、表現を学び、主に口頭能力の上達を図る。
到達目標	基本的な文法、語彙の知識を身につけ、日本語での日常会話が適切に行えるようになる。
授業計画	第 1 週: 復習 第 2 週: 第 11 課 第 3 週: 第 12 課、小テスト 第 4 週: 第 12 課 第 5 週: 第 13 課 第 6 週: 第 14 課、小テスト 第 7 週: 第 15 課 第 8 週: 第 15 課、小テスト 第 9 週: 第 16 課 第 10 週: 第 17 課、小テスト 第 11 週: 第 18 課 第 12 週: 第 18 課 第 13 週: 第 19 課、小テスト 第 14 週: 第 20 課 第 15 週: 第 21 課、期末テスト
テキスト等	『初級日本語げんき 1』(第2版)『ジャパントائمズ
成績評価	小テスト 50%、期末テスト 30%、宿題 10%、出席・授業参加度 10%
コメント	毎回の出席を望む。
オフィスアワー	坂野 水曜日 16:15-17:45

授業科目	日本語 3	
担当教員	森岡明美・堂田左和子	
学期	後期	
曜日/時間/教室	月曜日： 1025-11:55 , C24	
	火曜日： 1025-11:55 , C24	
	木曜日： 1025-11:55 , C24	
	金曜日： 1025-11:55 , C24	
定員	20	
授業の概要	日本語1 & 2で習得した文法内容を基礎に、このクラスでは、漢字熟語を中心に語彙を増やし、抽象的なトピックを扱っていく。学生は、日本の社会、制度、文化、習慣について理解し、自分の意見を表現するために必要な語彙、文法、慣用表現などを習得する。	
到達目標	日本の社会、制度、文化、習慣などについて、情報を得て、それを批判的に検証していく力をつけることが目標である。内容についての質問を聞いて答える予習課題が出されるので、自分でテキスト本文を読んで理解して回答を書き、授業ではロールプレイ、ディベートなどを通してそれについて話すというふうに四技能を伸ばすことを目指している。	
授業計画	第 1週: 教育	
	第 2週: 教育	
	第 3週: 社会人	
	第 4週: 社会人	
到達目標	第 5週: 結婚	
	第 6週: 結婚	
	第 7週: 余暇	
	第 8週: 余暇	
	第 9週: 家族	
	第10週: 家族	
	第11週: 宗教と行事	
	第12週: 宗教と行事	
	第13週: 人間関係	
	第14週: 人間関係	
	第15週: 自然災害	
テキスト等	日本について考えよう (pdf ファイルを配布)	
成績評価	試験 (40%)、ペーパー (20%)、話す活動 (20%)、授業参加 (10%)	
コメント	宿題をしてから出席すること。	
オフィスアワー	木曜日 16:15-17:45	

授業科目	日本語 4	
担当教員	守谷智美・黒江理恵	
学期	後期	
曜日/時間/教室	火曜日： 8:40-10:10 , C24	
	水曜日： 8:40-10:10 , C24	
	木曜日： 8:40-10:10 , C24	
	金曜日： 8:40-10:10 , C24	
定員	20	
授業の概要	さまざまな文章を読み、中級レベルの語彙・漢字・表現・文型を学ぶとともに、書く・話す・聞くなどの総合的な活動を行う。	
到達目標	①さまざまな文章を読むことを通して、語彙・表現力を高める。 ②自分の考えや感情など伝えたいことを自分の言葉で表現し、他者とのインターアクションを通して深める。	
授業計画	第 1週: オリエンテーション、第1課	
	第 2週: 第1課	
	第 3週: 第2課	
	第 4週: 第2課、第3課	
	第 5週: 第3課	
	第 6週: 第3課、第4課	
	第 7週: 第4課	
	第 8週: 中間テスト、第5課	
	第 9週: 第5課	
	第10週: 第6課	
	第11週: 第6課、第7課	
	第12週: 第7課	
	第13週: 第8課	
	第14週: 第8課、最終発表準備	
	第15週: 最終発表会、最終発表会、期末テスト	
テキスト等	『中級を学ぼう 中級前期リスリー・エーネットワーク	
成績評価	クイズ 20%、課題 20%、中間テスト 20%、期末テスト 20%、最終発表 10%、出席・授業参加 10%	
コメント	積極的に授業に参加してもらいたい。 受講前に少なくとも 400 字の漢字を習得していることが望ましい。	
オフィスアワー	守谷： 月曜日 16:15-17:45	

授業科目	日本語 5
担当教員	青井由佳・内丸裕佳子
学期	後期
曜日/時間/教室	月曜日：10:25-11:55、C12 火曜日：10:25-11:55、C12 水曜日：10:25-11:55、C12 木曜日：10:25-11:55、C12
定員	20
授業の概要	・中級レベルの語彙・漢字・表現・文型を学び、読む・書く・話す・聞く練習を行う。 ・学部あるいは大学院の授業についていくために最低限必要とされる日本語力を身につける。
到達目標	・学習した語彙・漢字・表現・文型をもとに、まとまった内容が読めるようになる。 ・あるテーマについて、文が書けるようになる。 ・あるテーマについて、発表できるようになる。
授業計画	第1週: オリエンテーション、復習 第2週: 第2課 第3週: 第2課 第4週: 第2課 第5週: 第3課 第6週: 第3課 第7週: 第5課 第8週: 第6課 第9週: 第6課 第10週: 中間試験 第11週: 第7課 第12週: 第7課 第13週: 第8課 第14週: 第9課 第15週: 発表、復習 コースに関する内容や予定は、オリエンテーションで説明する。
テキスト等	『中級を学ぶ』 日本語の文型と表現 82 中級中期Jスリーエーネットワーク
成績評価	出席・授業態度 10%、漢字クイズ 10%、文法クイズ 10%、単語クイズ 10%、作文 20%、発表 10%、中間試験 15%、期末試験 15%
コメント	積極的に授業に参加してもらいたい。 受講前に少なくとも600字の漢字を習得していることが望ましい。
オフィスアワー	内丸: 火曜日 16:15-17:45

授業科目	日本語 6
担当教員	小林薫子・秋田節子
学期	後期
曜日/時間/教室	火曜日：8:40-10:10、C12 水曜日：8:40-10:10、C12 木曜日：8:40-10:10、C12 金曜日：8:40-10:10、C12
定員	20
授業の概要	日本語そのものを学ぶのではなく、日本語を使うことを目的とします。まず、テキストに沿っているいろいろなテーマについて学び、意図を交換します。そして、興味のあるテーマを選び、インタビュー調査し発表します。
到達目標	学習した日本語を使い、あるトピックについて調べたことをまとめ、自分の意見を加えて発表できる。
授業計画	第1週: オリエンテーションと自己紹介 (グループ作業のためにもお互いをよく知り、興味のあることをシェアする。) 第2週: 第1課 第3週: 第1課 第4週: 第2課 第5週: 第2課 第6週: 第3課 第7週: 第3課 第8週: 第4課 第9週: 第4課 第10週: 第5課 第11週: 第5課 第12週: 発表のための準備(アンケート、インタビュー調査の作成、実施) 第13週: 発表のための準備(調査結果の集計、分析、発表原稿の作成) 第14週: 発表のための準備(発表資料の作成、発表の練習) 第15週: 期末試験及び発表
テキスト等	『改訂版 トピックによる日本語総合演習 テーマ探しから発表へ 上級J(スリーエーネットW
成績評価	出席・授業参加 20% 発表 回 40% 期末試験 15% 小テスト 25%
コメント	これまで習った文法は失敗を気にしないで、積極的に使ってみてみてください。日本語が正しく使えるかより、日本語で自分の考えを表現したり、興味があることを調べたり、他の学生と協力してグループ作業をしたりできることを評価します。
オフィスアワー	

授業科目	日本語 7(読むb)
担当教員	森岡明美
学期	後期
曜日/時間/教室	火曜日： 14:30-16:00、C24
定員	20
授業の概要	「読む」技能に焦点をあてた、上級レベルの日本語クラスである。詩、短歌、俳句、エッセイ、評論、文学作品など様々なジャンルのものを読んで、それについて考える。
到達目標	私達の日ごろ「読んで」いるのは文字ばかりではなく、絵・写真・建築など社会の様々な「記号」を読んでいる。授業では、文章の中から社会や文化を読み解き、究極的には、他者との関わりの中での「自分自身」を読んでいくことが目標である。
授業計画	第 1 週: 「読む」とはどういうことなのかを考える。 詩 第 2 週: ショートショート: 星新一「肩の上の秘書」 第 3 週: エッセイ: 星野道夫「旅をする木」 第 4-5 週: 評論(科学): 本川達雄「ゾアの時間ネズミの時間」 第 6-8 週: 文学: よしもとばなな「とかげ」 第 9 週: 中間試験 第 10 週: 俳句・短歌 第 11-13 週: 文学: 村上春樹「壺」ノルウェイの森」 第 14-15 週: 文学: 夏目漱石「こころ」 第 16 週: 期末試験
テキスト等	文庫、プリントを配布。
成績評価	中間試験と期末試験(60%)、書評(30%)授業参加(10%)
コメント	詩書を持参すること。
オフィスアワー	木曜日 16:15-17:45

授業科目	日本語 7(書くb)
担当教員	守谷智美
学期	後期
曜日/時間/教室	月曜日： 14:30-16:00、B22
定員	20
授業の概要	レポート作成の基礎を身に着けることを目標とする。具体的には、レポート作成の基礎(手順やルール)を知り、実際に集めた情報を使ってレポートを作成する。また、各自の作成したレポートについてクラスメートと検討するなど、他者との協働活動を通してよりよいものを作り上げ、日本語でのレポート作成の技術や書くことへの自信を高めることを目指す。
到達目標	1. レポートの種類・形式や、作成のプロセス・留意点などを知り、自身が出会う「書く」課題に対処できるようになる。 2. 書いたものを分析できる力を身につける。
授業計画	第 1週: オリエンテーション 第 2週: レポート作成の基礎①レポートのルール 第 3週: レポート作成の基礎②要約する 第 4週: レポート作成の基礎③引用する 第 5週: 意見・理由の述べ方① 第 6週: 意見・理由の述べ方② 第 7週: 意見・理由の述べ方③ 第 8週: レポートの作り方①レポートとは/レポートの構成 第 9週: レポートの作り方②資料を集める・使う 第 10週: レポートの作り方③図やグラフを使う 第 11週: 最終課題: レポート作成①テーマを決める・構成を考える 第 12週: 最終課題: レポート作成②各構成要素の内容を考える 第 13週: 最終課題: レポート作成③序論・本論・結論・参考文献を書く 第 14週: 最終課題: レポート作成④クラスメートと読み合い、推敲する 第 15週: 最終課題発表会/振り返り
テキスト等	必要な資料を配布します。
成績評価	各回の課題 30%、発表・協働活動 20%、最終課題 40%、出席および授業への参加貢献 10%
コメント	
オフィスアワー	月曜 5 限(16:15-17:45)

授業科目	日本語 7(話す b)	
担当教員	内丸裕佳子	
学期	後期	
曜日/時間/教室	木曜日: 16:15-17:45, C23	
定員	20	
授業の概要	「話す」技能に焦点を当てた授業である。このクラスでは日本語のバリエーションを学習する。分かりやすく伝えるためにどのような話し方が適切なディスカッションやロールプレイを通して学ぶ。	
到達目標	正しい発音で話せるようになる。 日常生活で円滑なコミュニケーションができるようになる。	
授業計画	第 1 週: オリエンテーション	
	第 2 週: 日本語のバリエーション(若者言葉、役割語、方言、言葉の男女差)	
	第 3 週: 日本語のバリエーション(若者言葉、役割語、方言、言葉の男女差)	
	第 4 週: 日本語のバリエーション(若者言葉、役割語、方言、言葉の男女差)	
	第 5 週: 日本語のバリエーション(若者言葉、役割語、方言、言葉の男女差)	
	第 6 週: 日本語のバリエーション(若者言葉、役割語、方言、言葉の男女差)	
	第 7 週: 日本語のバリエーション(若者言葉、役割語、方言、言葉の男女差)	
	第 8 週: 日本語のバリエーション(若者言葉、役割語、方言、言葉の男女差)	
	第 9 週: 感動詞・応答詞、オノマトペ	
	第 10 週: 感動詞・応答詞、オノマトペ	
	第 11 週: 感動詞・応答詞、オノマトペ	
	第 12 週: 発表準備	
	第 13 週: 発表準備	
	第 14 週: 発表準備	
	第 15 週: 発表	
テキスト等	ハンドアウト	
成績評価	出席・タスク 55%、発表 45%	
コメント	積極的な授業参加を期待する。	
オフィスアワー	火曜日 16:15-17:45	

授業科目	日本語 7(聞く b)	
担当教員	坂野英里	
学期	後期	
曜日/時間/教室	水曜日: 12:45-14:15, B22	
定員	20	
授業の概要	「聞く」技能に焦点を当てた授業である。授業ではニュースと映画の聞き取りを行い、それに関する意見交換も行う。ニュースや映画を聞きながら、時事表現や会話表現を習得すると共に日本文化に対する理解を深めて行く。	
到達目標	日本語の聞く力を伸ばし、日本文化への理解を深める。	
授業計画	第 1 週: コースの説明	
	第 2 週: ニュース、映画場面1	
	第 3 週: ニュース、映画場面1	
	第 4 週: ニュース、映画場面2	
	第 5 週: ニュース、映画場面2	
	第 6 週: ニュース、映画場面3	
	第 7 週: ニュース、映画場面3	
	第 8 週: 中間試験	
	第 9 週: ニュース、映画場面4	
	第 10 週: ニュース、映画場面4	
	第 11 週: ニュース、映画場面5	
	第 12 週: ニュース、映画場面5	
	第 13 週: ニュース、映画場面6	
	第 14 週: ニュース、映画場面6	
	第 15 週: ニュース、映画場面6	
	第 16 週: 期末試験	
テキスト等	プリント教材	
成績評価	宿題・発表: 30% 中間試験: 30% 期末試験: 40%	
コメント	毎回聞き取りの宿題を出す。また、発表もあるが、その時はしっかり準備しておいてもらいたい。	
オフィスアワー	水曜日 16:15-17:45	

授業科目	初級会話
担当教員	秋田節子
学期	後期
曜日/時間/教室	火曜日： 8:40-10:10、C23
定員	20
授業の概要	初めて学ぶ学生にとって岡山での生活に必要な日本語での会話を学ぶ。 岡山での生活に必要な知識を得る。
到達目標	初級の文法を使って、身近な場面でコミュニケーションできる。 最低限必要な情報を得るために、質問したり、相手の日本語を聞き取ったりすることができる。
授業計画	オリエンテーション、1課 自己紹介とあいさつ表現
	第2週：1課 あいさつ表現、5課 買い物
	第3週：3課 ファーストフード
	第4週：4課 レストラン
	第5週：2課 タクシーに乗る
	第6週：5課 買い物
	第7週：6課 時間をたずねる
	第8週：7課 交通
	第9週：7課 交通
	第10週：8課 いつ、どこで、なにを？
	第11週：8課 いつ、どこで、なにを？
	第12週：9課 人付き合い
	第13週：9課 人付き合い
	第14週：10課 休みの日／期末試験
	第15週：10課 休みの日／期末試験フィードバック
テキスト等	『For newcomers 日本語入門 NOHONGO Break through from survival to communication in Japanese』（アスク出版）¥1900
	* 日本語1(AorB)クラスを履修していない学生は参考書として下記のものを勧める。 『NOHONGO FUN&EASY Survival Japanese Conversation for Beginners』（アスク出版）¥1995
成績評価	出席・授業参加 20%
	タスク×10 30% 期末試験 20% 小テスト×10 30%
コメント	岡山で楽しい経験がたくさんでしょう。おいしいラーメン屋やきれいなところ、お得なスーパーはどこですか？クラスでシェアしましょう。
オフィスアワー	

授業科目	読み書き 1
担当教員	梅川ゆう子
学期	後期
曜日/時間/教室	月曜日： 8:40-10:10、C23 水曜日： 8:40-10:10、C23
定員	20
授業の概要	・ 初めて日本語を学習する人のためのクラス。 ・ 日本語の文字(ひらがな、カタカナ、漢字)を学習し、基本的な日本語の文章の読み書きを学ぶ。
到達目標	・ 基本的な日本語の文章の読み書きができるようになる。 ・ 基本的な日本語の文字の習得ができる。
授業計画	第 1週：第 1 課 ひらがな
	第 2週：第 2 課 カタカナ
	第 3週：漢字のオリエンテーション・
	第 4週：第 3 課
	第 5週：第 4 課、小テスト
	第 6週：第 5 課
	第 7週：復習
	第 8週：プレゼンテーション、中間テスト
	第 9週：第 6 課
	第10週：第 7 課
	第11週：第 8 課
	第12週：第 9 課
	第13週：第 10 課
	第14週：漢字の復習
	第15週：読解・作文の復習
テキスト等	『初級日本語げんき 1[第2版]』 ジャパンタイムズ
成績評価	小テスト 30%、中間テスト 30%、期末テスト 30%、出席・授業参加度 10%
コメント	毎回の出席を望む。レベル1の受講者は日本語1も併せて受講することを望む。
オフィスアワー	

授業科目	読み書き 2
担当教員	大平真紀子
学期	後期
曜日/時間/教室	月曜日：14:30～16:00、C23
定員	20
授業の概要	・大学で100時間程度の日本語クラスを履修した人のためのクラス。 ・基本的な漢字を学習し、短い文章を読んだり書いたりする。
到達目標	・基本的な漢字を読んだり書いたりできるようになる。 ・短い文章を読んだり書いたりできるようになる。
授業計画	第1週：オリエンテーション・復習 第2週：第11課 第3週：第12課 第4週：第12課・復習 第5週：第13課 第6週：第14課 第7週：第15課 第8週：復習 第9週：第16課 第10週：第17課 第11週：第18課 第12週：第19課 第13週：第20課 第14週：第21課 第15週：総復習
テキスト等	『初級日本語げんきⅠ、Ⅱ〔第2版〕』ジャパンタイムズ
成績評価	テスト80%、出席・授業参加度10%、宿題・発表10%
コメント	毎回の出席を望む。 レベル2の受講者は、「日本語2」も併せて受講することを望む。
オフィスアワー	

授業科目	新聞・雑誌で学ぶ日本語
担当教員	秋田節子
学期	後期
曜日/時間/教室	木曜日：12:45～14:15、C24
定員	20
授業の概要	新聞や雑誌、広告、チラシ、カタログ、市役所からの案内、漫画など日本語で書かれたさまざまなものを、みんなで楽しく読み、日本の生活を豊かにする情報を得る。
到達目標	読むことを通して、習った語彙や文法が実際にどのように使われているのかを知る。すべてが理解できなくても、わかっていいる言葉や文脈から類推する練習をする。
授業計画	第1週：オリエンテーションと自己紹介 第2&3週：1課 空港／銀行口座／国民健康保険の申し込み書／電子メール 第4&5週：2課 住宅の広告／家電／自動販売機 第6週：3課 地球温暖化フォーラムのポスター／防災用品 第7週：中間試験 第8週：4課 学園祭のパンフレット／新入生勧誘チラシ 第9週：5課 新聞記事（年末年始について） 第10週：6課 フィットネスクラブの広告／初診票 第11週：7課 チャットのやりとり／裸祭り 第12週：8課 新聞の投書欄／マスコミ 第13週：9課 求人広告／履歴書 第14週：10課 ホームページ／期末試験 第15週：10課 岡山の観光案内／期末試験フィードバック
テキスト等	『ドラえもののどこでも日本語』（小学館）¥2000
成績評価	出席・授業参加 20% 中間・期末試験 40% 小テスト×10 40%
コメント	友達や先生からもらったメール、スーパールのチラシや案内板、看板、何でもクラスに持って来て、一緒に読んでみましょう。
オフィスアワー	

授業科目	メディアリテラシー
担当教員	森岡明美
学期	後期
曜日/時間/教室	木曜日：14:30-16:00、C24
定員	20
授業の概要	最初に「メディアリテラシー」の概念を理解し、日常生活で、有形無形にメディアに洗脳されている実態を把握する。その後、メディアからの情報を批判的に検証する。
到達目標	与えられた情報を勘告みにしないで、検証的に問いたり居たり読んだりできる市民になることが目標である。
授業計画	第1週：メディアリテラシーとは 第2-3週：新聞 第4-5週：雑誌 第6週：中間発表 第7-8週：インターネット 第9-10週：テレビ 第11-12週：コマージュヤル 第13-14週：映画 第15週：期末発表
テキスト等	クラスで配布。
成績評価	試験(50%)、書く課題(30%)、話す課題(20%)、期末発表(20%)
コメント	辞書を持参すること
オフィスアワー	木曜日 16:15-17:45

授業科目	プロジェクトワークで学ぶ日本語
担当教員	佐藤美穂
学期	後期
曜日/時間/教室	月曜日：12:45-14:15、B22
定員	20
授業の概要	協働作業による調査テーマの選定、企画、実施、報告によって、考える力、日本語で表現し伝える力を伸ばす。 ・協同作業を通して自分の考えを検討し視野を広げる。 ・日本語で分かりやすく発表できるようになる。
到達目標	第1週：オリエンテーション 第2週：アンケート用紙を作る① 第3週：アンケート用紙を作る② 第4週：資料の読み取り① 第5週：資料の読み取り② 第6週：効果的なプレゼンテーション① 第7週：効果的なプレゼンテーション② 第8週：効果的なプレゼンテーション③ 第9週：発表①(グラフを使って発表する) 第10週：プロジェクトワークの準備① 第11週：プロジェクトワークの準備② 第12週：プロジェクトワークの準備③ 第13週：プロジェクトワークの準備④ 第14週：プロジェクトワークの準備⑤ 第15週：発表②
授業計画	
テキスト等	プリント配布
成績評価	中間テスト30%、期末テスト50%、出席・授業参加10%、課題提出10%
コメント	辞書を持参すること。毎回の出席を望む。
オフィスアワー	

授業科目	日本を知ろう
担当教員	黒江理恵
学期	後期
曜日/時間/教室	火曜日：12:45-14:15、C23
定員	20
授業の概要	この授業では、日本の社会問題や日本人の行動・習慣などをよく観察し、その背後にあるものの見方や考え方、価値観などを理解することを目的としている。資料を読んだり、体験したりした後、グループでの話し合いを通して考えを深める。
到達目標	読む力、書く力、話す力、聞く力を伸ばし、日本の社会、文化について理解を深める。
授業計画	第1週目のオリエンテーションで学生のニーズ調査を行い、その結果をふまえて授業で取り扱うトピックを決める。 例 ・日本人の宗教観 ・家族のあり方の変化 ・若者の人間関係 ・教育問題 ・マンガの神様 ・日本の輸入の歴史 ・ものづくり日本 ・政治家になるための条件
テキスト等	ハンドアウト
成績評価	出席・出席態度 30%、課題 70%
コメント	このクラスは「日本語5」以上の学生を対象としている。
オフィスアワー	なし

授業科目	中級文法・語彙 1
担当教員	青井由佳
学期	後期
曜日/時間/教室	月曜日：8:40-10:10、C12
定員	20
授業の概要	日本語能力試験 N3レベルの文法・語彙を学ぶクラス 練習問題を通して文法や語彙を増やし、整理する
到達目標	中級文法・文型を増やして、日常的な日本語が理解できるようになる
授業計画	第 1週:オリエンテーション 第 2週:練習問題 1 第 3週:練習問題 2 第 4週:練習問題 3 第 5週:練習問題 4 第 6週:練習問題 5 第 7週:練習問題 6 第 8週:中間テスト 第 9週:練習問題 7 第10週:練習問題 8 第11週:練習問題 9 第12週:練習問題 10 第13週:練習問題 11 第14週:練習問題 12 第15週:期末テスト、フィードバックとまとめ
テキスト等	プリント配布
成績評価	期末テスト40%、中間テスト30%、出席15%、宿題15%
コメント	毎回宿題を出す
オフィスアワー	

「東アジアの共通善を実現する深い教養に裏打ちされた中核的人材育成プログラム」の共通科目について

平成24年9月10日
キャンパス・アジア事業推進委員会プロジェクトチーム決定

1 趣旨

「東アジアの共通善を実現する深い教養に裏打ちされた中核的人材育成プログラム」(以下「C・A人材育成プログラム」という。)実施のための共通科目(以下「C・A共通科目」という。)の開講及び履修に関し、必要な事項を定める。

2 C・A共通科目の定義

C・A共通科目とは、C・A人材育成プログラムに基づき、学部及び研究科に受入の留学生(以下「C・A学部留学生」又は「C・A大学院留学生」という。)への開講科目として、日・中・韓に共通する諸課題を取り上げた授業科目をいう。

3 C・A共通科目の選定・決定

1) C・A共通科目は、キャンパス・アジアプロジェクトチームにおいて、岡山大学で既に開講されている授業科目(以下、「既存科目」という。)の中から選定又は教育内容の充実を図るため、新規に授業科目を開設するものとする。

2) 既存科目については、当該授業科目を開設する学部又は研究科及び担当教員に対し、キャンパス・アジア事業推進委員長から協力量議を行うものとする。

3) 大学院生を対象とするC・A共通科目(以下「大学院C・A共通科目」という。)の開講は、キャンパス・アジアプロジェクトチーム委員が開講する授業科目を中心に編成するものとする。

4) C・A人材育成プログラムで実施する「サマーセミナー」及び「ウィンターセミナー」における講義は、C・A共通科目として開設することができるものとする。

5) C・A共通科目の決定は、当該授業科目を開設する学部又は研究科の了解を得て、キャンパス・アジアプロジェクトチームにおいて行い、キャンパス・アジア事業推進委員会に報告する。

4 C・A共通科目の単位認定は、学則第13条及び大学院学則第12条の2の規定に基づき授業担当教員が行う。

5 履修

1) C・A学部留学生のC・A共通科目の履修は、5科目(計10単位)を上限とするが、当該プログラムの趣旨にかんがみ、2科目(4単位)以上の履修を推奨するものとする。

2) C・A大学院留学生は、受入研究科で受ける研究指導のほか、大学院C・A共通科目を履修することができるとし、当該プログラムの趣旨にかんがみ、2科目(4単位)以上の履修を推奨するものとする。

3) C・A共通科目には、人文社会科学系の共通科目として、「東アジアの共通善の実現」に関連する授業科目を含むものとし、C・A学部留学生及びC・A大学院留学生の履修を推奨するものとする。

4) C・A共通科目は、岡山大学に在籍するC・A学部留学生及びC・A大学院留学生以外の学生も履修することができるものとする。

6 事務

C・A人材育成プログラムの共通科目に関する事務は、関係学部又は研究科及び協定校と連携し、国際センター事務室(キャンパス・アジア事務局)において行う。



岡山大学国際センター
キャンパス・アジア

2013年2月 短期受入プログラム						
		1限	2限	3限	4限	5限
		8:40-10:10	10:25-11:55	12:45-14:15	14:30-16:00	16:15-17:45
2/2	土	岡山空港到着(20:00着)				
2/3	日			倉敷茶室見学・美観地区散策 12:00岡大出発、13:00茶道体験、15:30美観地区	ガイダンス	
2/4	月	日本語(書く) 三宅 B42	日本語(話す) 三宅 B42	副学長訪問 13:00荒木理事 15:30阿部理事	キャンパスツアー	歓迎会(18:00~20:00) ビーチャニオン4階
2/5	火	日本語(書く) 三宅 A42	日本語(話す) 三宅 A42	日本語(話す) 大野呂 B42	個別研修(酒井)	個別研修
2/6	水	日本語(書く) 加納 B42	日本語(話す) 加納 B42	個別研修	個別研修(酒井)	個別研修
2/7	木	日本語(書く) 大野呂 B42	日本語(話す) 大野呂 B42	個別研修	個別研修(酒井)	個別研修
2/8	金	日本語(書く) 佐藤 B42	日本語(話す) 加納 B42	日本文化講義 堤 B42	個別研修	個別研修
2/9	土	奈良研修旅行 8:00岡山大学出発 12:00ごろ奈良到着、昼食後東大寺、春日大社見学、ならまち見学(格子の家、ならまち資料館、ならまち物語館)、白鹿荘泊				
2/10	日	奈良研修旅行 8:00白鹿荘出発、法隆寺見学(天王寺IC経由) 大阪見学(心齋橋、道頓堀、難波) 18:20岡山大学到着予定				
2/11	月	自由行動				
2/12	火	日本語(書く) 三宅 A42	日本語(話す) 三宅 A42	日本語(話す) 大野呂 B42	個別研修(酒井)	個別研修(酒井)
2/13	水	日本語(書く) 加納 B42	日本語(話す) 加納 B42	韓国語スピーチ発表会~韓国語学習者との交流 13:00~16:00 C31		個別研修/学生交流
2/14	木	日本語(書く) 大野呂 B42	日本語(話す) 大野呂 B42	個別研修/学生交流	個別研修(酒井)/学生交流	個別研修/学生交流
2/15	金	日本語(書く) 佐藤 B42	日本語(話す) 佐藤 B42	日本文化講義 辻 B42	個別研修/学生交流	個別研修/学生交流
2/16	土	バスツアー(姫路・神戸) 8:00岡山大学出発、10:00~11:30姫路城見学 13:10から16:00神戸見学(元町、三宮) 18:50岡山大学到着予定				
2/17	日	自由行動				
2/18	月	日本語(書く) 三宅 B42	日本語(話す) 三宅 B42	個別研修/学生交流	個別研修(酒井)/学生交流	個別研修(酒井)/学生交流
2/19	火	日本語(書く) 三宅 B42	日本語(話す) 三宅 B42	個別研修/学生交流	個別研修(酒井)/学生交流	個別研修/学生交流
2/20	水	日本語(書く) 加納 B42	日本語(話す) 加納 B42	個別指導(文集作成・研究発表会準備)		
2/21	木	修了試験 佐藤 B42	評価 大野呂・佐藤・加納	研究発表会 大野呂・佐藤・加納 (14:30~16:30) B21	アンケート実施	歓送会(18:00~20:00) ビーチャニオン3階
2/22	金	岡山市内・史跡見学(グループ行動)・夏期成大韓国語研修予定者との懇談会				
2/23	土	帰国(9:40発)				

Korean Language Programs

Sungkyun Language Institute (SLI)

Sungkyun Language Institute (SLI) provides several Korean language programs in both campuses to help international students in experiencing the Korean culture, making Korean friends as well as learning the Korean language.

The flagship of the Korean programs is the Regular Korean Program which is held four sessions a year for 10 weeks each. By completing each session, students will level up from level 1 to level 6.

Regular Korean Program

Many international students who want to improve their Korean before applying to degree programs in Korean universities are choosing the Regular Korean Program at SLI. Another group of international students at SLI are ones who want to get a job after reaching level 6 of Regular Korean Program while making friends and experiencing Korea.

09:00 a.m. to 01:00 p.m. / five days a week / 10 weeks / total 200 hours

Extra Afternoon Classes

After the Regular Korean Program in the morning, SLI provides Extra Afternoon Classes for students' further understanding on the Korean language.

List of Extra Afternoon Classes: Korean Music Class, Korean Film Class, Advanced Writing Class, Pronunciation Class, Listening Class, etc.

Korean Cultural Activities

Learning Korean in the classrooms is not the only way! SLI provides hands-on Korean Cultural Activities during the Regular Korean Program by visiting places and doing outdoor activities.

Instructors and curriculums

Korean language programs at SLI are well known for the qualified instructors who are all educated in teaching Korean as a foreign language. Their eagerness to guide international students to the goal of speaking good Korean has devised a distinguishable curriculum and enhanced the reputation of the Korean language programs as SLI.

Excellent textbooks

SLI has developed learner-friendly textbooks: Easy to learn Korean 1 ~ 6 and Easy to speak Korean 1 ~ 12, which are also used in 14 universities in Korea and several universities in China and Thailand

Friends , SKKU buddies

International students at the Korean language programs are matched to their buddies called Friends, voluntary SKKU students who are willing to help students in learning and experiencing Korea and SKKU

Additional Korean Programs

SLI runs several more Korean language programs to meet students' demands: 3-week Korean Program in March and August; Evening Classes for the diplomats and business persons; Tailored Programs with and Samsung Electronics, National Institute of International Education (NIIED), and International Office, etc.

Contact Information for admission

E-mails		Website
Address	Languages	
koreaneng@skku.edu	English	http://koreansli.skku.edu
koreanjpn@skku.edu	Japanese	
koreanchn@skku.edu	Chinese	

吉林大学国际语言学院

暑期汉语（入门下）研修班课程表（日本、韩国）

时间：2012年8月6日—8月31日

前14教室

序号	日期	星期	课节	学 习 内 容
1.	8月6日	星期一	1—2节	汉语测试 发放教材计 琼梁亚东仲秋
			3—4节	汉语综合课 计 琼
2.	8月7日	星期二	1—2节	汉语综合课 计 琼
			3—4节	汉语综合课 计 琼
			5—7节	交际汉语实践（会话练习）
3	8月8日	星期三	1—2节	汉语听力课 梁亚东
			3—4节	汉语口语课 仲 秋
4	8月9日	星期四	1—2节	汉语综合课 计 琼
			3—4节	汉语综合课 计 琼
			5—7节	交际汉语实践（会话练习）
5	8月10日	星期五	1—2节	汉语听力课 梁亚东
			3—4节	汉语口语课 仲 秋
6	8月13日	星期一	1—2节	汉语综合课 计 琼
			3—4节	汉语综合课 计 琼
			5—7节	交际汉语实践（会话练习）
7	8月14日	星期二	1—2节	汉语综合课 计 琼
			3—4节	汉语综合课 计 琼
8	8月15日	星期三	1—2节	汉语听力课 梁亚东
			3—4节	汉语口语课 仲 秋
			5—7节	交际汉语实践（会话练习）
9	8月16日	星期四	1—2节	汉语综合课 计 琼
			3—4节	汉语综合课 计 琼
10	8月17日	星期五	1—2节	汉语听力课 梁亚东
			3—4节	汉语口语课 仲 秋
11	8月20日	星期一	1—2节	汉语综合课 计 琼
			3—4节	汉语综合课 计 琼
			5—7节	交际汉语实践（会话练习）
12	8月21日	星期二	1—2节	汉语综合课 计 琼
			3—4节	汉语综合课 计 琼
13	8月22日	星期三	1—2节	汉语听力课 梁亚东

			3—4 节	汉语口语课 仲 秋
			5—7 节	交际汉语实践（会话练习）
(14)	8 月 23 日	星期四	1—2 节	汉语综合课 计 琼
			3—4 节	汉语综合课 计 琼
15	8 月 24 日	星期五	1—2 节	汉语听力课 梁亚东
			3—4 节	汉语口语课 仲 秋
16	8 月 27 日	星期一	1—2 节	汉语综合课 计 琼
			3—4 节	汉语综合课 计 琼
			5—7 节	交际汉语实践（会话练习）
17	8 月 28 日	星期二	1—2 节	汉语综合课 计 琼
			3—4 节	汉语综合课 计 琼
18	8 月 29 日	星期三	1—2 节	汉语听力课 梁亚东
			3—4 节	汉语口语课 仲 秋
			5—7 节	交际汉语实践（会话练习）
19	8 月 30 日	星期四	1—2 节	汉语综合课 计 琼
			3—4 节	汉语综合课 计 琼
20	8 月 31 日	星期五	1—2 节	汉语结业考试 计 琼

上课时间：1—2 节：8：30—10：00 3—4 节：10：10—11：40

文化讲座：13：30—15：30 语言实践课：13：30—16：00

国际语言学院

中国文化讲座上课时间及地点：

	第一周	第二周	第三周	第四周
熊本学园大学	周四 8 教室	周五 8 教室	周五 8 教室	
金城西南冈山	周三 9 教室	周二 9 教室	周二 9 教室	周二 9 教室
成均馆大学	周五 8 教室	周四 8 教室	周四 8 教室	周四 8 教室

吉林大学国际语言学院

暑期汉语（基础）研修班课程表（日本、韩国）

时间：2012年8月6日—8月28日

前9教室

序号	日期	星期	课节	学 习 内 容
1.	8月6日	星期一	1—2节	汉语测试 发放教材邵 壮张晋涛仲秋
			3—4节	汉语综合课 邵 壮
2.	8月7日	星期二	1—2节	汉语听力课 张晋涛
			3—4节	汉语口语课 李春红
3	8月8日	星期三	1—2节	汉语综合课 邵 壮
			3—4节	汉语综合课 邵 壮
			5—7节	交际汉语实践（会话练习）
4	8月9日	星期四	1—2节	汉语听力课 张晋涛
			3—4节	汉语口语课 李春红
5	8月10日	星期五	1—2节	汉语综合课 邵 壮
			3—4节	汉语综合课 邵 壮
			5—7节	交际汉语实践（会话练习）
6	8月13日	星期一	1—2节	汉语综合课 邵 壮
			3—4节	汉语综合课 邵 壮
			5—7节	交际汉语实践（会话练习）
7	8月14日	星期二	1—2节	汉语听力课 张晋涛
			3—4节	汉语口语课 李春红
8	8月15日	星期三	1—2节	汉语综合课 邵 壮
			3—4节	汉语综合课 邵 壮
			5—7节	交际汉语实践（会话练习）
9	8月16日	星期四	1—2节	汉语听力课 张晋涛
			3—4节	汉语口语课 李春红
10	8月17日	星期五	1—2节	汉语综合课 邵 壮
			3—4节	汉语综合课 邵 壮
11	8月20日	星期一	1—2节	汉语综合课 邵 壮
			3—4节	汉语综合课 邵 壮
			5—7节	交际汉语实践（会话练习）
12	8月21日	星期二	1—2节	汉语听力课 张晋涛
			3—4节	汉语口语课 李春红
13	8月22日	星期三	1—2节	汉语综合课 邵 壮

			3—4 节	汉语综合课 邵 壮
			5—7 节	交际汉语实践（会话练习）
14	8 月 23 日	星期四	1—2 节	汉语听力课 张晋涛
			3—4 节	汉语口语课 李春红
15	8 月 24 日	星期五	1—2 节	汉语综合课 邵 壮
			3—4 节	汉语综合课 邵 壮
16	8 月 27 日	星期一	1—2 节	汉语综合课 邵 壮
			3—4 节	汉语综合课 邵 壮
			5—7 节	交际汉语实践（会话练习）
17	8 月 28 日	星期二	1—2 节	汉语听力课 张晋涛
			3—4 节	汉语口语课 李春红
18	8 月 29 日	星期三	1—2 节	汉语综合课 邵 壮
			3—4 节	汉语综合课 邵 壮
			5—7 节	交际汉语实践（会话练习）
19	8 月 30 日	星期四	1—2 节	汉语听力课 张晋涛
			3—4 节	汉语口语课 李春红
20	8 月 31 日	星期五	1—2 节	汉语结业考试 邵 壮

上课时间：1—2 节：8：30—10：00 3—4 节：10：10—11：40

文化讲座：13：30—15：30 语言实践课：13：30—16：00

国际语言学院

中国文化讲座上课时间及地点：

	第一周	第二周	第三周	第四周
熊本学园大学	周四 8 教室	周五 8 教室	周五 8 教室	
金城西南冈山	周三 9 教室	周二 9 教室	周二 9 教室	周二 9 教室
成均馆大学	周五 8 教室	周四 8 教室	周四 8 教室	周四 8 教室

2012年度成均館大学 キャンパスアジア科目

NO.	科目名	担当教員	時間	単位	言語
1	東アジアの現代古典	Hwang, Ho Duk 先生	2012 spring 15:00-17:45 (15min break)	3	韓国語
2	東アジアの古典学入門	Hwang, Ho Duk 先生	2012 autumn	3	韓国語
3	東アジアの総合疎通と漢字文明	Kim, Yong Tai 先生	2012 autumn 火曜、木曜 16:30-17:45	3	韓国語

2012年度吉林大学キャンパスアジア講義シリーズ(1単位)

シリーズ	講義名	担当教員(所属)	時間	場所	参加者	言語	URL
I	多次元の視点からみた東アジアの共同利益 (中国語)“东亚共同利益的多维视角”	劉徳斌教授 吉林大学国際関係研究所所長、交際交流與合 作処処長、中国世界現代史研究会副理事長	2012/5/30(水) 14:30-15:30	吉林大学友誼会 館第九教室	CAプログラム 三校参加学生	中国語	http://oic.jlu.edu.cn/oic/xwxx/xwxx_one_detail.php?new_num=628
II	中国・アメリカおよび東アジアの一体化 (中国語)“中国、美国与东亚一体化”	王秋彬准教授 吉林大学国際関係研究所	2012/6/6(水) 14:00-15:00	吉林大学友誼会 館第一教室	CAプログラム 三校参加学生	中国語	http://oic.jlu.edu.cn/oic/xwxx/xwxx_one_detail.php?new_num=629
III	世界正義の尺度 (中国語)“世界正义的尺度”	何志鵬教授 吉林大学法学院	2012/6/8(金) 14:00-15:00	吉林大学友誼会 館第六教室	CAプログラム 三校参加学生	中国語	http://oic.jlu.edu.cn/oic/xwxx/xwxx_one_detail.php?new_num=630
IV	日本語、韓国語における中国語、漢字の影響及び中日韓三国言語の相互関係とその文化の継承 (中国語)汉语汉字对日语韩语的影响以及中日韩三国语言间的相互影响及其文化承载	劉富華教授 吉林大学国際言語学院	2012/6/20(水) 14:00-15:00	吉林大学友誼会 館第二教室	CAプログラム 三校参加学生	中国語	http://oic.jlu.edu.cn/oic/xwxx/xwxx_one_detail.php?new_num=640
V	中国伝統文化図解 (中国語)图解中国传统文化	漆思教授 吉林大学哲学社会学院	2012/6/25(月) 14:00-15:00	吉林大学友誼会 館第一教室	CAプログラム 三校参加学生	中国語	http://oic.jlu.edu.cn/oic/xwxx/xwxx_one_detail.php?new_num=641

吉林大学国际言语学院学部生専攻に関する授業計画及び行程表

専攻：留学生中国語語学専攻

课程类别	课程性质	课程编码	课程名称	学时	学分	其中		建议修读学期及周学时							
						讲授	实验	1	2	3	4	5	6	7	8
学科基础课程	必修	0501200102	现代汉语	92	4	92				2	2	2			
		0501200202	汉语语言学	72	3	72								4	
		0501200302	中国文学	92	4	92							2	2	2
		0501200402	中国文化	76	3	76								2	4
		0501200502	中国概况	72	3	72				2	2				
		0402200602	中国武术	72	2	72		2	2						
			合计：	476	19	476									
	选修	0501300702	新闻语言	72	3	72				2	2				
		0501300802	汉外翻译	36	2	36								2	
		0501300902	汉字概论	36	2	36					2				
		0501301002	诸子百家讲读	36	2	36								2	
		0601301102	中国历史	72	3	72						2	2		
		0101301202	中国哲学	36	2	36									2
		0501301302	中外文化比较	36	2	36							2		
			合计：	324	16	324									
专业教育	必修	0501501402	汉语精读	884	42	884		12	10	8	8	4	4	2	2
		0501501502	汉语听力	216	10	216		4	4	2	2				
		0501501602	汉语阅读	252	12	252			2	4	4	4			
		0501501702	汉语口语交际	288	14	288		4	4			4	4		
		0501501802	汉语写作	108	5	108						2	2	2	
		0501501902	汉语视听说	72	3	72				2	2				
		0501502002	新闻听读	72	3	72						2	2		
		0501502102	汉语语法	72	3	72							2	2	
		0501502202	古代汉语	108	5	108						2	2	2	
		0501502302	毕业论文	160	10										
			合计：	2232	107	2232									
	选修	0501502402	商贸汉语	72	3	72				2	2				
		0501502502	中国旅游地理	36	2	36			2						
		0302502602	中国当代热门话题	54	3	54							3		
		0806502702	计算机中文处理	36	2	18	18					2			

课 程	选 课	0303502802	中国人口、家庭、社会	18	1	18						2			
		0201502902	中国当代经济改革专题研究	18	1	18								2	
			合计:	234	12	216	18								
		毕业生需修到 135 学分。加毕业论文 10 学分合计: 145 学分。						22	24	24	26	26	25	22	10
	C 任 选 课	0501603002	当代影视作品赏析	18	1	18								2	
		0501603102	中国书法	18	1	18								2	
		0501603202	儒道佛研究	36	1.5	36							2		
		0501603302	中国现当代文学作品选	36	1.5	36								2	
		0501603402	中国艺术史	36	1.5	36							2		
		0501603502	中国古典诗歌赏析	36	1.5	36								2	
		0501603602	中文工具书使用	18	1	18					2				
		0501603702	中国教育	18	1	18					2				
		0501603802	宗教与中国文化	18	1	18						2			
		0501603902	语言文化社会实践	60	2	60									
			合计:	294	13	294									
											4	2	4	8	

吉林大学国际语言学院汉语进修课程设置：

汉语进修教学课程设置

课 型	课 程 名 称	周学时	课程学分	规定学分
必修课	初级汉语综合课(上)	12	12	24
	汉语听力(上)	4	4	
	汉语阅读(上)	4	4	
	汉语口语(上)	4	4	
总 学 分				24

一年级进修班下学期

课 型	课 程 名 称	周学时	课程学分	规定学分
必修课	初级汉语综合课(下)	10	10	26
	汉语听力(下)	4	4	
	汉语阅读(下)	4	4	
	汉语口语(下)	4	4	
选修课 (限选)	中国文化	2	2	
	新闻听读	2	2	
选修课 (任选)	太极拳	2	2	4
	商贸汉语	2	2	
总 学 分				30

吉林大学国际语言学院本科专业指导性教学计划及其进程表

专业： 国际贸易专业

课程类别	课程性质	课程编码	课程名称	学时	学分	其中		建议修读学期及周学时							
						讲授	实验	1	2	3	4	5	6	7	8
学科基础课程	B 必修	0501200102	汉语精读	296	16			4	4	4	4				
		0501200202	汉语听力	148	8			2	2	2	2				
		0501200302	汉语写作	72	4					2	2				
		0501200402	中国概况	80	4				4						
		0701200502	经济数学基础	220	12			4	4	2	2				
		0301200602	法学基础理论	34	2				2						
		0806200702	计算机中文处理	80	4	3/4	1/4	4							
专业教育课程	A 必修	0501500802	商贸汉语	296	16			4	4	4	4				
		0502500902	英语	296	20			4	4	4	4				
		0201501002	政治经济学	148	8			4	4						
		0201501102	西方经济学	80	6					4					
		0201501202	国际贸易	68	4						4				
		0201501302	会计学	68	3						4				
		0201501402	世界经济概论学	80	4					4					
	B 限选课	0601501602	中国历史	34	2				2						
		0101501702	中国哲学	34	2					2					
	C 任选课	0201601802	中国当代经济改革专题研究	1	18						1				
		0402601902	中国武术	2	72				2						



韓国・成均館大学校への長期派遣学生 集中講義カリキュラム

日時	時限	科目名	講義内容	教員
8 月 20 日 (月)	1	・文化とアイデンティティ	ディスカッション: 文化とアイデンティティ形成について、文化交流について	大林
	2	・英語・異文化コミュニケーション	Introduction: Meeting People	Paul R. Townsend
	3	・実践韓国語	① 翻訳(韓日、辞書使用可) ② 会話練習(上記の内容に基づいて) 【チューター参加】	(白)
8 月 21 日 (火)	1	・日本文化と自分	ディスカッション: 日本の文化について	大林
	2	・英語・異文化コミュニケーション	Small Talk: Sharing Culture	Paul R. Townsend
	3	・実践韓国語	① 作文練習(韓国語「私の韓国留学」)60 分 ② 発表と会話練習 【チューター参加】	(白)
8 月 22 日 (水)	1	・東アジアにおける「共通善」(30 分) ・近現代日中韓三国関係と社会	① ※教室変更(荒木理事室) (10:30~11:00) ② テーマ「歴史が語る三国関係—残された諸課題」 (レジュメ、関連文献資料の配布)	荒木、 大林、白
	2	・英語・異文化コミュニケーション	Residence / School Life	Paul R. Townsend
	3	・実践韓国語	① 翻訳練習(日韓、辞書使用可) ② 聴力練習と作文 【チューター参加】	白
8 月 23 日 (木)	1	・近現代日中韓三国関係と社会	テーマ「中韓両国の『日本観』」 (レジュメ、関連文献資料の配布)	白
	2	・英語・異文化コミュニケーション	Living in Seoul / Korea	Paul R. Townsend
	3	・実践韓国語	① 書きとり練習(韓国語) ② 会話強化練習 【チューター参加】	白
8 月 24 日 (金)	1	・近現代日中韓三国関係と社会	・テーマ「近くて遠かった中国と韓国—『脱亜論』から東アジアへの『復帰』」 (レジュメ、関連文献資料の配布)	白
	2	・英語・異文化コミュニケーション	Socializing / Traveling in Seoul & Korea	Paul R. Townsend
	3	・実践韓国語	① スピーチ(テーマ自由)20 分 ② 日韓学生交流(チューター、成均館大留学生の参加)	白

◆期間: 8 月 20 日(月)—24 日(金) 計 15 コマ

◆時限: 1 限(10:30~12:00)、2 限(13:00~14:30)、3 限(14:40~16:10)

◆教室: C23(一般教育棟 C 棟 2 階)

12月 2012年 (平成24年) 【3限：12:45-14:15 4限：14:30-16:00 5限：16:15-17:45】 GT=グローバルプチャーター

Classroom:		C25		C25		C23		C25		C25	
日		月		火		水		木		金	
25		26		27		28		29		30	1
2		3		4		5	研修スタート⇒ 3限：中国語 (GT) 14:20-: 研修ガイダンス 4限：ENGLISH ※ 5限：韓国語 (GT) ※チャーターマッピング	6		7	8
9		10	1限：韓国語 (白)	11	6限：中国語 (白)	12	3限：中国語 (GT) 4限：ENGLISH 5限：韓国語 (GT)	13	5限：中国語 (白) 6限：韓国語 (白)	14	15
16		17	1限：韓国語 (白)	18		19	3限：中国語 (GT) 4限：ENGLISH 5限：韓国語 (GT)	20	5限：中国語 (白) 6限：韓国語 (白)	21	22
23	天皇誕生日	24	振替休日	25	6限：中国語 (白)	26	3限：中国語 (GT) 4限：ENGLISH 5限：韓国語 (GT)	27	5限：中国語 (白) 6限：韓国語 (白)	28	29
30		31		1	6限：中国語 (白)	2		3	5限：中国語 (白) 6限：韓国語 (白)	4	5

1月 2013年 (平成25年)

【3限 : 12:45-14:15

4限 : 14:30-16:00

5限 : 16:15-17:45】

GT=グローバルプチャーター

Classroom:		C25					C25				
日		C25		C25		C23		C25		金	土
		月	火	水	木	水	木	金	土		
30		31	1 元日	2	3	4	5			5	
6		7	8	9	10	11	12				
		1限 : 韓国語 (白)	6限 : 中国語 (白)	3限 : 中国語 (GT) 4限 : ENGLISH 5限 : 韓国語 (GT)	3限 : 韓国語 (白) 5限 : 中国語 (白)						
13		14 成人の日	15	16	17	18	19				
			6限 : 中国語 (白)	3限 : 中国語 (GT) 4限 : ENGLISH 5限 : 韓国語 (GT)	3限 : 韓国語 (白) 5限 : 中国語 (白)						
20		21	22	23	24	25	26				
		1限 : 韓国語 (白)	6限 : 中国語 (白)	3限 : 中国語 (GT) 4限 : ENGLISH 5限 : 韓国語 (GT)	3限 : 韓国語 (白) 5限 : 中国語 (白)						
27		28	29	30	31	1	2				
		1限 : 韓国語 (白)	6限 : 中国語 (白)	3限 : 中国語 (GT) 4限 : ENGLISH 5限 : 韓国語 (GT)	3限 : 韓国語 (白) 5限 : 中国語 (白)						

2月 2013年(平成25年)

【3限 : 12:45-14:15

4限 : 14:30-16:00

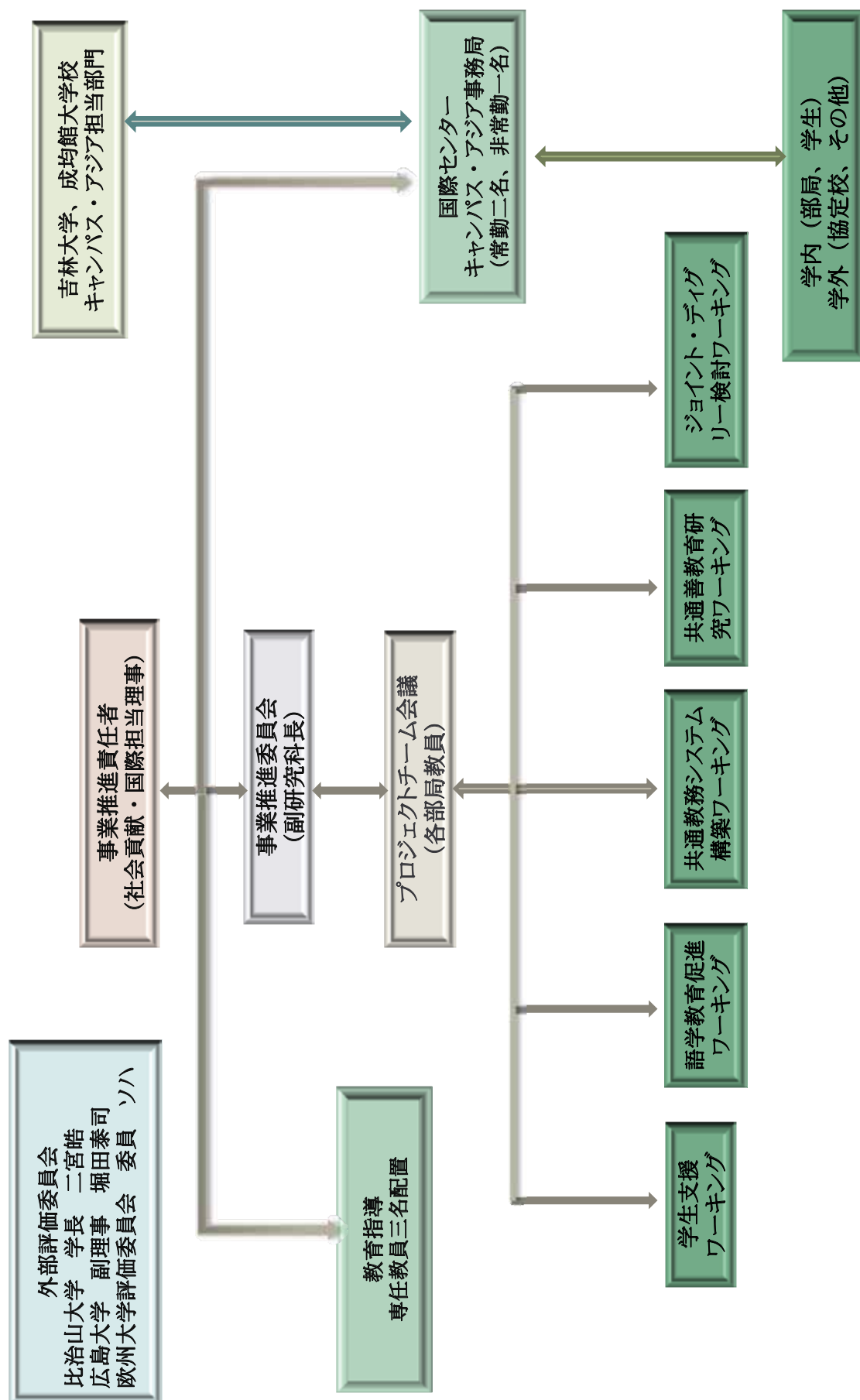
5限 : 16:15-17:45】

GT= グループチャター

Classroom:		C25			C23		C25			C25	
日		月	火	水	木	金	土				
27		28	29	30	31	1	2				
3		4	5	6	7	8	9				
		1限：韓国語 (白)	6限：中国語 (白)	3限：中国語 (GT) 4限：ENGLISH 5限：韓国語 (GT)	3限：韓国語 (白) 5限：中国語 (白)						
10		11	12	13	14	15	16				
		建国記念の日		集中 (中国語) (白)	集中 (韓国語) (白)	←研修終了 出発前総括ガイダンス					
17		18	19	20	21	22	23				
24		25	26	27	28	1	2				
				派遣学生 出発 (予定)							

岡山大学キャンパス・アジア プログラム運営体制

1. 事業推進委員会は各部署の副科長クラスを配した全学態勢
2. 外部評価委員会を年一、二回開催し、事業を評価し、助言を受ける
3. 事務局は主体でアップ&ダウンで情報を行き渡り、計画を実施する



プログラム組織メンバー名簿Ⅰ

キャンパスアジア事業推進委員会委員名簿

H25年4月修正

所属	職名	氏名
大学院医歯薬学総合研究科(医)	理事(社会貢献・国際担当)	◎ 荒木 勝
大学院社会文化科学研究科(経済)	副理事(社会貢献・国際担当)	二宮 善文
大学院社会文化科学研究科(法)	教授	○ 田口 雅弘
大学院自然科学研究科(理)	教授	張 紅
大学院医歯薬学総合研究科(歯)	教授	西原 康師
言語教育センター	准教授	長塚 仁
教育学研究科	副研究科長	陳 南澤
社会文化科学研究科	副研究科長	高塚 成徳
自然科学研究科	副研究科長	田中 共子
保健学研究科	副研究科長	五福 明夫
環境学研究科	副研究科長	竹田 芳弘
医歯薬学総合研究科	副研究科長	藤原 健史
言語教育センター	副センター長	浅海 淳一
国際センター	准教授 (キャンパス・アジア専任教員)	鶴持 淑
国際センター	准教授 (キャンパス・アジア専任教員)	白 榮勲
国際センター	助教 (キャンパス・アジア専任教員)	廣畑 聡
学務部学務企画課	学務企画課長	大林 純子
国際センター事務室	事務室長	坂本 泰彦
		山崎 征洋

◎…委員長
○…副委員長

キャンパスアジアプロジェクトチームメンバー名簿

(H25年4月修正)

所属	職名	氏名
大学院医歯薬学総合研究科(医)	理事(社会貢献・国際担当) 国際センター長 CA事業推進委員会委員長	荒木 勝
国際センター	副理事(社会貢献・国際担当)	二宮 善文
大学院社会文化科学研究科(経済)	副センター長 プログラムマネージャ 教授	田口 雅弘
国際センター	副センター長 プログラムマネージャ 教授	長塚 仁
大学院医歯薬学総合研究科(歯)	プログラムマネージャ 教授	西原 康師
大学院社会文化科学研究科(法)	教授	張 紅
大学院社会文化科学研究科(文)	教授	辻 星児
大学院環境生命科学研究科(農)	教授	村田 芳行
新医療研究開発センター	教授	那須 保友
大学院環境生命科学研究科(環)	教授	金 科哲
言語教育センター	准教授	陳 南澤
大学院社会文化科学研究科(法)	准教授	吾妻 聡
大学院医歯薬学総合研究科(薬)	准教授	金 恵淑
大学院社会文化科学研究科(東アジア)	准教授	土屋 洋
国際センター	准教授 (キャンパス・アジア専任教員)	白 榮勲
国際センター	准教授 (キャンパス・アジア専任教員)	廣畑 聡
国際センター	助教 (キャンパス・アジア専任教員)	大林 純子
国際センター事務室	事務室長 副センター長	山崎 征洋

プログラム組織メンバー名簿Ⅱ

共通善教育研究会メンバー名簿

H25年4月改正

所属	職名	氏名
	理事(社会貢献・国際担当) 国際センター長 CA事業推進委員会委員長	荒木 勝
大学院社会文化科学研究科(法)	教授	張 紅
大学院社会文化科学研究科(法)	准教授	吾妻 聡
国際センター	准教授 (キャンパス・アジア専任教員)	白 栄 勲
大学院社会文化科学研究科(文)	教授	姜 克 実
大学院社会文化科学研究科(文)	教授	遊 佐 徹
言語教育センター	准教授	孫 路 易
吉林大学	教授	沈 海 濤
成均館大学校	准教授	金 龍 泰
多摩大学	教授	金 美 徳
都留文科大学	教授	邊 英 浩

学生支援ワーキング名簿

(H25年4月修正)

所属	職名	氏名
国際センター 大学院社会文化科学研究科(経済)	副センター長 プログラムマネージャ 教授	田 口 雅 弘
大学院自然科学研究科(理)	プログラムサブマネージャ 教授	西 原 康 師
大学院社会文化科学研究科(法)	教授	張 紅
大学院社会文化科学研究科(文)	教授	辻 星 児
言語教育センター	准教授	陳 南 澤
大学院社会文化科学研究科(東アジア)	准教授	土 屋 洋
国際センター	准教授 (キャンパス・アジア専任教員)	白 栄 勲
国際センター	准教授 (キャンパス・アジア専任教員)	廣 畑 聡
国際センター	助教 (キャンパス・アジア専任教員)	大 林 純 子
キャンパスアジア事務局	プログラム・オフィサー	云 洪 凌
	アシスタント	増 田 鈴 子